

学位請求論文

論文題目

幼児をもつ母親の「子育ての期待と現実の差」と保護者支援

大阪総合保育大学大学院
児童保育研究科 児童保育専攻
博士後期課程 平成 27 年進学
小西 眞弓

論文の要旨

本研究では、保育者が保護者支援を行うに当たり、「子育ての期待と現実の差」が母親の育児への肯定的感情に及ぼす影響並びに望ましい保護者支援のあり方について検討を行った。

第1章では、まず、母親が日常の子育てにおいて抱く育児への肯定的感情と否定的感情について概観を行った。次いで、これまでに報告されてきた子育ての期待に関連した研究の動向についてデータベースを用いて概観した結果、母親が子どもとの関わりにおいて、「こんなはずではなかった」という「子育ての期待と現実の差」を認識すること、期待する子どもの認識と現実の子どもの認識の差から、子どもへの過度な要求や関わりをしている可能性があることが推察された。

保育者が保護者支援を行う場合には、「子育ての期待と現実の差」から保護者を捉えることによって、適切な支援の提供が可能となり、保護者の子育てを支えることにつながると考えられる。そこで、第2章では、幼児をもつ母親の「子育ての期待と現実の差」が、母親の育児への肯定的感情に与える影響を明らかにすること、教育・保育施設において保育者が行う保護者支援において、「子育ての期待と現実の差」の視点から検討を行い、保護者支援に有効な方法を提案することを本研究の目的として設定した。そして、母親の育児への肯定的感情をはじめとする基本概念の定義を行った。

第3章第1節・第2節では、母親の自由記述を「子育ての期待と現実の差」が大きいと感じる群及び小さいと感じる群との2群に分けて検討を行った。第3節では、幼児をもつ母親の育児への肯定的感情と「子育ての期待と現実の差」との関連を、母親の年齢の高群低群及び職業の有群無群で比較検討した。その結果、保護者支援では母親の年齢の高低、職業の有無に分けて、支援や情報提供の方法を変えていく必要性が示唆された。

第4章では、第1節において、母親が子どもや子育てに対して親になる前に抱いていた「期待と現実の差」を、「親役割の状態の差」や「子どもへの認識の差」から捉え、それらと「父親からのサポート」、「育児感情」、「日常生活での育児幸福感」との関連について検討を行った。その結果、「子育ての期待と現実の差」がマイナスの群の保護者支援においては、保育者は母親自身に適した対処法を一緒に考え、自身で解決できる道筋を支えることが求められていた。第2節では、「子育ての期待と現実の差」がプラスの群

とマイナスの群の母親が求める保護者支援について比較検討した結果、「子育ての期待と現実の差」がプラスの群では、子育てについて相談ができることであり、「子育ての期待と現実の差」がマイナスの群では、子どもの成長に伴って変化する子育ての対処法を母親と一緒に考え、母親自身で解決する道筋を支えることなど、それぞれのニーズに応じた支援のあり方が求められていた。

第5章では、第1節において、保育者がもつ主観的な見方である「保育者の保護者観」が教育・保育施設で行われている「子どもや保護者を支える職員体制」や、養育力の向上に資する支援である「望ましい保護者支援」に影響を与えているか検討を行った。その結果、「保育者の保護者観」は「子どもや保護者を支える職員体制」や「望ましい保護者支援」に正の影響、「子どもや保護者を支える職員体制」は「望ましい保護者支援」に正の影響を与えることが示された。第2節では、経験年数の違いによる保育者が感じる保護者支援並びに保護者支援で感じることと「保護者への共感的支援」との関連性について検討を行った。その結果、保護者支援の内容や技術は保育者の経験による違いがあることが示された。「子育ての期待と現実の差」の視点から捉える「保護者への共感的支援」では、保育者は保護者との日常的な関わりの中で「保育知識や技術不足」、「保育者の方が年下である」ことなどを感じながら支援を行っていることが明らかにされた。

以上のような本論文における研究によって、幼児をもつ母親の「子育ての期待と現実の差」は、母親の育児への肯定的感情である「育児肯定感」に対して、職業無群では有意な負の影響、年齢高群では負の影響を及ぼす傾向が示された。また、「子育ての期待と現実の差」がマイナスの群においては、育児感情における「育ちへの不安感」、「育て方への不安感」から「親役割の状態の差」に負の影響、日常生活での育児幸福感における「生活場面」及び「育ちへの不安感」から「子どもへの認識の差」に負の影響を及ぼしていた。さらに、「保育者の保護者観」は「子どもや保護者を支える職員体制」や「望ましい保護者支援」に正の影響を与えていた。これらの結果は、幼児をもつ母親の「子育ての期待と現実の差」に関する研究における意義と保護者支援を行う上での意義をもっていると考えられる。まず、保育者が保護者支援を行うに当たって、母親を「子育ての期待と現実の差」や職業の有無や年齢の高低から捉えることによって、個々に応じた支援が提供される可能性が考えられるということがある。また、「子育ての期待と現実の差」がプラスの群やマイナスの群の母親についても、それぞれに適した支援の提供が可能となり、幼児をもつ母親の子育てを支えることにつながると推察される。さらに、「保育者

の保護者観」や保育者としての経験の積み重ねは、「望ましい保護者支援」につながる可能性が考えられる。以上より保護者への理解の手立てとして、幼児をもつ母親を「子育ての期待と現実の差」の視点から把握する意義は少なくないものと考えられる。

本研究に残された課題としては、母親の育児への肯定的感情尺度の信頼性と妥当性の検討を行うことが課題である。また、夫婦のペアデータ数を増やすこと、「子育ての期待と現実の差」がマイナスの群の母親の支援についてより詳細に検討を行うこと、「子育ての期待と現実の差」を小さくするためには、父親以外の家族や、友達、保育者からのサポートについても検討を行うことが必要であろう。保育者の保護者観と望ましい保護者支援については、より具体的かつ有効な検討が必要であると思われ、より多くの保育者を対象にデータ数を増やし、保護者支援の内容や家庭との具体的な連携についての提言が行えるよう研究の積み重ねが望まれる。

今後の方向性としては、幼児をもつ父親の「子育ての期待と現実の差」についても調査を行い、父親の育児感情に与える影響についても検討を行うとともに、「望ましい保護者支援」については、保育士の個人的サポート源、職場の人間関係、仕事の量的負荷など、保護者対応で困難感を感じた場合の対応や改善に必要な要因についても検討を加えていきたい。

— 目次 —

はじめに

1. 少子化対策の視点から 1
2. 次世代育成支援対策の視点から 2
3. 男女共同参画の視点から 3
4. 児童虐待の視点から 4
5. 保護者支援の視点から 4

第1章 母親を取り巻く現状と保護者支援 6

第1節 母親の育児感情に関する先行研究の概要 6

1. 母親の育児への否定的感情 6
2. 母親の育児への肯定的感情 8

第2節 母親の子育ての期待と現実についての研究動向（研究1） 10

1. 目的 10
2. 手続き・結果 11
3. まとめ 24
4. 問題の所在 26

第2章 本研究の目的 28

第1節 本研究の目的と構成 28

1. 本研究の目的 28
2. 本研究の構成 29

第2節 基本概念の定義 33

第3章 幼児をもつ母親の育児への肯定的感情と子育ての期待と現実の差との関連 37

第1節 子育ての期待と現実の差が大きいと感じる母親の検討（研究2） 37

1. 目的 37
2. 方法 38
3. 結果 38

4. 考察	4 4
第2節 子育ての期待と現実の差が小さいと感じる母親の検討（研究3）	4 7
1. 目的	4 7
2. 方法	4 8
3. 結果	4 8
4. 考察	5 3
第3節 職業の有無と年齢の高低からの検討（研究4）	5 4
1. 目的	5 4
2. 方法	5 5
3. 結果	5 8
4. 考察	6 2
第4節 まとめ	6 5
第4章 幼児をもつ母親の育児感情が親役割に及ぼす影響	6 7
第1節 親役割の状態の差及び子どもへの認識の差についての検討（研究5）	6 7
1. 目的	6 7
2. 方法	6 9
3. 結果	7 2
4. 考察	7 7
第2節 親役割の状態の差及び子どもへの認識の差と保護者支援（研究6）	8 0
1. 目的	8 0
2. 方法	8 1
3. 結果	8 2
4. 考察	8 4
第3節 まとめ	8 7
第5章 教育・保育施設における保護者支援の検討	8 9
第1節 保育者の保護者観、子どもや保護者を支える職員体制、 望ましい保護者支援との関連（研究7）	8 9
1. 目的	8 9

2. 方法	9 1
3. 結果	9 4
4. 考察	1 0 6
第2節 望ましい保護者支援－保育者の自由記述からの検討－（研究8）	1 0 9
1. 目的	1 0 9
2. 方法	1 1 0
3. 結果	1 1 1
4. 考察	1 1 2
第3節 まとめ	1 1 7
第6章 総合的考察	1 1 9
第1節 まとめ・本研究の意義	1 1 9
1. 本研究のまとめ	1 1 9
2. 本研究の意義	1 2 1
第2節 本研究の限界と今後の課題	1 2 4
1. 本研究の限界	1 2 4
2. 本研究の今後の課題	1 2 6
おわりに	1 2 8
引用文献	1 3 0
資料	1 4 6
要約	1 6 9
謝辞	1 7 4

はじめに

近年、子どもや家庭をめぐる問題が多様化かつ複雑化し、育児不安や児童虐待など多くの社会的問題が生じている。また、少子化や核家族化の進行に関して、原田（2006）は「現代の子育ての困難さの大きな要因は日本の親たちが子どもを育てるための準備をまったくしないまま親になってしまったことである」と述べている。そのうえで、「実際に育児をする前にもっていた育児のイメージと現実の育児とのギャップは、育児における母親の感情や育児そのものにきわめて大きな影響を与える」と指摘している。

『厚生労働白書 平成 25 年版』（厚生労働省、2013）も、「少子化や核家族の進行、地域のつながりの希薄化など、社会環境が変化する中で、身近な地域に相談できる相手がいないなど、子育てが孤立化することにより、その負担感が増大している」と指摘している。そして、全ての子育て家庭への支援として、同白書は、身近な場所に子育て親子が気軽に集まって相談や交流を行う「地域子育て支援拠点事業」の設置の推進、育児に伴う心理的・身体的負担を軽減するため「一時預かり事業」や「乳児家庭全戸訪問事業（こんにちは赤ちゃん事業）」などの地域子育て支援機能の強化を図ると明言している。そして、「子育てへの不安が大きいことが、少子化の要因の一つであり、様々な不安や負担を和らげ、全ての子育て家庭が、安全かつ安心して子供を育てられる環境」（内閣府、2015a）の整備を行うことが重要であるとの認識を示している。

少子化や核家族化の影響は、子どもを取り巻く環境の変化や遊び友だちの減少につながり、戸外での活動の減少や人と交わる経験の減少（深谷、2015）を招くとともに、子育てをしている保護者にとっても、育児経験のないまま親になり、地域の人々との関係が希薄な孤立した環境の中で子育てに対する不安や負担を増加させる要因となっている。ここでは、まずこうした母親を取り巻く現状について、子育て支援施策の流れという側面から概観する。

1. 少子化対策の視点から

少子化は「出生率の低下に伴い子どもの数が減少すること」（児嶋、2000）と認識されている。我が国においては、国民生活の福祉や健康など生活に関わる政府の施策や報告、今後の展望について『厚生白書』『厚生労働白書』など様々な白書が編纂され出版されている。「子どもの出生率についてふれているのは平成元（1989）年版が最初」（岩崎、

2002) であり、その中で、「人口の高齢化は出生率の低下と平均寿命の伸長によってもたらされる」(厚生省、1990) との認識の下、出生率低下の要因やその影響、家庭の姿の変化、家庭支援と新たな地域づくりの重要性について述べられている。

また、『厚生白書』において、『『少子化』あるいは『少子社会』という表現が登場するのは、平成 5 (1993) 年版から」(岩崎、2002) であり、1989 (平成元) 年の合計特殊出生率が 1.57 であったことや、1990 (平成 2) 年の合計特殊出生率が 1.50 と過去最低であったことから、懸念されていた少子化が現実となり、子どもと子育ての問題について真剣に対応せざるを得なくなっている。子どもと子育てを巡る施策について、人口減少と未婚化や晩婚化、夫婦の出生率の低下が少子化の要因として述べられる中で「育児に多くの支援が注がれてこそ子どもは健やかに育つ」(大日向、1996) という社会的支援の必要性から、国や自治体は様々な少子化対策の策定を行うことになる。

1994 (平成 6) 年 12 月には、今後 10 年間に取り組むべき基本的方向と重点施策を定めた「今後の子育て支援のための施策の基本的方向について」(エンゼルプラン)(文部、厚生、労働、建設の 4 大臣合意) が策定された。我が国の子育て支援は、少子化の進行が問題として取り組まれた少子化対策から、「子育て」には国による支援が必要であるという「次世代育成支援」対策へと展開していったと考えることは妥当であろう。

2. 次世代育成支援対策の視点から

『厚生白書 平成 10 年版』(厚生省、1998) においては、急速な少子化の進行が労働人口の減少や経済成長を制約するおそれがあり、将来の国民生活に影響をもたらすという認識に立ち、安心して子どもを産み育てることができるといえる福祉社会への実現に向けた提言を行っている。すなわち、子育てにおける「母性」の果たす役割が過度に強調されすぎていること、子育て不安は専業主婦に高い傾向が見られること、母親がストレスを感じながら子どもに接することは子どもの心身の健全発達に好ましくなく児童虐待という事態に至ることもあることなど、母親に家事・育児責任が過度に集中していることに言及している。

その後、少子化の問題に的確に対処するための施策を総合的に推進するために「少子化社会対策基本法」(2003)、次代の社会を担う子どもが健やかに生まれ、かつ、育成される環境の整備を図るため、「次世代育成支援対策推進法」(2003) が制定された。この法律の制定により、国、自治体、企業及び国民の責務が明らかにされるとともに、行動

計画の策定など（第 4 条、第 5 条、第 6 条）、次代の社会を担う子どもを育成し、育成しようとする家庭に対する支援が、法的な根拠をもって行われる政策となった。

また、子どもたちの健やかな育ちや自立を促し、さらには親自身の育ちを支援し、子育て・親育て支援社会をつくることを国の最優先課題とすることが求められていることにより、国の基本施策として「少子化社会対策大綱」（2004）が発表された。さらに、「少子化社会対策大綱」で掲げた四つの重点課題に沿って、具体的な実施計画を示した「少子化社会対策大綱に基づく重点施策の具体的実施計画について」（子ども・子育て応援プラン）（2004）が策定された。その中の重点課題の一つとして、地域における子育て支援の拠点などの整備及び機能の充実を図るために、子育て中の親子が相談・交流できる「つどいの広場」事業や、「地域子育て支援センター」事業が推進されることとなった。

3. 男女共同参画の視点から

1975（昭和 50）年の「国際婦人年」を契機として、男女平等の実現を求める内外議論の高まりの中で、1985（昭和 60）年に「女子に対するあらゆる形態の差別の撤廃に関する条約」（女子差別撤廃条約）が批准された。男女平等という視点から、1984（昭和 59）年に国籍法と戸籍法の一部が改正され 1985（昭和 60）年に施行された。また、「男女雇用機会均等法」（1985 年）が制定され、文部省（当時）が 1989（平成元）年に学習指導要領を改訂して、家庭科を男女必修科目の実現とするなど、国内法や制度の見直しが行われた。

『国民生活白書 平成 4 年版』（経済企画庁、1992）では、少子化の背景には、若者の結婚観の変化、女性の職場進出、家族のあり方の変化などがあり、女性の就業率の高まりは、その結婚観に影響を及ぼし、家庭における育児や家事についての夫婦の役割分担などについて、従来の考え方に変容を迫っていると述べられている。女性の社会進出に伴う働く女性の子育てや仕事との両立支援や、父親でも母親でも子どもが満 1 歳になるまで職場を離れて休業できる「育児休業法」（1991 年）の制定や、「家族的責任を有する男女労働者の機会及び待遇の均等に関する条約」（国際労働機関、1995）の批准を行い、子育てに対する「社会的支援の強化にむけて」（厚生省、1994）子育てしやすい環境の整備に努めていったと言えるであろう。

4. 児童虐待の視点から

我が国の母子保健法の制定の背景には、「第二次世界大戦直後の 1948 年に児童福祉法が定められ、各種の健康診査や保健指導の実施などの施策が盛り込まれ、戦後の母子の栄養の改善や健康状態の向上」（富沢・高野、1996）を図り、児童の栄養改善や感染症の予防が急務であったことがある。その後、「母子保健法」が 1965（昭和 40）年に制定され、「少子化や核家族化、地域の連帯感の希薄化などの子どもや家庭を取り巻く社会環境の変化に適切に対応」（富沢ら、1996）し、家族への育児支援、相談・指導体制の充実など、少子化社会における総合的な母子保健施策の実施が図られることとなった。

一方で、2015（平成 25）年度、児童相談所に寄せられた子ども虐待の相談処理件数（厚生労働省、2016a）は、103,260 件（速報値）で過去最多であり、統計を取り始めた 1990（平成 2）年から一貫して増加し続けている。母親が孤立化して子育てを行うことが子育て不安の深刻化や児童虐待のリスクを高める（厚生労働省、2003）ことや、子どもの心身の発達と人格の形成に重大な影響を与えることが指摘されている。そのため、予防的介入の必要性に加えて、早期の発見、早期相談や通報、社会全体での支援のために、児童虐待防止法の制定（2000）や、児童福祉法の一部を改正する法律（2004）を施行した。現在は、「乳児家庭全戸訪問事業（こんにちは赤ちゃん事業）」や「養育支援訪問事業」、母子保健事業や関係機関との連携を行うなど、児童虐待のない社会の構築に向けた取り組みの強化が推進されている（内閣府、2015b）。

5. 保護者支援の視点から

2001（平成 13）年、児童福祉法の改正では、保育士とは「第 18 条の 18 第 1 項の登録を受け、保育士の名称を用いて、専門的知識及び技術をもつて、児童の保育及び児童の保護者に対する保育に関する指導を行うことを業とする者をいう。」と法制化され、保育士は子どもの保育のみならず、地域の子育て支援を行う専門職としてより高い専門性が求められている。2008 年（平成 20）年に改正された『保育所保育指針』では、第 6 章で「保護者に対する支援」が創設され、保育所における保護者に対する支援の基本、次いで保育所に入所している子どもの保護者に対する支援、地域における子育て支援について記述されている。さらに、2017（平成 29）年に告示された『保育所保育指針』第 4 章において、保育所における子育て支援に関する基本的事項、保育所を利用している保護者に対する子育て支援、地域の保護者等に対する子育て支援を行うことが規定さ

れており、保育者には子どもや子育て家庭における多様な課題をもつ子どもや保護者を支える役割が求められている。

さらに、全ての子育て家庭を対象に、幼児期の学校教育や保育、地域の子育て支援の量の拡充や質の向上を進めるために、「子ども・子育て支援新制度」(2012)が、2015(平成27)年4月から本格的に実施されている。小学校就学前の子どもの教育・保育は、従来幼稚園や保育所に限られていたが、「就学前の子どもに関する教育、保育等の総合的な提供の推進に関する法律」(2006)が施行され、幼保連携型認定こども園においても、保護者に対する子育ての支援や、地域における子育て家庭の保護者等に対する支援(内閣府・文部科学省・厚生労働省、2014)が行われている。また、2017(平成29)年に告示された『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』第4章において、幼保連携型認定こども園の園児の保護者に対する子育ての支援、地域における子育て家庭の保護者等に対する支援を行うことが規定されている。

このように、現在では、少子化や核家族化の急速な進行が社会問題であると受け止められ、保護者支援の必要性は広く認識されている。身近に子育ての相談者がいない保護者にとって、地域にある教育・保育施設の保育者には、保護者支援の担い手としての役割も期待されている。一方で、子育ての孤立化や配偶者の育児分担の少なさから多くの保護者がインターネットに接続し、授乳や離乳、医療機関に関する情報を集めているという報告もある(外山・小舘・菊地、2010)。保護者が多様な情報を選択する場合に、子どもの成長や自身の生活環境にふさわしい情報であるか否かは、保護者の判断に委ねられており、保育者には子どもの育ちにふさわしい情報や適切な関わり方を保護者に伝えていくことも求められる。保育者が保護者の子育てにおける課題に、適切な情報や手立てや方法を提案しその子育てを支えるためには、保護者の生活背景や心情理解を深めることが必要である。保護者が子どもと生活する中で「イライラする」、「子どものことでどうしたらいいのか分からない」などの気持ちを抱くのか、それらを理解することで保護者が求めるニーズや支援を提供することができる。本研究では、保護者の気持ちを理解する視点をもつために、まず次章において日常の子育てによって起因する母親の育児への否定的感情と肯定的感情から概観する。

第1章 母親を取り巻く現状と保護者支援

第1節 母親の育児感情に関する先行研究の概要

1. 母親の育児への否定的感情

戦後の出生率安定期（1950年代半ば～1970年代半ば）では、子育てにおける「母性」の果たす役割が過度に強調され、絶対視される中で、「母親は子育てに専念するもの、すべきもの」という社会的規範が広く浸透していた（厚生省、1998）。青木・松井・岩男（1986）が指摘したように、「母親の意識的・感情的側面をとらえた先駆的な研究は周産期を中心とするものが多い。これは妊娠・出産を契機として母性が発達するという視点に立脚しているため」に、母親は子どもの発達に影響を及ぼす要因として捉えられていた。

一方で、母親の「育児不安」や「育児ストレス」に関する研究は、1970年代頃から社会問題となったコインロッカーベビー事件や、子育てをしている母親の負担や困難などの理由による嬰兒殺害事件や母子心中事件などで衆目を集めるようになった。「育児は一つの人間関係能力であり、生得的な適性に支えられるとともに、学習され発達するものである」（浅川・鎌田・横川・古川、1999）という視点の下で、母親の属性や就労状況、居住環境や育児サポート、母親の成育経験からの人との関係の取り方などが、母親と子どもとの関わりや子育てに伴う感情に影響することが明らかにされている。ただし、「育児不安」や「育児ストレス」の定義は研究者によって異なる。

まず、牧野（1982）の研究では、育児不安を「育児行為の中で一時的あるいは瞬間的に生ずる疑問や心配ではなく、持続し蓄積された不安の状態」であり、また、「子の現状や将来あるいは育児のやり方や結果に対する漠然とした恐れを含む情緒の状態」と定義している。その上で、育児不安と子どもの年齢、きょうだい数、家族形態について関連は見られなかったこと、育児不安の程度に関する要因の一つに夫婦関係があり、父親が子育てを一緒にしてくれることや母親自身の社会的な人間関係が広いと感じる母親は、子育てに望ましい育児態度をとることができることが報告されている。また、子どもへの接し方の難しさなど子育ての具体的な体験から捉える立場で吉田・山中・巷野・太田・中村・山口・牛島（1999）は、育児不安を「育児にともなう自信のなさや不安、子どもと関わることの疲労感、子育てからの逃避願望、育児による社会からの孤立感」と定義している。吉田らは、父親の育児サポートが少ないこと、子どもを育てにくいと思うこと

が育児不安に影響していることを指摘している。

夫婦関係との関連においては、父親の育児・家事参加度の高さは母親の育児への否定的感情の軽減につながる（柏木・若松、1994）とする研究もある一方で、父親からの育児援助は母親の満足度に影響をもたらすが、育児不安の低減に対して直接影響を及ぼすとは言えない（田中、1997）とする研究もある。住田・中田（1999）は、夫婦間のコミュニケーションの頻度が高いことで一致している場合は、父親の育児参加度の如何にかかわらず、母親の満足度は高く、育児不安は低いと述べている。尾形・宮下（1999）も、夫婦間のコミュニケーションと母親の精神的ストレスとの関わりを明らかにしている。また、他者サポートとの関連では、荒牧・無藤（2008）は、育児に対する「負担感」などの否定的感情は父親や友人、保育者からのサポートが多いほど低く、育児に対する「肯定感」はこれらのサポートが多いほど高いことを報告している。

次に、育児に関わるストレスとして捉える立場から、佐藤・菅野・戸田・島・北島（1994）は、Lazarus と Folkman（1984）の心理学的ストレスモデルに基づいて、「子どもや育児に関する出来事や状況などが母親によって脅威であると知覚されることや、その結果、母親が経験する困難な状態」と定義し、母親関連育児ストレスと子ども関連ストレスの質的に異なる二つの次元から育児関連ストレスモデルを構築している。また、奥村・松尾（2011）は、「母親が育児生活のなかでのある出来事をストレスと認知し、それに対して対処行動を取ろうとした結果ストレス反応が引き起こされるという一連の過程が育児ストレスである」としている。

さらに、手島・原口（2003）は、「母親や養育者を煩わせる育児中の子どもの行動や態度を育児ストレス、その育児ストレスによって引き起こされる養育者の心の状態（ストレス反応）」を「育児不安」と定義している。育児ストレスが多い母親は、育児不安が高く、子育ての専門家によるサポートや子どもが遊べる場所などのソーシャル・サポートの多い母親は育児不安が低いことを明らかにしている。

また、母親全般を対象としたものだけでなく、就労する母親についても育児ストレスと精神的健康との関連を検討した研究も見受けられる（小泉・菅原・前川・北村、2003；酒井・松本・菅原、2014）。常勤群とパート群の就労状況の違いにおける育児ストレスの比較から、母親の職場での負担が家庭に流入して葛藤を抱えると、育児ストレスを介して精神的な不健康につながるとされるものや、常勤群の母親の方が仕事へのやりがいにより、自己効力感を高くもつことができ、育児ストレスが低いとするものなどがあり、

その内容については詳しく検討する必要があるであろう。

子どもと関わる時間が長く、主に子どもを養育している母親が抱える育児不安は、母子精神保健領域の中においては、産後の疲れや身体の不調（吉田、2010）や産後うつ病（postpartum depression）など妊娠期から育児期にわたる支援との関連で研究がなされてきた（吉田・山下・岩元、2006）。また、育児ストレス研究からは、母親の親役割受容の消極的意識（金井、2003；植村・内藤、2005；松原・堀田・山口、2012）、低出生体重児や子どもの気質的扱いにくさとの関連（星・小田切・奥平・若葉・大伴・星・秦野・瀬戸・栗山・蓮見・庄司・嶋崎・菊池・中江・前川、1998；水野、1998；茂本・奈良間・浅野、2010）、周囲のサポートや父親の育児参加の程度（吉永・岸本、2007；加藤、2008；小林、2009）などが明らかにされている。子どもや子育てに対する否定的感情としての育児不安や育児ストレスは、保健医療の分野では発生予防や早期発見・早期対応といった援助や介入が必要であると認識されている。上記の要因に加えて、「子どもとの接触経験や育児経験の不足」（櫻谷、2004；森田・上田、2004）によって、「私の子どもは、私が期待しているほどのことができない」（奈良間・兼松・荒木・丸・中村・武田・白畑・工藤、1999）など、子どもの特性や発達の無理解から起こる子どもや子育てに対する葛藤や否定的感情を抱いていると考えられる。

子どもや子育てに対する感情は、母親を取り巻く社会的環境の変化にも大きな影響を受けていると推察され、子どもの世話を主にしている母親の育児における葛藤や苦痛を認識することが求められる。

2. 母親の育児への肯定的感情

このように子どもや子育てに対して母親は育児不安といった否定的感情をもつ一方で、「子どもを持って成長できた」（柏木ら 1994）、「子どもが生まれてきてそこにいること自体が喜びである」（清水・関水・遠藤、2010）と感じるなど育児への肯定的感情も抱いていると推察される。

幼児をもつ母親の育児への肯定的感情である親役割満足感について検討を行った小坂（2004）は、親役割満足感に「夫の子育て満足」、「親としての態度満足」、「子どもとの関係満足」の3次元を見出している。特に、親役割満足感には、「子どもの発達に関する懸念」、「職業満足感」、「情緒的サポート」の影響が見られ、就労形態別に分析した結果から、特にフルタイムで働く母親については、親としての態度や子どもとの関係の満足感

への情緒的サポートの強い影響が示され、情緒的サポートの重要性が示唆されたことが報告されている。

西出・江守（2011）は、自己効力感を「自分が必要な行動を上手に行うことができるという確信」と定義し、母親の心の健康度に母親の自己効力感とソーシャル・サポートがどのように影響するかについて検討を行った。その結果、心の健康に影響を与えている要因は、夫からのサポートであり、子育てをすることによる母親の自信の表れが自己効力感に影響していたことを明らかにしている。金岡（2011）は、育児に対する自己効力感とは、「育児で直面する経験的なあるいは未経験な新しい状況に遭遇した際に臨機応変に対処できるという確信の程度」と定義し、母親が個人的資源として日常生活で満足感などの前向きな気持ちを持ち得ていることや、子育てに対する自己効力感が高いほど、育児満足感が得られ、子育てにより派生するストレスが低減されることを明らかにしている。

清水・伊勢（2006）は、子育て中の母親はどのようなときに幸福感を抱いているのかを知るために、母親の子育てに対して肯定的な感情に注目して調査を行った。その結果、母親が子育て中に感じる肯定的情動の中心は、愛情、喜び、感謝、安心、誇り、希望、同情であり、育児幸福感を感じる際の事情は 14 項目に分類され、「子どもの成長・発達・健康」及び「子どものしぐさ」などの子ども中心の構成であったことを報告している。

また、金田・大竹（2015）は、母親の楽観主義が日常生活での育児幸福感の生活場面（「子どもの食事を作っているとき」など家事や子どもの世話に関する項目で構成されている）と関係性場面（「子どもと手をつないで歩いているとき」など子どもとの直接的な関わりに関する項目内容）、並びに育児幸福感の夫への感謝に強く影響を与えることを示した。そして、母親の育児幸福感を高めることは、母親本人だけではなく、子どもにとっても良い効果をもたらすことが期待できるという。

このように、子育てをすることに伴って生じる育児感情については、母親の就労状況やライフスタイルによる意識や行動、子育てにおけるソーシャルサポートによる違いなど、様々な側面から研究が行われている。

第2節 母親の子育ての期待と現実についての研究動向（研究1）

1. 目的

第1節において、保護者を理解するために、母親が抱く子どもや子育てに対する感情を否定的感情と肯定的感情から概観した。子どもをもつことや親になることで多くの母親は、人間的に成長したことや、子どもとの関係で満足（柏木、2003）を得ていると述べられている。しかし、現実の子育てでは、自分の趣味や行動の制限や生活時間帯の変更を迫られることが多くなることにより、「こんなはずではなかった」という母親となった自身に対して描いていた認識（イメージ）や、「期待と現実との差（ギャップ）」の大きさなどが母親のストレスや不安の原因となっていることが指摘されている（大日向、2002）。また、母親が子どもや子育てに対して抱く認識（イメージ）とは、「理想とする・期待する・想像する」子どもや子育てについての個人的な意見や考え方及び見解であると推察される。意見や考え方は、それぞれの母親が育った環境や個人的な資質によっても異なっていると考えられる。さらに、「現実」の子どもや子育てにおいても、個々の子どもの成長や発達の違いや、母親が実際に関わっている時間やケアの内容など、一定基準に基づいて測定されたものではなく、それぞれの母親が生育環境の中で培ってきた価値観に基づいて認知されているものである。

母親だけでなく、一緒に子どもの養育を行う父親においても、自身の経験や父親モデルが少ないことで、「3歳までは母親が育児に専念すべき」（桑名・桑名・細川、2008）とする者が多いとする報告もあり、父親の育児参加は「子どもと一緒に遊ぶ」ことや「食事やお風呂」に入ることなど、母親の子育てを援助する育児行動量で評価されることが多い。したがって、子育てや家事などの日常的なケアの実施や責任のほとんどは、母親に委ねられている場合が多く、過度の負担が「期待と現実の差」を大きく認識する可能性は高いと考えられる。

前節で述べたように、母親の子育てに伴う感情に影響する様々な要因について、知見が蓄積されている。しかし、そうした様々な状況要因に単に着目するのではなく、保育者が保護者の困難な状況を子育てについての「期待と現実の差」から捉え、その差の背景を知ること、保護者の課題を明確にすることや、適切な支援を提供することにつながると考えられる。そこで、子どもや子育てなどについて保護者が「理想とする・期待する・想像する」ことを「子育ての期待」として捉えて検討するため、まずはこれまで

報告されてきた子育ての期待に関連した研究の動向を概観し、課題を探ることとする。

2. 手続き・結果

2017（平成 29）年 4 月に検索を行った。まず、医学中央雑誌 Web（ver.4）版を用い、1976（昭和 51）年から 2017（平成 29）年 4 月までの間に発行された文献を対象として検索を行った。検索の条件としてまず、キーワード「母親」、「子育て」、「期待と現実」で検索を行ったが、0 件であった。そこで、「母親」、「子育て」、「期待」をキーワードに、医学中央雑誌 Web（ver.4）版、国立情報学研究所論文情報ナビゲーター（以下、CiNii とする）、メディカルオンライン（以下、Medical Online とする）を用いて検索した。検索の結果、医学中央雑誌 Web（ver.4）版で 166 件、CiNii で 50 件、Medical Online で 80 件の文献が検索された。次に、「学童期」や「青年期」の子どもをもつ母親が抱く期待とはテーマが異なるため、「幼児」を追加して絞り込みを行ったところ、医学中央雑誌 Web（ver.4）版で 53 件、CiNii で 17 件、Medical Online で 25 件の文献が検索された。その後、研究テーマが疾病や障がいをもつ子どもの親の成長である文献、会議録、抄録集、総説（解説）、読み物を除外し、「母親の子育てに伴う感情」、「父親の育児や家事参加及びソーシャルサポート」、「多様な専門機関や専門職による子育て支援」「尺度の開発に関する研究」について記述がなされている 35 件の文献について概観した。検索された文献の分類結果を Table 1-1 に、概観した文献の概要を Table 1-2 に示した。以下、分類ごとに詳細を述べる。

（a）母親の子育てに伴う感情

母親の子育てに伴う感情について検討した研究では、母親と子どもとの関係性については 2 件（内田・古家・河合、2011；矢澤、2014）、育児への否定的感情について検討がなされたものが 4 件（星ら、1998；原田・山野・中川・橋本・雲井・加古・大野・亀岡・加藤・服部、2004；長谷川・牧谷・善養寺・村田、2006；川上・澤村・松本・越田・香西・池内・矢敷、2011）、育児への肯定的感情を論述したものが 3 件（砂川・田中・黒石、2010；磯山、2010；川村・田中・畠中、2010）であった。

母親と子どもとの関係性については、内田ら（2011）は、母親の「内的作業モデル（Internal Working Model）」という観点から子どもの育てにくさについて検討した結果、子どもの育てにくさに関する尺度から、「ぐずり・依存行動」、「不機嫌行動」、「対人

Table1-1

医学中央雑誌Web(ver.4)、国立情報学研究所（CiNii）、Medical Onlineにおける
母親・子育て・期待・幼児に関する文献の分類結果

No.	大分類	文献数	小分類	文献数
1.	多様な専門機関や専門職による子育て支援に関する文献	16	乳幼児健診を通して行われる子育て支援	5
			心理職や看護師・看護学生や保育者による子育て支援	6
			子育てサークルや育児教室における子育て支援	5
2.	母親の子育てに伴う感情に関する文献	9	—	—
3.	父親の育児や家事参加及びソーシャルサポートに関する文献	5	—	—
4.	尺度の開発に関する研究に関する文献	5	—	—
5.	疾病や障がいや特別支援に関する文献	18	疾病及び障がいをもつ子どもの保護者	12
			特別な支援を必要とする子どもの保護者	5
			摂食障害をもつ子どもの保護者	1
7.	その他	8		—
計		61		

重複して検索された文献は除いた

Table 1-2 母親・子育て・期待・幼児に関する文献の概要

	著者 (年)	タイトル	研究の対象	調査内容及び尺度	結果
母親の子育てに伴う感情	星永 小田切房子 奥平洋子 他12名 (1998)	低体重児の多面的縦断研究3歳迄の発育・発達と養育環境	早産低出生体重児6名、正期産成熟児9名	小児科外来での診察・面談 親の養育態度として①母乳型育児 ②垂直的親愛 ③水平的親愛 ④自立促進 ⑤許容性 ⑥生活リズム ⑦母現実適応 ⑧家族統合性 子どもの行動特徴として①活動性 ②自我 ③自立 ④大人への親和性 ⑤子どもへの親和性 ⑥情緒安定性 ⑦体質安定性	母親や家族への早期介入をすることで、母親の育児不安を軽減し、育児サポートを得られることで子どもの基本的な欲求を受容できることにより、子どもは体質的にも情緒的にも安定しバランスのとれた発達を遂げていたことから、育児サポートの充実が必須であると報告している。
	原田正文 山野則子 中川千恵美 他7名 (2004)	児童虐待を未然に防ぐためには、何をすべきか 子育て実態調査『兵庫レポート』が示す虐待予防の方向性	兵庫県H市の4か月児健診、10か月児健診、1歳6か月児健診、3歳児健診対象者の母親5242名のうち、回答者3900名	「児童虐待発生要因の解明と児童虐待への地域における予防的支援方法の研究」の一環として子育て実態調査のうち、第1報「自分の子どもが生まれるまでに、小さい子に食べさせたり、おむつをかえたりした経験はありましたか」、「近所にふだん世間話をしたり、赤ちゃんの話をしたりする人がいますか」、「「赤ちゃん(お子さん)をかわいいと思いますか」、「子育てをたいへんと感じますか」、「育児でいろいろすることは多いですか」など	乳幼児を全く知らないまま親になる母親の増加、子育て家庭の孤立化、育児での不安やイライラ感や負担感を感じる母親の急増、親子関係が大きく変化し、「体罰」、「厳格」、「不安」に加えて、「期待」と「干渉」が急増している。また、育児ストレスの大きな原因は「育児で努力しても誰も自分をほめてくれない」という承認欲求や「育児のために自分のしたことができない」という自己実現欲求が満たされないことであると述べている。その上で、自分の子どもとよその子どもを比較して、優秀を競う「子育て競争」をしてしまう傾向や、子どもをしつける際には体罰を使用する傾向が見られることから、子育てスキルを親が身につけるよう支援する必要があると述べている。
	長谷川理絵子 牧谷孝子 善養寺圭子 村田忠良 (2006)	北海道家庭生活総合カウンセリングセンターの電話相談にみる育児不安の変化ー平成元年と平成12年の比較ー	平成元年電話相談者620件、平成12年電話相談者366件	相談カード内容 ①受付年月日 ②担当者 ③相談種別 ④相談経路 ⑤相談者氏名・年齢 ⑥性別 ⑦職業 ⑧住所 ⑨相談形態・回数 ⑩相談対象 ⑪相談内容(主訴、家族構成、相談経過等) ⑫所見	平成元年と平成12年度のカウンセリングセンターの電話による相談を比較して、検討を行った。平成元年では育児不安が子ども側の要因で占められていた。平成12年度では子育てを通して引き出される母親自身への嫌悪感に変化していた。母親自身が親になる前に子どもにかかわる経験や、生活経験の乏しさと関係があらうと推察している。
	川村千恵子 田中昌吾 畠中宗一 (2010)	乳幼児をもつ母親のウェルビーイングに影響を及ぼす要因ー属性、子育て支援ニーズならびに充足度からの検討ー	幼稚園、保育園、子育て支援事業を利用している母親1571名	①属性(母親の年齢、就労形態、子どもの数、末子年齢、親ならびに配偶者親(義親)との居住関係 ②母親のウェルビーイング ③子育て支援ニーズ ④子育て支援充足度	「母親のウェルビーイング尺度」(川村・田辺・野原・畠中、2008)から、「社会面のウェルビーイング」、「家庭面のウェルビーイング」、「母親である自己の受容」、「心理面のウェルビーイング」、「育児面のウェルビーイング」、「身体面のウェルビーイング」の6因子が抽出された。属性と「母親のウェルビーイング尺度」の各因子との関係では、「社会面でのウェルビーイング」はフルタイムで就業している母親や、末子年齢群の4～6歳が高かった。「家庭面でのウェルビーイング」では専業主婦が高く、「母親である自己の受容」は末子年齢群の4～6歳が低かった。子育てに関する情報や、心配事を相談する相手がほしいという「間接的支援ニーズ」は、「母親である自己の受容」に正の影響を及ぼしていた。
	磯山あけみ (2010)	第2子妊娠中の母親の子育てに対する主観的体験	第2子妊娠中の母親20名	第1子に対する子育てについて、おなかの子について、第2子誕生後の子育てについて	母親は「自分の時間確保への望み」を抱いていた。子育ては楽しいことばかりではなく、自己抑制することも多いが、「子育て代償への期待」として、子どもの成長に立ち会えることができるという子育ての醍醐味を感じていたことを報告している。
	砂川公美子 田中満由美 黒石由佳里 (2010)	肯定的感情を記載する「育児日記」による育児幸福感増大の効果	A県内の2～5歳で保育所に通所させている、第1子のみを育児中である、育児日記を1ヵ月間記載してもらえ、その面接に協力してくれる12名母親	1ヵ月間、育児中で感じた肯定的感情の記載	「育児日記」を記載した母親はポジティブ面の認識が強化されていた。育児日記をつけることで、怒り方を改めたり、子どものペースに合わせて行動変容が見られた。「育児日記」は、育児幸福感を増大させるツールになり得る可能性が示唆された。

	著者 (年)	タイトル	研究の対象	調査内容及び尺度	結果
母親の 子育てに 伴う感情	内田利広 古家美穂 河合三奈子 (2011)	母親の内的作業モデルから見た「子どもの育てにくさ」に関する研究－「ぐずり・依存行動」「不機嫌行動」「対人不安行動」をめぐって－	3歳児健診に訪れた母親102名	①属性(年齢、職業、家族形態、子どもの年齢及び性別) ②成人愛着スタイル尺度 ③子どもの育てにくさに関する尺度	子どもの育てにくさに関する尺度から、「ぐずり・依存行動」、「不機嫌行動」、「対人不安行動」の3因子を抽出した。この3因子と母親の「内的作業モデル(Internal Working Model)」の関連については、母親の「内的作業モデル(Internal Working Model)」の回避群と子どもの「対人不安行動」との関連が示唆された。回避群の母親は子育てにおける関わりの難しさを意識していないが、子どもの行動としては他者との関係のとりにくい対人不安行動を示している可能性があり、早期の支援の必要性を報告している。
	川上智美 澤村くるみ 他5名 (2011)	乳幼児をもつ母親の育児に対するネガティブ感情の構造に関する一考察 母親のフォーカス・グループ・インタビューから	B地区在住の0歳から4歳までの乳幼児を育児中の母親、両親がそろっており、日中に幼稚園や保育園の利用がある10名の母親	集団面接(フォーカス・グループ・インタビュー) ①育児で楽しい時、②1歳6ヵ月児健康診査や3歳児健康診査時の項目への回答 ③育児で大変なときとその対処法 ④育児支援事業について思うこと	母親のネガティブ感情は、母親個人の要因において「思い通りに満たせない欲求」と「常にくさぶるイライラの火種」との間に自分との葛藤があった。母親を取り巻く人的要因の中では、子どもを自分の思い通りに「コントロールできない」葛藤があること、父親には手段的サポートや情緒的サポート希求があること、姑には手段的サポート希求があることが示唆された。
	矢澤圭介 (2014)	幼児期における母親の子どもとの一体感とは何か？－子どもイメージ・発達期待・しつけ方針等の関係の分析－	3・4・5歳児をもつ母親210名	①属性(子どもの性別、幼稚園と保育園の別、子どもの年齢、母親の就業状況、パート・アルバイト・自営業) ②IOS尺度 ③人生での重要目への回答 ④育児で大変なときとその対処法 ⑤発達期待尺度 ⑥しつけ方針尺度	「母親の子どもとの一体感(IOS尺度)」は、幼稚園や保育園の違い、子どもの性別、年齢に関係はなかった。また、子どもイメージ、発達期待、しつけ方針についての検討では、しつけ方針においては「母親の子どもとの一体感(IOS尺度)」尺度得点の上位群は子どもを扱いにくいと見ておらず、過保護的な対応をする程度が高い傾向にあることを報告している。
父親の 育児や 家事参 加及び ソーシ ヤルサ ポート	江口麻衣 畠本玲子 他6名 (2001)	育児における父親の母親に対する情緒的支援について	F県の市町村で4ヵ月健診を受けた児の父親353名	①属性(父親の年齢、職業、勤務形態、母親の職業、家族形態) ②父親の幼少期の体験 ③夫婦のコミュニケーション ④妊娠・出産時の夫婦の協力 ⑤母親の満足感に対する父親の認識 ⑥母親への情緒的支援	母親への情緒的支援を行っている父親は幼少期から父親や乳幼児との触れ合い体験をしていたこと、育児において夫婦で協力し良好なコミュニケーションがとれていることを明らかにしている。
	金岡緑 藤田大輔 (2002)	乳幼児をもつ母親の特性的自己効力感及びソーシャルサポートと育児に対する否定的感情	4ヵ月、1歳6ヵ月、3歳6ヵ月健康診査を利用する大阪府I市在住の乳幼児をもつ養育者843名	①個人及び家族構成に関する項目 ②特性的自己効力感尺度 ③育児負担感尺度 ④支援ネットワーク尺度	経産婦において有意に自己効力感が低い傾向があること、育児における否定的感情の認知も経産婦において高い傾向が見られ、特性的自己効力感に対しては負の関連が見られた。サポートの認知が母親の育児効力への期待や否定的感情の認知に大きな影響を与えることから、母親の健康を増進させることにより、育児の継続・充実が期待されると考えられた。
	百瀬栄美子 (2003)	母親の就業状態による子育て観の構造	F県在住の3歳児までの乳幼児をもつ専業主業・就業母親各10名	①属性(父母の年齢、子どもの人数、子どもの年齢) ②相談者・父親の協力度 ③計画出産及同居の有無 ④母親の学歴、父親の勤務体制	子育て観の構成要因は「子育てに対する戸惑い・不安」、「子育てによる心身への負担を実感する」、「周囲の支援により子育ての喜びを実感する」、「子どもと共に親も成長する」、「社会的支援に対する要望・期待」の五つのカテゴリーで成立していた。ソーシャルサポートとして、人的サポートでは母親が本音で語れる場や気持ちを受け止めてくれる人が挙げられた。
	笠井真紀 河原加世子 (2007)	育児期間中の母親への夫の育児サポートと夫婦関係との関連	乳児健診、1歳6ヵ月児健診、3歳児健診を利用した母親196名	①属性(年齢、結婚年齢、第1子出産年齢) ②「夫の育児サポート」 ③「夫婦関係」	「夫の育児サポート」(5項目)、「夫婦関係」(8項目)の因子分析の結果、それぞれ「共同感」因子と「親近感」因子が抽出された。また、因子得点の相関分析を行った結果、相関係数は0.759(p<.001)であり強い正の相関が認められたことから、父親から直接行動が伴わなくても母親が支えられていると認知することで、母親の育児負担は軽減されると推察している。
	片山理恵 内藤直子 佐々木睦子 (2012)	乳幼児の母親と父親のソーシャルサポートと子育て観の関係と育児休業利用の実態	保健センター、助産院、保育所で協力した乳幼児をもつ母親と父親246名	①属性(年齢、性別、世帯類型、子育ての支援者、子どもの人数、就業状態) ②ソーシャルサポート尺度 ③子育て観尺度 ④育児休業制度の利用状況	ソーシャルサポート尺度と子育て観尺度の下位尺度の母親の子育て満足感・生きがい感には弱い正の相関、子育て負担感・不安感には弱い負の相関があった。母親の子育て観を高めるには、ソーシャルサポートが必要であると考えられた。母親は仕事と子育てが両立できる社会を期待しており、子育て意欲はあると考えられた。

	著者 (年)	タイトル	研究の対象	調査内容及び尺度	結果
乳幼児健診を通して行われる子育て支援	炭谷靖子 成瀬優知 (1999)	母親の乳児集団健診に対する期待にかかわる要因	4か月または3か月児健康診査に訪れた683名の母親	①属性(母親の年齢、就業状況、育児の相談相手、日中の主な育児者、子どもの性別、子どもの出生順位、出生時体重、哺乳方法、子どもの育てやすさの感覚) ②今回の健診に対する期待、③育児能力に対する自信 ④対児感情尺度	乳幼児集団健診に期待することは、「専門家に成長発達を確認してもらうこと」、「他の子どもの様子を見られること」、「日頃の悩みを相談できること」、「健診に来た他のお母様と交流がもてること」であったことを明らかにしている。
	片川久美子 小林淳子 (2004)	母親の期待と満足感による1歳6か月児健康診査の評価および母親の属性、ソーシャルサポートとの関係	1歳6か月児健康診査に訪れた母親265名	①属性(母親の年齢、母親の就労の有無、母親の体調、集団健診の経験回数、子どもについての心配の有無、子どもの性別、児の出生順位、児の治療中の病気の有無) ②育児に関するソーシャルサポートの認知 ③健診への期待と期待に対する満足感	健診への期待は「専門家に子どもの成長発達を確認してもらう」であり、満足感も高かった。また、身近に存在するソーシャルサポートを認知している母親は、健診への期待も高く満足感も得られやすいことが明らかにしている。また、対象児が第1子の場合には「他の親子との交流」の満足感が有意に高かった。義母や実母からの手段的サポートを認知している母親は、「他の親子との交流」への期待と満足感が有意に高かった。ソーシャルサポートの提供者が多様であることと健診への期待と満足感には正の相関が認められる傾向にあった。
	林亜希子 萱間真美 近藤あゆみ 他2名 (2005)	A市における乳幼児健康診査の受診および育児支援事業の利用に関連する要因 育児環境に対する母親の認知および抑うつ状態に焦点をあてて	A市在住の3歳前後の子どもを末子にもつ母親231名	①属性(年齢、初産、子どもの数、婚姻状況、就業状況、最終学歴、世帯年収) ②乳幼児健診の受診経験 ③育児支援事業の利用経験 ④育児環境に対する認知 ⑤育児環境に対する期待 ⑥育児支援事業に対する母親の要望 ⑦メンタルヘルスに関する尺度	4か月健診・7か月健診・1歳6か月健診の各事業利用の共通点は、「訪問指導」、「育児指導」、「育児サークル」の項目においては、母親仲間からのねぎらいの期待であった。「面接相談」では母性否定意識と夫婦関係の困難さであった。「電話相談」では母性否定意識、夫婦関係や隣人関係の困難さ、母親の抑うつ状態であることと関連があったと報告している。
	鈴木美枝子 衛藤隆 (2006)	子育て支援の観点からみた健診	1歳6か月児健診に来所した母親339名	①属性(母親の年齢、職業の有無、子どもの性別、子どもの出生順位、祖父母との同居) ②育児上の問題 ③健診への期待 ④健診の感想	健診本来の機能に、子育て支援機能を付加していくことが求められているが、母親が期待していたのは「子どもの成長の確認」という本来の機能であった。また、第1子や職業をもたない母親において有意に期待が高かった。職業をもつ母親は、子どもの病気や症状について具体的なアドバイスを求めている。子育ての知恵や知識を具体的に得たいという母親の期待に対しては母親の健診に対する満足感とは得られていない傾向があることがわかった。健診スタッフは母親のおかれている状況を把握して接することが求められる。
	鈴木美枝子 衛藤隆 (2007)	健診の満足感に関連する要因～子育て支援に着目して～	1歳6か月児健診に来所した母親339名	①属性(母親の年齢、職業の有無、子どもの性別、子どもの出生順位、祖父母との同居) ②育児上の問題 ③健診への期待 ④健診の感想	「健診への期待」については「不安解消や具体的なアドバイスの要求」、「発育・発達について知りたい」、「同月齢の親子の様子が知りたい」、「健診への積極的期待感」の4因子が抽出された。「健診の感想」については、「具体的・個別的アドバイスへの満足感」、「指導内容の押し付け・健診後の不安感」、「実践的な指導内容への満足感」、「気持ちの楽観化」、「指導が一般的・抽象的」、「個別健診の方がいい」の6因子が抽出された。「育児上での問題」については、「夫からのサポート感」、「子どもへの苛立ちや育児への負担感」、「育児への不安感・自身喪失感」、「母親の手で育てるべき」、「子育ての楽しみ」の5因子が抽出された。母親は、健診時に不安を解消したいこと、育児への具体的なアドバイスがほしい傾向があることを明らかにしている。
心理職や看護師・看護学生や保育者	木船宏子 (2003)	乳幼児を持つ母親の母性の発達に関する縦断的研究	3～4歳の子どもを持つ専業主婦5名	①属性(夫婦の学歴、年齢、職業、子どもの出産の状況と発達、性格) ②母性イメージ尺度 ③動的家族画	母性イメージの未熟さと不安傾向は関連はなかった。不安傾向と不定愁訴の関連もなかった。コウ・カウンセリングを基本理念とした半構造化面接による介入によって、母親がライフ・イベントが生じた際に家族が心理的にまとまり成長することにより母性の発達に関与すると考えられた。育児における人間関係能力の発達は、専業主婦の場合、ライフ・イベントと世代間連鎖と自己実現が複雑に作用していると考えられた。心理職をトレーニングし、家庭訪問を行い面接を行うことで育児不安の軽減や児童虐待防止に効果が得られることが示唆された。

	著者 (年)	タイトル	研究の対象	調査内容及び尺度	結果
心理職や看護師・看護学生や保育者による子育て支援	塩川朋子 田中時穂 他2名 (2006)	検査・処置を受ける子どもに対するプレパレーションへの期待 親の視点を通して	子育てサロンを利用している乳幼児期の母親25名	①検査や処置を受ける子どもに対する説明の必要性 ②過去の医療体験と説明の経験 ③採血の場面を題材にした絵本や人形等を使って、プレパレーションの一部を紹介した後の感想	インタビューで語られた内容を質的帰納的に分析した結果、母親の思いは「子どもにとっての効果」、「親にとっての効果」、「医療者側の問題」の3つのカテゴリーに分けられた。「子どもにとっての効果」のサブカテゴリーは、「安心感を得る」、「心の準備ができる」、「頑張れる」などであり、母親は、プレパレーションの実施が子どもの頑張りを引き出し、親も子どもの頑張りを引き出すことに参加できるといふ期待を抱いていることが示唆された。
	植村裕子 野口純子 小川佳代 他7名 (2008)	地域子育て支援事業に参加した母親の看護職への期待	地域子育て支援事業に参加した母親171名のうち、自由記述の記載があった45名	①属性(年齢、就業の有無、子どもの数、家族形態、育児協力者、支援事業の参加、支援事業の継続) ②子育て支援事業の参加動機および満足度 ③看護職に期待することの自由記述	自由記述の内容分析から「援助時の姿勢」、「具体的な支援」、「育児環境の整備」の3つのカテゴリーが抽出された。具体的支援以上に看護師の励ましや優しい心配りを期待していた。看護師には母親を理解すること、母親自身の気づきへと導いていける支援が求められる。地域の中で母子を取り巻く環境の向上に貢献していくことが求められると推察された。
	三好理恵 岡部恵子 千田みゆき 他6名 (2009)	本看護学科における地域貢献のあり方に関する研究－A市の母親の子育て支援のニーズに関する調査を通して－	4ヶ月児健康診査、10ヶ月児保育相談、1歳6ヶ月健康診査、3歳児健康診査と利用した保護者218名	①属性(対象者の年齢、子どもの数、就労状況) ②祖父母との同居の状況 ③子どもの保育所等の通園状況 ④子育て経験中での困りごとの数 ⑤看護学科に期待する育児支援内容 ⑥希望している育児支援の内容	母親の子育てにおける困りごとは「母親自身の困りごと」、「子どもと子どもの状況に関する困りごと」、「子育てをめぐる環境に関する困りごと」であった。調査結果から看護学科に求める子育て支援事業は、地域にとって必要とされる育児方法や食育、栄養に関する講義など専門的知識や情報提供を検討することが必要であることが示唆された。
	望月由紀子 篠原亮次 他9名 (2010)	被虐待児の育児環境の特徴と支援に関する研究	全国の認可夜間および併設昼間保育園18園に在籍する2～6歳の子どもと保護者2050名 そのうち、分析対象は「虐待」「確定」「疑い」と評価された6名	①保護者には育児環境指標 ②子どもの特性(性別、年齢、入園年齢、家族構成、きょうだいの有無) ③保護者特性(育児に対する自信、現在のストレス)	子ども側の要因としては、発達障害の特性を理解できずに手を上げる、怒鳴る、無視するとう育児上の困難を抱えた母親がいた。規則正しい生活が子どもの情緒の安定をもたらし、子どもへの対応方法を母親に伝えたことなど、子どもの扱いにくさへの保護者の認識を変える教育的支援が必要となる。育児環境の要因では、育児協力者がいないことで負担を持っていた。地域で子育て中の親子をサポートする事業の必要性が示唆された。保護者特性の要因では、「育児に自信がない」は育児上の心配ごとが解決されないことがあるので、どのようなサポートが必要か検討する必要がある。このような結果から、保育園等では具体的支援技術の普及を図ること、規則的な生活ができるように促すことと、地域における子育て支援システムの構築が望まれる。
	藤尾順子 山内京子 進藤美樹 (2016)	「子育て中の母親が期待する小児科診療所の看護師の役割に関する実態調査」	小児科診療所を受診している、子育て支援センターを利用している0～3歳の子どもの母親184名	①属性(母親の年齢、職業、学歴、家族構成、子どもの数、子どもの年齢) ②育児に関する内容 ③子どもに関する内容 ④看護師からの指導・情報提供 ⑤相談したい内容・行って欲しい内容	地域における小児科診療所の看護師に期待されている内容は、母親の相談相手ではなく「医者に聞けないような些細な話についてしてくれる」ことであり、母親に寄り添ってくれる関係を求めていることを示唆している。
子育てサークルや育児教室における子育て支援	大澤扶佐子 (2004)	乳幼児をもつ母親への育児教室の効果と保健師の関わり－盛岡市及び矢巾町の育児教室を通して－	育児教室に参加した2か月から14か月をもつ母親129名	①母親の育児環境 母親の年齢、学歴、父親の帰宅時間、育児の相談相手 ②育児教室に参加した動機、参加した感想	母親の育児教室の参加動機は、「正しい知識を得る」、「他の人の育児を知る」、「自分の友達づくり」、「友達に会いたい」、「育児に自信がもてない」であった。育児教室に参加したから母親同士の連帯感がうまれるとは限らない。「何かあれば相談できる人がいると思える」ような展開が出来る支援を考える必要がある。集団にいながら、「友達をつくる」ことや、「育児に自信がない」という母親は、保健師からの個人的な関わりを必要としていると考えられる。育児のネットワークを広げていく援助が求められる。
	勝浦範子 福岡欣治 (2004)	「浜松こども館子育て支援アンケート2003」の報告－子育て支援ニーズに関する実践的研究－	保育園5園、幼稚園4園、子育て支援センター利用者保護者557名、浜松こども館来館者308名	来館者調査(利用状況把握のための調査) ①来館者の年齢、性別 ②職業 ③家族の形態 ④末子の年齢・性別・通園・通学状況 ⑤こども館利用経験・回数 ⑥交通手段・所要時間 ⑦利用日 ⑧利用目的 ⑨末子の遊び・子どもの外出状況	親子の交流の場としての機能は期待されていなかった。「親子ともに顔見知り、子どもには遊び相手、親には話し相手が出来るとような交流の場」としての機能を高めることが求められたと報告している。

	著者 (年)	タイトル	対象者	調査内容及び尺度	結果
子育てサークルや育児教室における子育て支援	小林真 米納絵吏 (2014)	子育てサークルに対する母親の態度－パーソナリティ要因を考慮して－	保育園、幼稚園に子どもが在籍している母親、育児サークルを利用している母親 295名	属性①子育てサークルへの参加の有無、参加していた期間、母親の年齢、子どもの年齢、家族構成 ②育児サークルに抱いていた期待 ③パーソナリティ尺度	パーソナリティ尺度の因子分析の結果、「情緒不安定」、「内向性」、「協調性」の3因子が抽出された。子育てサークル尺度は1因子構造であった。子育てサークルに対する期待尺度と母親の感想を比較した結果、参加する前に抱いていた期待に比べ参加後の感想は低下していた。このことにより利用者のニーズに応えていないことがわかった。また、グループワークを通じて母親同士のコミュニケーションをとる機会が十分に保障されている子育てサークルでは、参加者の満足度は高いことから、親子のふれあいを促進する、親子で一緒に遊ぶ場を設定することが求められる。サークル内ではリーダー的な役割を与えるなど他者のために活躍できる場を考えるなどの運営が求められる。
	石井栄子 (2015)	親の心の変化に焦点づけた「フォーカシングを基盤とした親向け講座」の試みと効果－親の安心感を確保し、子育て力のエンパワメントを図る－	0歳児から未就学の幼児を子育て中の保護者20名	月1回、連続4回の親子向け講座の実施、グループワーク、ロールプレイの実施、講座の体験についての討議	半構造化面接により、気持ち楽になった、子育ての意欲が向上した等の意見があった。ロールプレイにより大人、子ども、観察者両方の気持ちの理解ができた。自分の子どもへの態度を振り返る機会を得た等の意見があった。本講座に参加して親の本来持っている力を助長し、子育ての応用力となる力、子育てに向き合う力をエンパワメントすることができたと考えられた。
	岩永幸 井上徳浩 他3名 (2016)	大阪狭山市における乳幼児スキンケア講習会の取り組み	乳幼児スキンケア講習会に参加した1か月児から4歳児までの母親82名	講座前①養育者の性別、年齢 ②受講児の性別、月齢 ③小児期の皮膚の特徴 ④スキンケアの方法 講座後①小児期の皮膚の特徴についての理解 ②スキンケアの方法の理解 ③講習全体の満足感 ④講習会で良かった点	母親は児の皮膚トラブルをストレスと感じていることや、講習後は子どもの皮膚の特徴やスキンケアに関する知識が向上したと感ずることがわかった。医師や保健師、管理栄養士、アレルギーサークルによる多職種が協働して行う支援は、アレルギーの一次予防につながり、母親のもつ不安を軽減につながると考えられると報告している。
尺度の開発に関する研究	吉田弘道 山中龍宏 他5名 (1999)	育児不安尺度の作成に関する研究－1歳半児の母親用試作モデルの検討	育児雑誌の全国の購入リストから、第1子の1歳児を育てている母親265名、再テストは69名	育児不安調査用紙（母親の育児不安19項目、夫のサポート7項目、相談相手の有無4項目、子どもの育てやすさ8項目、母親の育児意識・育児満足17項目）	全項目について因子分析を行なった結果、「育児満足」、「夫のサポート」、「子どもの育てやすさ」、「相談相手の有無」、「自己効力感」の6因子が抽出された。クロンバックα係数は0.59～0.91であった。育児不安5段階評定とSTAIの状態不安5段階評定との間で妥当性について検討したところ、有意な正の相関が認められ、2回目調査結果からも有意な相関が認められた。本モデルにおいては、不安段階5を示した母親をスクリーニングし、重点的に相談・援助活動を行うことができる。
	陳東 森恵美 他4名 (2006)	乳幼児を持つ親に対する子育て観尺度の開発－信頼性・妥当性の検討－	既婚、単胎、正期産、母子とも妊娠出産において特に異常がない、産後入院中の褥婦とその夫 416名	文献による構成概念の検討と尺度原案の作成後、内容的妥当性と表面的妥当性の検討・修正を行った。質問紙による信頼性と妥当性の検討を行う。	項目分析による選定を行った結果、平均値や標準偏差に大きな偏りのみられた項目、I-T（項目－全体）相関0.20未満の項目5項目を削除した。残り60項目に対し因子分析を行い5つの因子が抽出された。因子負荷量が0.30未満、解釈困難であった17項目を削除し、43項目を採用した。再度、因子分析を行なった結果、「子育て肯定的印象」、「親役割強化」、「子育て否定的印象」、「周囲との関わり」、「子ども観」の5つの因子が抽出された。全体のクロンバックα係数は0.79であり、5下位尺度のα係数は0.58～0.81であった。妊娠期の男女に用いることや、子育てを経験する前のスクリーニングツールとして活用することが可能であると考えられる。
	清水嘉子 関水しのぶ (2010)	母親の育児ストレス尺度の短縮版作成と妥当性の検討	6歳以下の乳幼児を持つ母親 672名	①属性（母親の年齢、子どもの数、末子の年齢、就業状況、家族構成） ②育児ストレス尺度 ③主観的幸福感 ④ベックの絶望感尺度 ⑤子育て完全主義傾向により構成される質問紙	育児ストレス尺度33項目を3因子分析した結果、「心身の疲労」、「育児不安」、「夫の支援のなさ」の3因子が抽出された。3つの因子それぞれの項目の内的整合性を表すα係数は、0.82から0.88と十分な値が得られた。構成概念妥当性の検討において、ベック絶望感得点とは有意な正の相関、主観的幸福感とは負の相関、子育て完全主義とは正の相関がみられた。「子育てを完璧に行なわなければならない」という認知が育児中の不安を高めるということが示唆された。短時間で子育て中の母親の心理状態の査定ができ、母親本人にとって解釈がしやすくなることで、臨床での汎用性が期待される。

	著者 (年)	タイトル	対象者	調査内容及び尺度	結果
尺度の 開発に 関する 研究	清水嘉子 関水しのぶ 遠藤俊子 (2010)	母親の育児幸福 感尺度の短 縮版尺度開発	6歳以下の乳幼 児を持つ母親 672名	①属性(母親の年齢、子どもの数、 末子の年齢、就業状況、家族構 成) ②育児幸福尺度 ③主観 的幸福感 ④ベックの絶望感尺度	育児幸福尺度41項目を因子分析した結果、「育児の 喜び」($\alpha=0.82$)、「子どもとの絆」($\alpha=0.77$)、「夫への 感謝」($\alpha=0.86$)の3因子が抽出された。育児幸福尺 度短縮版と主観的幸福感尺度との間には正の相関があ り、ベックの絶望感尺度との間には負の相関があった。 育児幸福尺度反収版は心理的健康との関連が示唆 され、母親自身にフィードバックすることが出来、子育て に対する振り返る資料として役立つことが期待できる。
	金岡緑 (2011)	育児に対する 自己効力感尺 度 (Parenting Self-efficacy Scale:PSE尺 度)の開発と その信頼性・ 妥当性の検討	4か月・1歳6か 月・3歳児乳幼 児健診を利用 した乳幼児を もつ母親648名	①属性(父母の年齢、初産・経産 の別、母親の就業形態) ②育児 に対する自己効力感尺度、③特性 的自己効力感尺度 ④育児負担 尺度 ⑤精神的健康度 ⑥支援 ネットワーク尺度	育児に対する自己効力感尺度の妥当性は、探索的因 子分析より1次元の尺度であり、すべての項目が一定以 上の因子負荷量をもつこと、特性的自己効力感尺度との 有意な正の相関が見られたことで構成概念の妥当性が 支持された。基準的妥当性では、特性的自己効力感尺 度と支援ネットワーク尺度で正の相関を認め、育児負担 尺度と精神的健康度において負の相関を認めたことによ り確認された。重回帰分析によって、育児場面で乳幼 児をもつ母親は、育児に対する自己効力感、育児負担 感の関連性が最も強く、情緒的支援ネットワークと精神 的健康度に強い影響を与えることがわかった。手段的 ネットワークは直接的に影響を与えないことが示された。

不安定行動」の3因子を抽出した。この3因子と母親の内的作業モデルの関連については、母親の内的作業モデルの回避群と子どもの「対人不安定行動」との関連が示唆された。回避群の母親は子育てにおける関わりの難しさを意識していないが、子どもの行動としては他者との関係がとりにくい対人不安定行動を示している可能性があり、早期の支援の必要性を報告している。矢澤（2014）は、3・4・5歳児をもつ母親210名を対象に、「母親の子どもとの一体感（IOS尺度）」と母親の外の変数や母親内の変数との関係を検討した。その結果、母親の子どもとの一体感は、幼稚園や保育園の違い、子どもの性別、年齢に関係はなかった。また、しつけ方針においては母親の子どもとの一体感尺度得点の上位群は子どもを扱いにくいと見ておらず、過保護的な対応をする程度が高い傾向にあることを報告している。

育児への否定的感情については、星ら（1998）は、低出生体重児6名と正期産成熟児9名に、生後1ヵ月から3歳までの面接や行動観察を行い、児の発達特徴と環境要因との関係性を検討した。結果、母親や家族への早期介入をすることで、母親の育児不安を軽減し、子育て実感が肯定的に受け止められるための方策が求められると示唆している。原田ら（2004）は、2003（平成15）年に実施した子育て実態調査と1980（昭和55）年生まれの子どもたちを対象とした子育て実態調査との比較・検討を行った。その結果、2003（平成15）年では乳幼児を全く知らないまま親になる母親の増加、子育て家庭の孤立化、育児での不安やイライラ感や負担感を感じる母親の急増、親子関係の大きな変化により、「体罰」、「厳格」、「不安」に加えて、「期待」と「干渉」の急増が目立つ。また、育児ストレスの大きな原因が「育児で努力しても誰も自分をほめてくれない」という承認欲求や「育児のために自分のしたいことができない」という自己実現欲求が満たされないことにあることを明らかにしている。一方で、1989（平成元）年と2000（平成12）年度のカウンセリングセンターの電話による家庭生活相談内容を比較し検討を行った長谷川ら（2006）は、1989（平成元）年では育児不安が子ども側の「泣く」、「不快」、「困惑」などの要因で占められていたと報告している。一方、2000（平成12）年度では子育てを通して引き出される母親自身への嫌悪感に変化していた。母親自身の人間関係の薄さや苦手さに加え、母親自身が親になる前に子どもに関わる経験や、知識を応用する力を裏付ける生活経験の乏しさと関係があらうと推察している。川上ら（2011）は、育児困難感や育児不安のネガティブ感情の構造を明らかにするために、フォーカス・グループ・インタビューを行った。その結果、母親のネガティブ感情は、母親個人の要因

において「思い通りに満たせない欲求」と「常にくすぶるイライラの火種」との間に自分との葛藤があり、子どもの成長発達を理解するための支援や、母親同士の交流促進ができる場を提供することの必要性を指摘している。

育児への肯定的感情については、砂川ら（2010）は、「育児日記」を使用した母親のポジティブな情動への変化を明らかにし、「育児日記」は、育児幸福感を増大させるツールになり得る可能性を示唆した。礒山（2010）は、第2子妊娠中の母親20名を対象に、母親の子育てに対する主観的体験を検討した。母親は「自分の時間確保への望み」を抱くとともに、子育ては楽しいことばかりではなく、自己抑制することも多いが、「子育て代償への期待」として、子どもの成長に立ち会うことができるという子育ての醍醐味を感じていたことを報告している。また、川村ら（2010）は、母親としての肯定的側面を支援するための方策を探るために、ウェルビーイングを規定する要因を母親の属性、子育て支援ニーズならびに子育て支援充足度との関連について検討を行った。属性と「母親のウェルビーイング尺度」の各因子との関係では、「社会面でのウェルビーイング」はフルタイムで就業している母親や、末子年齢群の4～6歳が高かった。「家庭面でのウェルビーイング」では専業主婦が高く、「母親である自己の受容」は末子年齢群の4～6歳が低かった。子育てに関する情報や、心配事を相談する相手がほしいという「間接的支援ニーズ」は、「母親である自己の受容」に正の影響を及ぼしていた。母親としてのウェルビーイングを高めるために、専門職からの情緒的・情動的サポートを得られる環境を創ることが望まれると考察している。

(b) 父親の育児や家事参加及びソーシャルサポート

父親の育児や家事参加及びソーシャルサポートについて検討した研究は5件であった。江口・畝本・緒方・周布・田中・月川・山尾・津留崎（2001）は、父親の母親に対する情緒的支援に影響を与える要因として、情緒的支援を行っている父親は幼少期から父親や乳幼児との触れ合い体験をしていたこと、育児における夫婦の協力やコミュニケーション、子どもの人数などが関係していることを明らかにしている。金岡・藤田（2002）は、乳幼児をもつ母親の人格特性的傾向である自己効力感が、母親のソーシャルサポートの認知と否定的感情に及ぼす影響について検討した。その結果、経産婦において有意に自己効力感が低い傾向にあること、育児への否定的感情の認知も経産婦において高い傾向が見られ、特性的自己効力感に対しては負の関連が見られることが明らかになった。

金岡ら（2002）はサポートの認知が、母親の育児効力への期待や否定的感情の認知に大きな影響を与えることから、親子あるいは夫婦関係など個人の家族システムをサポートする家族支援の方略が有効であろうと述べている。

百瀬（2003）は、子育て中の母親の子育て観の構成要因を明らかにし、ソーシャルサポートが与える影響について検討した。その結果、子育て観の構成要因は「子育てに対する戸惑い・不安」、「子育てによる心身への負担を実感する」、「周囲の支援により子育ての喜びを実感する」、「子どもと共に親も成長する」、「社会的支援に対する要望・期待」の五つのカテゴリーで成立していた。ソーシャルサポートについては、手段的サポートでは「延長保育」、「病児保育施設の促進」、人的サポートでは、母親が本音で語れる場や気持ちを受け止めてくれる人が挙げられ、父親の子育てに対する精神的な理解度が影響すると推察された。笠井・河原（2007）は、育児期間中の母親への父親の育児サポートと夫婦関係との関連について検討を行った。その結果、「夫の育児サポート」、「夫婦関係」はどちらも1因子で構成され、父親から直接行動が伴わなくても母親が支えられていると認知することで、母親の育児負担は軽減される可能性を示唆している。片山・内藤・佐々木（2012）は、ソーシャルサポートと子育て観の関係と父母の育児休業利用状況について検討を行った。「子育て観尺度」（内藤・橋本・杉下、1998）から「子育て満足感 生きがい感」と「子育て負担感・不安感」の2因子が抽出された。ソーシャルサポートと「子育て満足感・生きがい感」は弱い正の相関、「子育て負担感・不安感」では弱い負の相関を示したことから、肯定的感情を高めるために、ソーシャルサポートの必要性が報告されている。

（c）多様な専門機関や専門職による子育て支援

多様な専門機関や専門職による子育て支援について検討した研究は11件であった。乳幼児健診を通して行われる子育て支援については、炭谷・成瀬（1999）、片川・小林（2004）、林・萱間・近藤・妹尾・大原（2005）、鈴木・衛藤（2006・2007）によって研究が行われていた。炭谷ら（1999）は、乳幼児集団健診の意義を利用する母親の視点から検討を行った。その結果、乳幼児集団健診に期待することは、「専門家に成長発達を確認してもらうこと」、「他の子どもの様子を見られること」、「日頃の悩みを相談できること」、「健診に来た他のお母様と交流がもてること」であったことを報告している。また、母親のソーシャルサポートの認知、健診への期待と満足感について調査を行った片

川ら（2004）は、健診への期待は「専門家に子どもの成長発達を確認してもらう」であり、満足感も高かったこと、身近に存在するソーシャルサポートを認知している母親は、健診への期待も高く満足感も得られやすいことを明らかにしている。林ら（2005）は、乳幼児健診の受診と育児支援事業の利用に関連する要因について検討した。育児支援事業利用の共通点については、「訪問指導」、「育児指導」、「育児サークル」では、母親仲間からの労いの期待であること、「面接相談」では母性否定意識と夫婦関係の困難さであること、「電話相談」では母性意識否定、夫婦関係や隣人関係の困難さ、母親の抑うつ状態であることと関連があったと報告している。鈴木ら（2006・2007）は、乳幼児健診に参加した母親は、育児に対して不安感や自信喪失感を感じていることにより、健診において不安を解消したいこと、具体的なアドバイスがほしい気持ちをもつ傾向があることを明らかにしている。その上で、指導内容を押し付けられたと感じたり、不安感を感じたりする傾向があり、母親の心の状態により配慮した関わりが求められると考察している。

心理職や看護師・看護学生や保育者による子育て支援については、木船（2003）、塩川・田中・上川・森田（2006）、植村・野口・小川・榮・三浦・竹内・舟越・宮本・松村・大池（2008）、三好・岡部・千田・佐鹿・浅川・大森・吉岡・安藤・坂口（2009）、藤尾・山内・進藤（2016）、望月・篠原・杉澤・童・平野・富崎・田中・渡辺・恩田・川島・安梅（2010）によって報告されている。

ライフ・イベント（Life-events）と心理職の面接的介入が母性の発達に与える影響を検討した木船（2003）は、ライフ・イベントが生じた際に家族が心理的にまとまり、成長することにより母性の発達に関与することが示唆され、それにより、心理職は母親とラポールが成立すれば、面接を行う中で育児不安の軽減や虐待の早期発見に効果があることを示唆している。看護師による子育て支援について、塩川ら（2007）は、乳幼児期の子どもをもつ親が、検査や処置を受ける子どもへの説明をどのように考えているかについて検討を行い、母親は、プレパレーションの実施が子どもの頑張りを引き出し、親も一緒に子どもの頑張りを支えることを期待していたと報告している。一方で、植村ら（2008）は、母親が看護職に対して期待していることは、「励ましや優しい心配り」、「行動」であり、対象者を理解することや対象者の気づきへと導けるような支援のあり方が求められると考察した。また、看護学科における地域貢献として具体的方策を検討した三好ら（2009）は、看護学科に求める子育て支援事業には、地域にとって必要とされる育児方法や食育、栄養に関する講義など専門的知識や情報提供が必要であることを報告

している。さらに、藤尾ら（2016）は、地域における小児科診療所の看護師に期待されている内容は、母親の相談相手ではなく「医者に聞けないような些細な話」であり、母親に寄り添ってくれる関係を求めていることを示唆している。保育園における子育て支援については、望月ら（2010）によって検討が行われ、児童虐待の早期発見・早期支援のために、保育園などにおいて活用可能な根拠のある具体的な支援技術の普及が求められること、地域や家庭における保護者支援システムを構築する必要性があると述べられている。

子育てサークルや育児教室における子育て支援については、大澤（2004）、勝浦・福岡（2004）、小林・米納（2014）、石井（2015）、岩永・井上・竹村・田野・新田（2016）によって報告されている。大澤（2004）は、育児教室に参加した母親が育児教室への参加から得たいものは、日頃感じている育児についての心配事に関する保健師の情動的援助者としての役割であると述べている。勝浦ら（2004）は、子ども館を利用している保護者にアンケート調査を行い、子ども館の利用状況と今後の役割を検討した。その結果、親子の交流の場としての機能は期待されていなかったことより、「親子ともに顔見知り、子どもには遊び相手、親には話し相手が出来るとような交流の場」としての機能を高めることが求められると報告している。小林ら（2014）は、保育所と幼稚園に子どもを在籍させている母親にアンケート調査を行い、子育てサークルに参加する前に抱いていた期待と参加後の感想を比較した。その結果、期待に比べて参加後の感想が低下しており、利用者のニーズに応えられていないことが明らかになっている。その上で、グループワークを通じての母親同士のコミュニケーションをとる機会の保障、親子同士が一緒に遊ぶ場の設定が求められることを示唆している。また、石井（2015）は、0歳から未就学幼児の子育て中の保護者が、子育てひろばで「フォーカシングを基盤とした講座」を受講したことにより、子育てをしている親の気持ちの安定や子育て力のエンパワメントにつながったと考えている。岩永ら（2016）は、乳幼児スキンケア講習会の取り組みにおいて、参加した母親は児の皮膚トラブルをストレスと感じていること、講習後は子どもの皮膚の特徴やスキンケアに関する知識が向上したことを報告している。医師や保健師、管理栄養士、アレルギーサークルによる多職種が協働して行う支援は、母親のもつ不安の軽減につながると報告している。

（d）尺度の開発に関する研究

尺度の開発に関する研究についての文献は 5 件であった。吉田ら（1999）は、「育児不安スクリーニング尺度: Maternal Anxiety Screening Scale」を作成した。第 1 因子「育児満足」、第 2 因子「育児不安」、第 3 因子「夫のサポート」、第 4 因子「子どもの育てやすさ」、第 5 因子「相談相手の有無」の 5 下位尺度で構成されている。吉田らは、本尺度の使用により、母親の育児不安の背景や育児意識と育児環境を把握できる手段となると報告している。乳幼児をもつ親に対する子育て観尺度を開発した陳・森・望月・柏原・安藤・大月（2006）は、子育て観を「乳幼児を育てること全般に対する個人の見解、考え方、価値観、認識、印象、期待の総体である」と定義している。下位尺度は、第 1 因子「子育ての肯定的印象」、第 2 因子「親役割強化」、第 3 因子「子育ての否定的印象」、第 4 因子「周囲との関わり」、第 5 因子「子ども観」の五つである。陳らは、子育て観を客観的にアセスメントすることにより、育児ストレスに陥りやすい対象をスクリーニングすることが可能であると指摘している。

また、清水ら（2010）は、多面的な育児幸福観を捉える CHS（Child-care Happiness Scale）の短縮版を作成した。第 1 因子「育児の喜び」、第 2 因子「子どもとの絆」、第 3 因子「夫への感謝」といった育児を通して直接的に感じる幸福感や、児の父親に対して感じられる感謝の念などの肯定的な感情についての項目から構成されており、その得点の度合いによって母親の心の健康を考える指標として活用が期待される。また、清水・関水（2010）は、多面的な育児ストレスを捉える育児ストレス尺度 CSS（Childcare Stress Scale）短縮版を作成した。第 1 因子「心身的疲労」、第 2 因子「育児不安」、第 3 因子「夫の支援のなさ」といった 3 下位尺度で構成されている。調査の結果、「子育てを完璧に行わなければならない」という認知が育児中の不安を高めるということが示唆された。金岡（2011）は、我が国の実情に応じた育児に対する自己効力感尺度（以下 PSE 尺度）を開発した。PSE 尺度は、育児場面における母親の自己効力感そのものを測定することが可能であり、潜在的に育児ストレスを抱えているが、母親自身で表現できない、親役割の過剰適応により認知されない対象に対して、現存のスクリーニングに比べ有効な手法であることが示唆された。

3. まとめ

現在、子育てをしている母親は、女性の就業継続の困難、子育て期にある男性の長時間労働などにより、ひとりで家事や育児を担っている状況であると言われている。その

ような状況で孤立した子育てをしている母親の期待と現実の乖離は、心理的葛藤となり母親自身の生活や子どもとの関わり方に影響を及ぼすものと考えられる。

母親の子育てに伴う感情に関しては、母親と子どもとの関係性で検討されていた。母親の育児不安の背景には、親になる前の子どもと関わる経験の乏しさがある(長谷川ら、2006)と考えられるが、子どもとの関わり方を肯定的な側面から捉えることは、子育てに対する見方を変える(砂川ら、2010)とする報告があった。これらは、母親が子育てについて「期待と現実の差」を認めながら、物事の見方や自分の行動を見直すことで、今までとは異なった対処法が見つかる可能性があることを示唆している。

また、父親の育児や家事参加及びソーシャルサポートについては、江口ら(2001)は幼少期に自身の父親とふれあう体験をしている父親は、母親と良好なコミュニケーションを行い、情緒的支援を積極的に行っていることを報告している。さらに、「夫婦で一緒に育児を行っている」(笠井ら、2007)と母親によって認知される夫の育児サポートは、直接、母親を手助けする行動だけでなく、心理面での夫によるサポートが母親の育児負担の軽減につながると報告している。つまり、子どもとふれあう体験がある父親は、自身が親になった時に母親の「期待と現実の差」を小さくする可能性があるものと推察される。

多様な専門機関や専門職による子育て支援においては、乳幼児健康診査では「専門家に子どもの成長発達を確認してもらおう」(片川ら、2004)こと、小児科診療所の看護師には、母親に寄り添ってくれる関係(藤尾ら、2016)、保育園における保護者支援では、子ども側の要因や育児環境の要因など、発見・把握に努め質の高い保育の提供や保護者のニーズに合った支援(望月ら、2010)が期待されていた。子育てサークルや育児教室における保護者支援では、講習会に参加してスキンケアに関する知識の提供を受けることが母親のストレスの軽減につながる(岩永ら、2016)、親向け講座への参加が子育てに向き合う力をエンパワメントすることにつながる(石井、2015)、母親のパーソナリティに配慮したきめ細かい子育てサークルの運営が求められる(小林ら、2014)ことについて報告がされていた。これらは、子育てに困難を感じている母親の「期待と現実の差」に働きかけ、負担を軽減するための取り組みであると考えられる。

尺度の開発に関する研究においては、育児不安尺度(吉田ら、1999)、子育て観尺度(陳ら、2006)、母親の育児幸福感尺度(清水ら、2010)、母親の育児ストレス尺度(清水ら、2010)、育児に対する自己効力感尺度(金岡、2011)など、子育て期における母

親の育児への感情を多面的に捉えようと開発が行われていた。育児に対する育児幸福感や自己効力感などの母親の個人的・主観的・心理的な抽象概念を測定でき、かつ標準化された測定方法を開発することで、母親の子育てにおける心理社会的現象に対する研究が可能となり、母親の育児に伴う感情に対する理解も深まってきている。母親の「子育ての期待と現実の差」についても、こうした育児感情との関連を検討していくことが必要である。

4. 問題の所在

第2節において、母親が子どもや子育てなどを心に描き理想化することを「子育ての期待」として捉え、これまでに報告されている子育ての期待に関連した研究を概観した。内容としては、母親の子育てに伴う感情に関する研究、父親の育児や家事参加及びソーシャルサポートに関する研究、さらに、母親の育児不安や子育て負担軽減のための多様な専門機関や専門職による子育て支援に関する研究が行われていた。

また、育児不安尺度や自己効力感尺度など、その概念を理論的に枠組みにした研究が行われていた。それぞれの尺度は、母親のスクリーニングに目的をもち母親の具体的支援に向けて適切な方策が行われることを期待して開発されていた。

このような研究の流れの中で、我が国の子育て世代の男性の長時間労働や、家事や子育てに費やす時間をみると、6歳未満の子どもをもつ夫の家事関連時間は1日当たり67分となっている（内閣府、2016）。また、女性が家事や子育てをひとりで担っている状況を表現した「ワンオペ育児」（読売新聞、2017）という言葉が注目されている。これは女性が結婚してから、家事や子育てなどの家庭生活の全てを担うことに加えて、就業することで、仕事と生活の調和が保たれていない状況にあるという認識が広まっていることによる。このため、女性が親になる以前には、個人の生活を優先することが可能であったが、親になり子どもの養育を担い、家事や就業という新しい役割を果たすことが求められる状況では、「こんなはずではなかった」という「期待と現実の差」を認識し、日々の生活や子どもとの関わりを困難なものにすると考えられる。

また、男性においても、家事や育児を積極的に行う男性「イクメン」及び社会的な気運醸成を図る「イクメンプロジェクト」（厚生労働省、2010）が開始され、父親も家事や子育てに関わらざるを得ない状況も推察される。「育児経験の無い父親は自分が育児に参加することに戸惑い」（光田・村上、2002）を感じていること、「家庭や育児に関心を

持つ父親が期待と役割で押し潰される危険」(竹原・須藤、2012)があることも指摘されている。さらに、父親においては、「実際に自分が育児をしようとした時に父親モデルがない」(牧野・金泉・伊豆・佐光、2011)のために、子どもとの関わり方や役割が分からないことも想定される。このようなことから、母親が期待する父親の家事や子育てへの参加及びその精神的なサポートの必要性について、父親が十分に認識していない可能性も考えられる。

さらに、母親は思い描いた子育てへの期待と母親になった自身や、「子どもとかかわり方に迷い、育児に自信がもてない」(原田、2006)などの現実との差(隔たり)の大きさに、悩みや戸惑いを感じているものと推察される。母親も父親も子どもとの接触経験や育児経験がないまま親となる人が増えている中で、保育者が子育ての「期待と現実の差」からもたらされる母親の認識について知ることは、保護者支援を行う際に適切な方法を見出す可能性が高まると考えられる。

さらに、3歳頃からの自我の発達が始まりに対して、母親が苛立ちを覚えること(中添・白石・舟越、1999; 寺藺、2009)や、「子どもの成長とともに行動や性格、対人関係の持ち方等」(服部・原田、1999)のしつけや教育的な内容へ質的に変化する時期であることも、母親にとってより深刻な悩みをもたらしている。例えば、幼児クラスへの進級で集団での生活や、友だちとの関わりを周りの子どもと比較し、子どもの成長や発達に不安を抱いている場合には、期待する子どもの認識と現実の子どもの認識の差から、子どもへの過度な要求や関わりをしている可能性も考えられる。

このようなことから、子どもの保育と保護者への支援を提供する教育・保育施設において、保育者が多様な課題を抱えた保護者に対して、保育者側の見方や価値観からの助言や提案のみを行っては、保護者なりの関わり方まで否定することになると考えられる。また、一時的な対処法や、その場限りの提案は、保護者にとっては子どもと関わる中で「うまくいった」、「これでいい」という自信をもつことにはつながりにくいと考えられる。保育者が保護者支援を行う場合には、その背景や要因を親役割、子どもへの認識、父親との関係など多面的に、「期待と現実の差」から保護者を捉えることによって、課題解決に向けた支援や様々な情報提供を行う必要があるのではなかろうか。したがって、全ての子どもの健やかな育ちを実現するためには、保護者支援において、「子育ての期待と現実の差」に影響を与える要因を検討することは、保護者が子育てを自ら実践する力の向上に寄与するために意義があると考えられる。

第2章 本研究の目的

第1節 本研究の目的と構成

1. 本研究の目的

少子化の一方、子育てに便利な商品や道具は市中に多く流通している。また、妊婦に優しい施設や妊婦が外出しやすいまちづくりなどの子育て環境や、公共交通機関においても乳幼児連れ移動にかかる情勢の変化には目を見張るものがある。女性の生き方に対する価値観や意識も変化し、結婚や出産後も就業継続も可能となっているとされているが、はたしてそうであろうか。男女共同参画時代と言われながら、長時間労働、仕事の人間関係、ワーク・ライフ・バランスなど、心理学では多重役割の影響について、肯定的な立場と否定的な立場の双方が報告されている(土肥・広沢・田中、1990;濱田、2005)。そういった中で、結婚、妊娠、子ども・子育てに温かい社会づくりが推進されているが、実際に子育てを始めてみると「こんなはずではなかった」という失望を抱く人も少なくない。地域の養育力や家族とのきずなが弱まった中、出産や子育てで就業継続の断念をせざるを得ない状況も見受けられる。このような中、保護者に子育てに対する不安感や負担感が増大している現状を踏まえて、教育・保育施設において保護者支援に対する社会的要請が高まってきている。保護者が子どもとの関わりの中で抱く不安や、この育て方でいいのか、他によい方法があるのかなど、子育て場面に上手く対処するための具体的な解決策を気軽に相談できる保育者の存在は、保護者にとって身近な支援者となり得るであろう。保育者は子どもの育ちだけでなく、前章で述べたように保護者に対する支援を「子育ての期待と現実の差」から捉え、保護者の子育てを支える視点や効果的な支援のあり方を探る必要があるのである。

「子育ての期待と現実の差」に関しては、1970年代から家政学分野で研究が行われてきた。具体的には、夫婦の役割分担に対して家事労働や子どもの養育における役割関係においてお互いが期待したものを実現している(久武、1977)とか、夫のもつ妻への役割期待は収入の獲得や家事の処理能力などの道具的役割より、夫に対する情緒的優しさ、暖かさなどの表出的役割である(伊藤富美、1988)とか、育児を固定的性役割意識で捉えている夫をもつ妻は育児への負の感情をもっているが、夫の気持ちを理解して期待に応じようとしている(猪野、1994)とか、夫と妻がお互いに望む役割に関する研究など

が行われていた。しかし、現代では、その時代から社会状況や生活様式も変化し、母親が近隣に子育てのサポートを得られない中で、子育てをしている自身に対して感じる「子育ての期待と現実の差」について研究する必要があると考えられる。

本研究の目的は、幼児をもつ母親の「子育ての期待と現実の差」が、母親の育児感情に与える影響を明らかにすることである。さらに、教育・保育施設において保育者が行う保護者支援において、「子育ての期待と現実の差」の視点から検討を行い、保護者支援に有効な方法を提案することである。

2. 本研究の構成

本研究は、以下の6章からなる。

はじめにでは、まず、母親を取り巻く現状として、子育て支援施策の流れについて「少子化対策の視点」、「次世代育成支援対策の視点」、「男女共同参画の視点」、「児童虐待の視点」、「保護者支援の視点」から概観した。

第1章では、保護者の子育てを支えるために、保護者の立場から問題を捉え、保護者理解するための視点として、母親が日常の子育てによって起因する育児への否定的感情と肯定的感情から先行研究を概観する。第1節では母親の育児感情に関する研究動向、第2節においては、研究1として「子育ての期待」についてのこれまでの研究動向を概観することによって、いくつかの問題点を明らかにした。

第2章では、第1章において概観した母親を取り巻く現状、母親の育児感情に関する研究、保護者支援の課題を踏まえ、本論文の目的と構成並びに基本概念の定義について述べる。まず、第1節では本論文の目的と研究構成について述べる。続く第2節では、「子育ての期待と現実の差」、母親の育児への肯定的感情、保育者、教育・保育施設における保護者支援、保護者などについて基本概念の定義を行う。

第3章においては、幼児をもつ母親の育児への肯定的感情と「子育ての期待と現実の差」との関連について検討を行う。第1節（研究2）では、「子育ての期待と現実の差」が大きいと感じる母親、第2節（研究3）において「子育ての期待と現実の差」が小さいと感じる母親、それぞれになぜそのように感じるのかについて自由記述による調査を行い、養育力の向上のために、母親の年齢の高低や職業の有無に配慮した保育者による情報提供や、支援のあり方について検討する。現在、「すべての女性が輝く社会」（内閣官房、2014）の実現にむけて様々な施策が行われている中、男性の家事や育児への参画

意識を高めることが重要と考えられている。女性の社会進出や経済的自立を促す社会的雰囲気に対して、父親の家事や育児参画が少ないと指摘される中、その分担を巡って葛藤の問題が想定され、夫婦で労り合うことや対話についても母親の育児への肯定的感情に及ぼす影響に関する検討が必要である。さらに、育児経験や接触体験のないまま親になる人が増えていることから、母親の過去における子育て体験が、現在の親役割や親性の形成に影響を与えている可能性も考えられる。これらの要因も含めて、保護者理解を深めるための検討を行う必要がある。そこで第3節（研究4）において、幼児を養育している母親を対象に、「母親の育児への肯定的感情」、「子育ての期待と現実の差」、「父親の家事や育児協力」、「子育て体験」、「夫婦の対話」について調査し、各要因と「母親の育児への肯定的感情」との関連について、母親の年齢の高低や職業の有無で検討を行う。

第4章では、保護者を理解するという視点からさらに具体的に、「子育ての期待と現実の差」を捉える方法として、育児期の親性尺度（大橋・浅野、2010）の構成概念の中から、「親役割の状態」と「子どもへの認識」の二つの下位領域を用いる。その上で、母親としての子どもとの関わりの中で現実の「親役割の状態」、「子どもへの認識」と、期待する「親役割の状態」、「子どもへの認識」との差に着目する。第1節（研究5）では、母親の子育てにおける「期待と現実の差」に影響を及ぼす要因について、「母親の年齢」、「就業状況」、「父親からのサポート」、「育児感情」、日常生活の中で経験する家事や子どもとの関わりの中で感じる幸福感である「日常生活での育児幸福感」から検討を行う。続く第2節（研究6）においては、「子育ての期待と現実の差」が大きい群と「子育ての期待と現実の差」が小さい群の両群の母親に「母親が求める保護者支援」についてアンケート調査を行い、第1節の結果も踏まえ、子どもの育ちを家庭と連携して支援していくために検討を行う。

研究7・研究8によって構成される第5章では、第3章・第4章で検討した教育・保育施設における保護者支援について、保育者が感じている保護者に対する主観的な見方である「保育者の保護者観」、教育・保育施設全体で行われている「子どもや保護者を支える職員体制」、個別の保護者に寄り添い養育力の向上に資する「望ましい保護者支援」の視点から検討する。

保護者支援において、保育者は自らがもつ「こんな保護者であってほしい」という保護者観で保護者を捉えて対応することは、保育者の価値観の押し付けになっていないか。保護者が子育てにおいて「子育ては大変だと思う」、「自分のための時間がない」という

訴えに対して、標準化された対応や見せかけの「受容」や「共感」の態度だけでは、保護者の訴えの背景に気づかず、重大な問題を見逃す可能性も予測される。そこで、研究 7 において、保育者の保護者観について調査を行い、望ましい保護者支援に影響を与える要因について検討を行う。さらに、研究 8 では、保育者の保護者支援についての自由記述から、保育者が有する保護者支援の特徴を捉え、有効な保護者支援を行うために検討を加える。

そして、第 6 章において、本研究によって得られた結果とその意義・限界、今後の課題について考察する。以上の本研究の構成を **Figure2-1** に示す。

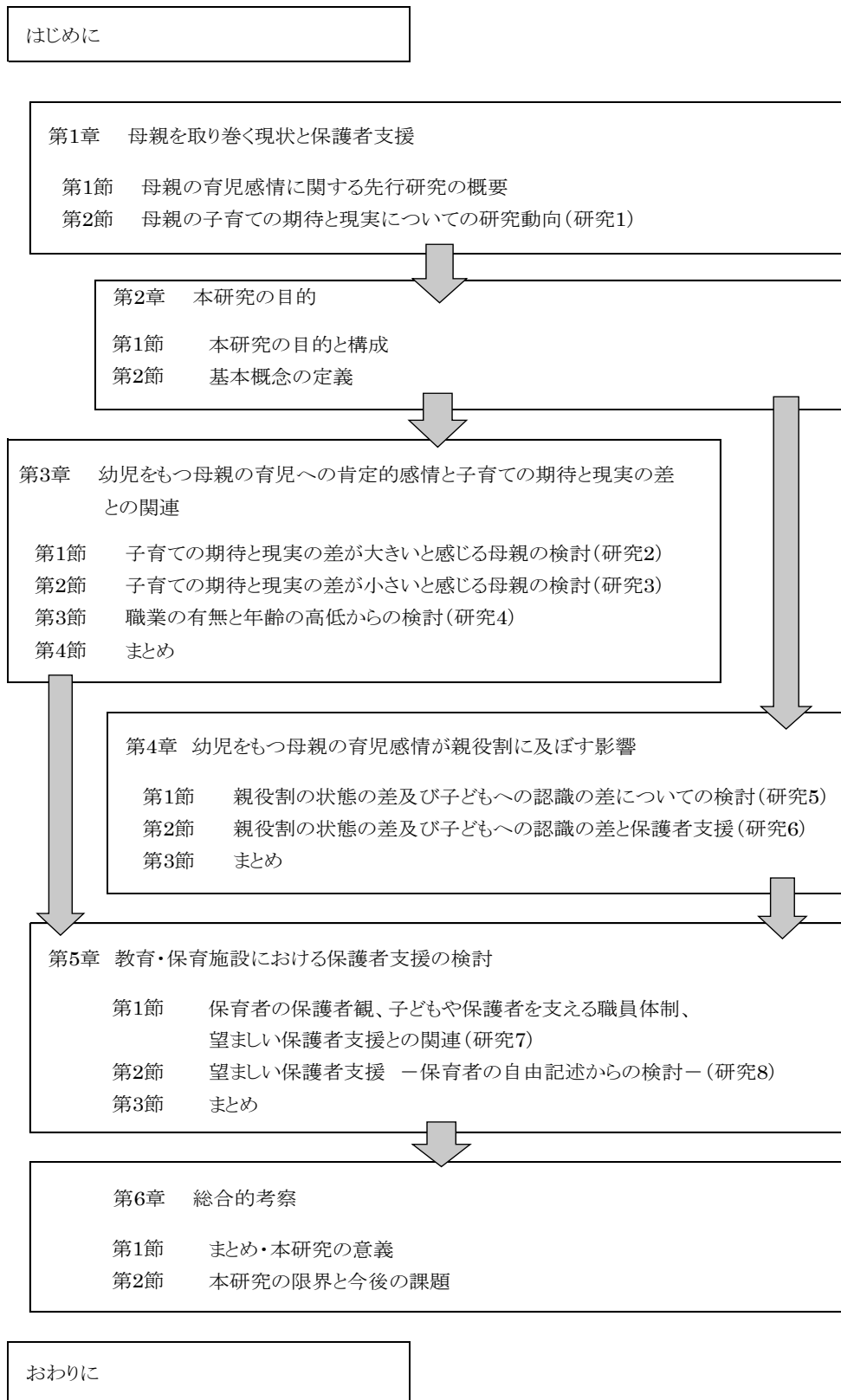


Figure2-1 本論文の構成

第2節 基本概念の定義

1) 子育ての期待と現実の差

興石（2002）は、「育児不安に影響を与えると考えられる要因として、育児に携わる以前の母親の感情、すなわち子どもあるいは育児に対する母親の期待感や、育児が上手にできるかどうかといったような予期不安の存在」が考えられると述べている。また、親になることで幸福感や期待感といった肯定的なイメージと不安感や焦燥感といった否定的なイメージをもつという親意識の役割形成についての研究（大和、2003）もあり、母親が親になり子どもの世話をすることにより、期待する親役割や期待する子育てに対して、葛藤を抱いている場合も考えられる。さらに、母親が認識する現実の乳児の状態や日常生活に対する期待と願望が違っていることと育児困難感の特徴との関連を明らかにした研究では、母親の育児困難感は、子どもと気持ちが通じ合っていないという母親の認識や子どもの気質、日常生活に対する期待との相違と関連があることを見出している（茂本ら、2010）。先行研究においては、母親になる前の子育てに対する受け止め方としての「子育ての期待」と、想像以上に大変な「現実の子育て」とのギャップや乖離の大きさが子育て不安に関連があるとする文脈の中で捉えられている（原田、2006；高田・巽、2008）。これらの研究知見を踏まえ、本研究においては、「子育ての期待と現実の差」とは、母親が抱く子どもや子育てについての願望や理想化した内容である「子育ての期待」と「現実の子育て」との間に感じる差のことであり、母親自身の主観的な評価を意味することとする。つまり母親が思い描いていた「子育ての期待」と、母親となった「現在の子育て」との間で、「子育ての期待」より「現在の子育て」に多くの負担を感じている場合には、子育てに不安や困難を抱くであろうと考えられる。しかし、「子育ての期待」より「現実の子育て」が高く評価されれば、子どもや子育てに対して、満足感を得ているであろうと考えられる。

2) 母親の育児への肯定的感情

荒牧（2005）は、育児への肯定的感情を「子どもを育てることや子どもの存在自体を肯定的に捉える感情」と定義して、父親からのサポートが多い母親は、育児への否定的感情が低く、肯定的感情が高いことを明らかにしている。さらに、荒牧ら（2008）は、未就学児をもつ母親を対象に行った研究の中で、育児への肯定感について「子どもの年齢や性別、きょうだい数などにかかわらず、母親の育児感情を支える基盤となりうると考えられる」と述べて、母親が仕事をもち、育児と自分のキャリアとを両立させている

方が、育児を肯定的に捉え楽しんでいると推察している。近藤（2006）は、生後 6 か月未満の乳児を育てている母親のインタビュー調査から、子育ての不安や生活への制約感・苛立ち・負担感をもちながら、子どもとの関係を築く努力をする中で、過去の自分や子どもと比較をしながら現在の自分を肯定的に捉え、成長を確認していると報告している。また、島田・恵美須・長岡・高橋・森・遠藤（2003）は、産褥期育児生活感尺度改訂に関する研究において、「自己肯定感」因子は母親役割への自信や育児を中心とした現在の自己の生活に対する肯定的感情を示す 7 項目から構成されたことを報告している。これらの研究知見を踏まえ、本研究における「母親の育児への肯定的感情」は、「育児肯定感」と「自己肯定感」で構成されるものとする。「育児肯定感」とは、子どもとの関わりの中で「子どもがかわいい」、「子どもの成長に喜びを感じる」など、育児を肯定的に受け止めている感情を言う。「自己肯定感」とは、子育てを通して新たな友達とも良好な関係を築き、親となった自己を肯定的に受け止めている感情を言う。なお、ひとり親、ふたり親、ステップファミリーなどの様々な家族形態では、子育てを行っている親を区別しないこととする。

3) 保育者

本研究における「保育者」とは、2015（平成 27）年に本格実施された「子ども・子育て支援新制度」の下、幼児期の教育や乳幼児期の保育の提供を行っている幼保連携型認定こども園、保育所などの学校及び保育施設における教育や保育に携わっている者を言う。労働形態は、正規職員や非常勤職員の別は問わないこととする。

4) 教育・保育施設における保護者支援

『保育所保育指針』（厚生労働省、2008a）の第 6 章「保護者に対する支援」において「保育所における保護者への支援は、保育士等の業務であり、その専門性を生かした子育て支援の役割は、特に重要なものである。保育所は、第 1 章（総則）に示されているように、その特性を生かし、保育所に入所する子どもの保護者に対する支援及び地域の子育て家庭への支援について、職員間の連携を図りながら、次の事項に留意して、積極的に取り組むことが求められている。」と規定されているように、保育士には「専門的知識及び技術をもつて、児童の保育及び児童の保護者に対する保育の指導」（児童福祉法、第 18 条の 4）を行う責任や役割が求められている。また、2012（平成 24）年に制定された子ども・子育て支援法第 7 条においては、「この法律において『子ども・子育て支援』とは、すべての子どもの健やかな成長のために適当な環境が等しく確保されるよう、

国若しくは地方公共団体又は地域における子育て支援を行う者が実施する子ども及び子どもの保護者に対する支援をいう。」と明記されている。

一方、幼保連携型認定こども園においては、『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』（2014）の第1章第3-6において、「保護者に対する子育ての支援に当たっては、この章の第1に示す幼保連携型認定こども園における教育及び保育の基本及び目標を踏まえ、子どもに対する学校としての教育及び児童福祉施設としての保育並びに保護者に対する子育ての支援について相互に有機的な連携が図られるよう、保護者及び地域の子育てを自ら実践する力を高める観点」に立って、幼保連携型認定こども園の園児の保護者に対する子育ての支援、地域の子育て家庭の保護者等に対する支援を行うことが規定されている。このように、保育者には教育や保育施設において「保育士の専門性」や「教育及び保育に関する専門性」を用いて、「保護者の養育力の向上に資する」支援を行うこと、「保護者及び地域の子育て力を自ら実践する力」を高める観点に立って行う支援が求められている。さらに、保育者には保護者が実際に子育てを行っていく中で「保護者のなかに育つことが期待されている養育力」（丹羽、2012）の向上を支援することが期待される。以上を踏まえ、本研究における「保護者支援」は、保育者が教育や保育施設においてその専門性を用いて、子育ての具体的な対処法の提案や、生活課題に必要な情報の提供を行い、保護者が子どもの成長に気付き子育ての喜びが感じられるように、保育相談や課題への取り組みを通して保護者の子育てを支えるものとする。

5) 保護者

本研究における「保護者」とは、児童福祉法（1947）に則り、「第十九条の三、第五十七条の三第二項、第五十七条の三の三第二項及び第五十七条の四第二項を除き、親権を行う者、未成年後見人その他の者で、児童を現に監護する者をいう」。さらに、認定こども園及び保育園を利用している、並びに地域で子育てをしている者も保護者と言うこととする。

6) 保育者の保護者観

牧野（2012）は、その研究の中で保護者は『『自分の気持ちや言動に対して保護者の立場に立って対応してもらいたい』『一方的な価値観に縛られないで自分のことは自分で決めたい』』などの思いをもっていると述べている。一方で、保育者の経験年数が5年を経過するころから、自己中心的な保護者や問題を抱えた保護者への対応に苦慮したり、困難感を感じている（成田、2012）、経験年数が短いほど、保護者対応に苦手意識をも

っている（中平・馬場・高橋、2014）など、保護者対応の難しさを指摘する報告がある。このようなことから、保育者は自身の生育歴や親子関係の中で培われた子ども観や保護者観、または保育経験から蓄積された保護者への見方や考え方をもち、子どもの姿を受容しながら保護者の意向や要望をも受容しているものと考えられる。そこで、本研究においては、「保育者の保護者観」は、保護者から寄せられた相談内容及び意向や要望に対して、保育者個人の経験から捉えられた保護者に対する肯定的な捉え方や、否定的及び消極的な捉え方並びに批判的な見方や考え方なども含む認知的評価であるとする。

7) 望ましい保護者支援

本研究における望ましい保護者支援とは、『保育所保育指針解説書』（厚生労働省、2008b）の第6章内の文面をもとにした保護者支援についての研究（鈴木・横川、2009）を参考に、「保護者に対する支援」の基本を踏まえた内容である「保護者に対する個別支援」、「保護者との相互理解」、「子どもの保育に関連した保護者支援」及び、第3章と第4章から得られた内容である「保護者への共感的支援」を含める必要があると考えられる。本研究では、「望ましい保護者支援」とは、「子育ての期待と現実の差」から保護者を捉え、母親の職業の有無や年齢の高低に配慮された支援の実施や、必要な情報提供を行い、子どもの健やかな育ちが実現できるよう、保護者の子育てを支えることであるとする。

第3章 幼児をもつ母親の育児への肯定的感情と子育ての期待と現実の差との関連

第1節 子育ての期待と現実の差が大きいと感じる母親の検討（研究2）

1. 目的

核家族化や少子化による子育ての孤立化や、育児情報が氾濫する中で、子育て世代の母親たちは身近で子育てをしている母親の姿を見たり、自身が乳幼児と関わる経験が少ないまま母親になるなど、子育てをする母親を取り巻く環境は大きく変化している。

花沢・松浦（1986）は、男女大学生を対象に、対児感情と小学校・中学校・高校の各時期における赤ちゃんとの接触経験の有無との関係を調査した結果、男女ともに児童期から乳児との接触経験を多くもった学生は、対児感情が高い傾向がみられたと報告している。また、乳児と接触経験をもっている女子大学生は、あやし行動やあやし言葉、発話速度についてはゆっくりと話しかけるなど、多様な行動を身につけている（中川・松村、2010）とする報告から、自身の経験から得られた乳幼児に対する具体的なイメージは、子どもへの関わり方の手がかりになることが示唆されている。

しかしながら、「育てている子どもの月齢や年齢によって母親の育児不安の質」（吉田、2013）も異なり、子どもの行動や性格によっては、子どもとの関わりやしつけの場面において、母親が育児不安に陥りやすいと考えられる。母親が核家族として孤立した状態で子育てを始めることで、子どもに触れた経験の無い母親が「子育ての期待」と「現実の子育て」に落差を感じていることは想像に難くない。また、子どもをもつことによって起こる日常生活の変化や、身体的疲労や負担についても「こんなはずではなかった」という感情を抱くと推察される。さらに、それぞれの母親がもつ「子育ての期待」の実現に向かって一生懸命に取り組んでいる母親にとって、「こんなはずではなかった」という思いは、家族関係や子育てに対して「これでいい」と思えず、子育てに不安や困難を感じる状況にもつながると考えられる。

そこで、本研究では母親が子どもと日々関わる中での、子どもや子育てについての「期待と現実の差」に関する記述を取り上げて、年齢の高低や就業の有無などの母親の属性による違いがあるかを検討する。これにより、保護者支援を行う保育者にとって「子育ての期待と現実の差」が大きいと感じる要因について検討を行うことを通して、母親に

対する理解を深め、適切な支援の方向性を見極めたり、必要な情報提供を行うことにつながるのではないかと考えられる。

2. 方法

(a) 手続き

無記名式自記式質問紙調査による検討を行った。調査の方法としては、近畿圏内の二か所の認定こども園に3・4・5歳児を在籍させている保護者619名に、調査の依頼文と「子育てアンケート（母親）」と題した調査票を入れた封筒を園の保育教諭を通じて配布し、自宅で持ち帰り回答し封印したものを回収した。有効回答は418（白紙回答は5、欠損値8）であり、回収率は69.6%であった。

(b) 調査対象者

母親が主観的にもつ子どもや子育てなどについての「子育ての期待と現実の差」感じる程度について、「よくあてはまる」、「すこしあてはまる」と回答した母親237名から得られた673の自由記述を分析対象とした。調査対象者の基本属性をTable3-1に示す。

(c) 調査期間

2013年7月11日から21日、2013年9月9日から20日にかけて行った。

(d) 分析方法

子どもや子育てについて、期待と現実の差を感じると思う内容、自分が子どもとの関わりの中で経験する負担やそれに伴う感情について自由記述（複数回答）を求めた。自由記述の分類としては、記述内容について一名分の記述に二つ以上の内容が含まれている場合においては、記述を分離し二つ以上の記述として取り扱った。次に、児童保育を専攻する博士後期課程に在籍する大学院生7名により、KJ法を用いて検討を行った（川喜田、1986）。また、分析のプロセスにおいては、妥当性を確保するために、臨床心理士によりスーパーバイズを受けた。

3. 結果

(a) 子育ての「期待と現実の差」が大きいと感じる母親の記述内容

子どもや子育てについて、「期待と現実の差」が大きいと感じる内容、自分が子どもとの関わりの中で経験する負担やそれに伴う感情について、KJ法を用いて分類したところ、51の小カテゴリーと12の大カテゴリーを得た。Table3-2に示す。

Table3-1

研究3における調査対象者の基本属性

	項目	人数 (%)
年齢	20～24歳	3 (0.1)
	25～29歳	24 (5.7)
	30～34歳	124 (30.4)
	35～39歳	157 (37.6)
	40～44歳	98 (23.4)
	45歳～	12 (2.8)
職業形態	職業に就いていない	255 (61.0)
	フルタイム	24 (5.7)
	パートタイム	67 (16.0)
	アルバイト・内職	22 (5.3)
	家業	33 (7.9)
	その他	17 (4.1)
子どもの 人数	1人	89 (21.3)
	2人	245 (58.7)
	3人	70 (16.7)
	4人以上	14 (3.3)
家族形態	夫婦と子どものみ	371 (88.7)
	夫方親族と同居	11 (2.6)
	妻方親族と同居	13 (3.1)
	その他	23 (5.6)

Table 3-2

子育ての期待と現実の差が大きいと感じる母親の記述例

大カテゴリー	小カテゴリー		記述例
育児負担感 129 (19.2%)	負担感	69 (10.3%)	・子育ては大変だと思う
	育児不安	28 (4.2%)	・子どもが思うように育たない
	衝動的な叱責	17 (2.5%)	・子どもの振る舞いで怒ってしまう
	責任感	15 (2.2%)	・子育てに責任を感じる
時間の制約 114(16.9%)	時間の制約	44 (6.5%)	・自分のための時間がない
	行動の制限	22 (3.4%)	・やりたいことができない
	突然の予定変更	18 (2.7%)	・自分の思うように物事が進まない
	孤独感	11 (1.6%)	・一人で子育てをしているように思う
	切迫感	10 (1.4%)	・気持ちに余裕がない
	喪失感	9 (1.3%)	・失うものが多すぎる
期待と現実の差がある 76(11.3%)	困難感	18 (2.7%)	・もっと楽しく育児ができてと思っていた
	マニュアル	16 (2.4%)	・子育てにマニュアルはない
	父親の協力がいない	14 (2.1%)	・育児・家事を全部、一人でするとは思ってなかった
	母親像への葛藤	14 (2.1%)	・かわいいだけでは育てられない
	専業主婦への誤解	11 (1.6%)	・子育てをしてイライラする人の気持ちがわかった
	母性への懷疑	3 (0.4%)	・自分には母性がないのではないかな
世話経験がある 69(10.3%)	職場での経験談	29 (4.3%)	・職場で先輩の子育ての話を聞いていた
	友達の子育て	28 (4.2%)	・友だちの子どもの面倒をみたことがある
	同胞の子育て	7 (1.0%)	・兄弟姉妹の子どもの面倒をみたことがある
	保育や教育実習	5 (0.7%)	・保育や教育実習で経験した
母親の充実感 63(9.4%)	母親役割の受容	20 (2.9%)	・子どものために一緒にいてやりたいと思う
	子どもへの愛情	18 (2.7%)	・子どもがかわいい
	幸福感	15 (2.2%)	・幸せを感じる
	充実感	10 (1.5%)	・毎日、充実していると思う
子どものしつけや対処法 62(9.2%)	しつけの方法	23 (3.5%)	・しつけの方法が分からない
	子どもの行動の読み取り	16 (2.4%)	・子どもが泣いている理由がわからない
	反抗期の対応	13 (1.9%)	・イヤイヤ期の対応が難しい
	周囲の子どもとの比較	5 (0.7%)	・まわりの子どもと比べてしまう
	子どもの性格	5 (0.7%)	・子どもの性格によって対応が違う
母親の心身の疲労 58(8.6%)	イライラ感	24 (3.5%)	・イライラすることが多くなった
	睡眠不足	12 (1.8%)	・睡眠不足になる
	疲労感	11 (1.6%)	・疲れる、疲労を感じる
	体力不足	6 (0.9%)	・体力がいる
	忍耐力	5 (0.7%)	・忍耐力がいる
自分の成長 46(6.8%)	自分の成長	16 (2.4%)	・一人前になったと思う
	子どもへの関心	15 (2.2%)	・他人の子どもへ視線がいくようになった
	社会との関わり	13 (1.9%)	・物の見方や考え方が変わった
	再発見	2 (0.3%)	・人生を2度生きているように思う
子どもの気質 20(3.0%)	育てにくさ	9 (1.3%)	・よく泣く わがママを言う 言うことを聞かない
	寝つきの悪さ	7 (1.0%)	・夜、なかなか寝ない
	活発さ	4 (0.7%)	・活動的な子どもである
期待と現実の差がない 8(1.2%)	生き方	4 (0.6%)	・母親も自分も専業主婦である
	働き方	2 (0.3%)	・両親が共働きだった
	自己実現	2 (0.3%)	・仕事が続いてきている
育児支援がある 8(1.2%)	祖父母の支援	4 (0.6%)	・祖父母からの育児支援が得られている
	父親との会話	4 (0.6%)	・父親と育児について話し合っている
その他 20(3.0%)	世間の冷たい視線	8 (1.2%)	・しつけができていないのは母親のせいだという声
	仕事の継続	4 (0.6%)	・仕事と家庭の両立が難しい
	育児情報	3 (0.4%)	・情報が多すぎる
	行政サービス	3 (0.4%)	・必要な情報が届いていない
	金銭的負担	2 (0.3%)	・子育てにお金がかかり過ぎる
合計		673	

「負担感」、「育児不安」、「衝動的な叱責」、「責任感」という四つの小カテゴリーからなる『育児負担感』。「時間の制約」、「行動の制限」、「突然の予定変更」、「孤独感」、「切迫感」、「喪失感」という六つの小カテゴリーからなる『時間の制約』。「困難感」、「マニュアル」、「父親の協力が無い」、「母親像への葛藤」、「専業主婦への誤解」、「母性への懷疑」という六つの小カテゴリーからなる『期待と現実の差がある』。「職場での経験談」、「友達の子育て」、「同胞の子育て」、「保育や教育実習」という四つの小カテゴリーからなる『世話経験がある』。「母親役割の受容」、「子どもへの愛情」、「幸福感」、「充実感」という四つの小カテゴリーからなる『母親の充実感』。「しつけの方法」、「子どもの行動の読み取り」、「反抗期の対応」、「周囲の子どもとの比較」、「子どもの性格」という五つの小カテゴリーからなる『子どものしつけや対処法』。「イライラ感」、「睡眠不足」、「疲労感」、「体力不足」、「忍耐力」という五つの小カテゴリーからなる『母親の心身の疲労』。「自分の成長」、「子どもへの関心」、「社会との関わり」、「再発見」という四つの小カテゴリーからなる『自分の成長』。「育てにくさ」、「寝つきの悪さ」、「活発さ」という三つの小カテゴリーからなる『子どもの気質』。「生き方」、「働き方」、「自己実現」という三つの小カテゴリーからなる『期待と現実の差がない』。「祖父母の支援」、「父親との会話」という二つの小カテゴリーからなる『育児支援がある』。「世間の冷たい視線」、「仕事の継続」、「育児情報」、「行政サービス」、「金銭的負担」という五つの小カテゴリーからなる『その他』といった 12 の大カテゴリーに分類された。

(b) 母親の年齢別、職業有無別に見た記述内容

本研究においては、母親の年齢を高群と低群に分ける基準として母親の平均年齢 36.39 歳（標準偏差 3.39）より高い方を年齢高群（記述は 347 個）、低い方を年齢低群（記述は 326 個）とした。同様に就業形態で「フルタイム」、「パートタイム」、「アルバイト・内職」、「家業」、「その他」と回答した母親を職業有群（記述は 354 個）、「職業に就いていない」と回答した母親を職業無群（記述は 319 個）とした。

まず、各カテゴリーに該当する記述の件数を年齢の高低群及び職業の有無群で分け、それらの件数を χ^2 検定によって比較検討を行った。なお、統計的有意水準は 5%未満とした。その結果を Table3-3、3-4 に示す。

分析の結果、大カテゴリーにおいては、年齢高群においては、『母親の心身の疲労』（ $\chi^2=4.95$ 、 $p<.05$ ）が有意に多かった。年齢低群では、『時間の制約』（ $\chi^2=4.91$ 、 $p<.05$ ）、『育児負担感』（ $\chi^2=6.01$ 、 $p<.05$ ）の 2 項目が有意に多かった。職業の有無群において

Table 3-3
大カテゴリーと母親の年齢についての χ^2 検定

大カテゴリー		年齢高群		年齢低群		χ^2 検定結果
育児負担感	育児負担感有	54	* ↓	75	* ↑	$\chi^2=6.01^*$
	育児負担感無	293		251		
合計		347		326		
時間の制約	時間の制約有	48	* ↓	66	* ↑	$\chi^2=4.91^*$
	時間の制約無	299		260		
合計		347		326		
期待と現実の差がある	期待と現実の差がある	45		31		$\chi^2=2.01$
	期待と現実の差がない	302		295		
合計		347		326		
世話経験がある	世話経験がある有	28		41		$\chi^2=3.71^\dagger$
	世話経験がある無	319		285		
合計		347		326		
母親の充実感	母親の充実感有	39		24		$\chi^2=2.98^\dagger$
	母親の充実感無	308		302		
合計		347		326		
子どものしつけや対処法	子どものしつけや対処法有	38		24		$\chi^2=2.59$
	子どものしつけや対処法無	309		302		
合計		347		326		
母親の心身の疲労	母親の心身の疲労有	38	* ↑	20	* ↓	$\chi^2=4.95^*$
	母親の心身の疲労無	309		306		
合計		347		326		
自分の成長	自分の成長有	25		21		$\chi^2=.15$
	自分の成長無	322		305		
合計		347		326		
子どもの気質	子どもの気質有	14		6		$\chi^2=2.81^\dagger$
	子どもの気質無	333		320		
合計		347		326		
期待と現実の差がない	期待と現実の差がない	5		3		$\chi^2=.39$
	期待と現実の差がある	342		323		
合計		347		326		
育児支援がある	育児支援が有	3		5		$\chi^2=.64$
	育児支援が無	344		321		
合計		347		326		
その他	その他有	10		10		$\chi^2=.02$
	その他無	337		316		
合計		347		326		

* p<.05、 † p<.10

Table 3-4
大カテゴリーと母親の職業の有無についての χ^2 検定

大カテゴリー		職業有群	職業無群	χ^2 検定結果
育児負担感	育児負担感有	63	66	$\chi^2 = .91$
	育児負担感無	291	253	
合計		354	319	
時間の制約	時間の制約有	62	52	$\chi^2 = .18$
	時間の制約無	292	267	
合計		354	319	
期待と現実の差がある	期待と現実の差がある	37	39	$\chi^2 = .53$
	期待と現実の差がない	317	280	
合計		354	319	
世話経験がある	世話経験がある有	37	32	$\chi^2 = .03$
	世話経験がある無	317	287	
合計		354	319	
母親の充実感	母親の充実感有	39	24	$\chi^2 = 2.41$
	母親の充実感無	315	295	
合計		354	319	
子どものしつけや対処法	子どものしつけや対処法有	31	31	$\chi^2 = .19$
	子どものしつけや対処法無	323	288	
合計		354	319	
母親の心身の疲労	母親の心身の疲労有	29	29	$\chi^2 = .17$
	母親の心身の疲労無	325	290	
合計		354	319	
自分の成長	自分の成長有	26	20	$\chi^2 = .31$
	自分の成長無	300	327	
合計		326	347	
子どもの気質	子どもの気質有	13	7	$\chi^2 = 1.27$
	子どもの気質無	341	312	
合計		354	319	
期待と現実の差がない	期待と現実の差がない	5	3	$\chi^2 = .32$
	期待と現実の差がある	349	316	
合計		354	319	
育児支援がある	育児支援が有	4	4	$\chi^2 = .02$
	育児支援が無	350	315	
合計		354	319	
その他	その他有	8	12	$\chi^2 = 1.31$
	その他無	346	307	
合計		354	319	

有意な差は見られなかった。次に、小カテゴリーに該当する記述の件数を母親の年齢の高低群及び職業の有無群で分け、それらの件数を χ^2 検定により比較検討を行った。 χ^2 検定で有意な差が認められたカテゴリーについて残差分析を行った結果、母親の年齢高群において、「衝動的な叱責」、「責任感」($\chi^2=13.01$, $p<.01$)、「母親役割の受容」($\chi^2=12.70$, $p<.01$)が有意に多かった。年齢低群では、「時間の制約」($\chi^2=12.82$, $p<.05$)、「反抗期の対応」($\chi^2=11.36$, $p<.05$)、「幸福感」($\chi^2=12.70$, $p<.01$)が有意に多かった。また、職業有群において、「時間の制約」($\chi^2=12.86$, $p<.05$)、「困難感」($\chi^2=14.10$, $p<.05$)、「反抗期の対応」($\chi^2=11.75$, $p<.05$)、「睡眠不足」($\chi^2=11.62$, $p<.05$)、「子どもへの関心」($\chi^2=8.37$, $p<.05$)、の 5 項目が有意に多かった。職業無群では、「充実感」($\chi^2=9.60$, $p<.05$)、「衝動的な叱責」($\chi^2=9.83$, $p<.05$)、「父親の協力が無い」($\chi^2=14.10$, $p<.05$)が有意に多かった (Table3-5、3-6)。

4. 考察

(a) 母親の年齢の高低群に関する結果に対する考察

子どもや子育てについて、「期待と現実の差」が大きいと感じる母親の記述内容の大カテゴリーでは、年齢高群においては『母親の心身の疲労』が有意に多かった。『母親の心身の疲労』は自身の年齢の影響や、子育て不安や子育て負担による子育てのストレスの兆候を心理面だけでなく、身体的不調といった側面 (塩田、2011) から感じているのではないかと推察される。小カテゴリーにおいては『母親の心身の疲労』の「イライラ感」や「睡眠不足」で有意な差は見られなかったが、心身の疲労を認知した中での子育ては、『育児負担感』において子育てをがんばらなければという「責任感」を強く認識しているがゆえに、「衝動的な叱責」につながった可能性も考えられる。一方で、社会進出や就業継続などのライフコースの変更を迫られることが多かった年齢高群で、『母親の充実感』における「母親役割の受容」は有意に高かった。日頃の子どもとの関わりの中で、「母親役割の受容」という自身の役割を評価しているものと考えられる。

また、年齢低群では、『時間の制約』における「時間の制約」が有意に高かった。乳幼児をもつ母親を対象とした育児ストレス尺度の作成を行った研究 (吉永・眞鍋・瀬戸・上里、2006) では、やりたいことを我慢することや、自由な時間がないことにより解釈された「育児による拘束」下位尺度得点は、3~4 歳児をもつ母親において一番高かったことを報告している。さらに、『子どものしつけや対処法』における「反抗期の対応」

Table3-5 小カテゴリーと母親の年齢についての χ^2 検定

大カテゴリー	小カテゴリー	年齢高群 (n=129)		年齢低群 (n=108)		χ^2 検定結果
育児負担感	負担感	24		45		$\chi^2=13.01^{**}$
	育児不安	8		20		
	衝動的な叱責	12	* ↑	5	* ↓	
	責任感	10	* ↑	5	* ↓	
時間の制約	時間の制約	11	* ↓	33	* ↑	$\chi^2=12.82^*$
	行動の制限	12		10		
	突然の予定変更	11		7		
	孤独感	6		5		
	切迫感	6		4		
	喪失感	2		7		
期待と現実の差がある	困難感	6		12		$\chi^2=9.48$
	マニュアル	10		6		
	父親の協力が無い	9		5		
	母親像への葛藤	10		4		
	専業主婦への誤解	9		2		
	母性への懐疑	1		2		
世話経験がある	職場での経験談	11		18		$\chi^2=7.74$
	友達の子育て	8		20		
	同胞の子育て	5		2		
	保育や教育実習	4		1		
母親の充実感	母親役割の受容	17	* ↑	3	* ↓	$\chi^2=12.70^{**}$
	子どもへの愛情	11		7		
	幸福感	4	* ↓	11	* ↑	
	充実感	7		3		
子どものしつけや対処法	しつけの方法	16		7		$\chi^2=11.36^*$
	子どもの行動の読み取り	13		3		
	反抗期の対応	3	* ↓	10	* ↑	
	周囲の子どもとの比較	3		2		
	子どもの性格	3		2		
母親の心身の疲労	イライラ感	17		7		$\chi^2=8.41$
	睡眠不足	10		2		
	疲労感	4		7		
	体力不足	5		1		
	忍耐力	2		3		
自分の成長	自分の成長	11		5		$\chi^2=4.46$
	子どもへの関心	9		6		
	社会との関わり	4		9		
	再発見	1		1		
子どもの気質	育てにくさ	7		2		$\chi^2=4.94$
	寝付きの悪さ	6		1		
	活発さ	1		3		
期待と現実の差がない	生き方	3		1		$\chi^2=.53$
	働き方	1		1		
	自己実現	1		1		
育児支援がある	祖父母の支援	2		2		$\chi^2=.53$
	父親との会話	1		3		
その他	世間の冷たい視線	5		3		$\chi^2=2.17$
	仕事の継続	1		3		
	育児情報	2		1		
	行政サービス	1		2		
	金銭的負担	1		1		
	小計	347		326		
	合計		673			

**p<.01, *p<.05

Table3-6 小カテゴリーと職業の有無についての χ^2 検定

大カテゴリー	小カテゴリー	職業有群 (n=87)		職業無群 (n=150)		χ^2 検定結果
育児負担感	負担感	39		30		$\chi^2=9.83^*$
	育児不安	10		18		
	衝動的な叱責	4	* ↓	13	* ↑	
	責任感	10		5		
時間の制約	時間の制約	32	* ↑	12	* ↓	$\chi^2=12.86^*$
	行動の制限	8		14		
	突然の予定変更	10		8		
	孤独感	6		5		
	切迫感	3		7		
	喪失感	3		6		
期待と現実の差がある	困難感	15	* ↑	3	* ↓	$\chi^2=14.10^*$
	マニュアル	8		8		
	父親の協力が無い	3	* ↓	11	* ↑	
	母親像への葛藤	5		9		
	専業主婦への誤解	5		6		
	母性への懷疑	1		2		
世話経験がある	職場での経験談	19		10		$\chi^2=6.70$
	友達の子育て	10		18		
	同胞の子育て	4		3		
	保育や教育実習	4		1		
母親の充実感	母親役割の受容	13		7		$\chi^2=9.60^*$
	子どもへの愛情	14		4		
	幸福感	10		5		
	充実感	2	* ↓	8	* ↑	
子どものしつけや対処法	しつけの方法	11		12		$\chi^2=11.75^*$
	子どもの行動の読み取り	5		11		
	反抗期の対応	10	* ↑	3	* ↓	
	周囲の子どもとの比較	1		4		
	子どもの性格	4		1		
母親の心身の疲労	イライラ感	10		14		$\chi^2=11.62^*$
	睡眠不足	11	* ↑	1	* ↓	
	疲労感	4		7		
	体力不足	3		3		
	忍耐力	1		4		
自分の成長	自分の成長	7		9		$\chi^2=8.37^*$
	子どもへの関心	13	* ↑	2	* ↓	
	社会との関わり	5		8		
	再発見	1		1		
子どもの気質	育てにくさ	8		1		$\chi^2=5.26$
	寝付きの悪さ	4		3		
	活発さ	1		3		
期待と現実の差がない	生き方	3		1		$\chi^2=.53$
	働き方	1		1		
	自己実現	1		1		
育児支援がある	祖父母の支援	1		3		$\chi^2=2.00$
	父親との会話	3		1		
その他	世間の冷たい視線	2		6		$\chi^2=2.99$
	仕事の継続	3		1		
	育児情報	1		2		
	行政サービス	1		2		
	金銭的負担	1		1		
	小計	354		319		
	合計		673			

*p<.05

では、思い通りにならない子どもへの対応に困難を感じているが、「幸福感」も見出している年齢低群では、子育てへの否定的感情だけを味わっているのではないことも示唆された。

(b) 母親の職業の有無群に関する結果に対する考察

期待と現実の差を感じる内容の大カテゴリーにおいては、職業の有無群において有意な差は見られなかった。小カテゴリーでは、職業有群で『時間の制約』における「時間の制約」と、『子どものしつけや対処法』における「反抗期の対応」及び『子育ての期待と現実の差がある』における「困難感」と『母親の心身の疲労』における「睡眠不足」が有意に多かった。これらのことから、職業をもつ母親は、時間のやり繰りが難しい中で子どもと対峙しながら行う子育てに対して、心にゆとりをもつことは難しいと考えられる。少子化が進む中で、乳幼児の世話経験の乏しさから、「自分の子育てはこのままでいいのか」、「別のやり方があるのではないかと」、子育ての対処に悩むことも多いと推察される。そのような中でも、子どもと良好な関係を築いている母親は、「子どもへの関心」も高く「他人の子どもに視線がいくようになった」など、育児への肯定的感情も抱いていると推察された。一方で、今回の調査では個々の生活状況や経済状況は分らないが、職業無群では、母親の育児不安や育児負担感の緩和として考えられる「父親の協力が無い」ことは、子育て場面において「衝動的な叱責」が多くなることにも関わりがあるのではないかと推察された。

本研究における検討で、年齢の高低や職業の有無によって、母親が子どもや子育てについて、「期待と現実の差」を感じる内容に違いがあることを示唆する結果が得られた。一方で、「期待と現実の差」に対して「あまりあてはまらない」、「まったくあてはまらない」と回答した群の母親も存在する。そこで、第2節では期待と現実の差が小さいと感じる母親についても検討を行っていく。

第2節 子育ての期待と現実の差が小さいと感じる母親の検討（研究3）

1. 目的

親となり子どもを育てることは、母親にとっては他では得られない体験であり人格的

社会的にも資する（柏木、2003）とされ、母親は「子どもはかわいい」、「子育ては楽しい」という育児への肯定的感情を持っていると推察される。一方で、母親の育児不安や負担感の緩和には、育児仲間や専門家（医師・保健師・保育士）など家庭外からのサポート（渡辺・石井、2010）や、父親からの育児サポートを得ている（田中、2010）と母親が認知することが有効であるとされている。そこで、研究3では子どもや子育てについて「期待と現実の差」が小さいと感じる母親の記述を取り上げて、年齢の高低や職業の有無によるその内容の違いや、差が小さいことにつながっている要因について検討することを目的とする。母親の「期待と現実の差」が小さいと感じる要因について検討することは、母親への具体的な支援の実施や、問題解決の契機につながると考えられる。

2. 方法

(a) 手続き

無記名式質問紙調査による検討を行った。調査方法としては、研究2と同様である。

(b) 調査対象

研究2において、子どもや子育てについて、「期待と現実の差」を感じる程度について「あまりあてはまらない」、「まったくあてはまらない」と回答した母親181名から得られた291の自由記述を分析対象とした。

(c) 調査期間

2013年7月11日から21日、2013年9月9日から20日にかけて行った。

(d) 分析方法

研究2と同様である。

3. 結果

(a) 子育ての「期待と現実の差」が小さいと感じる母親の記述

子どもや子育てについて、「期待と現実の差」を感じると思う内容、自分と子どもとの関わりに伴う感情について、KJ法を用いて分類したところ、24の小カテゴリーと六つの大カテゴリーを得た。Table3-7に示す。

「友達の子育ての観察」、「結婚生活談」、「兄弟の子育ての観察」、「実母の子育て」、「自分の仕事の経験」という五つの小カテゴリーからなる『身近な人の子育て経験』。「幸福感」、「充実感」、「達成感」、「接近感情」という四つの小カテゴリーからなる『育児肯定

Table 3-7

子育ての期待と現実の差が小さいと感じる母親の記述例

大カテゴリー	小カテゴリー		記述例
身近な人の子育て経験 72(24.7%)	友達の子育ての観察	28 (9.6%)	・友だちの子育てを見ていたので予想できた
	結婚生活談	19 (6.5%)	・結婚は大変だと話を聞いていた
	兄弟の子育ての観察	12 (4.1%)	・自分の兄弟の子育てを見ていた
	実母の子育て	8 (2.7%)	・実母が仕事をしながら子育てをしていた
	自分の仕事の経験	5 (1.7%)	・自分の仕事の経験から学んだ
育児肯定感 62(21.3%)	幸福感	18 (6.2%)	・毎日、幸福を感じている
	充実感	16 (5.5%)	・充実した毎日を過ごしていると思う
	達成感	15 (5.2%)	・子どもを産んでよかったと思う
	接近感情	13 (4.5%)	・子ども嫌いであつたが好きになった
育児支援感 55(18.9%)	父親との会話	25 (8.6%)	・父親と子育てでいろいろなことを相談している
	共有感	14 (4.8%)	・父親と一緒に子育てをしていると思う
	労りの気持ち	7 (2.4%)	・父親からの労りの言葉がうれしい
	父親の育児支援	5 (1.7%)	・父親が子育てを手伝ってくれる
	祖父母の協力	4 (1.4%)	・祖父母が子育てを手伝ってくれる
自分の成長 46(15.8%)	我慢強さ	19 (6.5%)	・我慢強くなったと思う
	視野の広がり	13 (4.5%)	・子どもをもって視野がひろがったと思う
	子どもが元気をくれる	12 (4.1%)	・子どもが私に元気をくれる
	再発見	2 (0.7%)	・人生を2度生きているように思う
現実の受容 44(15.1%)	楽観的	17 (10.3%)	・子育てはなんとかかなると思う
	意外性	14 (4.2%)	・自分が子育てをするとは思ってなかった
	日常的	13 (2.5%)	・毎日の生活はこんなものだと思う
その他 12(4.1%)	子どもの気質	5 (1.7%)	・育てやすい子どもであつた
	育児情報	5 (1.7%)	・育児情報を得られている
	保育	2 (0.7%)	・子どもを預ける場所がある(保育園の確保)
合計		291	

感』。「父親との会話」、「共有感」、「労りの気持ち」、「父親の育児支援」、「祖父母の協力」という五つの小カテゴリーからなる『育児支援感』。「我慢強さ」、「視野の広がり」、「子どもが元気をくれる」、「再発見」という四つの小カテゴリーからなる『自分の成長』。「楽観的」、「意外性」、「日常的」という三つの小カテゴリーからなる『現実の受容』。「子どもの気質」、「育児情報」、「保育」という三つの小カテゴリーからなる『その他』といった六つの大カテゴリーに分類された。

(b) 母親の年齢別、職業有無別に見た記述内容

本研究においては、母親の年齢を高群と低群に分ける基準として母親の平均年齢 36.39 歳（標準偏差 3.39）より高い方を年齢高群（記述は 111 個）、低い方を年齢低群（記述は 180 個）とした。同様に就業形態で「フルタイム」、「パートタイム」、「アルバイト・内職」、「家業」、「その他」と回答した母親を職業有群（記述は 163 個）、「職業に就いていない」と回答した母親を職業無群（記述は 128 個）とした。

まず、各カテゴリーに該当する記述の件数を年齢の高低群及び職業の有無群で分け、それらの人数を χ^2 検定によって比較検討を行った。なお、統計的有意水準は 10%未満とした。その結果を Table3-8、3-9 に示す。

分析の結果、大カテゴリーにおいては、年齢高群において『育児支援感』（ $\chi^2=3.44$ 、 $p<.10$ ）で有意に多い傾向が見られた。また、職業の有群で『自分の成長』（ $\chi^2=2.87$ 、 $p<.10$ ）において有意に多い傾向が認められた。次に、小カテゴリーに該当する記述の件数を母親の年齢の高低群及び職業の有無群で分け、それらの件数を χ^2 検定により比較検討を行った。 χ^2 検定で有意な差が認められたカテゴリーについて残差分析を行った結果、母親の年齢高群において、「我慢強さ」（ $\chi^2=8.65$ 、 $p<.05$ ）、「楽観的」（ $\chi^2=7.29$ 、 $p<.05$ ）が有意に多く、「幸福感」（ $\chi^2=6.79$ 、 $p<.10$ ）、「労りの気持ち」（ $\chi^2=8.28$ 、 $p<.10$ ）で有意に多い傾向が見られた。年齢低群では、「兄弟の子育ての観察」（ $\chi^2=8.57$ 、 $p<.10$ ）、「父親との会話」（ $\chi^2=8.28$ 、 $p<.10$ ）で有意に多い傾向が見られた。また、職業有群において、「実母の子育て」（ $\chi^2=10.25$ 、 $p<.05$ ）が有意に多く、「共有感」（ $\chi^2=8.52$ 、 $p<.10$ ）、「達成感」（ $\chi^2=7.30$ 、 $p<.10$ ）、「日常的」（ $\chi^2=4.65$ 、 $p<.10$ ）で有意に多い傾向が見られた。職業無群では、「兄弟の子育ての観察」（ $\chi^2=10.25$ 、 $p<.05$ ）が有意に多く、「視野の広がり」（ $\chi^2=7.77$ 、 $p<.10$ ）において有意に多い傾向が見られた（Table3-10、3-11）。

Table 3-8

大カテゴリーと母親の年齢についての χ^2 検定

大カテゴリー		年齢高群	年齢低群	χ^2 検定結果
身近な人の子育て経験	身近な人の子育て経験有	25	47	$\chi^2 = .48$
	身近な人の子育て経験無	86	133	
合計		111	180	
育児肯定感	育児肯定感有	23	39	$\chi^2 = .04$
	育児肯定感無	88	141	
合計		111	180	
育児支援感	育児支援有	27 * ↑	28 * ↓	$\chi^2 = 3.44^\dagger$
	育児支援無	84 * ↓	152 * ↑	
合計		111	180	
自分の成長	自分の成長有	18	28	$\chi^2 = .02$
	自分の成長無	93	152	
合計		111	180	
現実の受容	現実の受容有	13	31	$\chi^2 = 1.63$
	現実の受容無	98	149	
合計		111	180	
その他	その他有	5	7	$\chi^2 = .07$
	その他無	106	173	
合計		111	180	

†p<.10

Table 3-9

大カテゴリーと母親の職業の有無についての χ^2 検定

大カテゴリー		職業有群	職業無群	χ^2 検定結果
身近な人の子育て経験	身近な人の子育て経験有	37	35	$\chi^2 = .83$
	身近な人の子育て経験無	126	93	
合計		163	128	
育児肯定感	育児肯定感有	38	24	$\chi^2 = .89$
	育児肯定感無	125	104	
合計		163	128	
育児支援感	育児支援有	29	26	$\chi^2 = .30$
	育児支援無	134	102	
合計		163	128	
自分の成長	自分の成長有	31 * ↑	15 * ↓	$\chi^2 = 2.87^\dagger$
	自分の成長無	132 * ↓	113 * ↑	
合計		163	128	
現実の受容	現実の受容有	21	23	$\chi^2 = 1.45$
	現実の受容無	142	105	
合計		163	128	
その他	その他有	7	5	$\chi^2 = .03$
	その他無	156	123	
合計		163	128	

†p<.10

Table 3-10
小カテゴリーと母親の年齢についての χ^2 検定

大カテゴリー	小カテゴリー	年齢高群 (n=81)	年齢低群 (n=100)	χ^2 検定結果
身近な人の子育て経験	友達の子育ての観察	13	15	$\chi^2=8.57^\dagger$
	結婚生活談	7	12	
	兄弟の子育ての観察	1 * ↓	11 * ↑	
	実母の子育て	1	7	
	自分の仕事の経験	3	2	
育児肯定感	幸福感	11 * ↑	7 * ↓	$\chi^2=6.79^\dagger$
	充実感	5	11	
	達成感	3	12	
	接近感情	4	9	
育児支援感	父親との会話	8 * ↓	17 * ↑	$\chi^2=8.28^\dagger$
	共有感	8	6	
	労りの気持ち	6 * ↑	1 * ↓	
	父親の育児支援	2	3	
	祖父母の協力	3	1	
自分の成長	我慢強さ	12 * ↑	7 * ↓	$\chi^2=8.65^*$
	視野の広がり	3	10	
	子どもが元気をくれる	2	10	
	再発見	1	1	
期待と現実との差	楽観的	9 * ↑	8 * ↓	$\chi^2=7.29^*$
	意外性	2	11	
	日常的	2	12	
その他	子どもの気質	3	2	$\chi^2=1.71$
	育児情報	1	4	
	保育	1	1	
小計		111	180	
合計		291		

*p<.05, †p<.10

Table 3-11
小カテゴリーと職業の有無についての χ^2 検定

大カテゴリー	小カテゴリー	職業有群 (n=76)	職業無群 (n=105)	χ^2 検定結果
身近な人の子育て経験	友達の子育ての観察	17	11	$\chi^2=10.25^*$
	結婚生活談	7	12	
	兄弟の子育ての観察	3 * ↓	9 * ↑	
	実母の子育て	7 * ↑	1 * ↓	
	自分の仕事の経験	3	2	
育児肯定感	幸福感	9	9	$\chi^2=7.30^\dagger$
	充実感	12	4	
	達成感	12 * ↑	3 * ↓	
	接近感情	5	8	
育児支援感	父親との会話	10	15	$\chi^2=8.52^\dagger$
	共有感	11 * ↑	3 * ↓	
	労りの気持ち	5	2	
	父親の育児支援	1	4	
	祖父母の協力	2	2	
自分の成長	我慢強さ	15	4	$\chi^2=7.77^\dagger$
	視野の広がり	5 * ↓	8 * ↑	
	子どもが元気をくれる	10	2	
	再発見	1	1	
期待と現実の差	楽観的	6	11	$\chi^2=4.65^\dagger$
	意外性	5	8	
	日常的	10 * ↑	4 * ↓	
その他	子どもの気質	2	3	$\chi^2=1.71$
	育児情報	4	1	
	保育	1	1	
小計		163	128	
合計		291		

*p<.05, †p<.10

4. 考察

(a) 母親の年齢の高低群に関する結果に対する考察

子どもや子育てについて、「期待と現実の差」が小さいと感じている母親の記述内容の大カテゴリーでは、年齢高群においては『育児支援感』が有意に多い傾向が見られた。

「父親から労いの言葉がうれしい」など、父親からの精神的な支援を評価したものと推察される。小カテゴリーにおいては、『自分の成長』における「我慢強さ」で、子育てを通して親として自分は成長していると捉えていることがうかがわれた。また、子育てをなんとかすると「楽観的」に捉えている母親は、日々の生活の中で、親になった自分を肯定的に受け止めていると考えられる。

年齢低群では、「兄弟の子育ての観察」で有意に多い傾向が見られたことから、自身の兄弟の子育ての様子や具体的な育児行為を観察することは、有効であることがうかがわれた。実際に子育てをする上で、「身近な人の子育て経験」を見たり、聞いたりするなどの身近にモデルがいることが、「期待と現実の差」を小さくする可能性があると考えられる。また、「父親との会話」では、母親が父親と子育てについて相談することで情緒的に支えられていると認識していると考えられる。

(b) 母親の職業の有無群に関する結果に対する考察

「期待と現実の差」が小さいと感じる記述内容の大カテゴリーでは、職業有群において『自分の成長』で有意に多い傾向が見られた。仕事や子育てについても責任を果たしている職業有群では、多重役割を果たすことで過度の負担もあるだろうが、自己実現をしていると認識していると考えられる。また、小カテゴリーでは、「実母の子育て」が有意に多かったことから、時間のやり繰りが難しい中で、実母の子育てを見ていたことが経験知になっていると推察される。「共有感」や「日常的」が有意に多い傾向が見られたことから、母親が父親と一緒に子育てをしていると認知することや、毎日の生活に対してこんなものだと日々の生活を肯定的に受け止めていると考えられる。

職業無群においては、「兄弟の子育ての観察」で有意に多い傾向が見られたことは、子どもの要求や日常の些細な出来事に、どう対処するのかなどのヒントを観察から得ている可能性も考えられる。「視野の広がり」は、子どもをもっているいろいろな角度から物事を捉えることができるようになり、人間的な成長につながったと推察された。

第3節 職業の有無と年齢の高低からの検討（研究4）

1. 目的

第1節・第2節の検討において、「子育ての期待と現実の差」が大きいと感じる群及び小さいと感じる群や、年齢の高低、就業の有無などの母親の属性による違いが示唆された。幼児をもつ母親の育児への肯定的感情に対して、「子育ての期待と現実の差」や家庭内で父親の協力があること、親になる前の子育て体験があることなどが影響を及ぼすものと推察された。

「男女雇用機会均等法」（1985年）の制定や男女が協力して家庭生活を営むために家庭科の男女必須（1993年）が始まり、昭和60年代生まれ以降の人たちは家庭科を中学校で学んでいる。現在子育て中の母親は男女共同参画の視点や、子どもの発達や育児を通しての父親としての発達（森下、2006）の側面から、子育ての担い手として父親の役割も期待していると考えられる。また、母親の年齢については、若い子どもと接触体験が少ないことで母親の年齢が低いほど育児不安が強くなる（眞崎・橋本・奥富・池田、2011）とする研究や、母親自身の体調と周囲の状況を考えながら調整を行っていることで年齢の高い母親ほど育児ストレスが高い（村上・飯野・塚原・辻野、2005）ことを明らかにした研究、30歳未満の母親は育児幸福感尺度の「育児の喜び」得点や「子どもとの絆」得点が高い結果が得られた（清水ら、2010）とする研究など、その結果は研究者により様々である。

また、女性の年齢階層労働率（内閣府、2015c）は、35～39歳（70.8%）の年齢階層でM字型の曲線を描いており、環境の整備の遅れから母親が就労を断念している可能性も考えられる。母親の就労形態と育児不安の研究を行った八重樫・小河（2002）は、子育て不安得点は非常勤が最も高く、次いで専業主婦、常勤の順に低くなっていたものの統計的な有意な差は認められなかったが、就業形態別に子育て不安の因子分析を行った結果では、就労している母親の子育て不安構造と、専業主婦の子育て不安構造が異なっていることを明らかにしている。女性の社会進出が増大し性別役割分担意識の変化が見られても、現実の生活面では家事・育児への父親の参加は少なく、家庭で養育を行う営みにおいて、幼児をもつ母親の「期待と現実の差」は大きいと考えられる。母親が実際の子育てを経験する場面で「子育ての期待と現実の差」が大きいと認識することは、母親の育児への肯定的感情に負の影響を及ぼす一方で、「父親の家事や育児協力」、「子育て

体験」、「夫婦の対話」が多いと認知することは母親の育児への肯定的感情に正の影響を及ぼすと推察される。したがって、第3節では母親の育児への肯定的感情と「子育ての期待と現実の差」、「父親の家事や育児協力」、「子育て体験」、「夫婦の対話」との関連について、母親の年齢の高低や職業の有無で検討することを目的とする。

2. 方法

(a) 手続き

無記名式自記式質問紙調査による検討を行った。調査の方法としては、近畿圏内の二か所の認定こども園に3・4・5歳児を在籍させている保護者619名に、調査の依頼文と「子育てアンケート（母親）」と題した調査票を入れた封筒を園の保育教諭を通じて配布し、自宅で持ち帰り回答し封印したものを回収した。有効回答は418（白紙回答は5、欠損値8）であり、回収率は69.6%であった。

(b) 調査対象者

母親が主観的にもつ子どもや子育てなどについての「子育てに対する期待」に対して現実の子育ての状態に隔たりを感じる程度や、子育ての援助者としての父親との関係から母親の育児への肯定的感情について検討を行うために、すべてのデータがそろっているもの418名を調査対象とした。

(c) 調査期間

2013年7月11日から21日、2013年9月9日から20日にかけて行った。

(d) 質問紙の構成

①調査対象者の属性

母親の年齢、父親の年齢、母親の職業の有無、父親の職業の有無、家族構成、子どもの人数の6項目について尋ねた。

②子育ての期待と現実の差

母親になる前の「子育ての期待」と母親になった後での「現実の子育て」について、隔たり（差）を感じる程度について尋ねた。“よくあてはまる”を4、“すこしあてはまる”を3、“あまりあてはまらない”を2、“まったくあてはまらない”を1とする4件法で回答を求め、「子育ての期待と現実の差」得点として用いた。

③母親の育児への肯定的感情

まず、保育現場における0歳児から5歳児までの子どもを養育している母親たちの語

りから、日常生活場面における子どもや子育て全般に対する感情や思いなど、母親の肯定的感情が表現されている 69 項目を作成した。肯定的な感情での表現項目を収集したことは、母親が質問紙に回答する時に自身が子どもや子育てを否定的に捉えるのではなく、子育てに伴う肯定感や充実感を喚起するための配慮になると考えたことによる。さらに、これらの収集された語りについて、清水ら（2006）、荒牧（2005）、島田・恵美須・長岡・高橋・森・遠藤（2003）の先行研究から、母親が子どもと関わって生活する中で、どの程度肯定的感情を抱いているかについての認識に関する質問項目を参考に、内容や表現の吟味、検討を行った。

それらを心理・健康領域を専攻とする博士前期課程の大学院生 4 名と発達・臨床心理を専門とする大学院教員 1 名とで、KJ 法（川喜田、1986）を用い各項目の内容の共通性や類似性を検討した結果、「子育てを楽しんでいる」、「子どもをかわいと思う」、「自分よりも子どものことを優先する」、「子育てをして自分は成長していると思う」、「子どもをうまく育てていると思う」、「身のまわりの人から必要とされていると思う」、「子どもを通じて友だち関係が広がったと思う」、「保護者同士（ママ友）との関係はうまくいっていると思う」の 8 項目を採用した。回答方法としては、“よくあてはまる”を 4、“すこしあてはまる”を 3、“あまりあてはまらない”を 2、“まったくあてはまらない”を 1 とする 4 件法とし、評定値をそのまま得点として用いた。なお、本研究では、母親の育児への肯定的感情の程度は、母親の主観的な判断に委ねた結果を用いた。

④父親の家事や育児協力

本研究では乳幼児期の子どもの世話をすることが多い核家族の父親を対象としているため、父親の家事や育児協力の項目については、大和（2001）、渡邊・鈴木・長嶋・横森・茂手木・比江島（2001）、加藤・石井・牧野・土谷（2002）の先行研究を参考に 6 項目を選定した。父親の家事協力としては、「夫は家事を一緒にしてくれる」の質問項目に対して、“よくあてはまる”を 4、“すこしあてはまる”を 3、“あまりあてはまらない”を 2、“まったくあてはまらない”を 1 とする 4 件法とした。さらに、「食事の支度」、「食後の片付け」、「掃除」、「洗濯」、「食品の買い出し」、「ゴミ捨て」の 6 項目のうちあてはまる項目を選択し 1 点を配点した。以上を合計したものを父親の家事協力得点として用いた。

父親の育児協力については、「夫は育児を一緒にしてくれる」、「夫は子どもとよく遊ぶ」の質問項目に対して、“よくあてはまる”を 4、“すこしあてはまる”を 3、“あまりあ

てはまらない”を2、“まったくあてはまらない”を1とする4件法で評定してもらった。そして、「オムツの取り替え」、「衣服の着脱」、「食事の介助」、「入浴」、「子どもが泣いたらあやす」、「幼稚園の送迎」の6項目についてあてはまる項目に1点を配点し、合計したものを父親の育児協力得点とした。

⑤子育て体験

母親の子育て体験項目については、母親から収集して得た乳幼児の世話やふれあう体験をした内容及び、石川（2000）の研究を参考に6項目で作成した。「赤ちゃん（おおむね2歳ごろ）をだっこしたことがある」、「あやしたり遊んだことがある」、「ミルクを飲ませたり、離乳食を食べさせたことがある」、「オムツを替えたり着替えさせたことがある」、「寝かしつけたことがある」、「赤ちゃん（おおむね2歳ごろ）の相手や世話をしたことがない（逆転項目）」である。回答方法としては、“よくあてはまる”を4、“すこしあてはまる”を3、“まったくあてはまらない”を2、“まったくあてはまらない”を1とする4段階評定とし、評価値をそのまま得点として用いた。なお、逆転項目（項目6）については、1を4点、2を3点、3を2点、4を1点として計算した。

⑥夫婦の対話

夫婦の対話は、「育児で困ったとき、夫は話をきいてくれる」、「（育児以外のことでも）夫婦でよく話をする」の質問項目で、“よくあてはまる”を4、“すこしあてはまる”を3、“あまりあてはまらない”を2、“まったくあてはまらない”を1とする4件法で回答を求め、合計したものを夫婦の対話得点とした。

(e) 倫理的配慮

無記名式自記式質問紙調査を実施するに当たり、倫理的配慮として、二か所の認定子ども園の園長と面談を行い、調査の目的、方法、意義、守秘義務、研究の協力及び協力拒否が可能であることを文書に基づいて説明を行い、研究の協力を得た。園教諭より本調査の依頼文と無記名式自記式質問紙（表紙には、所属機関名、調査者氏名、連絡先、研究の趣旨、本調査においては特定の個人情報に漏れないようコード化し廃棄することを明記した）を、調査を協力すると意思表示した保護者に配布し、後日回収した。

(f) 分析方法

本研究では、母親の年齢を高い群と低い群に分ける基準として、母親の平均年齢36.39歳（標準偏差3.39）より高い方を年齢高群（210名）、低い方を年齢低群（208名）とした。同様に、職業形態で「フルタイム」、「パートタイム」、「アルバイト・内職」、「家

業」、「その他」と回答した母親を職業有群（163名）、「職業に就いていない」と回答した母親を職業無群（255名）とした。統計学的処理は、IBM SPSS Statistics（Ver.21）を用いて分析を行った。

3. 結果

（a）母親の育児への肯定的感情尺度の検討

母親の育児への肯定的感情尺度の合計得点の平均は 26.68 点、標準偏差は 2.78 であった。また、原尺度の各項目得点の平均の幅は 2.70 点から 3.53 点、標準偏差は 0.39 から 0.60 であった。次に、日常生活場面における子どもや子育て全般に対する感情や思いについての 8 項目を用いて最尤法による探索的因子分析を行った。その結果、説明分散及び項目の因子に対する負荷パターンより 2 因子が適当と判断された（因子間相関は .42 であった）。2 因子による累積説明率は 39.16% であった。プロマックス回転後の因子負荷量を Table3-12 に示した。因子の解釈は .40 以上の因子負荷量を示した項目を用いて行った。まず、第 1 因子は 6 項目からなり、母親が育児をする際の愛情や喜びを表すと考えられる項目の負荷量が高かったため“育児肯定感”と命名した。第 2 因子は 2 項目からなり、子育てを通して友だちと良好な関係を築き、母親になった自分を肯定している感情から構成されていると考えられる項目の負荷量が高かったため“自己肯定感”と命名した。さらに、6 項目によって構成される“育児肯定感”と 2 項目によって構成される“自己肯定感”、計 8 項目によって構成される尺度を“母親の育児への肯定的感情尺度”と命名した。

“母親の育児への肯定的感情尺度”の内的整合性を検討するために Cronbach の α 係数を算出したところ、育児肯定感は $\alpha=.70$ 、自己肯定感は $\alpha=.77$ 、“母親の育児への肯定的感情尺度”全体では $\alpha=.73$ であった。項目を除外した際の信頼性係数が高くなる項目は見られなかった。また、“母親の育児への肯定的感情尺度”における項目－全体相関は $r=.38-.53$ であり（ $p<.01$ ）、弱い～中程度の正の相関が見られた。

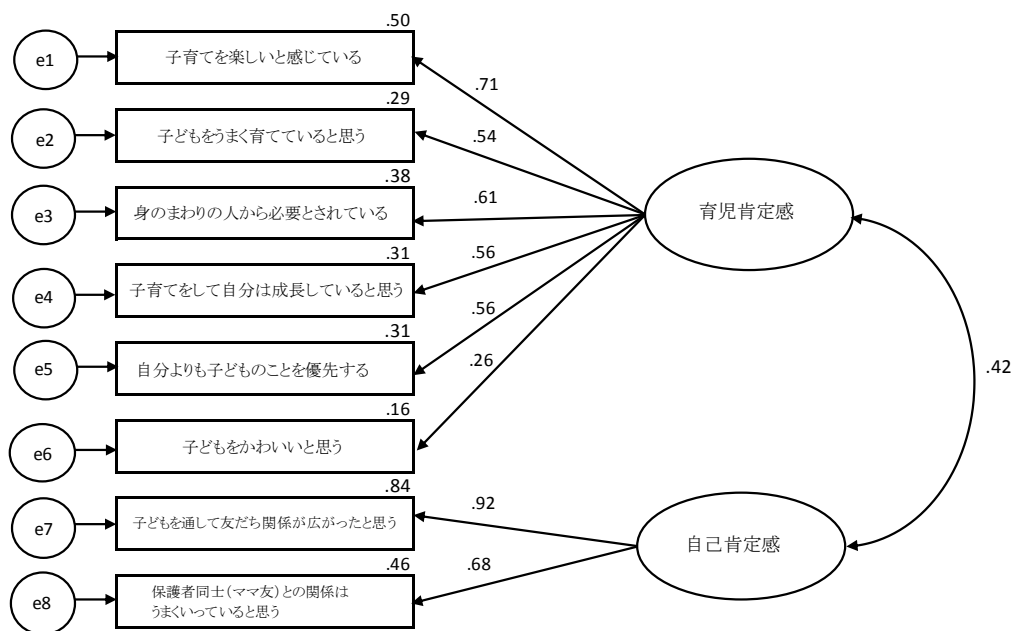
さらに、妥当性を検討するため、2 因子での確認的因子分析を行った。パス図のモデル適合は $\chi^2=48.30$, $df=19$, $p<.01$, $GFI=.97$, $AGFI=.94$, $CFI=.96$, $RMSEA=.061$ であった（Figure3-1）。標準化係数は“育児肯定感”では.26 から.71、“自己肯定感”で.68 から.92 であった。“育児肯定感”の決定係数 R^2 は.16 から.50、“自己肯定感”の決定係数 R^2 は.46 から.84 であった。

Table3-12

母親の育児への肯定的感情尺度項目のプロマックス回転後の因子負荷量および得点の平均・標準偏差

項 目 内 容	因子 I	因子 II	共通性	平均	標準偏差
第 1 因子: 育児肯定感 $\alpha=.70$					
子育てを楽しんでいる	.75	-.05	.53	3.41	.52
子どもをうまく育てていると思う	.59	-.07	.28	3.53	.39
身のまわりの人から必要とされている	.57	.06	.36	2.70	.59
子育てをして自分は成長していると思う	.55	-.00	.29	3.35	.53
自分よりも子どものことを優先する	.47	.15	.29	3.11	.66
子どもをかわいいと思う	.40	-.02	.16	3.52	.45
第 2 因子: 自己肯定感 $\alpha=.77$					
子どもを通じて友だち関係が広がったと思う	.04	.81	.65	3.33	.60
保護者同士(ママ友)との関係はうまくいっていると思う	-.05	.78	.57	3.44	.53
寄与率(%)	27.4	11.76			
累積寄与率(%)		39.16			
因子間相関		.42			

太字は .40以上の因子負荷量を示す。



$\chi^2=48.30$ $df=19$ $p<.01$ $GFI=.97$ $AGFI=.94$ $CFI=.96$ $RMSEA=.061$
 係数はすべて5%水準で有意である

Figure3-1 母親の育児への肯定的感情尺度の確認的因子分析の結果

(b) 父親の家事や育児協力の検討

父親の家事協力の合計得点の平均は 4.26 点、標準偏差は 2.70 であった。家事項目で「食事の支度」、「食後の片付け」、「掃除」、「洗濯」、「食品の買い出し」、「ゴミ出し」のうち、全てを行っていると回答した者は 23 名（育児肯定感 22.01 ± 2.04 、自己肯定感 $6.78 \pm .95$ ）であり、家事項目の全てを行っていないと回答した者は 177 名（育児肯定感 19.89 ± 2.21 、自己肯定感 6.76 ± 1.59 ）であり、母親の育児への肯定的感情について両者に有意な差は見られなかった。

父親の育児協力の合計得点の平均は 9.16 点、標準偏差は 3.38 であった。育児項目で「オムツの取り替え」、「衣服の着脱」、「食事の介助」、「入浴」、「子どもが泣いたらあやす」、「幼稚園の送迎」のうち、全てを行っていると回答した者は 62 名（育児肯定感 19.76 ± 2.39 、自己肯定感 $6.81 \pm .97$ ）であり、育児項目の全てを行っていないと回答した者は 104 名（育児肯定感 19.93 ± 2.46 、自己肯定感 6.68 ± 1.26 ）であり、上と同じ両者に有意な差は見られなかった。

(c) 子育て体験尺度の検討

母親の子育て体験尺度の合計得点の平均は 13.74 点、標準偏差は 5.82 であった。原尺度の各項目得点の平均の幅は 1.82 点から 2.73 点、標準偏差は 1.01 から 1.13 であった。次に、母親になる前の乳幼児との関わりの内容 6 項目を用いて最尤法による因子分析を行った。その結果、説明分散及び項目の因子に対する負荷パターンより 1 因子が適当と判断された。1 因子による累積説明率は 48.01% であった。プロマックス回転後の因子負荷量を Table3-13 に示す。因子の解釈は .40 以上の因子負荷量を示した項目を用いて行った。母親の“子育て体験尺度”は、母親が出産前に体験した子どもとの関わりや身のまわりの世話についての 6 項目からなっている。“母親の子育て体験尺度”の内的整合性を検討するために Cronbach の α 係数を算出したところ、 $\alpha = .95$ であった。さらに、妥当性を検討するため、確認的因子分析を行った (Figure3-2)。パス図のモデル適合は $\chi^2 = 30.19$, $df = 9$, $p < .01$, $GFI = .97$, $AGFI = .94$, $CFI = .93$, $RMSEA = .075$ であった。標準化係数は .51 から .79、決定係数 R^2 は .26 から .62 であった。

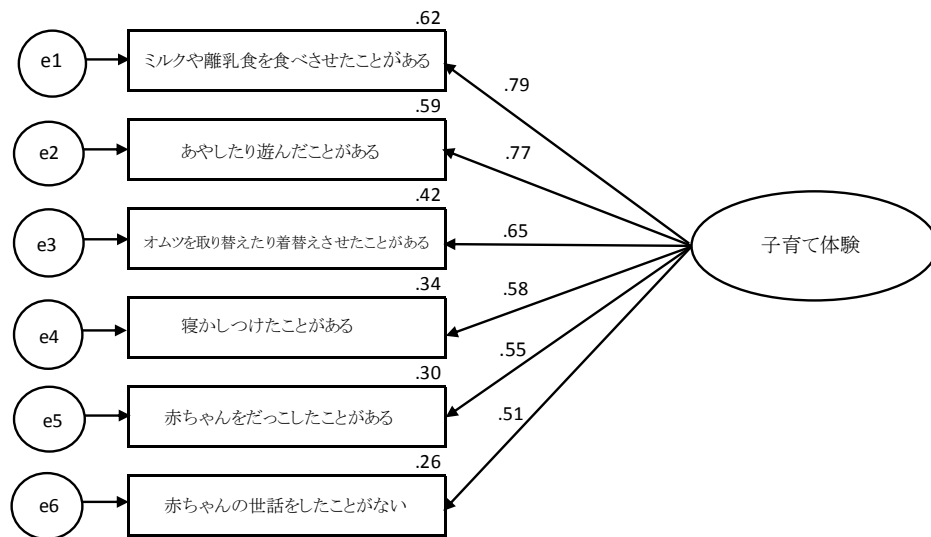
(d) 母親の年齢の高低と職業の有無における各変数の平均値の差

母親の年齢の高低と職業の有無で、母親の育児への肯定的感情の「育児肯定感」、「自己肯定感」、「子育ての期待と現実の差」、「父親の家事協力」、「父親の育児協力」、「子育て体験」、「夫婦の対話」各々の平均値に差があるか t 検定を行った (Table3-14)。

Table3-13

母親の子育て体験尺度項目のプロマックス回転後の
因子負荷量および得点の平均・標準偏差

項 目 内 容	因子 I	共通性	平均	標準偏差
第 1 因子: 子育て体験 $\alpha = .95$				
ミルクや離乳食を食べさせたことがある	.86	.74	2.00	1.12
あやしたり遊んだことがある	.77	.59	2.73	1.02
オムツを取り替えたり着替えさせたことがある	.76	.58	1.95	1.13
寝かしつけたことがある	.72	.52	1.82	1.09
赤ちゃんをだっこしたことがある	.62	.38	2.66	1.01
赤ちゃんの世話をしたことがない(逆転項目)	.47	.22	2.58	1.13
寄与率(%)	48.01			
累積寄与率(%)	48.01			



$\chi^2 = 30.19$ $df = 9$ $p < .01$ $GFI = .97$ $AGFI = .94$ $CFI = .93$ $RMSEA = .075$
係数はすべて5%水準で有意である

Figure3-2 母親の子育て体験尺度の確認的因子分析の結果

その結果、母親の年齢の高低での検討では、「育児肯定感」($t(416) = 2.44, p < .05$)、「自己肯定感」($t(416) = 2.24, p < .05$)、「育児協力」($t(416) = 2.73, p < .01$)、「子育て体験」($t(416) = 1.97, p < .05$)、「夫婦の対話」($t(416) = 2.36, p < .05$)において、年齢低群で有意に得点が高かった。年齢高群では「子育ての期待と現実の差」($t(416) = 1.76, p < .10$)が、有意に得点が高い傾向が見られた。

また、職業の有無では、「育児肯定感」($t(416) = 2.73, p < .01$)は職業有群で有意に得点が高く、「夫婦の対話」($t(416) = 1.67, p < .10$)は、有意に高い傾向が見られた。「子育ての期待と現実の差」($t(416) = 2.08, p < .05$)は職業無群で有意に得点が高かった。

(e) 母親の育児への肯定的感情に子育ての期待と現実の差、父親の家事協力、育児協力、子育て体験、夫婦の対話が及ぼす影響

「子育ての期待と現実の差」、「父親の家事協力」、「父親の育児協力」、「子育て体験」、「夫婦の対話」が、母親の育児への肯定的感情にどのような影響を及ぼすか検討するため、「育児肯定感」と「自己肯定感」のそれぞれを従属変数、これ以外の尺度得点を説明変数として強制投入法による重回帰分析を行った (Table3-15)。

その結果、「育児肯定感」を従属変数とした場合では、「子育ての期待と現実の差」は年齢高群 ($\beta = -.11, p < .10$) で負の有意傾向が見られ、職業無群 ($\beta = -.12, p < .05$) には有意な負の影響を与えていた。「夫婦の対話」は、職業有群 ($\beta = .34, p < .001$)、職業無群 ($\beta = .34, p < .001$)、年齢高群 ($\beta = .32, p < .001$)、年齢低群 ($\beta = .33, p < .001$) のどちらにも有意な正の影響を与えていた。また、「父親の育児協力」は、職業有群 ($\beta = -.22, p < .05$) に有意な負の影響を及ぼしていた。また、「自己肯定感」を従属変数とした場合においても、「夫婦の対話」は、職業有群 ($\beta = .25, p < .001$)、職業無群 ($\beta = .20, p < .01$)、年齢高群 ($\beta = .16, p < .05$)、年齢低群 ($\beta = .20, p < .01$) の両群に有意な正の影響が認められた。「子育て体験」は、年齢低群 ($\beta = .20, p < .01$) に有意な正の影響を与えていた。

4. 考察

本研究においては、母親の育児への肯定的感情と「子育ての期待と現実の差」、「父親の家事や育児協力」、「子育て体験」、「夫婦の対話」との関連について、母親の年齢の高低や職業の有無で検討を行った。まず、「母親の育児への肯定的感情尺度」、「子育て体験

Table3- 14

母親の年齢の高低と職業の有無における各変数の得点比較

	年齢高群 (n=210)	年齢低群 (n=208)	t値	職業の有群 (n=163)	職業の無群 (n=255)	t値
育児肯定感	19.65(2.28)	20.17(2.12)	2.44*	20.28(2.02)	19.67(2.30)	2.73**
自己肯定感	6.65(1.13)	6.89(1.08)	2.24*	6.87(1.05)	6.70(1.14)	1.52n.s.
子育ての期待と現実の差	2.76(.88)	2.62(.83)	1.76†	2.56(.90)	2.74(.84)	2.08*
家事協力	4.22(2.70)	4.31(2.71)	.34n.s.	4.48(2.86)	4.13(2.59)	1.30n.s.
育児協力	8.75(2.87)	9.56(3.16)	2.73**	9.10(3.13)	9.18(2.99)	.26n.s.
子育て体験	13.19(5.78)	14.30(5.83)	1.97*	14.26(5.74)	13.38(5.82)	1.50n.s.
夫婦の対話	6.30(1.50)	6.65(1.57)	2.36*	6.62(1.48)	6.36(1.62)	1.67†

**p<.01、*p<.05、†p<.10 ()内は標準偏差.

Table3- 15

「育児肯定感」・「自己肯定感」を従属変数とした重回帰分析の結果

	育児肯定感				自己肯定感			
	年齢高群 (n=210)	年齢低群 (n=208)	職業の有群 (n=163)	職業の無群 (n=255)	年齢高群 (n=210)	年齢低群 (n=208)	職業の有群 (n=163)	職業の無群 (n=255)
	標準回帰係数 β				標準回帰係数 β			
育児肯定感					.17*	.33***	.30***	.22**
自己肯定感	.16*	.33***	.29***	.20**				
子育ての期待と現実の差	-.11†	-.05	-.06	-.12*	-.05	-.01	-.04	-.03
家事協力	-.06	-.04	-.08	-.11	-.07	-.06	-.01	-.14
育児協力	-.08	-.06	-.22*	-.04	-.02	-.01	-.08	-.06
子育て体験	.03	.02	.06	.04	.00	.20**	.11	.03
夫婦の対話	.32***	.33***	.34***	.34***	.16*	.20**	.25***	.20**
R ²	.16***	.26***	.22***	.21***	.17***	.24***	.17***	.15***

***p<.001、**p<.01、*p<.05、†p<.10

尺度」の内的整合性と妥当性の検討を行った。それぞれの尺度のモデル適合は、いずれも CFI は.90 以上であるが、RMSEA は.05 以上であることから、モデルとして当てはまりはよいとは言えないが、「モデルの複雑さによる見かけ上の適合度の上昇を調整する適合度指標の一つで、0.08 以下であれば適合度は高いとされている」（山本・小野寺、1999）ことから妥当と判断した。

本研究から得られた t 検定及び重回帰分析の結果から、母親の育児への肯定的感情が年齢低群で有意に高かったことは、自らの意思に基づいて子育てを中心に生きている母親や「子育て体験」の豊かな母親が多かったことによると考えられる。過去に子どもと触れ合う機会をもった経験から、子どもの機嫌が悪くなるなどの場面では対応に困難感を抱くこともあるであろうが、母親が抱く子どもや子育てに対する期待との相違が少なかったために、「育児への肯定的感情」が高まったのではないかと推察される。また、子育てをする中で「夫婦の対話」が多く、周りの人と良好な関係を築いていると考えられる年齢低群の母親は、母親となった自己を肯定的に受け止めており、「自己肯定感」も高かったと考えられる。さらに、職業有群では、毎日の生活は時間に追われることもあるが、母親が自己実現できていることから、「育児肯定感」も高まったと考えられる。

また、「育児肯定感」に対して、「父親の育児協力」は職業有群において有意な負の影響を及ぼしていた。中川（2010）は、「男性の育児・家事参加が進まないことの原因は男性側の要因や状況的な要因だけではなく、妻が家庭責任を強く持ち、ゆえに育児・家事を行うことによって男性の育児・家事参加を制約するという女性側の要因」があると述べている。本研究では、「父親の家事協力」や「父親の育児協力」を頻度で測定したことにより、たとえ頻度が高くても父親が提供する家事や育児の質が母親の要求水準と合致しなかったことに原因があると推察される。また、夫婦間の家事や育児分担をめぐる勢力関係や何らかの夫婦間の日々のやりとりが集積している可能性（中川、2009）があると想定されることから、家事や育児参加の量的な問題ではなく「夫婦の対話」を重ねることは、育児肯定感を促進させるものと推察される。

さらに、母親の「育児肯定感」に対して、「子育ての期待と現実の差」は職業無群に有意な負の影響を及ぼし、年齢高群には負の有意傾向を与えていた。出産を機に離職する母親が多い中で、家事や育児を一人で担うことは身体的疲労感に加えて、心理的な負担感も高くなると考えられる。また、人生経験や情報量の多い年齢高群の母親は、理想とする母親役割や子育てを実現しようと努力している。しかしながら、現実の子育てにおい

ては、子育て技術の未熟さからくる育児への負担やその時々への対処の仕方で戸惑うことも少なくない。特に職業無群の母親においては、日中子どもと過ごす時間が多くなることから、子どもの要求にうまく対応できないと認知することが、育児への否定的感情につながる可能性が高くなると考えられる。このような時期に父親からの「妻への気づきと共感」といったりと言った思いやり（百瀬、2003）などを促進させる「夫婦の対話」は、母親に共感してもらっているという気持ちを抱かせ、父親から精神的な支えを得ることにつながり「育児肯定感」に影響を及ぼすと考えられる。

本研究では「子育ての期待と現実の差」は、育児への肯定的感情の「育児肯定感」に、職業無群の母親では有意な負の影響を及ぼし、年齢高群では負の有意傾向が見られた。ただし、母親が「子育て期待と現実の差」に悩む理由は、身近に子育てを手伝ってくれる人がいないからなのか、子育てに困っている時に気軽に相談できる人がいないからなのかというように、母親が生活する環境など他の要因が影響するのではないかと考えられる。よって、母親がどのような「子育ての期待と現実の差」を感じているか、その内容について検討していくことにより、より適切な支援のあり方を考えることにつながると考えられる。

第4節 まとめ

第3章では、母親の育児への肯定的感情と「子育ての期待と現実の差」、「父親の家事や育児協力」、「子育て体験」、「夫婦の対話」との関連について、母親の年齢の高低や職業の有無で検討を行った。まず、研究2では、「子育ての期待と現実の差」が大きいと感じる母親の自由記述から、日常生活や子どもとの関わりに対して、期待との差を感じている内容について検討を行った。年齢高低群の分析からは、「母親役割の受容」や「幸福感」を感じ、子育てを肯定的に受け止めている一方、「衝動的な叱責」や「責任感」などの「育児負担感」や、「時間の制約」や「疲労感」及び「反抗期の対応」などの困難さを認識していることが分かった。また、職業有無群では、「子どもへの関心」や「充実感」が得られたと認識をしている一方、「睡眠不足」や「時間の制約」及び「困難感」や「衝動的な叱責」や「父親の協力がいない」ことなどを感じていた。そして、研究3では、「子育ての期待と現実の差」が小さいと感じる母親の自由記述から、その差に対して感じている内容について検討を行った結果、父親の支援があることや周囲の子育ての観察を通して、母親は子どもや子育てについて概ね肯定的に受け止めていることが分かった。さ

らに、研究 4 では、母親の育児への肯定的感情の「育児肯定感」を従属変数とした場合では、「子育ての期待と現実の差」は年齢高群で負の有意傾向が見られ、職業無群では有意な負の影響が認められた。「夫婦の対話」は母親の年齢の高低群、職業の有無群のどちらにも有意な正の影響を与えていた。

保護者を取り巻く子育て環境が厳しい中で、「子育ての期待と現実の差」が大きい群では、子どもや子育てについて「母親の充実感」として肯定的に捉えている反面、「子どものしつけや対処法」が分らないことや、「母親の心身の疲労」が原因で子育てに行き詰まりを感じていることが推察された。このように「子育ての期待と現実の差」が大きい群と小さい群において感じる内容やその要因が異なる場合には、保護者支援において、提示する情報やその援助のあり方も異なることを示唆している。当然、保護者が求める支援や相談内容も変わってくる。「子どもが夜遅くまで起きている」、「子どもが野菜を食べないで困る」という相談が、実は父親の育児協力が得られないという訴えが背景にある場合も考えられる。また、研究 2 では、職業有群及び年齢低群において『時間の制約』における「時間の制約」が有意に多く、職業無群及び年齢高群では『育児負担感』における「衝動的な叱責」が有意に多かった。子どもと関わることで「時間の制約」を感じる母親にとっては、母親役割という新しい役割が増えたことにより、「子育ての責務を一身に担う心身の負担」（池田・古閑、2014）や困難さを感じている場合も多いと思われる。このようなことから、保育者は子育てに悩みや困難を抱える保護者であるという見方に対し、一生懸命に頑張っているのだという別の視点から捉え直したり、現実の子育てにおいて、どのようなことに差を感じているのかという側面からも見る姿勢が求められる。そこで、第 4 章では、さらに「子育ての期待と現実の差」に及ぼす様々な要因について検討を行っていく。

第4章 幼児をもつ母親の育児感情が親役割に及ぼす影響

第1節 親役割の状態の差及び子どもへの認識の差についての検討（研究5）

1. 目的

第3章における検討において、育児への肯定的感情は、「育児肯定感」と「自己肯定感」との2因子で構成され、「子育ての期待と現実の差」は年齢高群で負の有意傾向が見られ、職業無群では有意な負の影響を及ぼしていた。また、「子育ての期待と現実の差」が高い群の母親は、日常生活での子どもとの関わりの中で、「育児負担感」や「時間の制約」及び「子どものしつけや対処法」などの困難感を認識していること、低い群の母親においては「育児肯定感」や「育児支援感」など、概ね肯定的に受け止めていることが示唆された。

近年、女性の社会進出が進み男女共同参画社会の実現が望まれている。先行研究から母親の育児不安や育児負担感が、父親からの育児サポートで緩和される（岡本・中村・山口・奥山・標、2002）ことが明らかになっている。しかし、男性の仕事と育児を両立できる職場環境の整備については進捗が遅く、家事や育児での量的行動について期待されている役割を果たすことは難しい状況が予想される。また、母親が孤立した状況で子育てをすることにより、「イライラすることが多くなった」、「子どもの振るまいで怒ってしまう」など、子育てへの否定的感情を抱きやすくなることが推察され、母親による不適切な養育態度や虐待の相談件数の急増からは、「育児不安など孤立した状況での子育ての困難さ」（庄司、2001）が深刻化していることが分かる。

また、大橋・浅野（2010）は、「育児期とは、親役割を獲得する期間であり、家族機能においても家事や育児と仕事と家族員の役割の再調整の時期」でもあり、多様化する家族形態の中で、性別役割分業にとらわれない親の特性に着目する必要性があると述べている。その上で、母親と父親に共通する親の特性を示す「親性」について、「親性とは、すべての人がもっているものであり、女性と男性に共通する、自己を愛し、尊重しながら、他者（子ども）に対しても慈しみやいたわりをもつという性格のものである。ライフステージとともに発達していくものであり、妊娠・出産・育児期では、子どもに対して保護や育成という能力で発揮される」（大橋・浅野、2009）と定義している。その上で、「育児期の親性尺度」開発において、その構成概念を自己への認識と子どもへの認識

の二側面で捉え、その調和と葛藤を捉えることが親理解の重要ポイントであると述べている。そして、自己への認識を「親役割の状態」と「親役割以外の状態」と分け、「子どもへの認識」を合わせた三つを下位領域としている。「親役割の状態」は、子どもに接しながら、授乳や排泄の世話といった育児能力を身につけ、育児に関心を持ち親としての役割に満足感を抱いている状態である、「親役割以外の状態」は、夫や妻といった役割をもち、社会で働く存在を示している、「子どもへの認識」は、子どもとの関係を育みながら、子どもの現在と今後の成長・発達の様子の理解を深め、愛情を抱きながら接している様子であると定義している。親役割や親性に関する先行研究としては、母親自身がもつ三側面（家庭人としての自分、社会人及び職業人としての自分、個人としての自分）の理想と現実の構成割合に生じたギャップと育児不安の関連（原口・松浦・矢倉・佐々木・笠置、2005）、母親の精神状態と家事及び育児役割に対する理想と母親から見た父親の認識の差（山口・堀田・下方、2007）、子育てをしながらも個人としても生きたいと志向する「個人としての自分」と育児ストレスとの関連（小野田、2013）などの研究が見られる。これらの研究においては各親役割の比率に関する期待と現実の差や、母親が「親役割以外の状態」に関する期待と現実の差について検討されているが、「親役割の状態」や「子どもへの認識」に対する期待と現実の差については検討されていない。

そこで第4章では、「子育ての期待と現実の差」について、子どもとの関わりの中での現在の母親の「親役割の状態」から、自身が期待していた「親役割の状態」を減じたものを「親役割の状態の差」と仮定する。「親役割の状態の差」が正（プラス）であると認識している場合には、育児への肯定的感情や幸福感が得られると考えられる。一方で、「親役割の状態の差」が負（マイナス）であると認識している場合においては、親としての役割や育児への否定的感情を抱いていると推測される。つまり、「母親になった時の自分の感情や、実際の子育ての営みの中で経験する負担感とそれに伴う感情」（高田・巽、2008）が、期待していたものとかけ離れていた場合には、子育てに対して心配や不安を強くすると推察される。

さらに、現在の「日常生活の中で頻繁に経験する出来事に対する感じ方・家事や子どものかかわりの中」（金田ら、2015）で子どもから必要とされる経験や、対処の中で「うまくいった」、「これでよい」という確信を得る経験の積み重ねは、子どもとの絆を形成し、子育てへの肯定的感情や幸福感を育んでいると考えられる。このような母親の現在の「子どもへの認識」は高いものと推定され、期待していた「子どもへの認識」を

減じた「子どもへの認識の差」はプラスであろうと推測される。

そこで本研究においては、母親が子どもや子育てに対して親になる前に抱いていた「期待と現実の差」を、「親役割の状態の差」や「子どもへの認識の差」から捉え、それらが「父親からのサポート」、「育児感情」、「日常生活での育児幸福感」に影響されているという仮説について検討する。「親役割の状態の差」や「子どもへの認識の差」からそれぞれの群の母親の特徴を考察し、支援の方法を検討することは、子育てを支えるための支援につながると考える。

なお、本研究では、保護者の子どもや子育てに関連する要因について検討を行っている。したがって、大橋・浅野（2010）における「親役割以外の状態」の差については検討しないこととする。

2. 方法

(a) 手続き

近畿圏内の二か所の認定こども園、一か所の私立保育園に3・4・5歳児を在籍させている保護者735名に、無記名式自記式質問紙を配布した。有効回答は377（回収率は51.3%）であり、そのうち白紙回答及び欠損値のあるもの23を除いた354名を本研究の分析対象とした。

(b) 調査対象者

前述したように「育てている子どもの月齢や年齢によって母親の育児不安の質」（吉田、2013）も異なり、子どもとの関わりやしつけの場面において生じる葛藤や困難感が同様な状態であろうと考えられることから、研究2と同じ年齢（3・4・5歳児）をもつ保護者354名を調査対象とした。調査対象者の基本属性をTable4-1に示す。

(c) 調査期間

2016年7月7日から11日、2016年9月9日から14日にかけて行った。

(d) 質問紙の構成

①調査対象者の属性

まず、母親の属性として、年齢、職業形態、子どもの人数、家族形態、子どもの教育や子育ての分担の項目を設けた。次に、下記に示す五つの尺度の回答を求めた。

②母親になる前の期待する子育て

「母親になる前の期待する子育て」項目については、「育児期の親性尺度」（大橋ら、

Table4-1
研究5における調者対象者の基本属性

属性	項目	人数(%)
年齢	20～24歳	1 (0.3)
	25～29歳	27 (7.6)
	30～34歳	88 (24.9)
	35～39歳	149 (42.1)
	40～44歳	75 (21.1)
	45歳～	14 (4.0)
職業形態	職業に就いていない	163 (46.0)
	常勤勤務	79 (22.3)
	非常勤勤務	54 (15.3)
	自営業	20 (5.6)
	その他	38 (10.7)
子どもの 人数	1人	63 (17.8)
	2人	199 (56.2)
	3人	78 (22.0)
	4人以上	14 (4.0)
家族形態	夫婦と子どものみ	313 (88.4)
	夫方親族と同居	27 (7.6)
	妻方親族と同居	10 (2.8)
	その他	4 (1.1)
子どもの教育や 子育ての分担	もっぱら自分	242(68.4)
	ふたりで同じくらい	110(31.1)
	もっぱら配偶者	2 (0.6)

2010)を参考に作成した。この尺度は「親役割の状態」・「親役割以外の状態」・「子どもへの認識」という三つの下位尺度によって構成され、既にその信頼性・妥当性が確認されている。そのうち「親役割の状態」13項目、「子どもへの認識」11項目において、母親になる前に子どもや子育てに対して自ら期待していた関わり方や態度について、推量の意味を表す“～できるだろう”、“～がわかるだろう”を使用した項目を提示した。回答方法としては、“そう思う”を4、“どちらかといえばそう思う”を3、“どちらかといえばそう思わない”を2、“そう思わない”を1とする4件法とし、評定値をそのまま得点として用いた。なお、逆転項目(項目5・9・13・14・16・18・19・21・23)については、1を4点、2を3点、3を2点、4を1点として計算した。

③母親になった後の現実の子育て

「母親になった後の現実の子育て」項目については、「育児期の親性尺度」より「親役割の状態」13項目、「子どもへの認識」11項目を用いた。回答方法としては、“そう思う”を4、“どちらかといえばそう思う”を3、“どちらかといえばそう思わない”を2、“そう思わない”を1とする4件法とし、評定値をそのまま得点として用いた。なお、逆転項目(項目5・9・13・14・16・18・19・21・23)については、1を4点、2を3点、3を2点、4を1点として計算した。

④父親からのサポート

父親からのサポートを測定するために、「ソーシャルサポート」(武田・宮地・山口・野崎、1998)の情緒的サポート3項目と手段的サポート4項目を用いた。情緒的サポートは夫婦間のコミュニケーションなどを主体とする内容、手段的サポートは家事と育児の援助などを主体とする内容である。回答方法としては、“よくあてはまる”を4、“少しあてはまる”を3、“あまりあてはまらない”を2、“まったくあてはまらない”を1とする4件法とし、評定値をそのまま得点として用いた。

⑤育児感情

育児を担う母親の育児への否定的な感情を測定するために、「育児感情尺度」(荒牧、2011)の「育児への不安感」尺度を用いた。本研究においては、「育児への不安感」尺度の親側の要因に起因する不安感である「育て方への不安感」4項目と、子ども側の要因に起因する不安感である「育ちへの不安感」4項目の二つの下位尺度を用いた。回答方法としては、“よくそう思う”を4、“ときどきそう思う”を3、“いくらかそう思う”を2、“全くそう思わない”を1とする4件法とし、評定値をそのまま得点として用いた。

⑥日常生活での育児幸福感

日常生活の中で頻繁に経験する出来事に対する感じ方・家事や子どもとの関わりの中で感じる幸福の程度を測定するために、「日常生活での育児幸福感尺度」(金田ら、2015)を用いた。本研究では、家事や子どもの世話に関する項目で構成されている「生活場面」5項目と、子どもとの直接的な関わりに関する項目である「関係性場面」5項目を用いた。回答方法としては、“うれしい”を4、“どちらかといえばうれしい”を3、“どちらかというとうれしくない”を2、“うれしくない”を1とする4件法とし、評定値をそのまま得点として用いた。

(e) 倫理的配慮

無記名式自記式質問紙調査を実施するに当たり、倫理的配慮として、二か所の認定こども園の園長及び一か所の私立保育園の園長と面談を行い、調査の目的、方法、意義、守秘義務、研究の協力及び協力拒否が可能であることを文書に基づいて説明を行い、研究の協力を得た。園教諭より本調査の依頼文と無記名式自記式質問紙(表紙には、所属機関名、調査者氏名、連絡先、研究の趣旨、本調査においては特定の個人情報が出漏しないようコード化し研究終了後は廃棄することを明記した)を、調査を協力すると意思表示した保護者に配布し、後日郵送で回収を行った。なお、アンケート調査用紙は全て無記名とした。本研究は筆者が所属する機関の研究倫理審査委員会の承認を受けて実施した(承認番号:児保研-007)。

(f) 分析方法

まず、「母親になる前の期待する子育て」、「母親になった後の現実の子育て」、「父親からのサポート」、「育児感情」、「日常生活での育児幸福感」について、因子分析を行い、因子構成や内的整合性を確認した。さらに、「父親からのサポート」、「育児感情」、「日常生活での育児幸福感」が、「親役割の状態の差」及び「子どもへの認識の差」に影響を及ぼすモデルを、共分散構造分析によって検討を行った。統計学的処理は、IBM SPSS Statistics (Ver.21) と Amos (Ver.21) を用い、有意水準は5%未満とした。

3. 結果

(a) 子育ての期待と現実の差

母親になる前の期待する子育て尺度については、本研究の使用に際して因子分析を行った。まず、全項目24項目について最尤法による因子分析を行った結果、固有値の値

(11.00、2.55) から判断し、2 因子を採用した。これらの因子に対して、最尤法プロマックス回転で因子分析を行った。因子数と各項目が属する因子の決定には、負荷量の絶対値が.40 未満の項目及び二つの項目にまたがって.40 以上の値を示した、項目 2・3・5・12・17・20・22・24 を除外することとした。そして、残った 16 項目について再度因子分析を行った。その結果、第 1 因子「母親になる前の親役割の状態 (9 項目)」、第 2 因子「母親になる前の子どもへの認識 (7 項目)」から構成されていた。2 因子による累積説明率は 54.88%であった。プロマックス回転後の因子負荷量を Table4-2 に示した。各因子の内的整合性を示す Cronbach の α 係数は、それぞれ $\alpha = .91$ 、 $\alpha = .89$ であった。

次に、母親になった後の現実の子育て尺度についても、「育児期の親性尺度」(金田ら、2015) の 24 項目について最尤法による因子分析を実施した。その結果、第 1 因子「母親になった後の親役割の状態 (9 項目)」、第 2 因子「母親になった後の子どもへの認識 (7 項目)」が抽出された (2 因子による累積説明率は 49.10%)。各因子の内的整合性を示す Cronbach の α 係数は、それぞれ $\alpha = .90$ 、 $\alpha = .83$ であった (Table4-3)。

さらに、「子育ての期待と現実の差」について検討をする際には、「母親になった後の現実の子育て」においての「親役割の状態」得点、「子どもへの認識」得点から、「母親になる前の期待する子育て」においての「親役割の状態」得点、「子どもへの認識」得点の得点差を算出して、その値を「親役割の状態の差」得点、「子どもへの認識の差」得点とした。本研究では、「子育ての期待と現実の差」がプラスの群は 241 名、「子育ての期待と現実の差」がマイナスの群は 84 名であり、以後の分析ではこれらを従属変数として用いることにした。

(b) 父親からのサポート

父親からのサポート尺度 7 項目について、最尤法による因子分析を行った。まず、説明された分散の合計及び因子のスクリープロットと固有値を参考に、2 因子を採用した。そして、これらの因子に対して最尤法プロマックス回転で因子分析を行った。7 項目全ての因子負荷量は、.40 以上の負荷量を示し、及び複数の因子には .40 以上の値を示さなかった。2 因子による累積説明率は 71.11%であった (Table4-4)。各因子の内的整合性を示す Cronbach の α 係数は、「手段的サポート (4 項目)」.89、「情緒的サポート (3 項目)」.89 であった。

(c) 育児感情

育児感情尺度 8 項目について、最尤法による因子分析を行った。まず、説明された分

Table4-2

母親になる前の期待する子育て尺度項目のプロマックス回転後の
因子負荷量および得点の平均・標準偏差

項 目 内 容	因子 I	因子 II	共通性	平均	標準偏差
第 I 因子 親役割の状態 $\alpha = .91$					
21 私は、育児をすることに喜びを感じていないだろう R	.90	-.09	.74	3.31	.72
19 私は、子どもとの関係に満足を感じていないだろう R	.82	-.13	.57	3.30	.80
23 私は、子育てに充実感を感じていないだろう R	.81	-.00	.65	3.30	.74
14 私は、親としての充実感を感じていないだろう R	.74	.10	.63	3.18	.78
18 私は、親としてだけの自分をむなしと思っているだろう R	.72	-.00	.50	3.34	.79
13 私は、子どもとスキンシップがとれてないだろう R	.66	.06	.48	3.13	.74
16 子どもは、いつも私がいやがることをするだろう R	.62	-.11	.32	3.13	.78
9 私は、子どもと関わる時間を大事にしていなかったら R	.55	.22	.47	3.20	.74
11 私は、育児をすることに喜びを感じているだろう	.49	.36	.56	3.16	.81
第 II 因子 子どもへの認識 $\alpha = .89$					
8 私は、子どもの個性がわかるだろう	-.11	.85	.63	2.87	.79
6 私は、現在の子どもの発育がよくわかるだろう	-.05	.81	.61	2.80	.77
1 私は、子どもの様子がよくわかるだろう	-.02	.77	.58	2.90	.84
4 私は、子どもの欲求がよくわかるだろう	-.00	.77	.59	2.89	.81
7 私は、子どもを寝かしつけることがうまくできるだろう	-.01	.75	.55	2.73	.87
10 私は、子どものこれからの発育の様子を想像することができるだろう	-.01	.69	.47	2.69	.77
15 私は、子どもの性格がわかるだろう	.09	.59	.41	3.03	.75
寄与率 (%)	42.21	12.67			
累積寄与率 (%)		54.88			
因子間相関		.53			

Rは逆転項目 太字は .40以上の因子負荷量を示す。

Table4-3

母親になった後の期待する子育て尺度項目のプロマックス回転後の
因子負荷量および得点の平均・標準偏差

項 目 内 容	因子 I	因子 II	共通性	平均	標準偏差
第 I 因子 親役割の状態 $\alpha = .90$					
23 私は、子育てに充実感を感じていません R	.94	-.10	.80	3.50	.73
21 私は、育児をすることに喜びを感じていません R	.90	-.07	.74	3.46	.73
14 私は、親としての充実感を感じていません R	.77	.08	.66	3.49	.68
18 私は、親としてだけの自分をむなしと思っています R	.75	-.13	.47	3.38	.83
19 私は、子どもとの関係に満足を感じていません R	.69	.04	.52	3.34	.78
11 私は、育児をすることに喜びを感じています	.66	.12	.54	3.35	.69
9 私は、子どもと関わる時間を大事にしています R	.61	.13	.48	3.44	.69
16 子どもは、いつも私がいやがることをします R	.48	-.04	.21	3.24	.79
13 私は、子どもとスキンシップがとれていません R	.47	.22	.38	3.41	.69
第 II 因子 子どもへの認識 $\alpha = .83$					
1 私は、子どもの様子がよくわかります	-.04	.74	.52	3.17	.59
8 私は、子どもの個性がわかります	-.02	.72	.51	3.27	.62
15 私は、子どもの性格がわかります	.06	.72	.57	3.29	.65
4 私は、子どもの欲求がよくわかります	.01	.70	.50	3.11	.63
6 私は、現在の子どもの発育がよくわかります	-.06	.69	.44	3.17	.62
10 私は、子どものこれからの発育の様子を想像することができます	.06	.58	.38	2.87	.74
7 私は、子どもを寝かしつけることがうまくできます	-.02	.43	.17	3.11	.79
寄与率 (%)	38.10	11.00			
累積寄与率 (%)		49.10			
因子間相関		.54			

Rは逆転項目 太字は .40以上の因子負荷量を示す。

散の合計及び因子のスクリープロットと固有値を参考に、2 因子を採用した。そして、これらの因子に対して最尤法プロマックス回転で因子分析を行った。8 項目全ての因子負荷量は、.40 以上の負荷量を示し、及び複数の因子には.40 以上の値を示さなかった。2 因子による累積説明率は 65.75%であった。各因子の内的整合性を示す Cronbach の α 係数は、「育て方への不安感（4 項目）」.89、「育ちへの不安感（4 項目）」.87 であった（Table4-5）。

（d）日常生活での育児幸福感

日常生活での育児幸福感尺度 10 項目について、最尤法による因子分析を行った。まず、説明された分散の合計及び因子のスクリープロットと固有値を参考に、2 因子を採用した。そして、これらの因子に対して最尤法プロマックス回転で因子分析を行った。その結果、負荷量の絶対値が.40 未満の項目及び二つの項目にまたがって.40 以上の値を示した、項目 2・4・8・9 を除外することとした。残った 6 項目について再度因子分析を行った結果、第 1 因子「関係性場面（3 項目）」、第 2 因子「生活場面（3 項目）」が抽出された。2 因子による累積説明率は 42.65%であった（Table4-6）。各因子の内的整合性を示す Cronbach の α 係数は、それぞれ $\alpha = .78$ 、 $\alpha = .76$ であった。

（e）共分散構造分析によるモデルの検討

母親の属性及び「父親からのサポート」、「育児感情」、「日常生活での育児幸福感」が、「親役割の状態の差」及び「子どもへの認識の差」に影響を及ぼすという仮説の検証のために、Amos（ver21）を用いて共分散構造分析によるモデル検討を行った。分析の方法としては、まず、父親の育児サポートにおける「手段的サポート」・「情緒的サポート」、育児感情における「育て方への不安感」・「育ちへの不安感」、日常生活での育児幸福感における「関係性場面」・「生活場面」を説明変数、母親の「親役割の状態の差」・「子どもへの認識の差」を目的変数とするモデルを構成した。そして、「子育ての期待と現実の差」がプラスの群（241 名）とマイナスの群（84 名）のそれぞれについて検討を行った。なお、「父親からのサポート」、「育児感情」、「日常生活での育児幸福感」の各下位尺度には相関を仮定した。そして、5%水準で有意でなかったパス及び相関を削除したモデルについて適合度を求めた。

その結果、「子育ての期待と現実の差」がプラスの群では、モデル適合度指標は、 $\chi^2 = 21.73$, $df = 19$, $p < n.s.$, $GFI = .978$, $AGFI = .959$, $CFI = .977$, $RMSEA = .024$ であり、データに対するモデルのあてはまりは良好と言える水準であった（山本ら、1999）。

Table4-4

父親の育児サポート尺度項目のプロマックス回転後の
因子負荷量および得点の平均・標準偏差

項 目 内 容	因子 I	因子 II	共通性	平均	標準偏差
第 I 因子 手段的サポート $\alpha = .89$					
4 家事(炊事・掃除・洗濯)を手伝ってくれる	.88	-.05	.72	2.58	1.10
5 授乳や食事の世話をしてくれる	.88	.00	.76	2.51	1.04
6 おむつ替えや着替え・トイレの世話をしてくれる	.84	.02	.72	2.77	1.03
7 子どもの世話や子どもの遊び相手をしてくれる	.51	.29	.53	3.30	.84
第 II 因子 情緒的サポート $\alpha = .89$					
1 心配事や悩みを聞いてくれる	-.06	.95	.84	3.11	.93
3 出産や育児・子どもの発達や病気に関して心配事を相談できる	-.03	.89	.76	3.27	.91
2 あなたに気を配ったり思いやりったりしてくれる	.22	.65	.65	3.06	.91
寄与率(%)	59.74	11.37			
累積寄与率(%)		71.11			
因子間相関		.65			

太字は .40以上の因子負荷量を示す。

Table4-5

育児感情尺度項目のプロマックス回転後の因子負荷量
および得点の平均・標準偏差

項 目 内 容	因子 I	因子 II	共通性	平均	標準偏差
第 I 因子 育て方への不安感 $\alpha = .89$					
3 自分の育て方でよいのかどうか不安である	.90	-.03	.79	2.71	.89
2 子どもをうまく育てていけないか不安になる	.87	.02	.76	2.55	.94
4 子どもにうまく対応できていないと感ずることがある	.77	-.02	.58	2.57	.89
1 育児のことでどうしたらよいかわからなくなる	.76	.02	.59	2.64	.82
第 II 因子 育ちへの不安感 $\alpha = .87$					
6 他の子にはできて、自分の子どもにはできないことが多いと感じる	-.02	.88	.76	1.83	.94
7 同年齢の子どもと比べて、自分の子どもは幼いと感じる	-.05	.81	.63	1.82	1.01
8 他の子どもに比べて、自分の子どもは発達が遅れているのではないかと思う	-.05	.77	.57	1.50	.86
5 入園後、自分の子どもが他の子どもに遅れないでついていけるか不安になる	.16	.70	.60	2.13	1.06
寄与率(%)	44.49	21.26			
累積寄与率(%)		65.75			
因子間相関		.36			

太字は .40以上の因子負荷量を示す。

Table4-6

日常生活での育児幸福感尺度項目のプロマックス回転後の
因子負荷量および得点の平均・標準偏差

項 目 内 容	因子 I	因子 II	共通性	平均	標準偏差
第 I 因子 関係性場面 $\alpha = .78$					
10 子どもに絵本を読んであげているとき	.90	-.06	.61	3.36	.67
7 子どもがしらない人の前や場所で「ママ」と頼ってくるとき	.74	.07	.70	3.46	.64
5 子どもと手をつないで歩いてるとき	.54	.01	.42	3.84	.38
第 II 因子 生活場面 $\alpha = .76$					
3 子どもが食事が終わった後、片付け(食器洗いなど)をしているとき	-.15	.89	.66	2.29	.78
6 子どもの服を洗濯し、たたんでいるとき	.09	.69	.55	2.81	.83
1 子どもの食事を作っているとき	.25	.53	.51	2.78	.82
寄与率(%)	35.22	7.43			
累積寄与率(%)		42.65			
因子間相関		.58			

太字は .40以上の因子負荷量を示す。

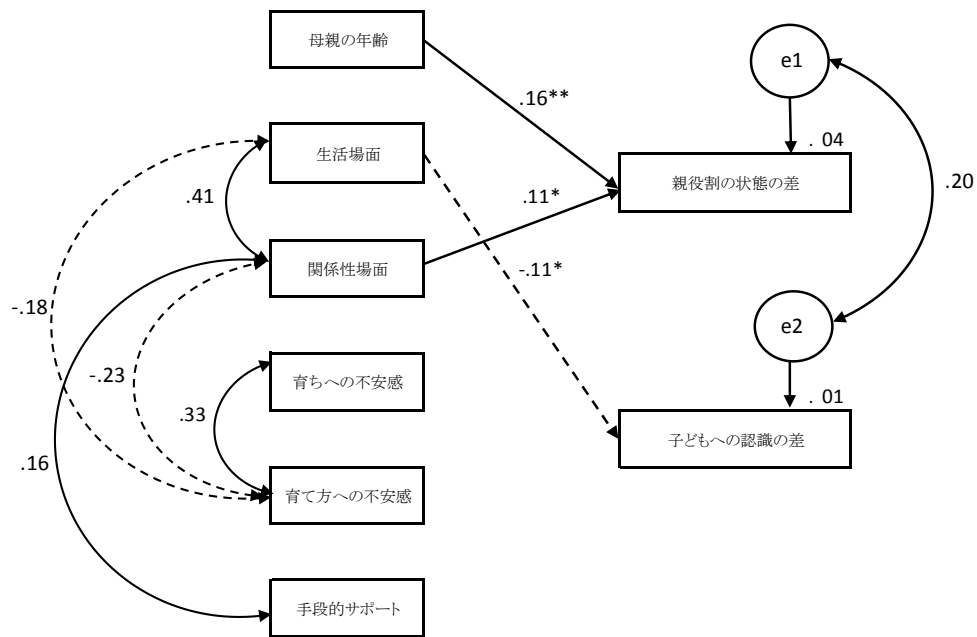
次に、「母親の年齢」、「育て方への不安感」、「育ちへの不安感」、「関係性場面」、「生活場面」による分散説明率（説明される変数の割合： R^2 ）並びにパス係数を検討した。「母親の年齢」から「親役割の状態の差」へのパス係数は正の影響（.16）、「関係性場面」から「親役割の状態の差」へのパス係数は正の影響（.11）を与えることを示し、分散説明率は.04であった。一方、「生活場面」から「子どもへの認識の差」へのパス係数は負の影響（-.11）を与えることを示し、分散説明率は .01 であった（Figure4-1）。

また、「子育ての期待と現実の差」がマイナスの群では、適合度指標は、 $\chi^2=1.31$, $df=2$, $p<n.s.$, $GFI=.995$, $AGFI=.945$, $CFI=1.00$, $RMSEA=.00$ であり、このモデルとデータとの適合は良好と言える水準であった。次に、「育て方への不安感」、「育ちへの不安感」、「関係性場面」、「生活場面」による分散説明率（説明される変数の割合： R^2 ）並びにパス係数を検討した。「親役割の状態の差」へのパス係数は、「生活場面」から正の影響（.24）、「関係性場面」から正の影響（.27）、「育ちへの不安感」から負の影響（-.23）、「育て方への不安感」から負の影響（-.15）を与えていることを示し、分散説明率は .38 であった。一方、「子どもへの認識の差」へのパス係数は、「生活場面」から負の影響（-.25）、「育ちへの不安感」から負の影響（-.43）を与えていることを示しており、分散説明率は.22 であった（Figure4-2）。

4. 考察

本研究においては、「子育ての期待と現実の差」がプラスの群の母親は、現実の子育ての状態が期待する子育てよりもよかったと感じている母親である。この群では、「母親の年齢」から「親役割の状態の差」へ正の影響が見られ、「日常生活での育児幸福感」の「関係性場面」から「親役割の状態の差」へ正の影響が見られた。

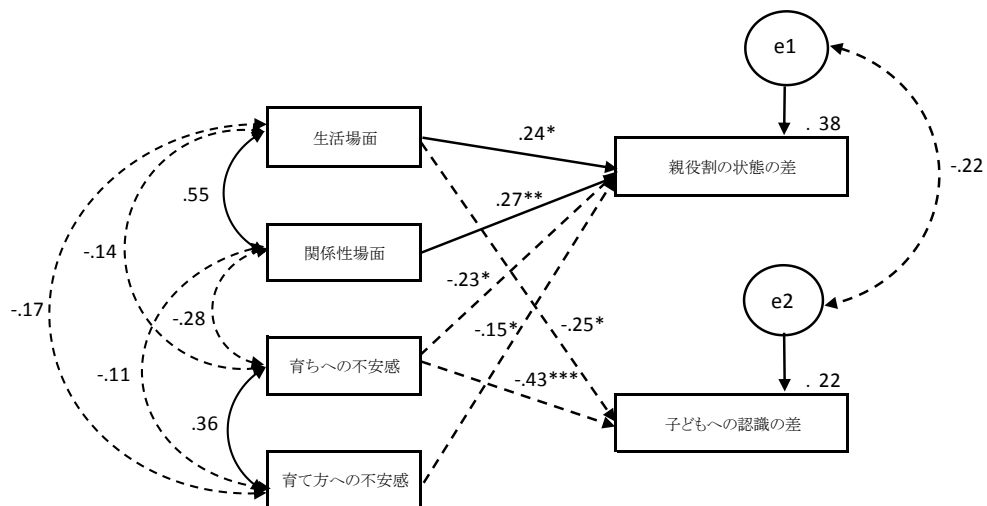
「母親の年齢」から「親役割の状態の差」へ正の影響が見られたことについては、多様な価値観や社会経験が豊かな年代の母親は、地域の子育て支援サービスについて情報を得て、親役割についても肯定的に受け止めているものと推察される。また、「日常生活での育児幸福感」の「関係性場面」から「親役割の状態の差」へ正の影響が見られたことについては、子どもとの関係の中で子どもへの愛情や、子どもの様子の理解を深め育児幸福感を実感することができていると考えられる。子どもとの関わりの中で実際に子育てがうまくいっているという自信をもつことができ、子育てに関心をもって親役割に満足感を抱いているものと推察される。



$\chi^2=21.73$, $df=19$, $p<n.s.$, $GFI=.978$, $AGFI=.959$, $CFI=.977$, $RMSEA=.024$

* $p<.05$ ** $p<.01$ 実線は正、破線は負のパス・相関・共分散を示す 有意なパス・相関・共分散のみ記載した

Figure4-1 子育ての期待と現実の差がプラス群の母親のモデル



$\chi^2=1.31$, $df=2$, $p<n.s.$, $GFI=.995$, $AGFI=.945$, $CFI=1.00$, $RMSEA=.00$

* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$ 実線は正、破線は負のパス・相関・共分散を示す 有意なパス・相関・共分散のみ記載した

Figure4-2 子育ての期待と現実の差がマイナス群の母親のモデル

一方で、「日常生活での育児幸福感」の「生活場面」から「子どもへの認識の差」に負の影響が見られたことについては、日常生活において家事をする、子どもの世話をする育児幸福感の「生活場面」で一生懸命頑張っている母親ほど、子どもとの関わりもより一層深まるであろうが、努力が報われない場合には自責の念にかられることもあると考えられる。本研究においては、「子どもの教育や子育ての分担」について、「もっぱら自分で」行うと回答した母親は 242 名（68.4%）であり、家庭での基本的生活習慣を身につける場面では、愛情をもって接していてもなかなか身に付かない場合も想定される。そのような場合、子どもから思いがけない反抗的な態度を示されたりすることで、その責任感の重さや苛立ちを感じることも多くなると推察される。このようなことから、日常的な家事や子どもの世話で幸福感を得られても、母親が幼児期のしつけの場面などで、母親の要求と子どもの要求との折り合いがつかない場合には、子どもへの認識を否定的に捉えることが多くなるのではなかろうか。「子育ての期待と現実の差」得点がプラスの母親に対する保護者支援には、子どもとの関わりが多くなることから起こる心配事や苛立ちに対して、「気軽に相談することができ、正しい情報提供を受けて、問題解決ができる」（河野・大井、2014）よう共に考えることが求められていると考えられる。

一方で、「子育ての期待と現実の差」がマイナスの群の母親は、現実の子育ての状態が期待する子育てよりも低いと認識し、現実の子育てに不安感や負担感を抱いていると推察される。「日常生活での育児幸福感」の「生活場面」と「関係性場面」から「親役割の状態の差」へ正の影響が見られたことについては、日常生活の中で子育てによって喚起される肯定的な感情をもつ母親は、子どもへの対処がうまくできている経験の積み重ねや、親役割の達成感を味わっているものと推察される。しかしながら、「育児感情」の「育ちへの不安感」と「育て方への不安感」から「親役割の状態の差」へ負の影響が見られたことについては、乳児・幼児初期と幼児期の育児不安とが質的に異なり（川井・庄司・千賀・加藤、1995）子どもの発達に伴いその対応の難しさに直面することが多くなることが関わっているかもしれない。母親が教育・保育施設で他児と比べたり、子どもの自己主張に振り回されたり苛立ちを覚えたりすることにより、子育てに自信を失っている場合もある。諏澤・加藤・山口（2007）は、「児の成長とともに親の育児の自信が形成され、またその質は確固たるものではなく、アンビバレントで揺れやすい質」のものであるので、育児相談や支援の過程においては一律に応じるのではなく、子どもの年齢段階を考慮した対応が必要であることを指摘している。

また、育児能力に対する不安である「育児感情」の「育て方への不安感」が高いと認識している母親は、日々の関わりにおいて、自分で納得できる対処ができていないことにより、子育てに自信がもてず親役割に不安を抱いている可能性も考えられる。母親の子育ての対処法がうまくいった成功体験は、母親の努力が報われ、自分で解決できたと思えることにつながり、子どもとの関わりで育児幸福感も高まる。その一方、努力に反して十分な効果が得られず、問題が解決できない状況では、親役割に対して自信を喪失させやすくなると考えられる。

次に、「日常生活での育児幸福感」の「生活場面」や「育児感情」の「育ちへの不安感」から「子どもへの認識の差」へ負の影響が見られたことは、「児の自我の拡大に伴い、親の心身の疲労感」（諏訪ら、2007）が増加することや、日々の関わりの中で子どもにうまく対応できないことが考えられる。加えて、保護者が子どもの成長や発達に不安を抱くことにより、子どもに対して正しい認識が得られていないことが推察される。

「子育ての期待と現実の差」がマイナスの母親に対する保護者支援については、子どもの良い面を見ようとする、子どもへの対応を変えること、子どもと距離を置いて見る（寺藺、2009）など、母親に子育ての対処法を獲得することを促すことが求められる。したがって、母親が子どもと関わる場面で葛藤している場合には、保育者が母親自身に適した対処法と一緒に考え、自身で解決できる道筋を支えることが求められる。マイナス群の母親への課題の理解や発見が遅れることは、心身の健康や親子関係を悪化させ、「複数の要因が重なりあって生じる」（山縣、2016）子ども虐待のリスクを高める可能性も考えられる。母親の身体的疲労の蓄積や内的資源の乏しさから心理的な問題が見られる場合には、地域の社会資源の情報を把握する必要もあるであろう。保育者は具体的な援助の実施に備え、関係機関との協働も視野に入れる必要があると考えられる。

第2節 親役割の状態の差及び子どもへの認識の差と保護者支援（研究6）

1. 目的

2008（平成20）年に改定された『保育所保育指針』では、第6章「保護者に対する支援」が創設され、保育所に入所している子どもの保護者に対する支援及び地域における子育て支援が、保育と並ぶ重要な責務であると位置づけられている。また、『保育所保

育指針』(厚生労働省、2017)においては、「保護者に対する支援」を「第4章 子育て支援」として改め、子どもの育ちを家庭と連携していくこと、保護者の主体性や自己決定を尊重しながら支援していくことが明記されている。また、2017(平成29)年に告示された『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』においても、第4章「子育ての支援」において、幼保連携型認定こども園の園児の保護者に対する子育て支援及び地域における子育て家庭の保護者等に対する支援を行うことが示されている。

保護者への支援や家庭との連携は、保育者に求められる重要な責務であり、適切な支援のあり方や方法は、一人一人の保護者の個人を取り巻く環境によって異なり、保育者が支援を行う場合の着眼点の相違は、これらの結果に大きく影響を及ぼすと考えられる。多くの場合、保育者は子育ての主体である母親を、「〇〇ちゃんのお母さん」と捉えがちであり、「育児についての見聞や経験が少なくなっているとともに、近隣に相談相手がなく孤立しているなどの状況があり、長時間労働の問題などともあいまって育児に悩む」(厚生労働省、2016b)個人であるとは理解しにくい。保育者は子育てを担う母親が、子どもの育ちを支えるためにどのような支援を求めているかを把握し、子どもの健やかな育ちを実現する必要がある。

そこで、本研究においては、「子育ての期待と現実の差」がプラスの群とマイナスの群の母親が求める保護者支援について検討を行うことを目的とする。それぞれの群の母親が求める保護者支援を比較することは、保護者ニーズを的確に捉え子どもの健やかな成長を促すための支援につながるものとする。

2. 方法

(a) 手続き

無記名式質問紙調査による検討を行った。調査方法としては、研究5と同様である。近畿圏内の二か所の認定こども園、一か所の私立保育園に3・4・5歳児を在籍させている保護者735名に、無記名式自記式質問紙を配布し、記入後郵送で回収した。有効回答は377(回収率は51.3%)、そのうち白紙回答及び欠損値のあるもの23を除いた354であった。

(b) 調査対象

研究5において、「子育ての期待と現実の差」がプラスの群241名、マイナスの群84名、合計325名から得られた527の自由記述を分析対象とした。

(c) 調査期間

2016年7月7日から11日、2016年9月9日から14日にかけて行った。

(d) 分析方法

子育て中の母親が求める保護者支援について自由記述（複数回答）を求めた。自由記述の分類は、保育に携わる大学院博士前期課程修了者3名、児童保育を専攻する大学院博士後期課程に在籍する大学院生1名で、KJ法により検討を行った（川喜田、1986）。また、内容分析に当たっては、分析の信頼性と妥当性を高めるため、分析過程で共通の見解が得られるまで検討を繰り返した。

3. 結果

(a) 子育て中の母親が求める保護者支援の内容

子育て中の母親が求める保護者支援について、KJ法を用いて分類したところ、25の小カテゴリーと五つの大カテゴリーに分類された。分類結果をTable4-7に示す。

「保育の充実」、「保育料の軽減」、「経済的負担」、「乳幼児医療の充実」、「教育環境の整備」、「社会の雰囲気づくり」、「長時間労働」、「家事や育児の負担」という八つの小カテゴリーからなる『母親を取り巻く社会的環境』。「拘束感」、「遊び場の確保」、「情報提供」、「相談支援（人）」、「相談支援（方法）」、「相談支援（場所）」、「母親の自己肯定感」という七つの小カテゴリーからなる『母親を取り巻く個人的環境』。「父親の協力」、「育児支援」、「周囲の人の理解」、「母親の友達」という四つの小カテゴリーからなる『周囲の人からの支援』。「子どもの成長」、「子育ての対処法」、「乳幼児健診」、「子どもの健康」という四つの小カテゴリーからなる『子どもの成長や発達』。「産後うつ」、「女性の社会進出」、という二つの小カテゴリーからなる『その他』のカテゴリーが形成された。

(b) 「子育ての期待と現実の差」がプラスの群とマイナスの群から見た保護者支援の内容

本研究において、「子育ての期待と現実の差」がプラスの群とマイナスの群に分ける基準として、「育児期の親性尺度」（大野ら、2010）を参考に作成した「母親になる前の期待する子育て」尺度及び「母親になった後の現実の子育て」尺度について、二つの尺度の因子構成や信頼性を確認した後、「子育ての期待と現実の差」得点を算出し、その値を用いた。その結果、「子育ての期待と現実の差」がプラスの群（range1~34）は241名、

Table 4-7

子育て中の母親が求める保護者支援の記述例

大カテゴリー	小カテゴリー	記述例	記述数
母親を 取り巻く 社会的環境 214(40.6)	保育の充実	・保育時間延長、預かり保育・病児保育・待機児童	61
	保育料の軽減	・保育料が高すぎる、パート代が消える	51
	経済的負担	・父親の給料だけでは生活ができない	41
	乳幼児医療の充実	・乳幼児医療を義務教育終了まで延長してほしい	17
	教育環境の整備	・義務教育や高等教育を安心できるようにしてほしい	13
	社会の雰囲気づくり	・子育てをする親に理解を示してほしい	12
	長時間労働	・父親が家庭に帰られるようにしてほしい	12
	家事や育児の負担	・女性に家事や育児の負担が集中しすぎる	7
母親を 取り巻く 個人的環境 196(37.2)	拘束感	・ほっとする、気持ちを切り替える時間がほしい	61
	遊び場の確保	・親子で集える場所がほしい	35
	情報提供	・情報が多すぎる、必要な情報が届かない	24
	相談支援(人)	・ちょっとしたことを相談できる人がほしい	23
	相談支援(方法)	・子育ての対処法を教えてほしい	20
	相談支援(場所)	・ちょっとしたことを相談できる場所がほしい	19
	母親の自己肯定感	・自分の子育てを褒めてほしい、認めてほしい	14
周囲の人 からの支援 71(13.5)	父親の協力	・父親と一緒に子育てをしてほしい、話を聞いてほしい	33
	育児支援	・困ったときに助けてくれる人がほしい	19
	周囲の人の理解	・周囲の理解や暖かい見守りがほしい	14
	母親の友達	・同じような年頃の子どもを育てている友達がほしい	5
子どもの 成長や発達 39(7.4)	子どもの成長	・子どもの正常な成長や発達を教えてほしい	15
	子育ての対処法	・子育ての対処法を教えてほしい	11
	乳幼児健診	・乳幼児健診では指導より褒める場にしてほしい	8
	子どもの健康	・子どもの健康(予防接種・オーラルケア等)	5
その他 7(1.3)	産後うつ	・産後うつなどの心身のケアの必要である	5
	女性の社会進出	・女性の社会進出を阻んでいるように感じる	2
合計			527

「子育ての期待と現実の差」がマイナスの群（range-20~-1）は 84 名であった。

次に、各カテゴリーに該当する記述内容を「子育ての期待と現実の差」がプラスの群の記述（260 個）及び「子育ての期待と現実の差」がマイナスの群の記述（267 個）に分け、それらの個数を χ^2 検定によって検討し、結果が有意であった場合には残差分析を行った。なお、統計的有意水準は 10%未満とした。結果を Table4-8 に示す。

分析の結果、『母親を取り巻く社会的環境』については、「子育ての期待と現実の差」がマイナスの群において、「社会の雰囲気づくり」（ $\chi^2=17.66$ 、 $p<.05$ ）、「長時間労働」（ $\chi^2=17.66$ 、 $p<.05$ ）が有意に多かった。また、『母親を取り巻く個人的環境』については、「子育ての期待と現実の差」がプラスの群において、「遊び場の確保」（ $\chi^2=12.51$ 、 $p<.10$ ）、「相談支援（場所）」（ $\chi^2=12.51$ 、 $p<.10$ ）が有意に多い傾向が見られた。『周囲の人からの支援』では、「子育ての期待と現実の差」がマイナスの群において、「周囲の人の理解」（ $\chi^2=10.38$ 、 $p<.05$ ）が有意に多かった。また、『子どもの成長や発達』において、「子育ての期待と現実の差」がプラスの群では「子育ての対処法」（ $\chi^2=7.04$ 、 $p<.10$ ）が有意に多い傾向が見られ、「子育ての期待と現実の差」がマイナスの群では「子どもの成長」（ $\chi^2=7.04$ 、 $p<.10$ ）が有意に多い傾向が見られた。

4. 考察

(a) 子育ての期待と現実の差がプラスの群の結果に対する考察

本研究においては「子育ての期待と現実の差」がプラスの群は、子どもを関わる中で「親であることを肯定的に受け止め、親になることで人間的に成長できた」（大橋ら、2010）と認識しており、現実の子育ての状態が期待する子育てよりもよかったと感じている母親と考えられる。プラスの群の母親が『母親を取り巻く個人的環境』における「遊び場の確保」や「相談支援（場所）」が有意に多い傾向が見られたことは、子どもと一緒に遊ぶことができる、他の子育て中の親子と関わるすることができるなどの場所を求めているものと考えられる。先行研究から、子どもの遊び場を多くもつ母親は「育児不安が低く、育児ネットワークも多く持ち、定位家族体験も比較的豊かである」（中谷、2006）ことや、保育所での地域子育て支援事業の参加を通して「公園に出向く機会が増えて、子育て仲間や子どもといえるのが楽しい」（野原、2007）と感じて、社会性の拡大や向上が見られるようになったと述べられている。また、母親が地域子育て支援拠点事業の利用によって、「育児負担の軽減、育児情報の取得と活用、仲間づくり」（中谷、2014）を

Table 4-8

母親が求める保護者支援の
小カテゴリーと子育ての期待と現実の差についての χ^2 検定

大カテゴリー	小カテゴリー	期待と現実の 差がプラスの群 (n=241)		期待と現実の 差がマイナスの群 (n=84)		χ^2 検定結果
母親を取り巻く社会的環境	保育の充実	35		26		$\chi^2 = 17.66^*$
	保育料の軽減	37		14		
	経済的負担	30		11		
	乳幼児医療の充実	11		6		
	教育環境の整備	9		4		
	社会の雰囲気づくり	3	* ↓	9	* ↑	
	長時間労働	4	* ↓	8	* ↑	
	家事や育児の負担	3		4		
母親を取り巻く個人的環境	拘束感	24		37		$\chi^2 = 12.51^\dagger$
	遊び場の確保	20	* ↑	15	* ↓	
	情報提供	6		18		
	相談支援(人)	6		17		
	相談支援(方法)	9		11		
	相談支援(場所)	12	* ↑	7	* ↓	
	母親の自己肯定感	5		9		
周囲の人からの支援	父親の協力	11		22		$\chi^2 = 10.38^*$
	育児支援	11		8		
	周囲の人の理解	2	* ↓	12	* ↑	
	母親の友達	4		1		
子どもの成長や発達	子どもの成長	2	* ↓	13	* ↑	$\chi^2 = 7.04^\dagger$
	子育ての対処法	7	* ↑	4	* ↓	
	乳幼児健診	3		5		
	子どもの健康	2		3		
その他	産後うつ	3		2		$\chi^2 = .06$
	女性の社会進出	1		1		
小計		260		267		
合計			527			

*p<.05, † p<.10

行っているとする報告からも、母親が子どもと一緒に安全に遊びが展開でき、子育てに関する助言が得られる遊び場などの確保は必要であると考えられる。

さらに、『子どもの成長や発達』における「子どもの対処法」については、「子どもが早く寝てくれない」、「野菜を食べない」などの生活面での、子どもと関わる上で困り事があったときに相談に乗ってくれたり、愚痴を聞いてくれたりする相手など、子育ての情報源として、同年齢をもつ母親や看護師や保育士などが求められている可能性も考えられる。本研究では、子どもの人数の平均は 2.12 人（標準偏差.74）であり、複数の子どもを養育している母親は時間的余裕がなく、身体的な負担も大きくなると想像できる。

「子育ての期待と現実の差」がプラスの群の母親には、教育・保育施設が子育てについて相談に乗ってくれる、助言をしてくれる「相談支援（場所）」であることが求められる。また、プラスの群は現実の子育てがよかったと感じている母親であることから、保育者は子どもや子育ての相談事や子育てにまつわる話以外の内容にも応じ、関係性を構築していくことも必要となろう。

(b) 子育ての期待と現実の差がマイナスの群の結果に対する考察

本研究では子育ての期待と現実の差がマイナスの群の母親は、現実の子育ての状態が期待する子育てよりも低いと評価し、現実の子育てに不安感や負担感を抱いていると推察される。マイナスの群の母親が『母親を取り巻く社会的環境』における「社会の雰囲気づくり」や「長時間労働」が有意に多かったことについては、子育てを社会全体で支える環境を整備することが求められていると考えられる。また、「周囲の人の理解」については、「あらゆることで、今の親世代と、その上の祖父母世代では、子育ての常識があまりにも違って」いること（猪熊、2007）、「子連れ外出に対する意識に世代間ギャップがある」（谷口・奥山、2012）ことなどの研究から、子育てをしている母親に対して周囲の人たちが全て温かい視線を向けているとは限らないことが関わっているかもしれない。母親は子どもの面倒ができて当たり前であるという見方との軋轢の中では、紙おむつやベビーフードの使用、便利な育児用品の普及についても「子育てが楽になった」と、現象面だけで子育て中の母親に厳しい眼差しを送る世代も存在しているように思われる。よって、子育て中の母親が安心できる関係性の中で、ちょっとした手助けや温かい視線を送ることが大切であろうと思われる。また、『子どもの成長や発達』における「子どもの成長」については、「子どもの正常な成長や発達を教えてほしい」という記述内容から、

自分の子育てについて「これでいいのか」、「今の子どもの状態は子ども本来の姿なのか」などの確信がもててないように思われる。先行研究から子育て不安を現在感じている母親は、不安を感じていない母親に比べ蓄積疲労感が有意に高かった（藤井・永井、2008）ことが示唆されているように、気持ちに余裕がなく感情的な言葉をかけることも多くなる可能性が考えられる。

一方、日本小児保健協会（2011）が行った幼児の健康度に関する調査によれば、「日常の相談相手は誰ですか」の問いに、「夫婦で相談する」と回答した母親は、3歳児は80.4%、4歳児は76.7%、5-6歳は77.7%であり、「祖母（または祖父）」と回答した母親は、3歳児は65.8%、4歳児は64.9%、5-6歳は62.9%であった。同協会では、夫婦で相談する場合が多く祖父母を相談相手とする割合が多くなるのは、よい傾向であろうとしているが、身近に相談する相手がいないことの反映と捉えれば問題になろうと報告している。母親が問題を解決したいときや精神的な支えになってほしいと思われる身近な人に相談しても、父親もこの時期の子どもの姿が分からないことや、祖父母に相談をしても、世代間の軋轢で話がかみ合わないことも予想され、子育ての困難感を深めている状況も考えられる。「子育ての期待と現実の差」がマイナスの群の母親については、子どもの状況だけではなく、家庭環境の確認や母親が一人で問題を抱え込むことがないように、保育者が日頃の母親の頑張りを認め労いの言葉をかけたりすることや、子どもの様子を肯定的に伝えることなどが求められる。さらに、保護者に子育てにおける困難感が認められる場合には、社会資源の利用や関連機関との連携に備えて情報を収集することが望ましいと考えられる。

第3節 まとめ

第4章では、保護者が子どもや子育てに対して親になる前に抱いていた「期待と現実の差」を、「親役割の状態の差」や「子どもへの認識の差」から捉え、それらと「父親からのサポート」、「育児感情」、「日常生活での育児幸福感」との関連を検討した。研究5では、「子育ての期待と現実の差」がプラスの群では、「母親の年齢」及び「日常生活での育児幸福感」の「関係性場面」が「親役割の状態の差」に正の影響を及ぼし、「日常生活での育児幸福感」の「生活場面」が「子どもへの認識の差」に負の影響を与えていた。「子育ての期待と現実の差」がプラスの群の保護者支援は、子どもとの関わりについての相談ができることで、子どもへの認識が深まるという方向性が適切である可能性が示

唆された。

「子育ての期待と現実の差」がマイナスの群では、「日常生活での育児幸福感」の「生活場面」及び「関係性場面」から「親役割の状態の差」に正の影響が認められ、「育児感情」の「育ちへの不安感」及び「育て方への不安感」から「親役割の状態の差」に負の影響が認められた。また、「日常生活での育児幸福感」の「生活場面」及び「育児感情」の「育ちへの不安感」から「子どもへの認識の差」に負の影響が見られた。「子育ての期待と現実の差」がマイナスの群の保護者支援については、母親が子どもと関わる場面で、子どもの成長に伴って変化する子育ての対処法を獲得するために、母親自身に適した対処法を一緒に考え、自身で解決できる道筋を支えることが適切である可能性が推察された。続く研究 6 では、「子育ての期待と現実の差」がプラスの群の母親が求める保護者支援は、「遊び場の確保」や「相談支援（場所）」及び「子育ての対処法」であり、「子育ての期待と現実の差」がマイナスの群では、「社会の雰囲気づくり」や「長時間労働」及び「子どもの成長」であることが示された。

近年、子育て環境の変化に伴って、子どもの育ちや保護者の養育力を支えるための保護者支援への期待や必要性が高まってきている。そのような中で保育者は、保護者の現状を理解するために、「子育ての期待と現実の差」から捉えることが役立つ可能性がある。保育者として実際の支援を開始するに当たり、保護者が求める支援の内容が異なることを理解し、その差異に応じた支援を提供することは、支援の有効性を高めることにつながるかもしれないからである。つまり、第 4 章で示された「子育ての期待と現実の差」の視点から保護者の子育てに対する見解や思いの傾向を把握することは、実際の保護者への支援の基礎となろう。次の第 5 章では、保育者側から捉えられた保護者支援について検討を加えていく。

第5章 教育・保育施設における保護者支援の検討

第1節 保育者の保護者観、子どもや保護者を支える職員体制、望ましい保護者支援との関連（研究7）

1. 目的

幼保連携型認定こども園における保護者支援は、『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』（内閣府・文部科学省・厚生労働省、2015）には、「子どもに対する学校としての教育及び児童福祉施設としての保育並びに保護者に対する子育ての支援について相互に有機的な連携が図られるよう」保護者に対する子育て支援を行うよう示されている。有機的な連携とは、園児の送迎時の対応、相談や助言、連絡や通信、会合や行事など日常の教育及び保育に関連した様々な機会を活用すること、保護者との相互理解を図ること、教育及び保育における活動に保護者の積極的な参加を促すことを通して、保護者の子育てを自ら実践する力を高めることであると述べられている。さらに、地域における子育て家庭の保護者等に対する支援については、幼保連携型認定こども園が持つ地域性や専門性を十分に考慮して当該地域において必要と認められるものを適切に実施することとしている。

渡辺（2014）は、教育・保育そのものが子育て支援になっているという考え方を取り入れていく必要性から、「保護者同士をつなげていく」ことが子育て支援になると述べている。その上で、土曜日の行事の参加の工夫や、昼夜二部制の保護者会を開催するなど、園からの情報提供を公平に発信していくことで、就労の有無や家庭状況の異なる保護者同士がつながったとする成果を報告している。中山（2014）も認定こども園において、子どもの成長を共に喜び合うために、保護者の保育への参画、職員間の連携、地域の社会資源との連携、地域行政との協働が保育の質の向上につながると考察している。

保育所については、『保育所保育指針』（2008a）では、保育所に入所する子どもの保護者や地域の子育て家庭への支援も明確になり、積極的に取り組むことが求められている。新たに告示された『保育所保育指針』（2017）においても、「親になり、子どもとの生活を自分の生き方の中にどう位置づけるか」（社会福祉法人全国社会福祉協議会、2016）という視点に立って、保護者や地域と連携した子育て支援の充実が示されている。

このように、保護者支援が保育者に強く求められている背景には、「子どもにふさわし

い生活時間や生活リズムがつかれないことなど子どもの生活が変化する一方で、不安や悩みを抱える保護者が増加し、養育力の低下や児童虐待の増加」(厚生労働省、2008b)が挙げられおり、子どもの育ちを支えるためには保護者とその家庭を支えることも期待されている。また、保護者一人一人が置かれている状況は多岐にわたり、保護者の多様なニーズに応じた支援に当たっては、保育者が困難を感じたり葛藤を抱いたりすることと少なくないことが指摘されている(手島、2010; 小川、2011)。

一方、橋本(2010)は、保育者には保護者支援を行う際に保護者にどのように働きかけるか、その方向性に影響するものとして保護者支援を支える価値があり、保育者が保護者をどのように捉えるのかについて、その支援の展開は異なると述べている。橋本が言う「保護者支援の価値」は、一人一人の保育者が経験の中で得た価値観であり、保護者をどのような視点から捉えるのかについては、保育者の数だけ各々の保護者に対する見方や考え方や見解といった保護者観をもっている。さらに、その保護者観は保育者が育ってきた環境によって異なり、保護者支援の援助の質や内容にまで影響を及ぼすと推察される。また、先行研究からは、保育者が子どもとの関わり方に困難感を抱いている保護者に子育ての対処法を伝える支援については、「対人関係を築く力、相手とのコミュニケーションを行う力」(入江、2013)が求められること、黒川・青木・山崎(2014)は、「園内協力」(保育者同士の協力)や「情緒的サポート」(周囲からの承認や信頼、心配といった気かけられること)や「外部協力」(園外の機関から得られた協力)など、職場内の職員同士の支え合いや、外部機関との連携の必要性があることが報告されている。さらに、保護者課題に応じたきめ細かな保護者対応が求められている中で、保育経験年数の長短において職務上の困難に関する要因には違いがあること(上村、2012; 加藤・安藤、2013)など、保護者対応での戸惑いや不安の声も挙げられている。

本研究では第3章において、保育者が保護者支援を行うに当たって、母親を「子育ての期待と現実の差」や職業の有無や年齢の高低から捉えることによって、個々に応じた支援が提供される可能性が考えられること、第4章では、「子育ての期待と現実の差」がプラスの群やマイナスの群の母親についても、それぞれに適した支援の提供が幼児をもつ母親の子育てを支えることにつながることなどが推察された。保育者が日々接している保護者への支援を行うときに、「子育ての期待と現実の差」の視点を生かし、保護者の一人一人の状況に配慮された支援の実施や、必要な情報提供を行い子どもの健やかな育ちが実現できるよう、保護者の子育てを支える「望ましい保護者支援」を行うことが

必要であると考えられる。教育・保育施設において母親の「子育ての期待と現実の差」の視点を取り入れた「望ましい保護者支援」を行うためには、どのような要因の影響を受けるのかを明らかにする必要がある。そこで、本研究では保育者がもつ主観的な見方である「保育者の保護者観」や、教育・保育施設で行われている具体的なケースにおいて職員同士が支え合い、関係機関との連携を図り、子どもや保護者を支える「子どもや保護者を支える職員体制」が、個別の保護者に寄り添い養育力の向上に資する支援である「望ましい保護者支援」に及ぼす影響について検討する。保育者が日々のコミュニケーションを通して保護者と関係性の構築を図る中で抱く「保育者の保護者観」は、「子どもや保護者を支える職員体制」に影響を与え、保育者の経験に支えられた「子どもや保護者を支える職員体制」は、「子育ての期待と現実の差」の視点を取り入れた「望ましい保護者支援」に影響を与えるものと考えられる。

2. 方法

(a) 手続き

無記名式自記式質問紙調査による検討を行った。調査の方法としては、近畿圏内の五か所の保育園と六か所の認定こども園の園長に調査協力依頼説明書を用いて研究目的・趣旨・倫理的配慮などの説明を行った。同意を得られた施設の職員に、「保育者アンケート」と題した調査票と返信用封筒を配布し、質問紙は郵送法にて回収した。

(b) 調査対象者

近畿圏内の五か所の保育園と六か所の認定こども園に勤める保育者 227 名を対象とした。有効回答は 171（白紙回答・欠損値 6）であり、回収率は 78.0%であった。調査対象者の基本属性を Table5-1 に示す。

(c) 調査期間

平成 28 年 12 月から平成 29 年 1 月であった。

(d) 質問紙の構成

①調査対象者の属性

保育者の年齢、性別、職種、経験年数、相談者の人数、1 日当たりの相談時間など 6 項目とした。

②保育者の保護者観

保育者の保護者観の項目については、「保護者の保育ニーズとその対応に関する研究Ⅲ」

Table5-1

対象者の属性

項目	区分	人数(%)
年齢	20歳代	71(41.5)
	30歳代	31(18.1)
	40歳代	44(25.1)
	50歳代	16(9.4)
	60歳代	9(5.3)
性別	男性	6(3.5)
	女性	165(96.5)
職種	園長	5(2.9)
	主任	10(5.8)
	保育教諭	85(49.7)
	保育士	65(38.0)
	その他	6(3.5)
就労形態	常勤	129(75.4)
	非常勤	42(24.6)
経験 年数	0～5年未満	90(52.6)
	5～10年未満	36(21.1)
	10～15年未満	20(11.7)
	15～20年未満	7(4.1)
	20～25年未満	10(5.8)
	30年以上	8(4.7)

(須永・青木・齋藤・山屋、2017) 及び中道・中澤 (2003) 及び清水・関水・遠藤・落合 (2007) を参考に作成した。須永らは保護者との関係において、保育者が肯定的及び否定的な保護者観をもっていることを報告している。保育者が多様な保育ニーズをもつ保護者の養育態度を認知しているかについての 18 項目に対して、回答方法は“とてもよくあてはまる”を 4、“少しあてはまる”を 3、“あまりあてはまらない”を 2、“全くあてはまらない”を 1 とする 4 件法とし、評定値をそのまま得点として用いた。

③子どもや保護者を支える職員体制

子どもや保護者を支える職員体制の項目については、黒川ら (2014) が作成した「園内協力 (保育者同士の協力)」(7 項目)、「外部協力 (園外の機関から得られた協力)」(5 項目)、「情緒的サポート (周囲からの承認や信頼、心配といった気かけられること)」(7 項目) を使用した。回答方法は、各々の項目に対して、“とてもよくあてはまる”を 4、“ときどきあてはまる”を 3、“あまりあてはまらない”を 2、“全くあてはまらない”を 1 とする 4 件法とした。

④望ましい保護者支援

本研究では、「望ましい保護者支援」を『保育所保育指針解説書』(厚生労働省、2008) における第 6 章「保護者に対する支援」の内容に加えて、「子育ての期待と現実の差」の視点から保護者を捉え、母親の職業の有無や年齢の高低に配慮された支援の実施や、必要な情報提供を行い、子どもの健やかな育ちが実現できるよう、保護者の子育てを支えることであると定義した。そこで、望ましい保護者支援の項目については、鈴木ら (2009)、小西 (2016・2017) を参考に作成した。鈴木らが『保育所保育指針解説書』(厚生労働省、2008b) 第 6 章内の「保護者に対する支援」の文面をもとに作成した 32 項目から、「子どもの保育と密接に関連した保護者支援」(12 項目)、「保護者との相互理解」(5 項目)、「保護者の仕事と子育ての両立等への支援」(4 項目)、「障害や発達上の課題が見られる子どもの保護者に対する支援」(3 項目)、「保護者に対する個別支援」(5 項目)、「保護者に不適切な養育が疑われる場合の支援」(1 項目) 30 項目を採用した。さらに、小西による「保護者への共感的支援」(5 項目) を加えた。これは、本研究の第 4 章において「子育ての期待と現実の差」がプラスの群とマイナスの群の母親が求める保護者支援について比較検討した結果から、保育者が「保護者への共感的支援」の内容に留意して取り組むことが求められると考えたためである。

以上により、「望ましい保護者支援」として合計 35 項目について回答を求めた。回答

方法は、各項目内容が保育者自身についてあてはまるかどうかについて、“大いに取り組んでいる”を4、“まずまず取り組んでいる”を3、“あまり取り組んでいない”を2、“ほとんど取り組んでいない”を1とする4件法とし、評定値をそのまま得点として用いた。

(e) 倫理的配慮

無記名式自記式質問紙調査を実施するにあたり、倫理的配慮として、五か所の保育園と六か所の認定こども園の園長と面談を行い、調査の目的、方法、意義、守秘義務、研究の協力及び協力拒否が可能であることを文書に基づいて説明を行い、研究の協力を得た。本調査の依頼文と無記名式自記式質問紙（表紙には、所属機関名、調査者氏名、連絡先、研究の趣旨、本調査において回答を拒否しても不利益は被らないこと、得られたデータは特定の個人情報に漏れないようコード化し研究終了後は廃棄することを明記した）を、調査を協力すると意思表示した保育者に配布し、後日郵送で回収を行った。なお、アンケート調査用紙は全て無記名とした。本研究は筆者が所属する大学院の研究倫理審査委員会の承認を受けて実施した（承認番号：児保研-008）。

(f) 分析方法

まず、「保育者の保護者観」、「子どもや保護者を支える職員体制」、「望ましい保護者支援」について、因子分析を行い、因子構成や内的整合性を確認した。次に、尺度の因子の妥当性を確認するため「保育者の保護者観」、「子どもや保護者を支える職員体制」、「望ましい保護者支援」について、確認的因子分析を行った。そして、「保育者の保護者観」が、「子どもや保護者を支える職員体制」及び「望ましい保護者支援」に影響を及ぼすモデルについて、共分散構造分析によって検討を行った。統計学的処理は、IBM SPSS Statistics (Ver.21) と Amos (Ver.21) を用い、有意水準は5%未満とした。

3. 結果

(a) 保育者の保護者観尺度の検討

項目の得点は回答4・3・2・1に対してそれぞれ4点・3点・2点・1点を与えて計算した。保育者の保護者観尺度の合計得点の平均は49.4点、標準偏差は4.91であった。また、保育者の保護者観尺度の各項目得点の平均の幅は2.35点から3.57点、標準偏差は0.54から0.83であり特に偏った項目はなかった。

次に、因子的妥当性の確認及び尺度の精緻化のために因子分析を行った。まず、全18項目を用いて最尤法による因子分析を行った。固有値の値(第1因子から第3因子まで、

6.01、2.68、1.23) から判断し、2 因子を採用した。再度最尤法（プロマックス回転）による因子分析を行った。その結果、因子負荷量が .40 に満たない 5 項目「5. 子どもに過保護・過干渉」、「6. しつけや教育に熱心」、「8. 子どもを放任・無関心」、「10. 子どもに容易に手をあげたり、大声でしかったりする」、「17. 保護者同士の交流が盛んである」を分析から除外することとした。残った 13 項目について再度最尤法による因子分析を行った。2 因子による累積説明率は 48.93%であった。

プロマックス回転後の因子負荷量を Table5-2 に示した。因子の解釈は .40 以上の因子負荷量を示した項目を用いて行った。まず、第 1 因子は保育者が保護者の養育態度について肯定的に受け止めていると考えられる項目の負荷量が高かったため、“肯定的保護者観”と命名した。第 2 因子は保護者が保育者に厳しい要求をするなど否定的に受け止めていると考えられる項目の負荷量が高かったため“否定的保護者観”と命名した。さらに、“肯定的保護者観（7 項目）”、“否定的保護者観（6 項目）”によって構成される尺度を“保育者の保護者観尺度（13 項目）”と命名した。

2 因子モデルの妥当性については、内的整合性を示す Cronbach の α 係数が、第 1 因子“肯定的保護者観”は $\alpha = .86$ 、“否定的保護者観”は $\alpha = .86$ 、“保育者の保護者観尺度”全体では $\alpha = .88$ であり、内的整合性に問題がない尺度であると判断し、確証的因子分析を行った。このモデルの説明力の程度を示す適合度指標は $\chi^2 = 111.70$, $df = 64$, $p < .01$, $GFI = .911$, $AGFI = .873$, $CFI = .946$, $RMSEA = .066$ であり、妥当であるモデルとの結果を得た (Figure5-1)。

(b) 子どもや保護者を支える職員体制尺度の検討

項目の得点は回答 4・3・2・1 に対してそれぞれ 4 点・3 点・2 点・1 点を与えて計算した。子どもや保護者を支える職員体制尺度の合計得点の平均は 58.54 点、標準偏差は 6.96 であった。子どもや保護者を支える職員体制尺度の各項目得点の平均の幅は 2.10 点から 3.49 点、標準偏差は 0.58 から 0.85 であり特に偏った項目はなかった。

次に、因子的妥当性の確認及び尺度の精緻化のために因子分析を行った。まず、全 19 項目を用いて最尤法による因子分析を行った。固有値の値(第 1 因子から第 4 因子まで、5.87、3.36、1.51、1.15) から判断し、3 因子を採用した。これらに対して、最尤法（プロマックス回転）による因子分析を行った。さらに、項目を精選するために因子負荷量が .40 に満たない 4 項目「6.クレームを受けた前後の状況を記録し、事実関係を整理した」、「12.巡回相談員や臨床心理士がその保護者と話した」、「13.（あなたを）信頼して

Table5-2

保育者の保護者観尺度項目のプロマックス回転後の因子負荷量および平均・標準偏差

項目	項目内容	因子 I	因子 II	共通性	平均	標準偏差
第1因子 肯定的保護者観 $\alpha=.86$						
15	子育てを楽しんでいる	.74	-.01	.55	2.87	.61
16	園の方針に協力的である	.73	-.00	.54	3.04	.61
12	子どもの食事や健康に気を配っている	.71	.08	.47	2.93	.63
13	子どもの生活リズムを大切にしている	.70	.05	.46	2.75	.63
14	父母(家族)が協力して子どもを育てている	.68	-.00	.46	3.07	.66
11	子どもを抱きしめたり、やさしい言葉をかけて愛情を示している	.67	-.05	.48	3.16	.69
18	子どもの成長を楽しみにしている	.52	-.05	.30	3.57	.54
第2因子 否定的保護者観 $\alpha=.86$						
3	園や職員に厳しい要求をする	.04	.84	.68	2.35	.69
4	自己中心的	-.12	.82	.76	2.35	.77
9	子育てに負担感・不安感を持っている	.16	.68	.40	2.84	.78
2	子どもとの接し方や遊び方がわからない	.01	.64	.41	2.62	.74
1	権利意識が強い	-.02	.64	.42	2.44	.83
7	子どもの言動に過剰な反応・対応をする	-.08	.62	.43	2.61	.67
寄与率(%)		33.72	15.21			
累積寄与率(%)			48.93			
因子間相関			-.43			

太字は .40以上の因子負荷量を示す.

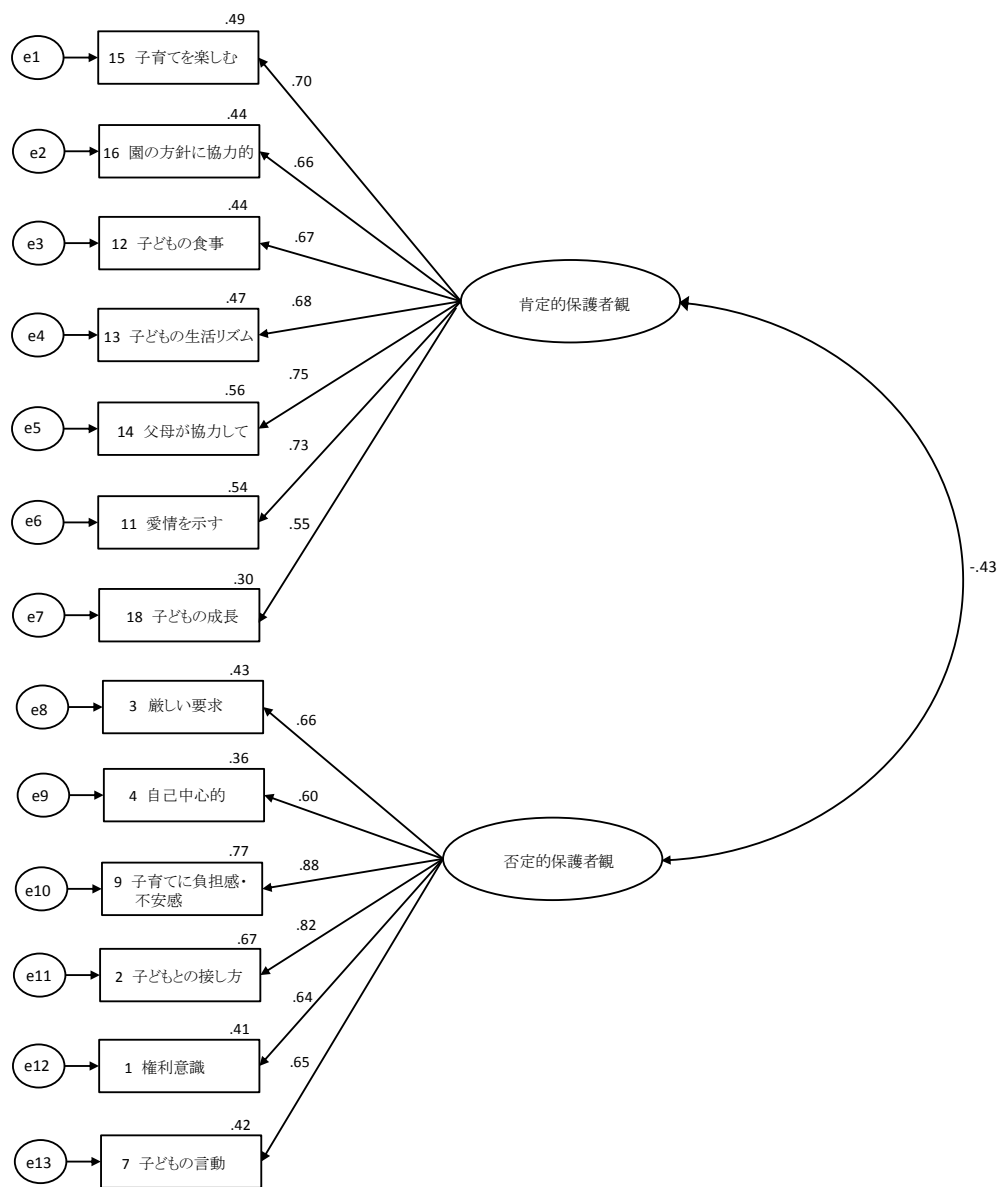


Figure5-1 保育者の保育観尺度の確認的因子分析

くれる人がいた」、「14. (あなたを) 同僚や仲間が認めてくれた」を分析から除外することとした。残った 15 項目について再度最尤法による因子分析を行った。3 因子による累積説明率は 60.58%であった。15 項目すべての因子負荷量は .40 以上の負荷量を示し、かつ複数の因子にまたがって .40 以上の値を示さなかった。

プロマックス回転後の因子負荷量は Table5-3 に示した通りである。因子の解釈は.40 以上の因子負荷量を示した項目で用いて行った。まず、第 1 因子は周囲からの承認や信頼という項目に高い負荷量が認められ、原尺度と同様に“情緒的サポート”と命名した。第 2 因子は園内で保育者同士の協力に関する項目に負荷量が高かったため、原尺度同様に“園内協力”と命名した。そして、第 3 因子は園外の関係機関から得られた協力に関する項目に高い負荷量が認められたことにより“園外協力”と命名した。さらに、“情緒的サポート (5 項目)”、“園内協力 (6 項目)”、“園外協力 (4 項目)” によって構成される尺度を“子どもと保護者を支える職員体制尺度 (15 項目)”と命名した。

3 因子モデルの妥当性については、内的整合性を示す Cronbach の α 係数が、第 1 因子“情緒的サポート”は $\alpha = .90$ 、第 2 因子“園内協力”は $\alpha = .80$ 、第 3 因子“園外協力”は $\alpha = .76$ であった。“保護者への支援尺度”全体では $\alpha = .85$ であり、内的整合性に問題はない尺度であると判断し、確証的因子分析を行った。このモデルの説明力の程度を示す適合度指標は、 $\chi^2 = 143.94$, $df = 87$, $p < .01$, $GFI = .904$, $AGFI = .867$, $CFI = .947$, $RMSEA = .062$ であり、妥当であると判断した (Figure5-2)。

(c) 望ましい保護者支援尺度の検討

項目の得点は回答 4・3・2・1 に対してそれぞれ 4 点・3 点・2 点・1 点を与えて計算した。望ましい保護者支援尺度の合計得点の平均は 72.23 点、標準偏差は 8.14 であり、望ましい保護者支援尺度の各項目得点の平均の幅は 2.46 点から 3.61 点、標準偏差は 0.53 から 0.86 であり特に偏った項目はなかった。

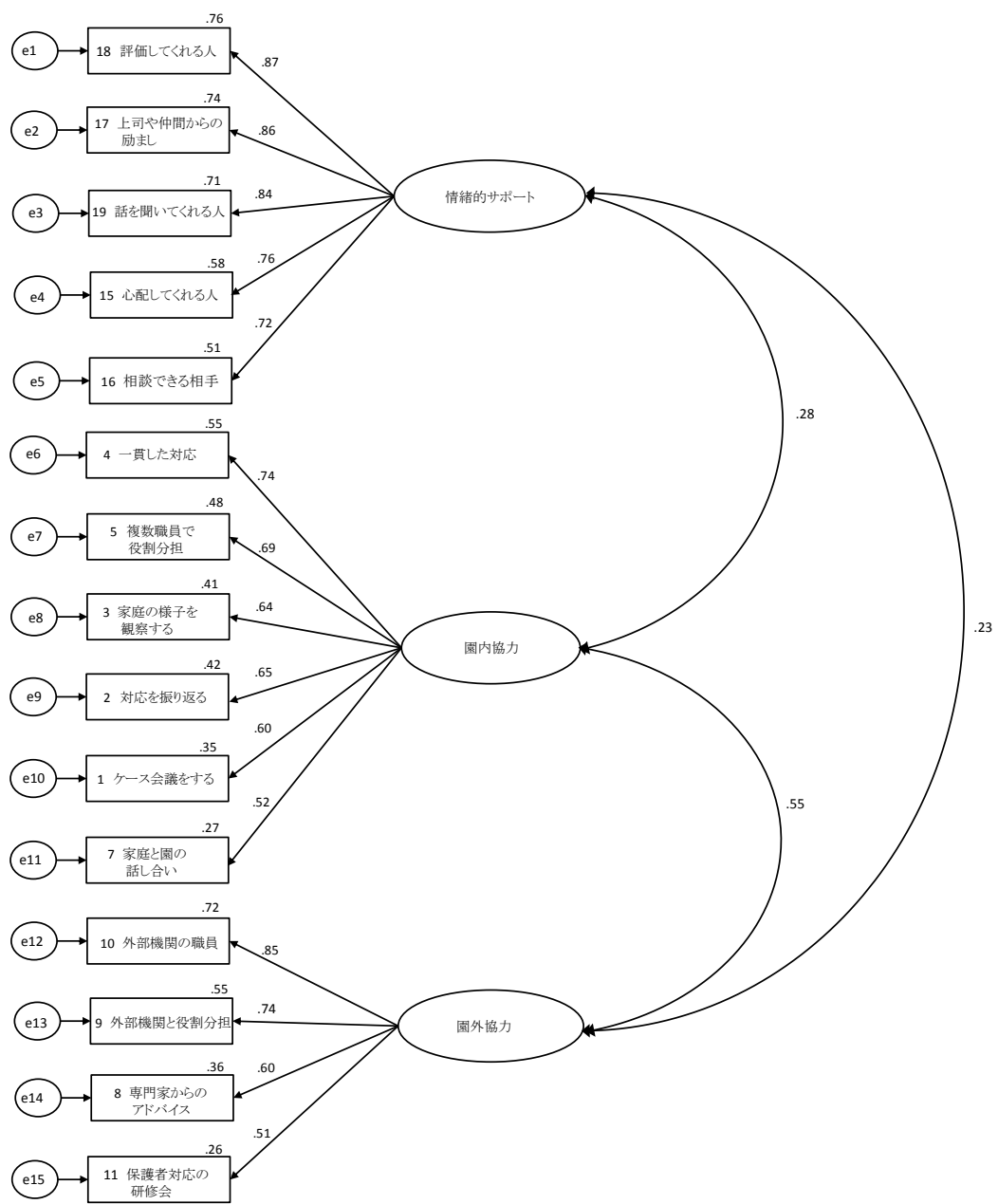
次に、因子的妥当性の確認及び尺度の精緻化のために因子分析を行った。まず、全 35 項目を用いて最尤法による因子分析を行った。固有値の値(第 1 因子から第 5 因子まで、7.48、2.49、1.88、1.34、1.02) から判断し、4 因子を採用した。これらに対して最尤法 (プロマックス回転) による因子分析を行った。さらに、項目を精選するために因子負荷量が.40 に満たない 6 項目「18. 延長保育の実施」、「19. 夜間保育の実施」、「20. 休日保育の実施」、「21. 病児または病後児保育の実施」、「1.子どもの送迎時に対話で保育内容や様子を知らせる」、「2. 連絡ノートや通信、園内掲示で保育内容や様子を知ら

Table5-3

子どもや保護者を支える職員体制尺度項目のプロマックス回転後の因子負荷量および平均・標準偏差

項目	項目内容	因子Ⅰ	因子Ⅱ	因子Ⅲ	共通性	平均	標準偏差
第1因子 情緒的サポート $\alpha=.90$							
18	(あなたを)褒め、評価してくれる人がいた	.89	-.06	.00	.77	3.37	.64
17	(あなたが)上司や仲間から励ましを受けた	.85	.01	.04	.74	3.49	.64
19	(あなたに)個人的な話を聞いてくれる人がいた	.82	.09	-.03	.71	3.39	.68
15	(あなたを)本気で心配してくれる人がいた	.76	-.03	.04	.58	3.30	.67
16	(あなたに)気軽に相談できる相手がいた	.73	.01	-.05	.52	3.43	.75
第2因子 園内協力 $\alpha=.80$							
4	園内で、複数職員で話し合い、一貫した対応をとった	.02	.81	-.08	.61	3.34	.58
5	園内で複数職員が役割分担し、その保護者と接した	-.10	.73	.02	.51	2.91	.68
3	その保護者や家庭での様子を観察し、理解を深めた	.05	.61	-.01	.39	3.26	.58
2	園がこれまで行った対応を振り返った	-.01	.60	.04	.39	3.03	.63
1	園内で、その家庭についてケース会議を開いた	.04	.52	.07	.34	2.87	.76
7	クレームを寄せてくる保護者の家庭と園で話し合いをした	-.00	.45	.13	.27	3.30	.69
第3因子 園外協力 $\alpha=.76$							
10	外部機関の職員と連絡を取り合った	-.02	-.07	.93	.80	2.33	.85
9	外部機関と園とで役割分担をしてその家庭と関わった	-.00	.02	.71	.51	2.39	.78
8	専門家からその保護者への対応についてアドバイスを得た	.03	.10	.51	.34	2.56	.80
11	園内で、巡回指導員や臨床心理士と共に、保護者対応についての研修会を実施した	-.00	.15	.43	.27	2.10	.84
寄与率(%)		32.33	18.75	9.49			
累積寄与率(%)			51.08	60.58			
因子間相関		I	II	III			
		I	—	.28			
		II		—			
		III					

太字は .40以上の因子負荷量を示す。



$\chi^2 = 143.94$, $df = 87$, $p < .01$, $GFI = .904$, $AGFI = .867$, $CFI = .947$, $RMSEA = .062$

Figure5-2 子どもや保護者を支える職員体制尺度の確認的因子分析

せる」を分析から除外することとした。よって残った 29 項目について再度最尤法（プロマックス回転）による因子分析を行った。因子負荷量が、.40 に満たない 6 項目「3. 保護者が参加する機会に保護者の気持ちや悩みを直接聴き取る」、「7. 保護者から求められた時に、相談・助言のための面接の機会を設ける」、「13. 園の方針や意図について説明し保護者の理解に努める」、「17. 疑問や要望に、対話を通して誠実に対応する」、「28. 子どもと保護者を含む支援計画や記録を作成する」、「34. （あなたは）園以外の社会資源について情報を収集するようにしている」を除外し、残った 23 項目について再度最尤法による因子分析を行った。4 因子による累積説明率は 57.48%であった。23 項目すべての因子負荷量は .40 以上の負荷量を示し、かつ複数の因子にまたがって .40 以上の値を示さなかった。

プロマックス回転後の因子負荷量は Table5-4 に示した通りである。因子の解釈は .40 以上の因子負荷量を示した項目を用いて行った。まず、第 1 因子は個々の保護者の思いや意向、要望などに対して保育者が経験の中で培ってきた知識や技術、専門性を用いて行う援助であると考えられる項目の負荷量が高かったため“保護者に対する個別支援（8 項目）”と命名した。次に、第 2 因子は保育の運営方針や日々の保育内容などを保護者に伝え、保育者と保護者の意思疎通を図ると考えられる項目に負荷量が高かったため“保護者との相互理解（6 項目）”と命名した。そして、第 3 因子は日常の保育と一体的に行われている子どもや保護者を支える職員体制であると考えられる項目に高い負荷量が認められたことにより“子どもの保育に関連した保護者支援（5 項目）”と命名した。さらに、第 4 因子は子育ての期待と現実の差に配慮された保護者への共感的支援であると考えられる項目に負荷量が高かったため“保護者への共感的支援（4 項目）”と命名した。これらの“保護者に対する個別支援（8 項目）”、“保護者との相互理解（6 項目）”、“子どもの保育に関連した保護者支援（5 項目）”、“保護者への共感的支援（4 項目）”の計 23 項目によって構成される尺度を“望ましい保護者支援尺度”と命名した。

4 因子モデルの妥当性については、内的整合性を示す Cronbach の α 係数が、第 1 因子“保護者に対する個別支援”は $\alpha = .86$ 、第 2 因子“保護者との相互理解”は $\alpha = .85$ 、第 3 因子“子どもの保育に関連した保護者支援”は $\alpha = .85$ 、第 4 因子“保護者への共感的支援”は $\alpha = .73$ 、“望ましい保護者支援尺度”全体では $\alpha = .90$ であり、内的整合性に問題はない尺度であると判断し、確証的因子分析を行った。このモデルの説明力の程度を示す適合度指標は、 $\chi^2 = 388.20$, $df = 224$, $p < .01$, $GFI = .841$, $AGFI = .803$, CFI

Table5-4

望ましい保護者支援尺度項目のプロマックス回転後の因子負荷量および平均・標準偏差

項目	項目内容	因子Ⅰ	因子Ⅱ	因子Ⅲ	因子Ⅳ	共通性	平均	標準偏差
第1因子 保護者に対する個別支援 $\alpha=.86$								
26	保育相談支援の内容によっては、ソーシャルワークやカウンセリングなどの知識や技術を援用する	.83	-.10	-.04	-.00	.56	2.86	.82
25	保育相談支援業務を重要な業務としてとらえて実践する	.79	-.07	.04	-.07	.58	2.96	.72
27	個別支援に当たって、情報収集と分析、さらに支援方法の選択を行う	.69	-.07	.10	.05	.51	2.99	.68
23	必要な保育相談支援を行う	.63	.08	-.07	.01	.42	3.04	.70
29	主たる支援者となる保育者を支え、組織的に子どもや家族を支援する体制をつくる	.63	.00	.01	.01	.40	2.99	.63
22	連携を密にし、必要に応じて専門機関からの助言を受けるなど適切な対応を図る	.54	.04	.05	-.03	.34	2.99	.73
24	他の保護者や他の子どもに対して、障がいに対する正しい知識や認識がもてるよう支援する	.51	.36	-.19	-.04	.48	2.75	.76
30	市町村や関係機関と連携する等適切な対応を図る	.49	.15	.03	-.05	.34	3.09	.68
第2因子 保護者との相互理解 $\alpha=.85$								
14	保育所保育指針の内容を説明したり、その内容を活用した情報提供や助言を行う	.04	.77	-.08	.04	.57	2.73	.86
12	他の職種との連携を密にし必要に応じて紹介・情報提供する	-.05	.76	-.04	.06	.51	2.73	.80
6	保護者会・その他の保護者の自主的活動で保護者同士の交流を促す	.00	.70	-.05	.02	.46	2.46	.84
8	保護者からの求めがなくても、積極的に面接の機会を設ける	.05	.61	.15	.02	.54	2.63	.83
4	保護者が参加する機会が保護者同士の交流の場になるよう配慮する	.01	.50	.25	-.09	.44	2.95	.68
5	保護者が参加する機会の内容や方法を、保護者支援の視点から工夫する	.15	.44	.20	.09	.50	2.89	.69
第3因子 子どもの保育に関連した保護者支援 $\alpha=.85$								
10	面接場面において、保護者の心情を理解し、共感に基づいて説明・助言する	-.04	.09	.83	-.11	.70	3.27	.63
9	面接場面において傾聴を基本とする	-.04	.01	.80	-.08	.58	3.26	.64
11	面接場面において、保護者自身が納得や解決に至るように支援する	-.04	.21	.69	-.08	.58	3.15	.66
15	保護者との間で、子どもへの愛情や成長を喜ぶ気持ちを伝え合う	-.09	-.23	.64	.20	.46	3.60	.59
16	保護者がおかれている状況や思いを受け止めて理解する	.08	-.04	.63	.20	.59	3.49	.60
第4因子 保護者への共感的支援 $\alpha=.73$								
32	(あなたは) 保護者の家庭環境の確認を行うようにしている	-.09	.03	-.02	.73	.51	3.26	.64
31	(あなたは) 保護者に日頃の子育てに対する労いの言葉をかけるようにしている	.02	.07	-.10	.67	.43	3.40	.62
35	(あなたは) 子どもの話以外でも保護者と会話するようにしている	.02	.02	.02	.61	.40	3.19	.72
33	(あなたは) 子どもの様子を肯定的に保護者に伝えるようにしている	-.04	.00	.07	.53	.30	3.61	.53
寄与率(%)		32.53	10.84	8.18	5.94			
累積寄与率(%)			43.37	51.55	57.48			
因子間相関		I	II	III	IV			
I		—	.61	.48	.18			
II			—	.56	.07			
III				—	.32			

太字は .40以上の因子負荷量を示す。

=.896, RMSEA=.066 であり、妥当であると判断した (Figure5-3)。

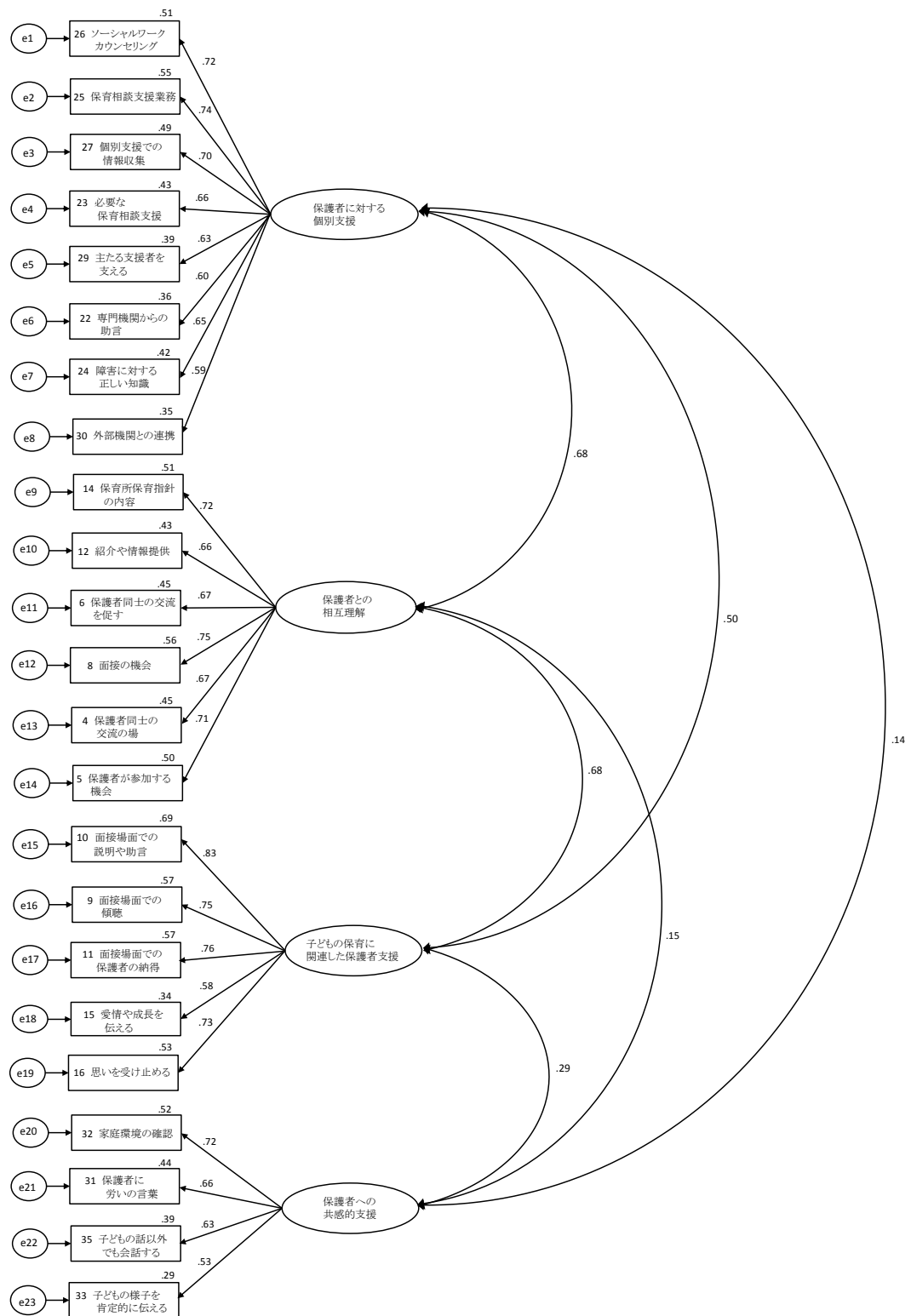
(d)「保育者の保護者観」、「子どもや保護者を支える職員体制」、「望ましい保護者支援」と保育者の経験年数との関連

保育者の経験年数の違いによる「保育者の保護者観」、「子どもや保護者を支える職員体制」、「望ましい保護者支援」について各下位尺度得点の平均値を比較するために一元配置分散分析、Tukey 法による多重比較で検討した。その結果を Table5-5 に示した。

保育者の経験年数の分類については、上村・七木田 (2008) を参考に 5 年未満を「新任保育者」(90 名)、5 年以上 20 年未満を「中堅保育者」(63 名)、20 年以上を「ベテラン保育者」(18 名) と分類した。その結果、「保育者の保護者観」の“肯定的保護者観”では、「ベテラン保育者」の平均値が「中堅保育者」の平均値より高い傾向 ($F(2, 168) = 2.45, p < .10$) が見られ、“否定的保護者観”では、「ベテラン保育者」の平均値が、「中堅保育者」及び「新任保育者」の平均値より有意に高かった ($F(2, 168) = 6.01, p < .01$)。また、「子どもや保護者を支える職員体制」の“園内協力” ($F(2, 168) = 2.72, p < .10$) と“園外協力” ($F(2, 168) = 2.35, p < .10$) では、「ベテラン保育者」は「新任保育者」より高い傾向が見られた。さらに、「望ましい保護者支援」の“保護者との相互理解”においても「ベテラン保育者」は、「中堅保育者」及び「新任保育者」より有意に高かった ($F(2, 168) = 4.38, p < .05$)。“保護者に対する個別支援” ($F(2, 168) = 2.41, p < .10$) において「ベテラン保育者」は、「中堅保育者」より高い傾向が見られ、“保護者への共感的支援” ($F(2, 168) = 2.53, p < .10$) では、「ベテラン保育者」は「新任保育者」より高い傾向が見られた。

(e) 共分散構造分析によるモデルの検討

分析方法としては、まず、「保育者の保護者観」が「子どもや保護者を支える職員体制」や「望ましい保護者支援」に影響を与える。「子どもや保護者を支える職員体制」は「望ましい保護者支援」に寄与する。さらに保育者の経験年数は「子どもや保護者を支える職員体制」に影響を与えるとするモデルを構築した。そして、5%水準で有意でなかったパスを削除したモデルを最終モデルとして採用した。最終モデルを Figure5-4 に示す。モデル適合度指標は、 $\chi^2 = 47.849$, $df = 22$, $p < .001$, $GFI = .945$, $AGFI = .887$, $CFI = .909$, $RMSEA = .077$ であり、データに対するモデルの当てはまりは妥当な水準であった (山本ら、1999)。



$\chi^2=388.20$, $df=224$, $p<.01$, $GFI=.841$, $AGFI=.803$, $CFI=.896$, $RMSEA=.066$

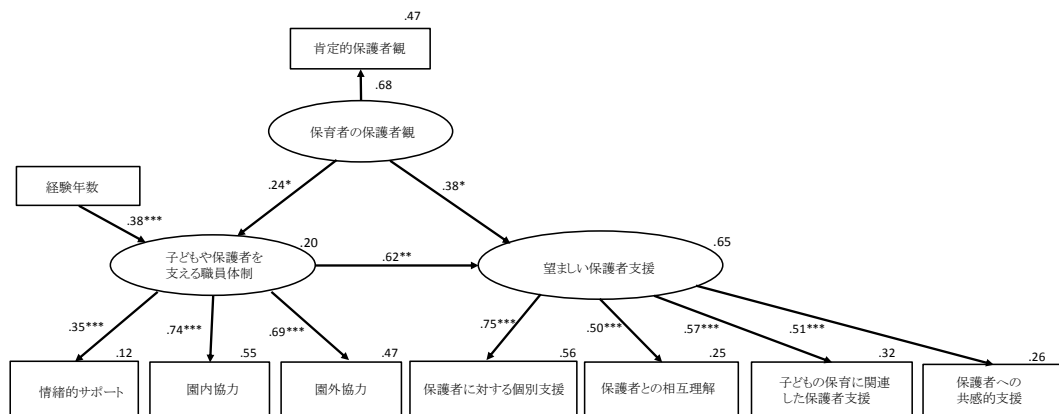
Figure5-3 望ましい保護者支援尺度の確認的因子分析

Table5-5

保育経験年数による保育者の保護者観、子どもや保護者を支える職員体制、望ましい保護者支援の
各因子得点の一元配置分散分析結果

	新任 保育者 (n=90)	中堅 保育者 (n=63)	ベテラン 保育者 (n=18)	F値	Tukey HSD法による 多重比較
肯定的保護者観	21.48(3.11)	20.89(3.42)	22.78(3.14)	2.45 [†]	ベテラン保育者>中堅保育者 [†]
否定的保護者観	14.57(3.24)	16.21(3.72)	16.89(3.55)	6.01 ^{**}	ベテラン保育者>中堅保育者>新任保育者 ^{**}
情緒的サポート	16.99(3.08)	16.87(2.83)	17.33(1.78)	.18	
園内協力	18.33(2.83)	18.94(2.69)	19.89(2.49)	2.72 [†]	ベテラン保育者>新任保育者 [†]
園外協力	9.18(2.43)	9.32(2.44)	10.56(2.79)	2.35 [†]	ベテラン保育者>新任保育者 [†]
保護者に対する個別支援	23.52(4.17)	23.38(3.87)	25.67(4.28)	2.41 [†]	ベテラン保育者>中堅保育者 [†]
保護者との相互理解	16.23(3.42)	15.97(3.35)	18.67(4.28)	4.38 [*]	ベテラン保育者>新任保育者 [*] ベテラン保育者>中堅保育者 [*]
子どもの保育に関連した保護者支援	16.54(2.49)	17.00(2.34)	17.00(2.61)	.74	
保護者への共感的支援	13.24(1.84)	13.59(1.95)	14.28(1.27)	2.53 [†]	ベテラン保育者>新任保育者 [†]

(平均値、括弧内は標準偏差)

[†]p<.10^{*}p<.05^{**}p<.01

$$\chi^2 = 47.849, df = 22, p < .01, GFI = .945, AGFI = .887, CFI = .909, RMSEA = .077$$

[†]p<.05 ^{**}p<.01 ^{***}p<.001 実線は正のパスを示す、誤差変数の表示は省略し、有意なパスのみ記載した

Figure5-4 教育・保育施設における保育者の保護者観、子どもや保護者を支える職員体制、望ましい保護者支援との関連

「保育者の保護者観」については、「肯定的保護者観」で標準化係数 .68、決定係数 $R^2=.47$ であった。「子どもや保護者を支える職員体制」については「情緒的サポート」の標準化係数は .35 で決定係数 $R^2=.12$ 、「園内協力」の標準化係数が .74 で決定係数 $R^2=.55$ 、「園外協力」では標準化係数は .69 で、決定係数 $R^2=.47$ であった。「望ましい保護者支援」では「保護者に対する個別支援」で標準化係数 .75 で決定係数 $R^2=.56$ 、「保護者との相互理解」の標準化係数は.50、決定係数 $R^2=.25$ 、「子どもの保育と関連した保護者支援」は標準化係数が .57 で、決定係数 $R^2=.32$ 、「保護者への共感的支援」の標準化係数 .51 で決定係数 $R^2=.26$ であった。

「保育者の保護者観」から「子どもや保護者を支える職員体制」へは正の有意なパス ($\beta=.24$) が引かれ、「望ましい保護者支援」へも正の有意なパス ($\beta=.38$) であった。「子どもや保護者を支える職員体制」から「望ましい保護者支援」へも正の有意なパス ($\beta=.62$) であった。また、保育者の「経験年数」から「子どもや保護者を支える職員体制」に正の有意なパス ($\beta=.38$) が引かれていた。

4. 考察

分析の結果より、「保育者の保護者観」は「子どもや保護者を支える職員体制」や「望ましい保護者支援」に正の影響を与える可能性が示され、「子どもや保護者を支える職員体制」は「望ましい保護者支援」に正の影響を与えることが示された。

保育者の経験年数との関連では、ベテラン保育者は中堅保育者や新任保育者より「肯定的保護者観」が有意に高かったことは、ベテラン保育者であっても保育や保育者に対する苦情や要望などの「保護者対応において中心的な役割を担う」(加藤・安藤、2013) ことが多くなり、「困難を感じている現状がある」(中平ら、2016) ものと考えられる。

また、「園や職員に厳しい要求をする」、「自己中心的」と捉えている一方で、「子育てに負担感・不安感をもっている」、「子どもとの遊び方がわからない」と保護者が支援を求める姿としても捉えている可能性も考えられる。また、ベテラン保育者は「肯定的保護者観」でも有意に高い傾向が見られたことは、ベテラン保育者は、保護者を現象面だけで捉えるのではなく、日々のコミュニケーションを通して、「子育てを楽しんでいる」、「父母(家族)が協力して子どもを育てている」など、保護者の思いや意向、その生活背景を理解し、保護者に応じた支援を行っているものと考えられる。多様な保護者への柔軟な対応には相当の力量を要する(片山、2015) が、保育者が広い視野をもち、保護

者が生活や時間に追われ精神的なゆとりのなさを抱いていると理解した上で肯定的に捉えることが、信頼関係の構築につながるものと推察される。

また、「保育者の保護者観」は教育・保育施設における「子どもや保護者を支える職員体制」に正の影響を与えていた。保護者が相談したい保育者の態度や対応のあり方については、「母親自身の悩みに応じてくれる専門家として保育者が見なされる」(笠原、2000)ことが求められている。保育者の「肯定的保護者観」は、保護者のおかれた状況や気持ちに寄り添い、保護者の子育てをより良いものにしたいとする保育者の前向きな気持ちや高いモチベーションの現れであると考えられ、「子どもや保護者を支える職員体制」に影響を及ぼすものと推察される。「情緒的サポート」については、本研究では保育者の経験年数で有意な差は見られなかったが、新任保育者が保護者対応に困難を抱えたときに、職場の上司や仲間からの肯定的な評価や励ましを受けることで、保育者自身も自己肯定感が高まり、「安心して指導・助言を受けられる保育者間の人間関係が支えとなり、不安等への」(片山、2015)情緒的サポートを得られることで、自らに自信をもち自分を発揮することにつながるものと推察される。また、「園内協力」や「園外協力」では、ベテラン保育者は新任保育者より高い傾向が見られた。「園内協力」に関しては、自園の子どもの状況や保護者の生活課題について、職員全員が共通認識をもち、園全体で取り組むことが求められる。「経験年数の少ない保育者ほど、保育の内容や指導などに関する悩みを抱えやすい」(加藤・安藤、2012)中で、ベテラン保育者と新任保育者が話し合い一貫した対応をとることや、職員間の連携を密にしながらの保護者対応は、困難感を抱えやすい新任保育者にとっては保護者対応での自信につながるであろうと考えられる。「園外協力」については、日々の保育や保護者支援での対応が難しい場合や、より個別的な対応や専門的な助言が必要であると判断される場合には、ベテラン保育者はその経験の積み重ねから、地域の社会資源の活用や関係機関との連携を図ることを意識していると推察される。

次に、「保育者の保護者観」は教育・保育施設における「望ましい保護者支援」に正の影響を与えていた。一人一人の保護者に寄り添い養育力の向上に資する「望ましい保護者支援」は、保育者が日々の連絡ノートや送迎時の対応などで、保護者から寄せられる子育ての問題や日常的な悩みについて、保護者を「子育ての期待と現実の差」から捉え解決の糸口を共に考えていくことであることから、肯定的な保護者観をもつことによって「望ましい保護者支援」が促進される可能性が考えられる。「望ましい保護者支援」は、

「保護者に対する個別支援」、「保護者との相互理解」、「子どもの保育と関連した保護者支援」、「保護者への共感的支援」という四つの因子構造で説明される。子育て不安の多くは、母親が一人で子育てを担っていることによる時間的な余裕のなさや育児負担が大きいことが関係していると考えられる。核家族化が定着する中での子育ては、親役割を獲得する重要な時期に、子どもとの関わりで自信をもつことよりも戸惑いや不安を多くもつことが多いと考えられる。まずは、「保護者に対する個別支援」でベテラン保育者が新任保育者より有意に高い傾向が見られたことは、保育者の保護者への対応は、『受容・傾聴・共感』といったカウンセリングマインドだけでは対応しきれない状況にまで陥ってきている」（神谷、2012）という現状が見られる中で、保育者と保護者が信頼関係を築くために、ベテラン保育者が「送迎時の会話や日々の連絡帳などを使いながら」（米田、2011）、保護者の家庭環境や生活実態の分析を行い、「子育て不安を抱えている保護者」であるという肯定的な見方に基づく対応を行っていると考えられる。

次に、「保護者との相互理解」においては、ベテラン保育者は新任保育者より有意に高いという結果であった。保育者は日々の保育の方針や意図について保護者との日々の対話や行事を通じて伝達を行っている。ベテラン保育者は、「子どもの成長を支えた保護者の子育てを承認し、子どもの成長とともに喜ぶ」（西村、2011a）ことで保護者を支え、家庭との相互理解を図っていると推察される。そして、「保護者への共感的支援」で、ベテラン保育者は新任保育者より有意に高い傾向が見られた。ベテラン保育者は日々の関わりから、「権利意識が強い」、「子どもの言動に過剰な反応・対応をする」などの感情の揺れや高まりを表現する保護者に対して、子育て不安感からくるものと認識し、共感的に対応していると考えられる。ベテラン保育者が保護者を「子育ての期待と現実の差」から捉えて支援を行っていることは、保護者の生活実態や心情の理解につながる可能性が高いと考えられ、経験を通じた保護者との関係性を維持していくための技術の習得によるものも多いと考えられる。

さらに、経験年数に支えられた「子どもや保護者を支える職員体制」は「望ましい保護者支援」に正の影響を及ぼしていた。新任保育者は、子どもの生活や発達を見通し、保育が適切に展開されるように保育の技術的側面に心を砕いていることが多く、保護者対応では保護者を「子育ての期待と現実の差」から捉えることに至っていない可能性も考えられる。自園での保育や保護者支援に対する姿勢や取組には、保育者としての自らの考え方や生き方とともに、「職場におけるチームワーク」（全国保育士会倫理綱領、2003）

を高めることが求められる。そのため、「子どもや保護者を支える職員体制」は、保育実践や保育の内容に関する職員の共通理解を図ること、「職場の組織・人間関係が良好に保たれる」（磯野・鈴木・山崎、2008）ことなど、保育者が保育や保護者対応で困難感をもった場合には、一人で抱え込まずに組織として対応することが「望ましい保護者支援」につながると考えられる。

以上により、教育・保育施設において「望ましい保護者支援」を行うには、保育者が日々のコミュニケーションを通して保護者との関係性の構築を図る中で「肯定的保護者観」をもつことや、「子どもや保護者を支える職員体制」で表されているような支援体制を整えることが必要であることが示唆された。今回、保護者支援を担っている保育者は、その「保育者の保護者観」を肯定的な側面から捉えていたが、保育業務としての保護者支援についての捉え方についても経験年数によって異なると考えられる。さらに、保護者の現状を理解するために「子育ての期待と現実の差」から捉え、「保護者への共感的支援」を行うことについても、経験年数による違いがある可能性が考えられ、今後の検討が必要であると考えられる。

第2節 望ましい保護者支援—保育者の自由記述からの検討（研究8）

1. 目的

第1節において、保育者が保護者支援を行う際に「子育ての期待と現実の差」の視点を取り入れた保護者の子育てを支える「望ましい保護者支援」に影響する要因について検討した。「望ましい保護者支援」には、保育者が保護者を肯定的な側面から捉えること、保育者が職場の上司や仲間から情緒的サポートを得られること、職場のチームワークを高め園内協力を図ること、保育や保護者支援での対応が難しい場合には専門家や関係機関などによる園外協力を求めることなど、保育者間の共通理解や協働性が不可欠であることが推察された。

しかし、保育者が自らの専門性を発揮して、保育や保護者支援における課題の解決に向けた取組が求められる中、実際に保育を展開している現場では、保育養成校を卒業直後の就職先を1年未満で離職した者は4人に1人以上おり、職場の雰囲気や労働条件などが退職理由であることが報告されている（全国保育士養成協議会、2009）。多様なニーズを有する保護者への支援では、連絡ノートや送迎時の対話を通して保護者の話を聞

き、日々の活動や心身の成長の姿を知らせることなど、保護者の子育ての自信や意欲を高めるための工夫は新任保育者にも求められている。一方で、保育実践の経験が少ない保育者にとっては、自らの育ちの中で培われた保護者への見方や考え方はあるものの、保護者の受け止め方やどのように対応したらよいかなど、保護者対応に不安を抱くこともあると考えられる。高濱（2001）は、保育を問題解決という視点で捉えた結果から、その問題をどのように解決しようとするかなどの一連のプロセスには保育経験による違いがあることを明らかにしている。保護者支援における保育者の対応は「経験年数に伴って蓄積される保護者との関わりの経験から、保護者への伝達方法や対応の仕方」（中平ら、2014）が促進されることや、「実践を積み重ねる中で困難を体験し、その困難を乗り越えていく」（片山、2015）中で保護者理解が進むものであることなどが考えられる。また、保育者は複雑なローテーション勤務などの時間的な制約や、経験年数によって様々な役割分担を引き受けながら保護者支援に当たっている。こうした状況に対して、保育者の保護者支援についての考え方や捉え方を調査及び分析し、考察することにより、その支援を担っている保育者にとって有効な方法を提案できるものと考えられる。

以上より本研究では、保育者が行っている保護者支援について日頃から感じることに
ついての自由記述から、保護者支援に関する考え方の多様性を明らかにすることを目的とする。さらに、保護者支援を「子育ての期待と現実の差」から捉えた「保護者への共感的支援」の観点から、課題を検討することとする。

2. 方法

(a) 手続き

無記名式質問紙調査による検討を行った。調査方法としては、研究 7 と同様である。近畿圏内の五か所の保育園、六か所の認定こども園に勤める保育者 227 名を対象とした。有効回答は 171（白紙回答・欠損値 6）で、回収率は 78.0%であった。

(b) 調査対象

研究 7 において、保育者に「先生が感じておられる保護者支援についてご意見がおありでしたら、お聞かせください」という内容で自由記述を求めた。上記の 171 名から得られた 253 の自由記述を分析対象とした。

(c) 調査期間

2016 年 12 月から、2017 年 1 月にかけて行った。

(d) 分析方法

まず、自由記述の分類については、記述内容について一名分の記述に二つ以上の内容が含まれている場合においては、記述を分離し二つ以上の記述として取り扱った。次に、児童保育を専攻する博士前期課程に在籍する大学院生 2 名、児童保育を専攻する博士後期課程に在籍する大学院生 1 名により、KJ 法（川喜田、1986）を用いて検討を行った。内容分析に当たっては、分析の信頼性と妥当性を高めるため、分析過程で共通の見解が得られるまで検討を繰り返した。そして、分類された記述について、上村・七木田（2008）を参考に 5 年未満を「新任保育者」、5 年以上 20 年未満を「中堅保育者」、20 年以上を「ベテラン保育者」とし、保育者の経験年数ごとに記述数をまとめた。さらに、保護者支援で感じることにについて分類された記述内容と「保護者への共感的支援」との関連性を調べるために、“保護者への共感的支援”尺度得点の平均値 13.47（標準偏差 1.87）を用いて群分けを行い、高群と低群について χ^2 検定を行って記述数を比較した。

3. 結果

(a) 経験年数の違いによる保育者が感じる保護者支援の内容

保育者が保護者支援において日頃から感じていることなどを調査し、KJ 法を用いて分類を行ったところ、44 の小カテゴリーと 8 の大カテゴリーを得た。

「連絡帳の記入」、「園だよりの配布」、「クラスだよりの配布」、「食育の情報提供」、「家庭との連携」、「園内掲示」、「栄養士や看護師との協働」という七つの小カテゴリーからなる『保護者との連携』。「保育者の方が年下である」、「子育ての対処法の提案」、「相談への回答」、「保育知識や技術不足」、「保育者としての自信」という五つの小カテゴリーからなる『保護者対応の困難感』。「信頼関係の構築」、「送迎時の会話」、「肯定的な伝達」、「笑顔で挨拶する」、「傾聴する」、「受容する」、「保護者と対面して伝達」という七つの小カテゴリーからなる『送迎時の会話』。「保育観や保護者観の違い」、「職場の人間関係」、「園長や主任からの助言」、「情報の共有化」、「若い保育者への支援」、「専門機関との連携」という六つの小カテゴリーからなる『職員間の連携』。「子育て不安」、「不適切な養育態度」、「保育への要望」、「保育への協力」、「子ども理解」、「保護者自身の課題」という六つの小カテゴリーからなる『保護者課題への対応』。「カウンセリング技術」、「子ども理解の促進」、「多様な保護者への対応」、「職員の質の向上」、「時間的余裕のなさ」という五つの小カテゴリーからなる『園内研修・園外研修』。「保護者同士の交流の場」、「保

育参観」、「発表会や運動会」という三つ小カテゴリーからなる『保護者の行事参加』。「事務量の多さ」、「ローテーション」、「仕事と家庭の両立」、「長時間労働」、「やり甲斐を感じる」という五つの小カテゴリーからなる『その他』といった八つの大カテゴリーに分類された (Table5-6)。

(b) 保護者支援で感じることと「保護者への共感的支援」との関連性

保育者が感じる保護者支援の内容について、「子育ての期待と現実の差」から捉えた「保護者への共感的支援」との関連性を調べるために χ^2 検定を行った。本研究においては、保育者が保護者支援で感じる自由記述を 2 群に分ける基準として、「望ましい保護者支援」尺度の第 4 因子である「保護者への共感的支援」尺度得点の平均値 13.47 (標準偏差 1.87) より高い方を高群 (89 名)、低い方を低群 (82 名) とした。そして、それらの人数から得られた自由記述を χ^2 検定によって比較検討を行った。なお、統計的有意水準は 10%未満とした (Table5-7)。

残差分析の結果、「保護者への共感的支援」尺度得点高群において、『保護者対応の困難感』における「保育知識や技術の不足」($\chi^2=11.52$, $p<.05$) が有意に多かった。また、『保護者との連携』における「家庭との連携」($\chi^2=11.47$, $p<.10$)、『送迎時の会話』における「信頼関係の構築」($\chi^2=10.79$, $p<.10$) において、高群が有意に多い傾向が見られた。「保護者への共感的支援」尺度得点低群では、『保護者対応の困難感』における「保育者の方が年下である」($\chi^2=11.52$, $p<.05$) が有意に多く、『送迎時の会話』における「送迎時の会話」($\chi^2=10.79$, $p<.10$) において、有意に多い傾向が見られた。

4. 考察

(a) 経験年数の違いによる保育者が感じる保護者支援の内容の考察

保育者が保護者支援において日頃から感じていることに関する自由記述を求めたところ、44 の小カテゴリーと八つの大カテゴリーに分類された。まず、具体的な子どもの保育と関連した保護者支援である『保護者との連携 (72)』に関する支援や方法についての内容が多かった。園における保育の内容や子どもの様子を保護者に伝えることは、保護者に安心感を与えることにつながると考えられる。保育者が連絡帳を通して、「保護者の行為と子どもの成長発達や行動の変化との関連を具体的場面で例示しながら」(橋本、2008) 伝えることは、保護者の子育てを支持することにつながり、保護者からの記述は子どもの体調や様子だけでなく、家庭の変化などを知る情報収集のための手段となり得

Table5-6

保育者の経験年数による保護者支援に対して感じる自由記述

大カテゴリー	小カテゴリー	記述例	新任 保育者 (n=90)	中堅 保育者 (n=63)	ベテラン 保育者 (n=18)
保護者 との 連携 72(28.5%)	連絡帳の記入	保護者との信頼関係を築くための手段として活用している	10	6	1
	園だよりの配布	園の方針の伝達や保育への理解の協力を求めている	8	6	1
	クラスだよりの配布	子どもの姿を伝え、成長を喜び合うために配布している	7	4	1
	食育の情報提供	給食の展示や食育だよりを配布している	4	3	2
	家庭との連携	生活習慣や生活リズムをつけるためには家庭の協力が必要だ	1	2	4
	園内掲示	園での様子を写真で伝えたり、協力依頼のために活用している	1	2	4
	栄養士や看護師との協働	子どものアレルギーや体調は他職種と協働して対応している	1	1	3
保護者 対応の 困難感 38(15.0%)	保育者の方が年下である	保護者の方が年長なのでアドバイスするのは難しいと感じる	7	1	1
	子育ての対処法の提案	子育て経験のない者には対処法を提案しにくい雰囲気がある	6	1	1
	相談への回答	相談の回答によっては保護者を否定していると思われそうだ	6	1	1
	保育知識や技術不足	保育者として保育知識や技術が不足していると感じる	5	1	1
	保育者としての自信	保育者としての経験不足から保護者対応に自信がもてない	4	1	1
送迎時の 会話 34(13.4%)	信頼関係の構築	保護者と信頼関係を築くためにコミュニケーションを大事にする	3	5	1
	送迎時の会話	登降園時には必ず会話するようにしている	1	4	1
	肯定的な伝達	その日の様子を肯定的に伝える	1	3	1
	笑顔で挨拶する	笑顔で挨拶するようにしている	3	1	1
	傾聴する	保護者の話を丁寧に聴くようにしている	1	1	1
	受容する	まずは、受容するようにしている	1	1	1
	保護者と対面して伝達	子どものケガなどは保護者と対面して伝達する	1	1	1
職員間の 連携 29(11.5%)	保育観や保護者観の違い	同じクラスの保育者同士で保育観や保護者観に違いがある	1	4	
	職場の人間関係	職場の人間関係で悩んでいる	1	4	
	園長や主任からの助言	園長や主任と相談し、保護者対応に当たっている	2	3	
	情報の共有化	忙しすぎて情報や伝達が全体に届かない時がある	1	3	1
	若い保育者への支援	すぐに挫折してしまうので、若い保育者への支援が急務である		1	4
	専門機関との連携	子どもの課題に対応した専門機関への紹介 (市町村の保健福祉課、医療機関、児童相談所など)		1	3
保護者 課題への 対応 24(9.5%)	子育て不安	子育てに不安を抱えている保護者への対応が難しい		4	2
	不適切な養育態度	不適切な養育態度が疑われる場合は見極めが難しい		4	2
	保育への要望	保育者へ個別的なかわり方への要望を示す保護者への対応		2	2
	保育への協力	保育への協力や理解が得られない保護者への対応		2	1
	子ども理解	保育者と保護者とで子ども理解が食い違う場合の対応		2	1
	保護者自身の課題	保護者自身が課題を抱えている場合		1	1
園内研修 園外研修 20(7.9%)	カウンセリング技術	保護者対応のためにカウンセリング技術を学びたい		4	1
	子ども理解の促進	特別な配慮を必要とする子どもへの支援について学びたい		3	1
	多様な保護者への対応	多様な課題を抱えている保護者への支援の方法について		3	1
	職員の質の向上	内外の研修への参加を促進し職員の質の向上を図りたい		2	2
	時間的余裕の無さ	学びたい気持ちはあるが時間的な余裕がない		2	1
保護者の 行事参加 18(7.1%)	保護者同士の交流の場	保護者同士が交流できる場をもっと提供したい	1	3	3
	保育参観	保護者に子どもの日頃の姿を知ってもらう場の提供と考えている	1	2	3
	発表会や運動会	子どもの成長を喜び合える場の提供と考えている	1	1	3
その他 18(7.1%)	事務量の多さ	事務量が多すぎる		2	4
	ローテーション	毎日のローテーションを回すだけで大変である		3	1
	仕事と家庭の両立	仕事と家庭の両立で悩んでいる		2	1
	長時間労働	労働時間が長すぎる	1	2	
	やり甲斐を感じる	保護者から感謝されることも多く仕事にやり甲斐を感じる	1	1	
小計			81	106	66
合計			253		

Table5-7

保護者への共感的支援得点の平均点の高低による χ^2 検定の結果

大カテゴリー	小カテゴリー	高群 (n=89)	低群 (n=82)	χ^2 検定結果
保護者との 連携	連絡帳の記入	4	13	$\chi^2=11.47^\dagger$
	園だよりの配布	5	10	
	クラスだよりの配布	4	8	
	食育の情報提供	2	7	
	家庭との連携	6	1	
	園内掲示	4	3	
	栄養士や看護師との協働	3	2	
保護者対応の 困難感	保育者の方が年下である	1	8	$\chi^2=11.52^*$
	子育ての対処法の提案	2	6	
	相談への回答	5	3	
	保育知識や技術不足	6	1	
	保育者としての自信	2	4	
送迎時の 会話	信頼関係の構築	8	1	$\chi^2=10.79^\dagger$
	送迎時の会話	1	5	
	肯定的な伝達	4	1	
	笑顔で挨拶する	2	3	
	傾聴する	2	1	
	受容する	1	2	
	保護者と対面して伝達	1	2	
職員間の 連携	保育観や保護者観の違い	2	3	$\chi^2=6.77$
	職場の人間関係	1	4	
	園長や主任からの助言	2	3	
	情報の共有化	3	2	
	若い保育者への支援	4	1	
	専門機関との連携	3	1	
保護者課題への 対応	子育て不安	1	5	$\chi^2=6.51$
	不適切な養育態度	1	5	
	保育への要望	3	1	
	保育への協力	2	1	
	子ども理解	2	1	
	保護者自身の課題	1	1	
園内研修 園外研修	カウンセリング技術	4	1	$\chi^2=2.56$
	子ども理解の促進	3	1	
	多様な保護者への対応	3	1	
	職員の質の向上	2	2	
	時間的余裕の無さ	1	2	
保護者の 行事参加	保護者同士の交流の場	4	3	$\chi^2=2.61$
	保育参観	4	2	
	発表会や運動会	1	4	
その他	事務量の多さ	3	3	$\chi^2=1.46$
	ローテーション	1	3	
	仕事と家庭の両立	2	1	
	長時間労働	1	2	
	やり甲斐を感じる	1	1	
	小計	118	135	
	合計		253	

*p<.05, †p<.10

る。また、園だよりやクラスだよりで、園の保育方針や保育の環境づくりなどを保護者に理解しやすい形で情報提供を行っていると考えられる。新任保育者が「連絡帳の記入」、「園だよりの配布」、「クラスだよりの配布」などの記述が多かったことは、保護者支援としてまずこれらを意識しているものと推察される。

次に、保育者は日頃から『送迎時の会話（34）』を通して、「ポジティブな内容を中心に、ネガティブな内容も含めて、その日の様子を保護者に伝える」（片山、2016）ことで「信頼関係の構築」を図っていた。特に中堅保育者は、子どもの園での様子を一日の生活の流れの中で視野に入れて、個々の保護者の状況を考慮した対応を行っていると考えられる。保護者との日常的な関わりの中で、「送迎時の会話」、「肯定的な伝達」を行い、子どもの育ちをわかりやすく伝え「信頼関係の構築」を図っているものと推察される。また、『保護者の行事参加（18）』は、「自分の子育てやその価値観を相対化して確認する機会」（西村、2011b）となり、教育・保育施設における日中の子どもの成長発達と生活の様子を伝える機能を果たしていると推察される。中堅・ベテラン保育者は「保護者同士が交流できる場をもっと提供したい」、「保護者に子どもの日頃の姿を知ってもらう場の提供と考えている」など、行事を通して子どもの成長を丁寧に伝えることで保護者への支援を行っていると考えられる。

一方で、保育者が『保護者対応の困難感（38）』を抱いている様子や『保護者課題への対応（24）』に苦慮している姿が見受けられた。『保護者対応の困難感』では、新任保育者は「保育者の方が年下」であるので、「子育ての対処法の提案」をしにくいと感じていることや、「相談への回答」によっては、「保護者よりも若年である自分の言動が保護者に否定的に捉えられることを危惧」（片山、2016）していることから、自らの経験年数が短いことで「保護者に対して緊張感を感じ、伝えたいことが伝わらない難しさ」（衛藤、2015）を感じているのではないかと推察される。新任保育者は「保育知識や技術不足」から、保護者との関係の築き方や、実践的な問題解決について「保育者としての自信」をもち得ていないと考えられる。中堅保育者やベテラン保育者では、『保護者課題への対応』を通して、困難感を抱きながら、保護者への有効な支援の方法を探っているものと考えられる。保護者を取り巻く就労状況や家庭環境の変化から、「子育て不安」や「不適切な養育態度」など、保護者対応については柔軟な対応や細やかな対応で苦慮する場面も多くなる。保護者対応の経験の積み重ねが技術の習熟につながる可能性も考えられ、「子ども理解」や「保護者自身の課題」について、保護者の個性や生活背景から捉え丁

寧に対応していくことが「保護者支援や家庭との連携に関する力量形成」(片山、2016)につながるものと推察される。

また、保育者が保護者支援を行っていくためには、職場の良好な人間関係や情報の共有化が求められることから、中堅保育者は、『職員間の連携 (29)』や『園内研修・園外研修 (20)』に問題意識をもっていると推察される。「職員間の連携」を図るため「園長や主任からの助言」を得たり、「情報の共有化」を行い、保育者相互のコミュニケーションの促進に努めようとしているものと考えられる。ベテラン保育者は、「若い保育者への支援」や「専門機関との連携」を行い、「職員間でお互いの仕事を支持し合えるような職場環境作り」(嶋崎、1995)を行っていかうとしていると推察される。また、中堅保育者やベテラン保育者は、問題解決に向けた具体的な対応を担っていることから、「カウンセリング技術」、「子ども理解の促進」、「多様な保護者対応」などの研修への参加を通して、「事例への対応に相応しい技術を適切に選択し、活用する力量を高める」(橋本、2011)必要性があることを認識していると推察される。

(b) 保護者支援で感じることと「保護者への共感的支援」との関連性の考察

保育者が保護者支援で感じることにに関する自由記述を、保育者が行う「子育ての期待と現実の差」から捉えた支援と考えられる「保護者への共感的支援」尺度得点の高群低群で差があるかを検討した。その結果、「保護者への共感的支援」高群で『保護者対応の困難感』における「保育知識や技術不足」が有意に多かった。保護者の家庭状況や課題は様々であり、具体的な支援の方法が異なる一方、支援の結果が子どもに帰結するような援助の在り方が求められる。保育者が実際に「保護者への共感的支援」を行う際に、「保育知識や技術不足」を感じているということは、保護者から相談や助言を求められた時に、子どもの成長や発達を踏まえた上での説明や助言が、保護者の納得や問題の解決に至っていないと感じており、より高い問題意識をもっているものと考えられる。また、『保護者との連携』における「家庭との連携」や『送迎時の会話』における「信頼関係の構築」においては、高群が有意に多い傾向が見られた。これは、「保護者への共感的支援」高群の保育者が、保護者とのコミュニケーションを大事にしながら家族と連携していくことが重要であることを十分に認識しているものと考えられる。「共感的な保護者支援」高群では、「適切な支援の方向性を見極める」(高橋、2014)ために、保育者が保護者の家庭状況や就業形態を把握した上で、個々の問題に対して、「信頼関係の構築」を

図りながら解決に当たっていると推察される。一方で、「保護者への共感的支援」低群では、『保護者対応の困難感』における「保育者の方が年下である」、『送迎時の会話』における「送迎時の会話」で有意に多い傾向が見られた。成田（2012）が指摘するように、「経験を積んだからといって単純にコミュニケーションのとり方が上達するわけではない」。保育者が「保育者の方が年下である」ことで自信をもって対応できないと認識している中では、保護者の不安や心配事の解決に至らないことも多いと考えられる。保育者が日頃の母親の頑張りを認め労いの言葉をかけたり、子どもの様子を肯定的に伝えたりするタイミングのつかみ方や伝え方の工夫は、日々のやり取りの中での失敗や、感謝される経験の積み重ねから得られるものである。「保護者への共感的支援」低群の保育者においては、登降園時の『送迎時の会話』場面で、まず、日頃から保護者を観察し話を傾聴することから始め、保護者の立場に立って考えることや、保護者の気持ちを汲み取ることなどを意識して行うことが求められる。

第3節 まとめ

第5章では、「保育者の保護者観」や「子どもや保護者を支える職員体制」が「望ましい保護者支援」に影響を与えているかについて検討を行った。研究7では、保護者を肯定的に捉える「保育者の保護者観」が、職場の上司や仲間からの肯定的な評価や励ましを受ける「情緒的サポート」や、複数の職員で対応する「園内協力」や、専門家や関係機関による「園外協力」によって構成される「子どもや保護者を支える職員体制」に正の影響を及ぼしていた。また、その「子どもや保護者を支える職員体制」は、「望ましい保護者支援」に正の影響を及ぼしていた。保育者は、保育の内容や子どもの様子を知らせるときには、日々のコミュニケーションを通した基本的な信頼関係の構築を目指して行っている。保育者が保護者を肯定的に捉える「保育者の保護者観」は、保護者との関係性を維持することにつながり、具体的な子育ての対処法や提案も伝えやすくなると考えられる。また、中平ら（2014）も本研究と同様に保育者の経験の蓄積が保護者対応に影響を与えることを示している。保育者の経験年数の積み重ねから保護者対応に求められる視野が広がり、「子どもや保護者を支える職員体制」によい方向に影響を及ぼすと考えられる。さらに、「保育者の保護者観」は、「望ましい保護者支援」に正の影響を及ぼしていた。「望ましい保護者支援」は、「保護者に対する個別支援」、「保護者との相互理解」、「子どもの保育と関連した保護者支援」及び「保護者への共感的支援」から構成

されている。「保護者への共感的支援」は、研究 6 で示された「子育ての期待と現実の差」がプラスの群とマイナスの群それぞれの差に応じた保護者支援を想定した内容である。「保育者の保護者観」及び「子どもや保護者を支える職員体制」が「望ましい保護者支援」に正の影響を及ぼすことは、保護者に「子育ての期待と現実」に応じた支援を提供するために、これらの要因を整えていくことが有効であることを示唆していると考えられる。

また、研究 8 では、経験年数の違いによる保育者が感じる保護者支援に関する分析から、新任保育者は日々のコミュニケーションでの基本的な保護者との信頼関係の構築を意識しつつも、保護者対応に困難感をもっていることが示された。また、中堅保育者は「子育て不安」や「不適切な養育態度」などの『保護者課題への対応』の必要性を感じており、さらに『職員間の連携』や『園内研修・園外研修』に問題意識を持って、保護者対応にカウンセリング技術などを活用し自らの力量を高めることに意欲をもっていると推察される。さらに、保護者支援で感じることと「保護者への共感的支援」との関連性については、「保護者への共感的支援」高群においては、『保護者対応の困難感』における「保育知識や技術不足」で有意な差、「保護者への共感的支援」低群では、『保護者対応の困難感』における「保育者の方が年下である」で有意な差が認められた。これらの結果から、「子育ての期待と現実の差」の視点を取り入れた支援を行うためには、支援の経験の積み重ねを通して知識や技術、問題意識を向上させていく必要があると考えられる。

ただし、研究 7 では、「保育者の保護者観」、「子どもや保護者を支える職員体制」、「望ましい保護者支援」の尺度の信頼性や妥当性については検討の余地が残されていること、研究 8 における検討は保育者に記述を求めるに当たって保護者支援の場面を設定しなかったことや、保育者個人の要因など検討すべき事項が残されていることから、今後の検討が望まれる。

第6章 総合的考察

第1節 まとめ・本研究の意義

1. 本研究のまとめ

保育者が保護者支援を行うに当たり、保護者の立場から問題を捉え、その子育てを支える適切な支援を提供するために保護者理解を深めることが必要である。本研究の第1章においては、まず日常の子育てによって起因する母親の育児への否定的感情と肯定的感情に関する研究について概観を行った。その結果、少子高齢化の進行、女性の社会進出による育児環境の急速な変化に伴い、乳幼児を対象とした育児不安研究が多数見られた一方で、乳幼児をもつ親が育児参加に伴って生じる幸福感や、育児に関係した生活場面や子どもとの関わりの場面における肯定的感情を検討した研究も行われていた。さらに、子どもや子育てについて保護者が「理想とする・期待する・想像する」ことを「子育ての期待」として捉え、これまで報告されてきた子育ての期待に関連した研究の動向についてデータベースを用いて概観した。その結果、「母親の子育てに伴う感情」、「父親の育児や家事参加及びソーシャルサポート」、「多様な専門機関や専門職による子育て支援」、「尺度の開発に関する研究」が行われていた。母親が子どもとの関わりにおいて、「こんなはずではなかった」という「子育ての期待と現実の差」を認識していること、父親の家事や子育てへの参加、及びその精神的サポートが必要とされている可能性が推察された。さらに、3歳頃からの自我の発達の始まりに対して母親が苛立ちを覚えること、期待する子どもの認識と現実の子どもの認識の差から、子どもへの過度な要求や関わりをしている可能性があることも推察された。このようなことから、保育者が保護者支援を行う場合には、親役割、子どもへの認識、父親との関係など多面的に、「子育ての期待と現実の差」から保護者を捉えることで、適切な支援の提供が可能となり、保護者の子育てを支えることにつながる可能性が示された。したがって、本研究の目的は、幼児をもつ母親の「子育ての期待と現実の差」が、母親の育児感情に与える影響を明らかにすること、教育・保育施設において保育者が行う保護者支援において、「子育ての期待と現実の差」の視点から検討を行い、保護者支援に有効な方法を提案することとした。第2章では、本研究の目的と構成について述べ、基本概念の定義を行った。

第3章第1・2節では、「子育ての期待と現実の差」が大きいと感じる群及び小さいと

感じる群の自由記述の検討を行った。その結果、「子育ての期待と現実の差」が大きいと感じる群において、年齢高群では「衝動的な叱責」、「責任感」、「母親役割の受容」、年齢低群で「時間の制約」、「幸福感」、「反抗期の対応」が有意に多い記述が見られた。職業有群では「時間の制約」、「困難感」、「反抗期の対応」、「睡眠不足」、「子どもへの関心」、職業無群では「衝動的な叱責」、「父親の協力がいない」、「充実感」において有意に多い記述が見られた。また、「子育ての期待と現実の差」が小さいと感じる群では、年齢高群では「我慢強さ」、「楽観的」が有意に多く、年齢低群では「兄弟の子育ての観察」、「父親との会話」において有意に多い傾向が見られた。さらに、職業有群では「実母の子育て」、職業無群では「兄弟の子育ての観察」が有意に多かった。「子育ての期待と現実の差」から母親を捉えることや、母親の年齢の高低、職業の有無に分けて、支援の実施や情報提供の方法を変えていく必要性が示唆された。続く第3節では幼児をもつ母親の育児への肯定的感情と「子育ての期待と現実の差」との関連を、母親の年齢の高群低群及び職業の有群無群で検討した。3・4・5歳児をもつ母親を対象とした質問紙調査の結果、「子育ての期待と現実の差」は母親の育児への肯定的感情の「育児肯定感」に対して、職業無群では有意な負の影響、年齢高群では負の有意傾向を及ぼしていた。「子育ての期待と現実の差」から母親を捉えることや、母親の個別の状況に応じた支援の提供や、必要な情報を提供し助言していく必要性が示唆された。

第4章では、第1節において、母親が子どもや子育てに対して親になる前に抱いていた「期待と現実の差」を、「親役割の状態の差」や「子どもへの認識の差」から捉え、それらと「父親からのサポート」、「育児感情」、「日常生活での育児幸福感」との関連について検討を行った。3・4・5歳児をもつ母親を対象とした質問紙調査の結果、「子育ての期待と現実の差」がプラスの群において、「母親の年齢」及び「日常生活での育児幸福感」の「関係性場面」から「親役割の状態の差」へは正の影響、「日常生活での育児幸福感」の「生活場面」から「子どもへの認識の差」に負の影響が示された。このことにより、「子育ての期待と現実の差」がプラス群の保護者支援は、子どもとの関わりが多くなることから起こる心配事や苛立ちに対し気軽に相談に乗り、問題解決に向けて共に考えることが求められると考えられる。また、「子育ての期待と現実の差」がマイナスの群では、「日常生活での育児幸福感」の「生活場面」及び「関係性場面」から「親役割の状態の差」へ正の影響、「育児感情」の「育ちへの不安感」、「育て方への不安感」から負の影響、「日常生活での育児幸福感」の「生活場面」及び「育児感情」の「育ちへの不安感」か

ら「子どもへの認識の差」へ負の影響を与えていた。「子育ての期待と現実の差」がマイナス群の保護者支援においては、保育者が母親自身に適した対処法を一緒に考え、自身で解決できる道筋を支えることが求められると考えられる。また、第2節において、「子育ての期待と現実の差」がプラスの群とマイナスの群の母親が求める保護者支援について検討を行った。その結果、「子育ての期待と現実の差」がプラスの群の母親が求める保護者支援は、「遊び場の確保」や「相談支援（場所）」及び「子育ての対処法」であり、「子育ての期待と現実の差」がマイナスの群では、「社会の雰囲気づくり」や「長時間労働」及び「子どもの成長」であることが示されたことから、それぞれのニーズを把握した上で、それに対応する支援のあり方を考えていくべきであることが示された。

第5章では、第1節において、保育者がもつ主観的な見方である「保育者の保護者観」や教育・保育施設での「子どもや保護者を支える職員体制」が、個別の保護者に寄り添い養育力の向上に資すると考えられる支援である「望ましい保護者支援」に影響を与えているか検討を行った。保育者を対象とした質問紙調査の結果、「保育者の保護者観」は「子どもや保護者を支える職員体制」や「望ましい保護者支援」に正の影響を与える可能性が示され、「子どもや保護者を支える職員体制」は「望ましい保護者支援」に正の影響を与えることが示された。そして、第2節において、経験年数の違いによる保育者が感じる保護者支援及び保護者支援で感じることと「保護者への共感的支援」との関連性について検討を行った。その結果、保育者が感じる保護者支援については、保育者の経験年数による違いが見られ、保護者支援の内容や技術が経験の中で高まっていくものであることが示された。さらに、「子育ての期待と現実の差」の視点から捉える「保護者への共感的支援」では、保護者との日常的な関わりの中で「保育知識や技術不足」、「保育者の方が年下である」といったことを感じながら、保育者としての技術や質及び経験について意識化を行い、支援を行っていると推察された。

2. 本研究の意義

本研究によって、幼児をもつ母親の「子育ての期待と現実の差」は、母親の育児への肯定的感情の「育児肯定感」に対して、職業無群では有意な負の影響、年齢高群では負の有意傾向を及ぼすことが示された。また、「育児感情」の「育児への不安感」と「日常生活での育児幸福感」は「子育ての期待と現実の差」に影響を及ぼしていた。さらに、保育者がもつ保護者観や「子どもや保護者を支える職員体制」が、「子育ての期待と現実の

差」から保護者を捉え、個々の状況に配慮された「望ましい保護者支援」に影響を与えていた。この本研究における保護者を「子育ての期待と現実の差」から捉える必要性や、保育者の「望ましい保護者支援」に関する研究の意義として以下の四点が考えられる。

まず一つ目として、「子育ての期待と現実の差」が母親の育児への肯定的感情に影響を与えていることを示唆したことである。母親が「子どもをもつことによって自分の生活が我慢と忍耐を必要とする生活に変化した」（高田ら、2008）と感ずることや、子育て場面において柔軟に関わることができなかつたり、対処法で葛藤を抱いたりすることで、「子育ての期待と現実の差」を母親が抱くことは、育児への肯定的感情に負の影響を及ぼし、支援が必要な状況になる可能性があると考えられる。

二つ目は、保護者が抱く育児への肯定的感情の観点から検討を行っていることである。従来の研究では子育ての不安感や負担感からの視点に基づくものが多いが、そうした気持ちを感じつつも一方で肯定的感情ももっているものと考えられたことにより、質問紙を育児への肯定的感情に着目して作成した。現実の幼児をもつ母親の子育て場面では、基本的生活習慣や友達との関わりなど、その場に応じた多様な方略も求められることが多くなり、「母親の育児不安は3・4歳時点でピーク」（唐田、2008）であるという報告もある。また、村松（2006）も、3～5歳の子どもをもつ母親を対象とした研究から、「マイペースの子」や「親の意に反する行動」をとる子どもに遭遇して生じた母親の衝動的感情は、わだかまり（育児不安）となって母親の心を循環し、子どもをしつける時に生じる衝動的感情を惹き起こす要因（育児ストレス）になると述べている。社会性の発達が著しい幼児をもつ母親が思うようにならない、子どもに振り回されたりしていると感じる場面では、母親が苛立ちの感情をもったり、怒りが抑制できず子どもに向けられる可能性も考えられる。研究2・研究3・研究4における「子育ての期待と現実の差」が大きい群において、職業無群と年齢高群では『育児負担感』における「衝動的な叱責」が有意に多かった。また、職業有群と年齢低群においても『子どものしつけや対処法』における「反抗期の対応」が有意に多かったことは、本研究の対象である母親は子どもとの接触経験や育児経験の少ないと考えられる世代であり、幼児期の子どもの特性を理解した上での対処法をもっていないことが推察される。子育て場面において「こんなはずではなかった」と日々の子どもとの関わりで問題を抱えている保護者に対して、子どもの発達の特徴や子ども理解を助ける保育者の支援が望まれると考えられる。したがって、保育者が保育の実践の中で子どもの成長や発達などの子どもの心理的な状態を把握し、保護者

を「子育ての期待と現実の差」の視点から捉えることに加えて、職業の有無群や年齢の高低群による個別的な支援を行うことによって、子育てに満足感や自信といった肯定的感情を抱く可能性があると推測される。

三つ目に、研究 5・研究 6 では保護者を理解するために「育児期の親性尺度」（大橋ら、2010）の「親役割の状態」と「子どもへの認識」の二つの下位領域から「子育ての期待と現実の差」を捉えたことである。大橋ら（2009）は、「親性」をすべての人がもっているものであり、妊娠・出産・育児期では、子どもに対して保護や育成という能力で発揮されるものと述べている。また、有馬・伊藤・三上（2002）は親性を「『生物学的性差を認めたくて、両性共に親になることにより発達する人格的特性』で、親自身へ方向性のあるもの」と概念規定して育児を肯定的な観点から評価する尺度開発を行った研究を行っている。また、親になることを「子どもを出産し養育していく役割を獲得していくことである」と捉え、そのことによって生ずる様々な変化を「親性の発達」（及川、2005）とする先行研究からは、柏木ら（1994）の研究で明らかにされた親となることで人間として成長したとする知見が得られている。本研究では「子育ての期待と現実の差」を検討する上で、親としての自らの評価である「母親になった後の現実の子育て」から、親になる以前の評価を「母親になる前の期待する子育て」を除いたものを用いたことで、「子育ての期待と現実の差」がプラスの群とマイナスの群のそれぞれに対する保護者支援のあり方を提供できる可能性を考えられることができた。保護者が子育てを通して人間として成長したと思えるためには、保護者自身が子育ての問題に取り組めるように、しつけの方略や対処法の提供などを行い、うまくいったと実感できる支援が求められよう。保護者の一番近くにいる保育者が、「子育ての期待と現実の差」から得られた情報をもとに、それぞれのニーズに合った支援を提供することで、保護者の子育てを支えることにつながる可能性があるのではないかと推察される。

四つ目に、研究 7・研究 8 において、保護者支援の観点から保育者が行う「望ましい保護者支援」についての結果がもつ意義が考えられる。現在、教育・保育施設において長時間保育や休日保育など、多様な保護者ニーズに対応した教育や保育が行われている中、保育者の多忙化やバーンアウトの問題も指摘されている（手島、2010；黒川ら、2014）。新任保育者であっても、連絡ノート、送迎時の対話、園内の掲示などの日々のコミュニケーションを通して、子育ての困り事や相談などに対する保護者対応が求められている。園や職員に厳しい要求をする保護者の心情に、「子育ての期待と現実の差」の視点から見

ることによって、父親との夫婦間の葛藤や経済的不安がその背景にあるのではないかと気付く場合も考えられる。この視点から見ることで、保護者が求めている支援と保育者が提供しようとする支援内容の一致が見られるかもしれない。保育者は経験の中で、いくつかの援助の方法や解決策を提案し、選択肢の中から選んでもらうなどの支援を展開でき得る技術を持っているものである。経験の少ない新任保育者の保護者支援を支えるために、中堅・ベテラン保育者には、保育知識や技術を伝達することも求められると考えられる。保育者は『送迎時の会話』で「信頼関係の構築」や『保護者との連携』における「家庭との連携」を図り、「上司や同僚に相談するという解決手段を講じ」（片山、2016）たりしながら、保護者への支援を展開している。保育者が保護者支援の開始に当たり、保護者を理解するために「子育ての期待と現実の差」の視点を取り入れることで、その差に応じた支援が提供される可能性につながると考えられる。

第2節 本研究の限界と今後の課題

1. 本研究の限界

前節で述べたように、本研究によって得られた結果は意義のあるものと考えられるが、多くの課題が残されている。

まず、一つ目に、第3章において開発された母親の育児への肯定的感情尺度についてである。この尺度は、子どもや子育てにおける母親の気持ちを明らかにするために、母親の語りや先行研究を参考に作成した。基礎統計の検討や母親の育児感情項目の因子分析を行い、内的整合性に問題がないと判断し、確認的因子分析を行った。その結果、母親の育児への肯定的感情に対する説明力の程度を示す適合度指標は $GFI=.97$, $AGFI=.94$, $CFI=.96$, $RMSEA=.061$ であった。山本ら（1999）はモデルを採択するには、 GFI が 0.9 以上であることが一つの目安であり、 $RMSEA$ においても 0.08 以下であれば適合度が高いと述べている。このように因子的妥当性については一定の結果が得られている。また、母親の育児への肯定的感情尺度の開発過程において、先行研究の文献の検討や博士前期課程の大学院生4名と発達心理学を専門とする教員とで検討を行って内容的妥当性の向上に努めたが、構成概念妥当性については構成概念の明確化や検討が十分であるとまでは言えない。幼児を育てている母親の状況は複雑であり、母親の性格や生活状況、子どもの特性など多方面からのアセスメントが必要であると考えられる。

二つ目は、第3章及び第4章の研究が質問紙調査による検討であることから、その内容は保護者の自身の子育てに対する感情や認知的評価を測るものであり、実際の状況とは異なる可能性もあることである。また、父親の評価は、母親の生育歴や人格特性、夫婦関係など様々な要因があり、評価する母親からの認識であるため、父親の家事・育児協力に関する評価についても実際の家事・育児協力の程度を測定できていないことが考えられる。そして、子育て体験についての母親の評価は、どの時点においての子どもとの接触経験や育児経験なのか限定しておらず、第4章でも育児期の親性に関する研究結果との関連は考察できなかった。さらに、幼児をもつ母親の「子育ての期待と現実の差」が大きい群及び小さい群の自由記述では、母親によっては妊娠中や乳児期を想起した記述も含まれている可能性もあり、幼児をもつ母親の思いとの関連が十分に明らかになっていない可能性も考えられる。今後は、これらの限界を克服するために、母親と父親の両方の調査データを用いることや、親性を獲得する重要な時期と考えられる青年期（内閣府、2004）での子育て体験の測定の検討、実際の支援事例を通じた検討を行うことが必要であろう。

三つ目に、第4章においては「子育ての期待と現実の差」を「育児期の親性尺度」を用いて測定し、「育児感情」、「父親からのサポート」、「日常生活での育児幸福感」との関連についてモデルの検討を行ったが、「子育ての期待と現実の差」がマイナス群の全ての母親が衝動的な感情が喚起されたり、衝動的な行動に至ったりするわけではない。今回の調査からは夫婦のコミュニケーションや家事・育児参加と「親役割の状態の差」及び「子どもへの認識の差」との関連が認められなかったことは、第3章と同様にあくまでも母親の認識に基づく回答であることや、父親の物理的時間上の余裕のなさを認識した上で回答しているとも考えられる。また、研究6において母親が求める保護者支援についての自由記述から母親を取り巻く個人的環境における「相談支援（場所）」で有意な差が認められたことから、母親が「子育ての期待と現実の差」を小さくする要因は、「父親からのサポート」だけでなく父親以外の家族や、友達、保育者からのサポートについても検討を行う必要がある。

四つ目として、「望ましい保護者支援」や「保護者への共感的支援」は研究結果をもとに「子育ての期待と現実の差」の視点を生かした保護者支援であると想定して内容を設定した。保育者は母親がもつ子育て不安や負担について相談や助言を求められた場合には、母親の心情を捉え寄り添いながら、「保護者への共感的支援」を行うことについては

認識しているものと考えられるが、そのような保護者支援を実際に取り入れているかどうかは保育者個人の意識に委ねられている。教育・保育施設を利用する保護者の個性や、生活状況も異なり、家庭との連携が必要であると判断される場合の見極めについても保育者の経験によって異なる可能性も考えられる。本研究では保育者の視点に基づいて「望ましい保護者支援」や「保護者への共感的支援」の支援効果を想定してモデル検討を行ったが、これらの支援が実際に「子育ての期待と現実の差」を解消する効果があるのかについてはまだ実証されておらず、引き続き検討が必要である。さらに、本研究は「子育ての期待と現実の差」に着目して幼児をもつ保護者を対象に調査を行ったが、子どもに障害や発達上の課題が見られる場合や、保護者に不適切な養育等が疑われる場合など、専門機関との連携を必要とされる保護者への支援については取り扱わなかった。今後はさらに、特別なニーズを有する家庭への支援が求められることから、「子育ての期待と現実の差」から保護者を捉える視点については、母親だけの要因のみではなく、子どもや父親を含めた家庭全体についても検討していく必要があると言える。

2. 本研究の今後の課題

最後に、本研究をもとにして考えられる今後の課題について述べる。まず、本研究では幼児をもつ母親の「子育ての期待と現実の差」が、幼児をもつ母親の育児感情に与える影響を明らかにすることを目的とした。研究結果では父親の家事や育児協力は母親の育児感情に負の影響を与えていたが、夫婦の対話度は正の影響を与えていた。徳弘・三品・有本（2015）は、3歳3か月児健診に来所した母親314名を対象とした調査から、母親が父親に相談できないと思うことと母親の児に対する否定的感情との関連を認めたと報告している。また、山口・佐藤・遠藤（2014）も父親の育児行動の中でも、母親の育児の苦労や労ったり、心配事の相談に乗ったり母親を気づかたりするほど育児負担感が少ないことを示唆している。本研究では、幼児をもつ母親の育児への肯定的感情に影響を与える要因として父親の家事や育児協力及び夫婦の対話を捉えていたが、父親に対しても調査を行う必要がある。母親が子育てをして成長したと認知するのであれば、父親においても子どもとの関わりで成長したと認知することもあると考えられる。父親が認知する家事や育児及び夫婦の対話について調査を行って「子育ての期待と現実の差」を検討することにより、夫婦間の育児への肯定的感情の違いや夫婦間の関係性も明らかになり、家族関係への支援や情報提供ができると考えられる。

次に、母親の職業形態についてである。第 3 章では職業無群 255 名 (61.0%)、職業有群 163 名 (39.0%)、第 4 章では職業無群 163 名 (46.0%)、職業有群 191 名 (54%) が調査対象であった。「女性では 24 年以降、25～34 歳を除く全ての年齢階級で非正規雇用者の割合が 50%を超えている」(内閣府、2015c) と報告されているように、今後母親の社会進出はますます増加すると考えられることから、母親の正規雇用やパート就労などの就労形態が、親役割や子どもとの関わりに及ぼす影響についても検討する必要がある。

そして、子育てを社会全体で支える方策を考えていくためには、子育てを子育て不安感や負担感、困難感などの否定的感情や側面のみに着目するのではなく、育児中に感じる肯定的な感情である育児幸福感(清水ら、2007; 金田ら、2015)からも評価することが重要であると考えられる。保護者に子育てのポジティブな側面を促進する育児幸福感が高まったと認知されるためには、子どもと関わることで「子どもの成長がわかる」、「子どもの笑顔がかわいい」など、母親が期待していたことが充足することが基本となる。社会全体で母親の子育てを支えていくのならば、子どもと関わることで得られる育児幸福感などの育児への肯定的感情を高めるための支援のあり方についても検討が必要であろう。

さらに、「保育者の保護者観」、「子どもや保護者を支える職員体制」、「望ましい保護者支援」の関係性についても、検討の余地が残されている。研究 7 では、「子どもや保護者を支える職員体制」に保育者の経験年数、保育者の相談者の人数、相談時間の長さの項目を加えたモデルを作成する予定であった。先行研究からも保育士の個人的サポート源(上村ら、2008)、職場や組織の人間関係(磯野ら、2008)、仕事の量的負荷(森田・植村、2011)など、保育者が様々な機会を捉えて保護者に積極的に関わる際に、保護者対応で困難感を感じた場合の対応や改善に必要な資源について報告されている。自園で「望ましい保護者支援」を行っていくためには、保育者の「高いモチベーションを維持し精神面の健康状態」(磯野ら、2008)を改善する視点からの検討も望まれる。

おわりに

育児期は「負担感も大きいが、子どもを育てその成長を見守る中で、何にも代え難い充実感や満足感を得」（内閣府、2005）られると考えられ、そのように保護者が子育てを通して成長したと実感するためには、乳幼児との育児経験や接触体験など、親性を獲得する機会を得ることが役に立つと考えられる。『高等学校学習指導要領解説 家庭編』（文部科学省、2010）第2章 第1節 家庭基礎において、「子育てを通じて親自身も人間的に成長することに気付かせ、子どもを生み育てることの意義について考えさせる」と記載されているように、学校教育においても親性の形成や親となる過程についての学習が展開されている。しかしながら、永久・柏女（2000）は、女性の高学歴化と有職化により、女性が家族の中で個人の世界や生き方をもつことを志向する個人化が進むとすれば、「女性の個人化や子どもの価値の変化は、女性の個人的な努力や心がけでは抑えることのできない、より大きな社会変動の一部だといえる」のではないかと述べている。さらに、母親が現在の子ども数以上に子どもを産まない理由の検討から、経済的負担だけでなく「もう一人目の子どもの子育ては、自分を成長させる経験というよりも、やりたいことができなくなることと捉えられているのではなかろうか」と報告している。そして、小野田（2013）は育児期女性への支援を考える際には、「個人としての自分」に目を向けた支援を組み込んでいくことが有効であり、自分のための時間や世界をもちたいという願いに対して、それが実現されないというギャップが葛藤を生み、育児ストレスの増大につながることを報告している。将来、子育てを中心となって担うであろう現在の学生が中等学校や高等学校での授業を通して親役割を獲得できたとしても、現実に関わったときに子育ての当事者として「親となって成長できた」と実感できる環境が整っていなければ、「こんなはずではなかった」という思いを抱くと考えられ、社会全体で子育てを支える支援体制を整えていくことが求められる。

また、保護者支援においては保育者個人の経験や子育ての対処法の伝授だけでは、保護者の子育ての不安感や負担感は払拭できず、子どもの成長に応じた関わりを求められるたびに問題が蓄積されることが考えられる。保育者は保護者との日常的なコミュニケーションを通じて信頼関係を構築し、保護者の不安を気付いたり受け止めたりしながら、保護者の個別ニーズに応じた細やかな支援をすることが求められる。そのため、保育者は自らの保育技術の向上や、保護者支援の質的向上につながる保育者の専門性を常に意識

し、保護者への支援を行っていくことが望まれる。さらに、前述した全国保育士養成協議会（2009）の調査によれば、「職場の人間関係」の悪さが離職に結びつきやすいことが示唆されており、共感したり、相手の立場に立って考えるというコミュニケーション力が落ちていると考えられ、学生個人の問題とせず養成施設や職場で真剣に取り組まなければならない重要な課題であることを指摘している。本研究において新任保育者は保育経験が少ないだけでなく、実際に子育てを経験していないことから相談や助言を求められた時に困難を感じる傾向が見られた。保護者との日々のやり取りを通して、子ども理解が促進され、保護者の要求を受け止めることや、子どもの育ちへの願いを知ることとも多くなると考えられる。教育・保育施設においては新任保育者に専門職としての自信を高め、「コミュニケーション能力の強化」（中平ら、2014）につなげるためにも、園内外の研修への参加を促し、保育者の専門性を高める工夫をすることが求められる。たとえば、「長期に渡って、新任・若手保育士に1対1などで指導・助言」（中平ら、2014）を行うことや、中堅・ベテラン保育者と同じクラス担任配置にすること、朝夕の長時間保育で一緒に担当することにより、保護者への関わり方や子どもの様子の伝え方など保護者との関係づくりを学ぶとともに、職場内の意思の疎通を図ることにもつながると考えられる。また、保護者への対応で収集された個人情報の取り扱いや、情報に基づいて保護者への支援の方向性を決定し実際に支援が展開されていくプロセスは、教育・保育施設内での保育者の協働性を学ぶ機会になろう。保護者の子育てを支える新任保育者が育つことは、職場全体の専門性が育つということであり、子どもの健やかな育ちが実現できるよう、保護者の子育てを支える「望ましい保護者支援」を促進するものと考えられる。

引用文献

- 浅川潔司・鎌田陽世・横川和章・古川雅文（1999）母親の育児感情の構造に関する研究
兵庫教育大学研究紀要、第1分冊 学校教育・幼児教育・障害児教育、19、pp.139-143.
- 青木まり・松井豊・岩男寿美子（1986）母親意識から見た母親の特徴－ライフ・ステージ、自己評価、充実感との関係から－ 心理学研究、57（4）、pp.207-231.
- 荒牧美佐子（2005）育児への否定的・肯定的感情とソーシャルサポートとの関連－ひとり親・ふたり親との比較から－ 小児保健研究、64（6）、pp.737-744.
- 荒牧美佐子（2011）育児感情尺度 心理測定尺度集VI 堀洋道（監修）松井豊・宮本聡
介編 サイエンス社 pp.219-224.
- 荒牧美佐子・無藤隆（2008）育児への負担感・不安感・肯定的感情とその関連要因
の違い：未就学児を持つ母親を対象に 発達心理学研究、19（2）、pp.87-97.
- 有馬志津子・伊藤美樹子・三上洋（2002）育児評価としての「親性」尺度開発の試み 日
本地域看護学会誌、4（1）、pp.34-40.
- 母子保健法（1965）昭和40年8月18日法律第141号
- 陳東・森恵美・望月良美・柏原英子・安藤みか・大月恵理子（2006）乳幼児を持つ親に
対する子育て観尺度開発－信頼性・妥当性の検討－ 千葉看会誌、12（2）、pp.76-82.
- 土肥伊都子・広沢俊宗・田中國夫（1990）多重な役割従事に関する研究：役割従事タイ
プ達成感を男性性、女性性の効果 社会心理学研究、5（2）、pp.137-145.
- 江口麻衣・畝本玲子・緒方美也子・周布亜美佳・田中紘子・月川直子・山尾玲子・津留
崎京子（2001）育児における父親の母親に対する情緒的支援について 福岡県立看護
専門学校看護研究論文集、24、pp.121-131.
- 衛藤真規（2015）保護者との関係に関する保育者の語りの分析－経験年数による保護者
との関係の捉え方の違いに着目して－ 保育学研究、53（2）、pp.194-205.
- 藤井加那子・永井利三郎（2008）育児期にある母親の育児満足感に影響する因子－子育
て不安の認識の有無による違い－ 小児保健研究、67（1）、pp.10-17.
- 藤尾順子・山内京子・進藤美樹（2016）子育て中の母親が期待する小児科診療所の看護
師の役割に関する実態調査 看護学統合研究、17（2）、pp.33-40.
- 深谷昌志（2015）「体験を持つ」意味を考える 児童心理臨時増刊 1008、金子書房、
pp.36-45.

- 濱田維子（2005）仕事と家庭の多重役割が母親の意識に及ぼす影響 日本赤十字九州国際看護大学、3、pp.147-158.
- 花沢成一・松浦純（1986）男女青年における対児感情と乳児接触経験との関係ー母性心理学研究XVⅡー 日本教育心理学会第28回総会発表論集、pp.356-357.
- 原田正文（2006）子育ての変貌と次世代育成支援ー兵庫レポートにみる子育て現場と子ども虐待予防 名古屋大学出版会 pp.138-161.
- 原田正文（2006）子育ての変貌と次世代育成支援ー兵庫レポートにみる子育て現場と子ども虐待予防 名古屋大学出版会 pp.146-148.
- 原田正文・山野則子・中川千恵子・橋本真紀・雲井弘幸・加古真紀・大野まどか・亀岡智美・加藤曜子・服部祥子（2004）児童虐待を未然に防ぐためには、何をすべきかー子育て実態調査『兵庫レポート』が示す虐待予防の方向性ー 子どもの虐待とネグレクト、6（1）、pp.14-22.
- 原口由紀子・松浦治代・矢倉紀子・佐々木くみ子・笠置綱清（2005）母親の個人としての生き方志向と育児不安との関連 小児保健研究、64（2）、pp.265-271.
- 長谷川理絵子・牧谷孝子・善養寺圭子・村田忠良（2006）北海道家庭生活総合カウンセリングセンターの電話相談にみる育児不安の変化ー平成元年と平成12年の比較ー ころの健康、21（2）、pp.72-80.
- 橋本真紀（2008）保育指導の資源と手段 柏女霊峰・橋本真紀 保育者の保護者支援 保育指導の原理と技術 フレーベル館 pp.226-234.
- 橋本真紀（2010）これからの保育者の保護者支援とは 柏女霊峰（監修）・橋本真紀・西村真実・高山静子・山川美恵子・水枝谷奈央 保護者支援スキルアップ講座 保育者の専門性を生かした保護者支援ー保育相談支援（保育指導）の実際 ひかりのくに pp.60-61.
- 橋本真紀（2011）保育相談支援の方法と技術 柏女霊峰・橋本真紀（編著）保育相談支援 ミネルヴァ書房 pp.48-56.
- 服部祥子・原田正文（1999）乳幼児の心身発達と環境ー大阪レポートと精神医学的視点ー 名古屋大学出版会 pp.207-208.
- 林亜希子・萱間真美・近藤あゆみ・妹尾栄一・大原美知子（2005）A市における乳幼児健康診査の受診および育児支援事業の利用に関連する要因ー育児環境に対する母親の認知および抑うつ状態に焦点をあててー 厚生指標、52（7）、pp.21-31.

- 久武綾子（1977）夫婦の役割分担に対する期待と現実 愛知県における調査 家政学雑誌、28（2）、pp.63-67.
- 星永・小田切房子・奥平洋子・若葉陽子・大伴潔・星三和子・秦野悦子・瀬戸淳子・栗山容子・蓮見元子・庄司順一・嶋崎るり子・菊池日登美・中江陽一郎・前川喜平（1998）低出生体重児の多面的縦断研究 3歳迄の発育・発達と養育環境 小児保健研究、57（6）、pp.745-754.
- 池田由紀・古閑祐樹（2014）地域の子育て・家庭支援拠点の取り組み 発達、140 ミネルヴァ書房 pp.15-22.
- 育児休業、介護休業など育児又は家族介護を行う勤労者の福祉に関する法律（1991）平成3年5月15日法律第76号
- 猪熊弘子（2007）親の言うこと、素直に聞いてますかー子育て世代間ギャップをどう乗り越えるか？（AERA with Baby（Vol.1））ー アエラ、20（5）、pp.54-57.
- 猪野郁子（1994）夫は妻の育児感情をどう認識しているか（第1報）妻の育児感情と夫の認識とのずれについて 日本家政学会誌、45（11）、pp.999-1004.
- 入江慶太（2013）新人保育士が感じる保育の難しさとは何かー3歳未満児クラスにおける検討ー 川崎医療短期大学紀要、33、pp.61-67.
- 石井栄子（2015）親の心の変化に焦点づけた「フォーカシングを基板とした親向け講座」の試みと効果ー親の安心感を確保し、子育て力のエンパワメントを図るー乳幼児精神保健学会誌、8、pp.3-11.
- 磯野富美子・鈴木みゆき・山崎喜比古（2008）保育所で働く保育士のモチベーションおよびメンタルヘルスとそれらの関連要因 小児保健研究、67（2）、pp.367-374.
- 磯山あけみ（2010）第2子妊娠中の母親の子育てに対する主観的体験 日本母性看護学会誌、10（1）、pp.17-23.
- 石川清美（2000）赤ちゃんふれあい体験学習 アンケート調査からみた効果 小児保健研究、59（2）、pp.159-162.
- 伊藤富美（1988）妻の役割の道具性と表出性に対する夫の評価 日本家政学会誌、39（8）、pp.793-802.
- 岩永幸・井上徳浩・竹村豊・田野成美・新田一枝（2016）大阪狭山市における乳幼児スキンケア講習会の取り組み 日本小児難治喘息・アレルギー疾患学会誌、14（3）、pp.285-288.

- 岩崎美智子（2002）厚生白書にみる「少子化問題」 年報筑波社会学、14、pp.40-62.
- 次世代育成支援対策推進法（2003）平成 15 年 7 月 16 日法律第 120 号
- 児童虐待の防止などに関する法律（2000）平成 12 年 5 月 24 日法律第 82 号
- 児童福祉法（1947）昭和 22 年 12 月 12 日法律第 164 号 1948（昭和 23）年施行
- 児童福祉法の一部を改正する法律（2001）平成 13 年 11 月 30 日法律第 135 号 2003（平成 15）年 11 月 29 日施行
- 児童福祉法の一部を改正する法律（2004）平成 16 年 12 月 3 日法律第 153 号
- 女子に対するあらゆる形態の差別の撤廃に関する条約（1985）昭和 60 年 7 月 1 日条約第 7 号及び外務省告示第 194 号 効力発生は同年 7 月 25 日
- 神谷哲司（2012）保育現場における「対応の難しい親」はなぜ産み出されたのか？— 家庭支援、保護者対応に関する研究動向からの一考察— Asian Journal of Human Services、3、pp1-15.
- 金井幸子（2003）乳幼児期の子どもをもつ母親の自己評価と夫に対する評価 小児保健研究、62（5）、pp.552-557.
- 金岡緑（2011）育児に対する自己効力感尺度（Parenting Self-efficacy Scale : PSE 尺度）の開発とその信頼性・妥当性の検討 小児保健研究、70（1）、pp.27-38.
- 金岡緑・藤田大輔（2002）乳幼児をもつ母親の特性的自己効力感及びソーシャルサポートと育児に対する否定的感情の関連性 厚生の指標、49（6）、pp.22-30.
- 金田亜里砂・大竹恵子（2015）母親の楽観主義が育児幸福感に及ぼす影響 健康心理学研究、28（2）、pp.47-54.
- 唐田順子（2008）乳幼児をもつ母親のサポート状況と育児不安との関連—病産院サポートを含めた分析—母性衛生、48（4）、pp.479-488.
- 笠原正洋（2000）保育者による育児支援：子育て家庭保護者の援助要請意識および行動から 中村学園研究紀要、32、pp.51-58.
- 笠井真紀・河原加代子（2007）育児期間中の母親の夫への育児サポートと夫婦関係との関連 日本地域看護学会誌、9（2）、pp.75-80.
- 柏木恵子（2003）家族心理学 社会変動・発達・ジェンダーの視点 東京大学出版会、p.198.
- 柏木恵子・若松素子（1994）「親となる」ことによる人格発達：生涯発達の視点から親を研究する試み 発達心理学研究、5（1）、pp.72-83.

- 片川久美子・小林淳子（2004）母親の期待と満足感による1歳6ヵ月児健康診査の評価
および母親の属性、ソーシャルサポートとの関係 北日本看護学会誌、6（2）、pp.9-19.
- 片山美香（2015）若手保育者による保護者支援の困難さと対応に関する検討ー経験に基づき保育者としての成長過程に着目してー 岡山大学大学院教育学研究科研究集録、159、pp.11-20.
- 片山美香（2016）若手保育者が有する保護者支援の特徴に関する探索的研究ー保育者養成校における教授内容の検討に生かすためにー 岡山大学教師教育開発センター紀要、6、pp.11-20.
- 片山理恵・内藤直子・佐々木睦子（2012）乳幼児の母親と父親のソーシャルサポートと子育て観の関係と育児休業利用の実態 香川大学看護学雑誌、16（1）、pp.49-56.
- 加藤邦子・石井クンツ昌子・牧野カツ子・土谷みち子（2002）父親の育児関わり及び母親の育児不安が3歳児の社会性に及ぼす影響：社会的背景の異なる2つのコーホート比較から 発達心理学研究、13（1）、pp.30-41.
- 加藤孝士（2008）母親の主観的幸福感とソーシャル・サポートの関係ー最も関わる人物からのサポートー 小児保健研究、67（1）、pp.57-62.
- 加藤由美・安藤美華代（2012）新任保育者の抱える困難に関する研究の動向と展望 岡山大学大学院教育学研究科研究集録、151、pp.23-32.
- 加藤由美・安藤美華代（2013）新任保育者の抱える職務上の困難感の要因に関する研究 岡山大学大学院教育学研究科研究集録、154、pp.15-23.
- 勝浦範子・福岡欣治（2004）「浜松こども館子育て支援アンケート 2003」の報告ー子育て支援ニーズに関する実践的研究 静岡文化芸術大学紀要、5、pp.21-29.
- 川井尚・庄司順一・千賀悠子・加藤博仁・中野恵美子・恒次欽也（1995）育児不安に関する臨床的研究ー幼児の母親を対象にー 日本こども家庭総合研究所紀要、31、pp.27-42.
- 川上智美・澤村くるみ・松本美祢・越田美穂子・香西真由美・池内明子・矢敷信子（2011）乳幼児をもつ母親の育児に対するネガティブ感情の構造に関する一考察ー母親へのフォーカス・グループ・インタビューからー 四国公衛誌、56（1）、pp.139-145.
- 川喜田二郎（1986）KJ法 混沌をして語らしめる 中央公論社
- 川村千恵子・田辺昌吾・畠中宗一（2010）乳幼児をもつ母親のウェルビーイングに影響を及ぼす要因ー属性、子育て支援ニーズならびに充足度からの検討ー メンタルヘル

- スの社会学、16、pp.42-52.
- 経済企画庁（1992）『国民生活白書 平成4年版』 pp.62-101.
- 木船宏子（2003）乳幼児を持つ母親の母性の発達に関する縦断的研究 母性衛生、44（1）、pp.148-155.
- 小林真・米納絵吏（2014）子育てサークルに対する母親の態度－パーソナリティ要因を考慮して－とやま発達福祉学年報、5、pp.15-20.
- 小林佐知子（2009）乳児をもつ母親の抑うつ傾向と夫からのサポートおよびストレスへのコントロール可能性との関連 発達心理学研究、20（2）、pp.189-197.
- 子ども・子育て支援法（2012）平成24年8月22日法律第65号
- 子ども・子育て支援新制度（2012）<http://www8.cao.go.jp/shoushi/shinseido/outline/index.html> 2015（平成27）年4月実施（検索日：2017年8月12日）
- 小泉智恵・菅原ますみ・前川暁子・北村俊則（2003）働く母親における仕事から家庭へのネガティブ・スピルオーバーが抑うつ傾向に及ぼす影響 発達心理学研究、14（3）、pp.272-283.
- 児嶋雅典（2000）少子化 森上史朗・柏女霊峰（編）保育用語辞典〔第8版〕ミネルヴァ書房、p.146.
- 国際労働機関（1981）家族的責任を有する男女労働者の機会及び待遇の均等に関する条約（第156号）日本は1995（平成7）年に批准
- http://www.ilo.org/tokyo/standards/list-of-conventions/WCMS_239023/lang-ja/index.htm（検索日：2017年8月12日）
- 国籍法及び戸籍法の一部を改正する法律（1984）昭和59年5月25日法律45号
- 近藤明代（2006）母親の認識の変化をもとにした地域における育児教室のあり方の検討 小児保健研究、65（3）、pp.448-455.
- 小西真弓（2016）幼児を養育する母親に対する保護者支援－保育ソーシャルワークを通して保育者に求められる役割－ 保育ソーシャルワーク学研究、2、pp.33-48.
- 小西真弓（2017）母親の育児感情と保護者支援 日本保育学会第70回大会論文要旨 p.662.
- 河野古都絵・大井伸子（2014）3歳児をもつ母親の育児不安に影響する要因についての検討 母性衛生、55（1）、pp.102-110.
- 小坂千秋（2004）幼児を持つ母親の親役割満足感を規定する要因－就労形態からの検討

ー 発達研究、18、pp.73-87.

輿石薫 (2002) 育児不安に影響を与える要因についての縦断的研究ー予期不安尺度と期待感尺度の作成ー 小児保健研究、61 (4) pp.686-691.

厚生省 (1990) 『厚生白書 平成元年版』 p.10.

厚生省 (1994) 『厚生白書 平成 5 年版』 p.3.

厚生省 (1994) 『厚生白書 平成 5 年版』 pp.65-71.

厚生省 (1998) 『厚生白書 平成 10 年版』 pp.82-87.

厚生省 (1998) 『厚生白書 平成 10 年版』 p.82.

厚生労働省 (2003) 『厚生労働白書 平成 15 年版』 pp.115-116.

厚生労働省 (2008a) 『保育所保育指針』 pp.31-33.

厚生労働省 (2008b) 『保育所保育指針解説書』 pp.179-198.

厚生労働省 (2008b) 『保育所保育指針解説書』 pp.8-9.

厚生労働省 (2010) イクメンプロジェクト <http://www.ikumen-project.jp> (サイトの開始: 2010 年 6 月 17 日) (検索日: 2017 年 8 月 1 日)

厚生労働省 (2013) 『厚生労働白書 平成 25 年版』 pp.191-192.

厚生労働省 (2016a) 平成 27 年度 児童相談所での児童虐待相談対応件数〈速報値〉
<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000132381.html> (検索日: 2016 年 10 月 9 日)

厚生労働省 (2016b) 保育所保育指針の改定に関する中間とりまとめ 社会保障審議会
児童部会保育専門部会 2016 (平成 26) 年 8 月 2 日
<http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi2/0000132740.html> (検索日: 2017 年 8 月 20 日)

厚生労働省 (2017) 『保育所保育指針』 pp.36-37.

雇用の分野における男女の均等な機会及び待遇の確保等女子労働者の福祉の増進に関する法律 (1985) 昭和 60 年 6 月 1 日法律第 45 号 (男女雇用機会均等法)

黒川祐貴子・青木紀久代・山崎玲奈 (2014) 関わりの難しい保護者像と保育者のバーンアウトの実態、小児保健研究、73 (4)、pp.539-546.

桑名佳代子・桑名行雄・細川徹 (2008) 1 歳 6 か月児をもつ親の育児ストレス (2) ー両親間における育児ストレスの関連ー東北大学大学院教育学研究科研究年報、57 (1) pp.339-358.

Lazarus, R., S., & Folkman, S. (1984) *Stress, Appraisal, and Coping*
Springer Publishing Company, Inc., Now York ストレスの心理学ー認知的評価と対

- 処の研究― 第1版 本明寛・春木豊・織田正美監訳（1991）実務教育出版社。
- 牧野カツ子（1982）乳幼児をもつ母親の生活と不安 家庭教育研究所紀要、17、pp.14-21.
- 牧野桂一（2012）保育現場における子育て相談と保護者支援のあり方、筑紫女学園大学・筑紫女学園短期大学部紀要、7、pp.179-191.
- 牧野孝俊・金泉志保美・伊豆麻子・佐光恵子（2011）父親の育児に関する研究動向と今後の課題 小児保健研究、70（6）、pp.780-789.
- 眞崎由香・橋本佐由理・奥富庸一・池田佳子（2011）就学前幼児を育てている母親の自己イメージと育児不安との関連 小児保健研究、70（6）、pp.725-730.
- 松原直美・堀田法子・山口孝子（2012）育児期の母親の抑うつ状態に関する縦断的研究 小児保健研究、71（6）、pp.800-807.
- 光田咲子・村上明美（2002）初めて子どもを持つ父親の育児観 母性衛生、43（1）、pp.67-72.
- 水野里江（1998）乳児期の子どもの気質・母親の分離不安と後の育児ストレスとの関連：第1子を対象にした乳幼児期の縦断研究 発達心理学研究、9（1）、pp.56-65.
- 三好理恵・岡部恵子・千田みゆき・佐鹿孝子・浅川典子・大森智美・吉岡幸子・安藤晴美・坂口由紀子（2009）本学看護学科における地域貢献のあり方に関する研究―A市の母親の子育て支援ニーズに関する調査を通して―埼玉医科大学看護科紀要、2（1）、pp.35-42.
- 文部科学省（2010）『高等学校学習指導要領解説 家庭編』 開隆堂出版株式会社、p.13.
- 文部省（1989）『中学校学習指導要領』 平成元年3月15日告示25号 1993（平成5）年4月1日施行
- 文部省・厚生省・労働省・建設省（1994）今後の子育て支援のための施策の基本的方向について <http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/angelplan.html>（検索日：2017年8月1日）
- 森下葉子（2006）父親になることによる発達とそれに関わる要因 発達心理学研究、17（2）、pp.182-192.
- 森田明美・上田美香（2004）妊娠・出産直後の母親が抱える問題と子育て支援の課題 東洋大学人間科学総合研究所紀要 創刊号、pp.72-96.
- 森田多美子・植村勝彦（2011）保育所に勤務する保育士のバーンアウトに影響を及ぼす要因の検討 愛知淑徳大学論集―心理学部集―創刊号、pp.67-81.

- 望月由妃子・篠原亮次・杉澤悠圭・童連・平野真紀・富崎悦子・田中笑子・渡辺多恵子・恩田陽子・川島悠里・安梅勅江（2010）被虐待児の育児環境の特徴と支援に関する研究 厚生指標、57（12）、pp.24-30.
- 百瀬栄美子（2003）母親の就業状態による子育て観の構造 チャイルドヘルス、6（10）、pp.772-776.
- 村上京子・飯野英親・塚原正人・辻野久美子（2005）乳幼児を持つ母親の育児ストレスに関する要因の分析 小児保健研究、64（3）、pp.425-431.
- 村松十和（2006）育児中の母親の心理（衝動的感情と育児不安）と夫との関係に関する研究 三重看護学誌、8、pp.11-20.
- 永久ひさ子・柏木恵子（2000）母親の個人化と子どもの価値—女性の高学歴化、有職化の視点から— 家族心理学研究、14（2）、pp.139-150.
- 内閣府（2004）『少子化社会白書 平成 16 年版』 pp.143-144.
- 内閣府（2005）『国民生活白書 平成 17 年版』 p.34.
- 内閣府（2015a）『少子化社会対策白書 平成 27 年版』 p.67.
- 内閣府（2015b）『子供・若者白書 平成 27 年版』 pp.173-177.
- 内閣府（2015c）『男女共同参画白書 平成 27 年版』 pp.50-51.
- 内閣府（2016）『少子化社会対策白書 平成 28 年版』 pp.26-28.
- 内閣府・文部科学省・厚生労働省（2014）『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』 pp.12-14.
- 内閣府・文部科学省・厚生労働省（2015）『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』 pp.117-136.
- 内閣府・文部科学省・厚生労働省（2017）『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』 pp.38-39.
- 内閣官房（2014）すべての女性が輝く社会づくり本部 平成 26 年 10 月 10 日
<http://www.cas.go.jp/jp/seisaku/kagayakujosei/>（検索日：2017 年 10 月 16 日）
- 内藤直子・橋本有里子・杉下知子（1998）0～3 歳の乳幼児を持つ〈専業母親〉の子育て観尺度開発に関する研究 CPS-M97 の妥当性・信頼性の検討 日本看護科学学会誌、18（3）、pp.1-9.
- 中川愛・松村京子（2010）女子大学生における乳児へのあやし行動：乳児との接触経験による違い 発達心理学研究、21（2）、pp.192-199.

- 中川まり（2009）共働き夫婦における妻の働きかけと夫の育児・家事参加 人間文化創成科学論叢、12、pp.305-313.
- 中川まり（2010）子育て期における妻の家庭責任意識と夫の育児・家事参加 家族社会学研究、22（2）、pp.201-212.
- 中平絢子・馬場訓子・高橋敏之（2014）信頼関係の構築を促進する保育所保育士の保護者支援 岡山大学教師教育開発センター紀要、4、pp.63-71.
- 中平絢子・馬場訓子・高橋敏之（2016）事例から見る望ましい保護者支援の在り方と保育士間の連携 岡山大学教師教育開発センター紀要、6、pp.21-30.
- 中道圭人・中澤潤（2003）父親・母親の養育態度と幼児の攻撃行動との関連 千葉大学教育学部研究紀要、51、pp.173-179.
- 中谷奈津子（2006）子どもの遊び場と母親の育児不安－母親の育児ネットワークと定位家族体験に着目して－ 保育学研究、44（1）、pp.50-62.
- 中谷奈津子（2014）地域子育て支援事業利用による母親の変化－支援者の母親規範意識と母親のエンパワメントに着目して－ 保育学研究、52（3）、pp.319-331.
- 中山昌樹（2014）（新）幼保連携型認定こども園で求められる保育者の資質 保育学研究、（52）1、pp.148-151.
- 中添和代・白石裕子・舟越和代（1999）3歳児をもつ母親の子育てに関する意識調査－看護の視点から育児支援を考える－ 香川県立医療短期大学紀要、1、pp.87-94.
- 奈良間美保・兼松百合子・荒木暁子・丸光恵・中村伸枝・武田淳子・白畑範子・工藤美子（1999）日本版 Parenting Stress Index (PSI)の信頼性・妥当性の検討 小児保健研究、58（5）、pp.610-616.
- 成田朋子（2012）保護者対応に求められる保育者のコミュニケーション力 名古屋柳城短期大学研究紀要、34、pp.65-76.
- 日本小児保健協会（2011）幼児健康度に関する継続的比較研究 幼児健康度に関する継続的比較研究 平成 22 年度総括・分担研究報告書
http://www.jschild.or.jp/book/pdf/2010_kenkochousa.pdf（検索日：2017 年 8 月 24 日）
- 西出弘美・江守陽子（2011）育児期の母親における心の健康度（Well-being）に関する検討－自己効力感とソーシャルサポートが与える影響について－ 小児保健研究、70（1）、pp.20-26.
- 西村真美（2011a）保育所入所児童の保護者支援 柏女霊峰・橋本真紀編著 保育相談

- 支援 ミネルヴァ書房 pp.85-113.
- 西村真美 (2011b) 行事を活用した保護者支援 橋本真紀・山縣文治編 よくわかる家庭支援論第2版 ミネルヴァ書房 pp.54-55.
- 丹羽さかの (2012) 保育相談支援の基本 小田豊監修・吉田ゆり・若本純子・丹羽さかの編著 保育相談支援 光生館 pp.18-29.
- 野原真理 (2007) 母親の育児に関する意識および行動の変化ー保育者で地域子育て支援事業の参加を通してー 小児保健研究、66 (2)、pp.290-296.
- 尾形和男・宮下一博 (1999) 父親の協力的関わりと母親のストレス、子どもとの社会性発達および父親の成長 家族心理学研究、13 (2)、pp.87-102.
- 小川晶 (2011) 保育所における高学歴・高齢初出産母子に対する支援ー母親と保育者の関係構築を基軸としてー 保育学研究、49 (1) pp.51-62.
- 大橋幸美・浅野みどり (2009) 親性とそれに類似した用語に関する国内文献の検討ー親性の概念明確化に向けてー 家族看護学研究、15 (1)、pp.56-64.
- 大橋幸美・浅野みどり (2010) 育児期の親性尺度の開発ー信頼性と妥当性の検討ー 日本看護研究学会雑誌、33 (5)、pp.45-53.
- 大日向雅美 (1996) 子どもを愛せない母親たち 大日向雅美・佐藤達也 (編) 現代のエスプリ 子育て不安・子育て支援、至文堂、pp.55-62.
- 大日向雅美 (2002) 発達心理学の立場から 岡田祐士・青木省三・宮岡など (監修) こころの科学 103、日本評論社、pp.10-15.
- 及川裕子 (2005) 親性の発達に関する研究ー乳幼児期の親性の因子構造と背景要因の検討ー 埼玉県立大学紀要、7、pp.1-7.
- 岡本絹子・中村裕美子・山口三恵子・奥山則子・標美奈子 (2002) 乳幼児をもつ母親の疲労感と父親の育児参加に関する研究 小児保健研究、61 (5)、pp.692-700.
- 奥村ゆかり・松尾博哉 (2011) ベビーマッサージが母子双方のストレス反応に及ぼす効果に関する研究 母性衛生、51 (4)、pp.545-556.
- 小野田奈穂 (2013) 育児期女性の「個人としての自分」と育児ストレスとの関連ー理想と現実のギャップからの検討ー 家族心理学研究、27 (2)、pp.123-136.
- 大澤扶佐子 (2004) 乳幼児をもつ母親への育児教室の効果と保健師の関わりー盛岡市及び矢巾町の育児教室を通してー 現代行動科学会誌、20、pp.8-15.
- 酒井厚・松本聡子・菅原ますみ (2014) 就労する母親の育児ストレスと精神的健康：職

- 場も含めたソーシャルサポートとの関連から 小児保健研究、73 (2)、pp.316-323.
- 櫻谷真理子 (2004) 今日の子育て不安・子育て支援を考える:乳幼児を養育中の母親への
育児意識調査を通して 立命館人間科学学研究、7、pp.75-86.
- 佐藤達哉・菅原ますみ・戸田まり・島悟・北島俊則 (1994) 育児に関するストレスそ
の抑うつ重症度との関連 心理学研究、6、pp.409-416.
- 茂本咲子・奈良間美保・浅野みどり (2010) 母親が認識する乳児の状態と育児困難感の
特徴とその関連 小児保健研究、69 (6)、pp.781-789.
- 島田真理恵・恵美須文枝・長岡由紀子・高橋弘子・森朋子・遠藤優子 (2003) 産褥期育
児生活肯定感尺度改訂に関する研究 日本助産学会誌、16 (2)、pp.36-45.
- 嶋崎博嗣 (1995) 保育者の精神健康に影響を及ぼす心理社会的要因に関する実証的研究
日本保育学会大会研究論文集、48、pp.628-629.
- 清水嘉子・伊勢カンナ (2006) 母親の育児幸福感と育児事情の実態 母性衛生、47 (2)、
pp.344-351.
- 清水嘉子・関水しのぶ (2010) 母親の育児ストレス尺度ー短縮版作成と妥当性の検討
ー こどもの虐待とネグレクト、12 (2)、pp.261-270.
- 清水嘉子・関水しのぶ・遠藤俊子 (2010) 母親の育児幸福感尺度の短縮版尺度開発
日本助産学会誌、24 (2)、pp.261-270.
- 清水嘉子・関水しのぶ・遠藤俊子・落合富美江 (2007) 母親の育児幸福感ー尺度の開発
と妥当性の検討 日本看護科学会誌、27 (2)、pp.15-24.
- 塩川朋子・田中時穂・上川紗央里・森田秀子 (2006) 検査を受ける子どもに対するプレ
パレーションへの期待ー親の視点を通してー 小児看護、37、pp.95-97.
- 塩田敦子 (2011) 思春期からの更年期の不定愁訴とその対応 日本産科婦人科学会誌、
63 (12)、pp.223-228.
- 須永進・青木知史・齋藤幸子・山屋春恵 (2011) 保護者の保育ニーズとその対応に関す
る研究Ⅲ 愛知淑徳大学論集 福祉貢献学部篇、1、pp.83-105.
- 住田正樹・中田周作 (1999) 父親の育児態度と母親の育児不安 九州大学大学院教育学
研究紀要、45 (2)、pp.19-38.
- 炭谷靖子・成瀬優知 (1999) 母親の乳児集団健診に対する期待に関わる要因ー母親の属
性要因と母親としての自信及び子どもへの感情との関係ー 富山医科薬科大学看護学
会誌、2、pp.17-27.

- 砂川公美子・田中満由美・黒石由佳里（2010）肯定的感情を記載する「育児日記」による育児幸福感増大の効果 第41回看護総合、pp.173-176.
- 諏澤宏恵・加藤則子・山田和子（2007）親の育児感情に影響を及ぼす乳幼児の年齢別要因の検討—psi 概念モデルをもとにした児の年齢別比較— 小児保健研究、66（3）、pp.402-411.
- 鈴木美枝子・衛藤隆（2006）子育て支援の観点からみた健診 チャイルドヘルス、9（3）、pp.207-212.
- 鈴木美枝子・衛藤隆（2007）健診の満足感に関連する要因～子育て支援に着目して～ チャイルドヘルス、10（2）、pp.122-127.
- 鈴木敏彦・横川剛毅（2009）保育士の業務実践におけるソーシャルワーク機能に関する基礎研究—保育所保育士の保護者支援を中心に— 和泉短期大学研究紀要、30、pp.1-15.
- 少子化社会対策基本法（2003）平成15年7月30日法律第133号
- 少子化社会対策大綱（2004）平成16年6月4日閣議決定
- <http://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/low/taikou2.html>（検索日：2017年8月12日）
- 少子化社会対策大綱に基づく重点施策の具体的実施計画について（子ども・子育てプラン）（2004）平成16年12月24日少子化社会対策会議決定
- <http://www.mhlw.go.jp/houdou/2004/12/h1224-4.html>（検索日：2017年8月12日）
- 社会福祉法人全国社会福祉協議会（2016）全社協ブックレット⑦「保育所保育指針中間とりまとめ」のポイント～改定の基本的方向性～ p.8.
- 庄司順一（2001）子ども虐待の理解と対応 子どもを虐待から守るために フレーベル館 pp.3.
- 就学前の子どもに関する教育、保育などの総合的な提供の推進に関する法律（2006）平成18年6月15日法律第77号
- 高田直美・巽あさみ（2008）子育ての想像と現実の乖離がもたらす母親の感情 日本地域看護学会誌、10（2）、pp.47-53.
- 高濱裕子（2001）保育者としての成長のプロセス 風間書房、p.229.
- 高橋貴志（2014）保育者の専門性と「保護者支援」 高橋貴志（編著）保育者がおこなう保護者支援 子育て支援の現場から 福村出版、pp.29-45.
- 武田文・宮地文子・山口鶴子・野崎貞彦（1998）産後の抑うつとソーシャルサポート

- 日本公衆誌、45 (6)、pp.564-571.
- 竹原健二・須藤茉衣子 (2012) 父親の産後うつ 小児保健研究、71 (3)、pp.343-349.
- 田中昭夫 (1997). 幼児を保育する母親の育児不安に関する研究 乳幼児教育学研究、6、pp.57-64.
- 田中恵子 (2010) 父親の家事育児行動・夫婦の関係満足度の変化と母親の育児ストレスとの関連性 人間文化研究科年報、25、pp.215-224.
- 谷口綾子・奥山有紀 (2012) 子育てバリアフリーにおける世代間ギャップと副作用の可能性に関する研究 土木学会論文集 D3 (土木計画学)、68 (5)、pp.I_1133-I_1142.
- 手島幸子 (2010) 保育者における保護者からのストレスとソーシャルサポート、心理相談センター年報、6、pp.33-41.
- 手島聖子・原口雅浩 (2003) 乳幼児健康診査を通じた育児支援：育児ストレス尺度の開発 福岡県立大学看護学部紀要、1、pp.15-27.
- 寺菌さおり (2009) ストレスコーピングと親役割達成感との関係ー子どもの自己主張に対する親のストレスに着目してー 小児保健研究、68 (3)、pp.359-365.
- 徳弘由美子・三品浩基・有本晃子 (2015) 児に対する否定的感情を抱える母親の実態調査ー集団幼児健診における問診項目の分析ー小児保健研究、74 (4)、pp.556-562.
- 富沢一郎・高野陽 (1996) 母子保健の改正とこれからの母子保健 Bull.Natl.Inst. Public Health, 45 (2) pp.133-138.
- 外山紀子・小舘亮之・菊地京子 (2010) 母親における育児サポートとしてのインターネット利用 人間工学、46 (1)、pp.53-60.
- 上村眞生 (2012) 保育士のメンタルヘルスに関する研究ー保育士の経験年数に着目してー 保育学研究、50 (1)、pp.53-60.
- 上村眞生・七木田敦 (2008) 保育士のサポート源構造に関する実証的研究 小児保健研究、67 (6)、pp.854-860.
- 植村裕子・内藤直子 (2005) 出産から育児期へ過渡期における母親意識の研究ー夫の育児協力による影響の比較 香川県立保健医療大学紀要、2、pp.69-77.
- 植村裕子・野口純子・小川佳代・榮玲子・三浦浩美・竹内美由紀・舟越和代・宮本政子・松村恵子・大池明枝 (2008) 地域子育て支援事業に参加した母親の看護職への期待 香川県母性衛生学会誌、8 (1)、pp.39-43.
- 内田利広・古家美穂・河合三奈子 (2011) 母親の内的作業モデルから見た「子どもの育

- てにくさ」に関する研究－「ぐずり・依存行動」「不機嫌行動」「対人不安定行動」をめぐって－ 家族心理学研究、25（1）、pp.56-67.
- 渡辺英則（2014）認定子ども園の現状と課題 保育学研究、52（1）、pp.132-139.
- 渡邊タミ子・鈴木奈緒・長嶋純子・横森愛子・茂手木明美・比江島欣慎（2001）父親の育児協力・夫婦の対話と母親の育児満足度との関連性 山梨医大紀要、18、pp.47-53.
- 渡辺弥生・石井睦子（2010）乳幼児をもつ母親の育児ストレスにソーシャルサポートおよび自己効力感が及ぼす影響について 法政大学文学部紀要、60、pp.133-145.
- 八重樫牧子・小河孝則（2002）母親の子育て不安と就労形態との関連性に関する研究 川崎医療福祉学会誌、12（2）、pp.219-239.
- 山縣文治（2016）虐待をうけている子どもと子ども家庭福祉 子ども家庭福祉論 ミネルヴァ書房 p.164.
- 山口咲奈枝・佐藤幸子・遠藤由美子（2014）未就学児をもつ父親の育児行動と母親の育児負担感との関連 母性衛生、54（4）、pp.495-503.
- 山口孝子・堀田法子・下方浩史（2007）産後3年間における母親の精神状態と性役割に関する縦断的研究 小児保健研究、66（4）、pp.551-560.
- 山本嘉一郎・小野寺孝義（1999）Amosによる共分散構造分析と解析事例〔第2版〕 ナカニシヤ出版 p.17.
- 大和郁生（2003）第1子の妊娠・出産に伴う親意識の形成について 心理臨床心理学研究、21（2）、pp.137-145.
- 大和礼子（2001）夫の家事・育児参加は妻の夫婦関係満足感を高めるか？－妻の世帯収入貢献度による比較－ ソシオロジ、46（1）、pp.3-20.
- 矢澤圭介（2014）幼児期における母親の子どもとの一体感とは何か？－子どもイメージ・発達期待・しつけ方針などとの関係の分析－ 立正社会福祉研究、15（2）、pp.9-15.
- 読売新聞（2017）安心の子育て 第3部ワンオペ育児1、平成29年7月26日朝刊
- 米田綾子（2011）相談援助の技術・アプローチ 春見静子、澁谷昌史（編著）相談援助 光生館、pp.67-78.
- 吉田弘道（2013）育児不安尺度の作成に関する研究 その3 ー3歳児、および4歳児の母親用モデル 小児保健研究、72（6）、pp.780-788.
- 吉田弘道・山中龍宏・巷野悟郎・太田百合子・中村孝・山口規容子・牛島廣治（1999）育児不安尺度の作成に関する研究－1歳児半児の母親用試作モデルの検討 チャイル

ドヘルス、2、pp.45-49.

吉田敬子（2010）妊婦のメンタルヘルスの多様性と育児支援－妊娠・出産・育児期にわたる継続したメンタルケアと治療ストラテジー 子育て支援合同委員会（監修）、子育て支援と心理臨床、1 福村出版、pp.43-49.

吉田敬子・山下洋・岩元澄子（2006）育児支援のチームアプローチ 周産期精神医学の理論と実践、金剛出版、pp11-20.

吉永茂美・岸本長代（2007）乳児をもつ母親の育児ストレス、ソーシャル・サポートとストレス反応との関連－初産婦と経産婦の比較から－ 小児保健研究、66（6）、pp.767-772.

吉永茂美・眞鍋えみ子・瀬戸正弘・上里一郎（2006）育児ストレス尺度作成の試み 母性衛生、47（2）、pp.386-396.

全国保育士会倫理綱領（2003）平成 15 年 2 月 26 日 平成 14 年度第 2 回全国保育士会委員総会採択 <http://www.z-hoikushikai.com/about/kouryou/index.html>（検索日 2017 年 9 月 24 日）

全国保育士養成協議会（2009）「指定保育士養成施設卒業生の卒業の動向及び業務の実態に関する調査」報告書Ⅰ－調査結果の概要－ 保育士養成資料集、50、pp.246-252.

全国保育士養成協議会（2009）「指定保育士養成施設卒業生の卒業の動向及び業務の実態に関する調査」報告書Ⅰ－調査結果の概要－ 保育士養成資料集、50、p.326.

資料一覧

資料 1 子育てアンケート（研究 2・研究 3・研究 4）

資料 2 アンケート母親（研究 5・研究 6）

資料 3 アンケート保育者（研究 7・研究 8）

子育てアンケート(母親)

このアンケートは、子育て中のみなさまの育児に対する考え方などをお尋ねすることによって、これからの子育て支援にいかそうとするものです。

4種類のアンケートがありますが、どのアンケートも望ましい答えというものはありません。それぞれについて普段のあなたに最も近いと思われるところに○印をつけて答えてください。

なお、本調査の結果は、統計的に処理します。したがって個人的な結果が他の人に知られたりするようなことはありませんので、ありのままをご回答くださいますようよろしくお願いします。

1. あなたの年齢をご記入ください。

() 歳

2. あなたの配偶者の年齢をご記入ください。 () 歳

3. あなたの仕事について当てはまる所に○印で囲んでください。

{	職業をもっていない	・	フルタイムの仕事	・	パートタイムの仕事
	アルバイト・内職	・	家業	・	その他

4. あなたの配偶者の仕事について当てはまる所に○印で囲んでください。

{	職業をもっていない	・	フルタイムの仕事	・	パートタイムの仕事
	アルバイト・内職	・	家業	・	その他

5. 家族について、当てはまる所に○印で囲んでください。

{	夫婦のみ	・	夫方親族と同居	・	妻方親族と同居
	その他				

6. お子さまは何人、いらっしゃいますか。当てはまる所に○印で囲んでください。

{	1人	・	2人	・	3人	・	4人	・	5人	・	その他

(質問A) あなたの子育て意識についてお尋ねします。「よくあてはまる」「すこしあてはまる」「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」の中から1つだけ選んで○印をおつけください。

1. 子育てを楽しんでいる。

(よくあてはまる ・ すこしあてはまる ・ あまりあてはまらない ・ まったくあてはまらない)

2. こどもをかわいいと思う。

(よくあてはまる ・ すこしあてはまる ・ あまりあてはまらない ・ まったくあてはまらない)

3. 自分よりもこどものことを優先する。

(よくあてはまる ・ すこしあてはまる ・ あまりあてはまらない ・ まったくあてはまらない)

4. 子育てをして自分は成長していると思う。

(よくあてはまる ・ すこしあてはまる ・ あまりあてはまらない ・ まったくあてはまらない)

5. こどもをうまく育てていると思う。

(よくあてはまる ・ すこしあてはまる ・ あまりあてはまらない ・ まったくあてはまらない)

6. 身のまわりの人から必要とされていると思う。

(よくあてはまる ・ すこしあてはまる ・ あまりあてはまらない ・ まったくあてはまらない)

7. こどもを通じて友だち関係が広がったと思う。

(よくあてはまる ・ すこしあてはまる ・ あまりあてはまらない ・ まったくあてはまらない)

8. 保護者同士(ママ友)との関係はうまくいっていると思う。

(よくあてはまる ・ すこしあてはまる ・ あまりあてはまらない ・ まったくあてはまらない)

(質問B) 配偶者の育児態度についてお尋ねします。「よくあてはまる」「すこしあてはまる」「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」の中から1つだけ選んで○印をおつけください。

1. 夫は育児を一緒にしてくれる。

(よくあてはまる ・ すこしあてはまる ・ あまりあてはまらない・ まったくあてはまらない)

*「よくあてはまる」「すこしあてはまる」に○印をつけられた方にお尋ねします。

育児では、どのような世話をしているのでしょうか。あてはまるものに○印をおつけください(複数可)。

その他に○印をつけられた方は()の中に何をされているのか、お書きください。

(オムツの取り替え ・ 衣服の着脱 ・ 食事の介助 ・ 入浴
 こどもが泣いたらあやす ・ 幼稚園の送迎 ・ その他:())

2. 夫は家事を一緒にしてくれる。

(よくあてはまる ・ すこしあてはまる ・ あまりあてはまらない・ まったくあてはまらない)

*「よくあてはまる」「すこしあてはまる」に○印をつけられた方にお尋ねします。

たとえば、どのようなことをしているのでしょうか。あてはまるものに○印をおつけください。(複数可)

その他に○印をつけられた方は()の中に何をされているのか、お書きください。

(食事の支度 ・ 食後の片づけ ・ 掃除 ・ 洗濯
 食品の買い出し ・ ゴミ捨て ・ その他:())

3. 夫は子どもとよく遊ぶ。

(よくあてはまる ・ すこしあてはまる ・ あまりあてはまらない・ まったくあてはまらない)

*「よくあてはまる」「すこしあてはまる」に○印をつけられた方にお尋ねします。

1日にお子様とどれくらい遊んでおられますか。

その他に○印をつけられた方は()の中に時間をお書きください。

(2時間 ・ 1時間 ・ 30分程度 ・ 10分程度
 その他:())

4. 育児で困ったとき、夫は話をきいてくれる。

(よくあてはまる ・ すこしあてはまる ・ あまりあてはまらない・ まったくあてはまらない)

5. (育児以外のことでも)夫婦でよく話をする。

(よくあてはまる ・ すこしあてはまる ・ あまりあてはまらない・ まったくあてはまらない)

(質問C) 家族について、その他に○印をつけられた方にお尋ねします。「よくあてはまる」「すこしあてはまる」「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」の中から1つだけ選んで○印をおつけください。

1. 私は育児や家事をひとりでする。

(よくあてはまる ・ すこしあてはまる ・ あまりあてはまらない ・ まったくあてはまらない)

a. 「よくあてはまる」「すこしあてはまる」に○印をつけられた方にお尋ねします。

たとえば、どのような世話をしていच्छやいますか。あてはまるものに○印をおつけください(複数可)。

その他に○印をつけられた方は()の中に何をされているのか、お書きください。

(オムツの取り替え ・ 衣服の着脱 ・ 食事の介助 ・ 入浴
 こどもが泣いたらあやす ・ 幼稚園の送迎 ・ その他:())

b. 「よくあてはまる」「すこしあてはまる」に○印をつけられた方にお尋ねします。

たとえば、どのようなことをしていच्छやいますか。あれはまるものに○印をおつけください(複数可)。

その他に○印をつけられた方は()の中に何をされているのか、お書きください。

(食事の支度 ・ 食後の片づけ ・ 掃除 ・ 洗濯
 食品の買い出し ・ ゴミ捨て ・ その他:())

2. 私は子どもとよく遊ぶ。

(よくあてはまる ・ すこしあてはまる ・ あまりあてはまらない ・ まったくあてはまらない)

a. 「よくあてはまる」「すこしあてはまる」に○印をつけられた方にお尋ねします。

1日にお子様とどれくらい遊んでおられますか。

その他に○印をつけられた方は()の中に時間を書いてください。

(2時間 ・ 1時間 ・ 30分程度 ・ 10分程度
 その他:())

b. 「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」に○印をつけられた方にお尋ねします。

育児や家事を手伝ってくださる方はいच्छやいますか。

(いる ・ いない)

c. 「いる」に○印をつけられた方にお尋ねします。それはどなたですか

(実家の親 ・ ご自分の兄弟・姉妹 ・ 友人 ・ 近所の方 ・ ママ友
 公的機関の関係者 ・ ファミリー・サポートセンター ・ その他:())

(質問D) あなたが母親になる前の子育て体験をお尋ねします。「よくあてはまる」「すこしあてはまる」「あまりあてはまらない」「あまりあてはまらない」の中から1つだけ選んで○印をおつけください。

1. 赤ちゃん(おおむね2歳ごろ)をだっこしたことがある。

(よくあてはまる ・ すこしあてはまる ・ あまりあてはまらない ・ まったくあてはまらない)

2. あやしたり遊んだことがある。

(よくあてはまる ・ すこしあてはまる ・ あまりあてはまらない ・ まったくあてはまらない)

3. ミルクを飲ませたり、離乳食を食べさせたことがある。

(よくあてはまる ・ すこしあてはまる ・ あまりあてはまらない ・ まったくあてはまらない)

4. オムツを替えたり着替えさせたことがある。

(よくあてはまる ・ すこしあてはまる ・ あまりあてはまらない ・ まったくあてはまらない)

5. 寝かしつけたことがある。

(よくあてはまる ・ すこしあてはまる ・ あまりあてはまらない ・ まったくあてはまらない)

6. 赤ちゃん(おおむね2歳ごろ)の相手や世話をしたことがない。

(よくあてはまる ・ すこしあてはまる ・ あまりあてはまらない ・ まったくあてはまらない)

- a. 1. から 5. までに「よくあてはまる」「すこしあてはまる」に○印をつけられた方にお尋ねします。
子育て体験をされた相手や場所や機会はどのようなものでしたか。あてはまるものに○印をおつけください(複数可)。

自分の兄弟姉妹 ・ 友だちの兄弟姉妹 ・ 父母の兄弟姉妹 ・ いとこやどこ
近所のこども ・ こどもの頃に通園していた保育園(所) ・ 職場体験学習
教育実習や保育実習 ・ その他:()

- b. 6に「よくあてはまる」「すこしあてはまる」に○印をつけられた方にお尋ねします。

あなたの子育てを手助けしてくださる方はどなたですか。

あてはまるものに○印をおつけください。(複数可)

夫 ・ 自分の両親 ・ 夫の両親 ・ 自分の兄弟姉妹 ・ 夫の兄弟姉妹 ・ ママ友
友人 ・ 近所の方 ・ 公共機関の関係者 ・ ファミリーサポートセンター
その他:()

(質問E)あなたが母親になる前の子育てに対する期待と母親になった後での現実の子育てについてお尋ねします。「よくあてはまる」「すこしあてはまる」「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」の中から1つだけ選んで○印をつけてください。

1. 母親になる前の子育てに対する期待と現在の子育てに隔たりを感じている。

(よくあてはまる ・ すこしあてはまる ・ あまりあてはまらない・ まったくあてはまらない)

- a.「よくあてはまる」「すこしあてはまる」に○印をつけられた方にお尋ねします。

その理由をご記入ください。

①	②	③

- b.「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」に○印をつけられた方にお尋ねします。

その理由をご記入ください。

①	②	③

2. あなたが子育てを楽しんでいると感じたりやり甲斐があると感じることをご記入ください。

①	②	③

以上で質問は終わりです。書き忘れている所がないか、もう一度見直してください。
ありがとうございました。

アンケート（ 母親 ）

このアンケートは、子育て中のみなさまの育児に対する考え方などをお尋ねすることによって、これからの子育て支援にいかそうとするものです。

7種類のアンケートがありますが、どの項目にも正しい答えや間違った答えというものはありません。感じたまま率直にお答えください。アンケートは無記名で行います。回答は全て統計的に処理され、本研究の目的外に用いられることはありません。情報は厳密に保護され、研究終了後破棄されます。アンケートへのご協力は自由意志によるものです。回答したくない項目は飛ばしてください。また、途中でやめることもできます。ご協力いただける場合は、下記の「アンケートに協力する」に対して「はい」に○をつけ、回答をはじめてください。（ご協力いただけない場合は、そのまま何も記入せず破棄してください） ＊調査に協力しないことによる不利益は一切ありません。

アンケートにご協力いただける方は、下の欄に記入してください。

アンケートに協力する	1. はい	2. いいえ
------------	-------	--------

1. あなたの年齢をご記入ください。 () 歳
2. あなたの配偶者の年齢をご記入ください。 () 歳
3. あなたの就労状況について当てはまる所に○印で囲んでください。

仕事なし
・
常勤勤務
・
非常勤勤務
・
自営業
・
その他
4. 家族について、当てはまる所に○印で囲んでください。

核家族である
・
三世代家族
・
ひとり親家庭
・
その他
5. お子さまは何人、いらっしゃいますか。当てはまる所に○印で囲んでください。

1人
・
2人
・
3人
・
4人
・
その他
6. ご結婚されてから何年になりますか。(年 ヶ月)
7. ご夫婦で子どもの教育や子育てについてどの程度分担しておられますか。当てはまる所に○印で囲んでください。

もっぱら自分
・
ふたりで同じくらい
・
もっぱら配偶者

(質問 1) あなたが**母親になる前の期待する子どもや子育て**についてお尋ねします。

下記の項目についてあなたの気持ちに一番近いものを一つ選んで○印をつけてください。

項目は全部で24項目ありますので、とばさないように順番にご回答ください。

母親になる前の期待する子育て	そう 思う	ど ち ら か と い え ば	ど ち ら か と い え ば	そ う 思 わ な い
1. 私は、子どもの様子がよくわかるだろう	4	3	2	1
2. 私は、育児に関心があるだろう	4	3	2	1
3. 私は、子どもと関わる時間を充分にとるだろう	4	3	2	1
4. 私は、子どもの欲求がよくわかるだろう	4	3	2	1
5. 私は、子どもの気持ちがわからないだろう	4	3	2	1
6. 私は、現在の子どもの発育がよくわかるだろう	4	3	2	1
7. 私は、子どもを寝かしつけることがうまくできるだろう	4	3	2	1
8. 私は、子どもの個性がわかるだろう	4	3	2	1
9. 私は、子どもと関わる時間を大事にしていないだろう	4	3	2	1
10. 私は、子どものこれからの発育の様子を想像することができる	4	3	2	1
11. 私は、育児をすることに喜びを感じているだろう	4	3	2	1
12. 私は、子どもに喜びを与えているだろう	4	3	2	1

	そう 思う	ど ち ら か と い え ば	ど ち ら か と い え ば	そ う 思 わ な い
13. 私は、子どもとスキンシップがとれていないだろう	4	3	2	1
14. 私は、親としての充実感を感じていないだろう	4	3	2	1
15. 私は、子どもの性格がわかるだろう	4	3	2	1
16. 子どもは、いつも私がいやがることをするだろう	4	3	2	1
17. 私は、子どもとコミュニケーションがとれているだろう	4	3	2	1
18. 私は、親としてだけの自分をむなしいと思っているだろう	4	3	2	1
19. 私は、子どもとの関係に満足していないだろう	4	3	2	1
20. 私は、子どもの食事（授乳）の世話がうまくできるだろう	4	3	2	1
21. 私は、育児をすることに満足感を感じてないだろう	4	3	2	1
22. 私は、子どもによく話しかけているだろう	4	3	2	1
23. 私は、子育てに充実感を感じてないだろう	4	3	2	1
24. 私は、子どもに信頼されているだろう	4	3	2	1

(質問2) あなたが**母親になった後**で現実の子育てや母親になったことについてお尋ねします。

下記の項目についてどの程度あてはまりますか。「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえどそう思わない」「そう思わない」の中から一つだけ選んで○印をつけてください。

母親になった後での現実の子育て	そう 思う	ど ち ら か と い え ば	ど ち ら か と い え ば	そ う 思 わ な い
1. 私は、子どもの様子がよくわかります	4	3	2	1
2. 私は、育児に関心があります	4	3	2	1
3. 私は、子どもと関わる時間を充分にとりたいと思います	4	3	2	1
4. 私は、子どもの欲求がよくわかります	4	3	2	1
5. 私は、子どもの気持ちがわかりません	4	3	2	1
6. 私は、現在の子どもの発育がよくわかります	4	3	2	1
7. 私は、子どもを寝かしつけることがうまくできます	4	3	2	1
8. 私は、子どもの個性がわかります	4	3	2	1
9. 私は、子どもと関わる時間を大事にしていません	4	3	2	1
10. 私は、子どものこれからの発育の様子を想像することができます	4	3	2	1
11. 私は、育児をすることに喜びを感じています	4	3	2	1
12. 私は、子どもに喜びを与えていると思います	4	3	2	1

	そう 思う	ど ち ら か と い え ば そ う 思 う	ど ち ら か と い え ば そ う 思 わ ない	そ う 思 わ ない
13. 私は、子どもとスキンシップがとれていません	4	3	2	1
14. 私は、親としての充実感を感じていません	4	3	2	1
15. 私は、子どもの性格がわかります	4	3	2	1
16. 子どもは、いつも私がいやがることをします	4	3	2	1
17. 私は、子どもとコミュニケーションがとれています	4	3	2	1
18. 私は、親としてだけの自分をむなしいと思います	4	3	2	1
19. 私は、子どもとの関係に満足していません	4	3	2	1
20. 私は、子どもの食事（授乳）の世話がうまくできます	4	3	2	1
21. 私は、育児をすることに満足感を感じていません	4	3	2	1
22. 私は、子どもによく話しかけています	4	3	2	1
23. 私は、子育てに充実感を感じていません	4	3	2	1
24. 私は、子どもに信頼されていると思います	4	3	2	1

(質問 3) あなたと配偶者さまとの関係について、お尋ねします。

日ごろ、あなたは、あなたと配偶者さまとの関係の中で、さまざまな気持ちを抱いていると思います。

それぞれについて、日ごろのあなたの気持ちにどのくらいあてはまるかを答えてください。

「よくあてはまる」、「少しあてはまる」、「あまりあてはまらない」、「まったくあてはまらない」のうち、

最も該当すると思うもの一つに○印をつけてください。

	よくあてはまる	少しあてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない
1. 心配事や悩みを聞いてくれる	4	3	2	1
2. あなたに気を配ったり思いやりたりしてくれる	4	3	2	1
3. 出産や育児・子どもの発達や病気に関して心配事を相談できる	4	3	2	1
4. 家事（炊事・掃除・洗濯）を手伝ってくれる	4	3	2	1
5. 授乳や食事の世話をしてくれる	4	3	2	1
6. おむつ替えや着替え・トイレの世話をしてくれる	4	3	2	1
7. 子どもの世話や子どもの遊び相手をしてくれる	4	3	2	1

(質問 4) あなたが子育てをしているとき、次のようなことを感じることがありますか。

「よくそう思う」、「ときどきそう思う」、「いくらかそう思う」、「全くそう思わない」のうち、**最も該当すると思われるもの一つに○印をつけてください。**

	よく そう 思う	とき どき そう 思う	いく らか そう 思う	全 く そ う 思 わ な い
1. 育児のことでどうしてもよいかわからなくなる	4	3	2	1
2. 子どもをうまく育てていけるか不安になる	4	3	2	1
3. 自分の育て方でよいのかどうか不安である	4	3	2	1
4. 子どもにうまく対応できていないと感じることがある	4	3	2	1
5. 入園後、自分の子どもが他の子どもに遅れないでついていけるか不安になる	4	3	2	1
6. 他の子どもにはできて、自分の子どもにはできないことが多いと感じる	4	3	2	1
7. 同年齢の子どもと比べて、自分の子どもは幼いと感じる	4	3	2	1
8. 他の子どもと比べて、自分の子どもの発達が遅れているのではないと思う	4	3	2	1

(質問 5) あなたが、毎日、お子さまと経験する出来事や場面で、うれしいと感じる程度についてお答えください。
「うれしい」、「どちらかといえばうれしい」、「どちらかというとうれしくない」、「うれしくない」のうち、
最も該当すると思われるもの一つに○印をつけてください。

	う れ し い	ど ち ら か と い え ば う れ し い	ど ち ら か と い う と う れ し く な い	う れ し く な い
1. 子どもの食事を作っているとき	4	3	2	1
2. 子どもの洋服など、必要なものを選んでいるとき	4	3	2	1
3. 子どもの食事が終わった後、片付け（食器洗いなど）をしているとき	4	3	2	1
4. 子どもが、両親（あなたとあなたの夫）以外の人と楽しそうに遊んでいるとき	4	3	2	1
5. 子どもと手をつないで歩いているとき	4	3	2	1
6. 子どもの服を洗濯し、たたんでいるとき	4	3	2	1
7. 子どもが知らない人の前や知らない場所で「ママ」と頼ってくるとき	4	3	2	1
8. 子どもに洋服を着替えさせるとき（子どもの着替えを手伝うとき）	4	3	2	1
9. 子どもと一緒に風呂に入っているとき	4	3	2	1
10. 子どもに絵本を読んであげているとき	4	3	2	1

(質問6)あなたが母親になる前と母親になった後で「こんなはずではなかった」と、子育てについて差(ギャップ)を感じたことはありましたか。

(よくあった ・ すこしあった ・ あまりなかった ・ まったくなかった)の中から1つだけ選んで○印をつけてください。

a. 「よくあった」「すこしあった」に○印をつけられた方にお尋ねします。

その理由をご記入ください(例えば、配偶者との関係で…、ご自身のことで…社会問題など)。

①	②	③

b. 「あまりなかった」「まったくなかった」に○印をつけられた方にお尋ねします。

その理由をご記入ください(例えば、配偶者との関係で…、ご自身のことで…社会問題など)。

①	②	③

2. あなたが求める保護者支援とはどのようなことですか。その内容をお書きください。

①	②	③

3. 子育て不安が増えていると言われていますが、あなたはどのように思いますか。

①	②	③

以上でアンケートは終わりです。ご回答くださいまして本当にありがとうございました。
 ころより感謝いたします。

アンケート(保育者)

1. このアンケートは、就学前の子どもに対する教育及び保育施設で保護者に対する支援を行っておられる先生方を対象に、みなさまの保護者支援に対する考え方などをお尋ねすることによって、これからの保護者支援にいかそうとするものです。
2. どの項目にも正しい答えや間違った答えというものはありません。日頃、感じたままを率直にお答えください。
3. アンケートは、無記名で行います。本研究の目的外に用いられることはありません。情報は厳密に保護され、研究終了後は破棄されます。
4. アンケートへのご協力は自由意志によるものです。
回答したくない項目は飛ばしてください。また、途中でやめることもできます。ご協力いただける場合は、下記の「アンケートに協力する」に対して「はい」に○をつけ、回答をはじめてください。

(ご協力いただけない場合は、そのまま何も記入せず破棄してください)

＊アンケートに協力しないことによる不利益はいっさいありません。

アンケートにご協力いただける方は、下の欄に記入してください。

アンケートに協力する	1. はい	2. いいえ
-------------------	--------------	---------------

本アンケートについてのご意見・ご質問は、以下までご連絡ください。

大阪総合保育大学大学院 児童保育研究科 渡辺俊太郎 (指導教員)
大阪総合保育大学大学院 児童保育研究科 小西眞弓 (研究者)

〒546-0013 大阪市東住吉区湯里6丁目4-26
(連絡先) 06-6702-0334(大学院代表)

資料3

1. 保護者に対する支援についてあなたやあなたの園ではどのように取り組んでおられるのかをお尋ねします。
 下記の項目についてどの程度あてはまりますか。「ほとんど取り組んでいない」「あまり取り組んでいない」
 「まずまず取り組んでいる」「大いに取り組んでいる」の中から1つだけ選んで○印をつけてください。

	組 ん ど い な い	ほ ん ど い な い	組 ん で い な い	あ ま り 取 り 組 ん で い な い	組 ん で い る	ま ず ま ず 取 り 組 ん で い る	組 ん で い る	大 い に 取 り 組 ん で い る
1. 子どもの送迎時の対話で保育内容や様子を知らせる	1			2		3		4
2. 連絡ノートや通信、園内掲示で保育内容や様子を知らせる	1			2		3		4
3. 保護者が参加する機会に保護者の気持ちや悩みを直接聴き取る	1			2		3		4
4. 保護者が参加する機会が保護者同士の交流の場になるよう配慮する	1			2		3		4
5. 保護者が参加する機会の内容や方法を、保護者支援の視点から工夫する	1			2		3		4
6. 保護者会・その他の保護者の自主的活動で保護者同士の交流を促す	1			2		3		4
7. 保護者から求められた時に、相談・助言のための面接の機会を設ける	1			2		3		4
8. 保護者からの求めがなくても、積極的に面接の機会を設ける	1			2		3		4
9. 面接場面において傾聴を基本とする	1			2		3		4
10. 面接場面において、保護者の心情を理解し、共感に基づいて説明・助言する	1			2		3		4
11. 面接場面において、保護者自身が納得や解決に至るように支援する	1			2		3		4
12. 他の職種との連携を密にし必要に応じて紹介・情報提供する	1			2		3		4
13. 園の方針や意図について説明し保護者の理解に努める	1			2		3		4
14. 保育所保育指針の内容を説明したり、その内容を活用した情報提供や助言を行う	1			2		3		4
15. 保護者との間で、子どもへの愛情や成長を喜ぶ気持ちを伝え合う	1			2		3		4
16. 保護者がおかれている状況や思いを受け止めて理解する	1			2		3		4

	組 んで いな い	ほ と ん ど 取 り	組 ん で い な い	あ ま り 取 り	ま ず ま ず 取 り 組 ん で い る	大 い に 取 り 組 ん で い る
17. 疑問や要望に、対話を通して誠実に対応する	1	2	3	4		
18. 延長保育の実施	1	2	3	4		
19. 夜間保育の実施	1	2	3	4		
20. 休日保育の実施	1	2	3	4		
21. 病児または病後児保育の実施	1	2	3	4		
22. 連携を密にし、必要に応じて専門機関からの助言を受けるなど適切な対応を図る	1	2	3	4		
23. 必要な保育相談支援を行う	1	2	3	4		
24. 他の保護者や他の子どもに対して、障がいに対する正しい知識や認識がもてるよう支援する	1	2	3	4		
25. 保育相談支援業務を重要な業務としてとらえて実践する	1	2	3	4		
26. 保育相談支援の内容によっては、ソーシャルワークやカウンセリングなどの知識や技術を援用する	1	2	3	4		
27. 個別支援に当たって、情報収集と分析、さらに支援方法の選択を行う	1	2	3	4		
28. 子どもと保護者を含む支援計画や記録を作成する	1	2	3	4		
29. 主たる支援者となる保育者を支え、組織的に子どもや家族を支援する体制をつくる	1	2	3	4		
30. 市町村や関係機関と連携する等適切な対応を図る	1	2	3	4		

2. 先生の所属する園での保護者への対応や取り組みについて、ご回答者であるあなたご自身の実践などについてお尋ねします。下記の項目についてどの程度あてはまりますか。「全くあてはまらない」「あまりあてはまらない」「ときどきあてはまる」「とてもよくあてはまる」の中から1つだけ選んで○印をつけてください。

	あては まら ない 全 く	あて は ま ら ない あ ま り	あて は ま る と き ど き	あて は ま る と て も よ く
1. 園内で、その家庭についてケース会議を開いた	1	2	3	4
2. 園がこれまで行った対応を振り返った	1	2	3	4
3. その保護者や家庭の様子を観察し、理解を深めた	1	2	3	4
4. 園内で、その保護者について複数職員で話し合い、一貫した対応をとった	1	2	3	4
5. 園内で、複数職員が役割分担し、その保護者と接した	1	2	3	4
6. クレームを受けた前後の状況を記録し、事実関係を整理した	1	2	3	4
7. クレームを寄せてくる保護者の家庭と園で話し合いをした	1	2	3	4
8. 専門家からその保護者への対応についてアドバイスを得た	1	2	3	4
9. 外部機関と園とで役割分担をしてその家庭と関わった	1	2	3	4
10. 外部機関の職員と連絡を取り合った	1	2	3	4
11. 園内で、巡回相談員や臨床心理士と共に、保護者対応についての研修会を実施した	1	2	3	4
12. 巡回相談員や臨床心理士がその保護者と話した	1	2	3	4

	あてはまらない 全く	あてはまら あまり	あてはま るとき	あてはま よく
13. (あなたを)信頼してくれる人がいた	1	2	3	4
14. (あなたを)同僚や仲間が認めてくれた	1	2	3	4
15. (あなたを)本気で心配してくれる人がいた	1	2	3	4
16. (あなたに)気軽に相談できる相手がいた	1	2	3	4
17. (あなたが)上司や仲間から励ましを受けた	1	2	3	4
18. (あなたを)褒め、評価してくれる人がいた	1	2	3	4
19. (あなたに)個人的な話を聞いてくれる人がいた	1	2	3	4
20. (あなたは)保護者に日頃の子育てに対する労いの言葉をかけるようにしている	1	2	3	4
21. (あなたは)保護者の家庭環境の確認を行うようにしている	1	2	3	4
22. (あなたは)子どもの様子を肯定的に保護者に伝えるようにしている	1	2	3	4
23. (あなたは)園以外の社会的資源について情報を収集するようにしている	1	2	3	4
24. (あなたは)子どもの話以外でも保護者と会話するようにしている	1	2	3	4

4. 就労形態 1. 常勤 2. 非常勤・パート

5. 先生の経験年数(現在の職場での)は何年ですか。

6. 現在担当しているクラスの児の年齢を、お選びください。

7. 教育・保育時間外で、保護者への対応にかかる時間はどれくらいありますか。

(例:相談にのる、話し相手をする、電話で連絡する、要支援家庭への対応など)

1日で（ ）分、1週間で（ ）時間くらい

8. 現在、仕事上で困っていることや悩みごとがありますか。 1. はい 2. いいえ
よろしければ、その内容をお書きください。

--

9. 仕事上、困ったことや悩みごとがある時の相談相手はいらっしゃいますか。

1. いる 2. いない

a. 相談相手がいらっしゃる先生にお尋ねします。どなたですか(いくつでも○をおつけください)。

- 167

4. 先生が接しておられる保護者について、最近どのような印象をお持ちですか。

以下の項目があてはまるか否か1から4の該当する番号1つに○をおつけください。

1. 全くあてはまらない	2. あまりあてはまらない	3. 少しあてはまる	4. とてもよくあてはまる
--------------	---------------	------------	---------------

- | | |
|--|--------------------------|
| 1. 権利意識が強い..... | 1----- 2 ----- 3 ----- 4 |
| 2. 子どもとの接し方や遊び方がわからない..... | 1----- 2 ----- 3 ----- 4 |
| 3. 園や職員に難しい要求をする..... | 1----- 2 ----- 3 ----- 4 |
| 4. 自己中心的..... | 1----- 2 ----- 3 ----- 4 |
| 5. 子どもに過保護・過干渉..... | 1----- 2 ----- 3 ----- 4 |
| 6. しつけや教育に熱心..... | 1----- 2 ----- 3 ----- 4 |
| 7. 子どもの言動に過剰な反応・対応をする..... | 1----- 2 ----- 3 ----- 4 |
| 8. 子どもを放任・無関心..... | 1----- 2 ----- 3 ----- 4 |
| 9. 子育てに負担感・不安感を持っている..... | 1----- 2 ----- 3 ----- 4 |
| 10. 子どもに容易に手をあげたり、大声でしかったりする・・ | 1----- 2 ----- 3 ----- 4 |
| 11. 子どもを抱きしめたり、やさしい言葉をかけて
愛情を示している..... | 1----- 2 ----- 3 ----- 4 |
| 12. 子どもの食事や健康に気を配っている..... | 1----- 2 ----- 3 ----- 4 |
| 13. 子どもの生活リズムを大切にしている..... | 1----- 2 ----- 3 ----- 4 |
| 14. 父母(家族)が協力して子どもを育てている..... | 1----- 2 ----- 3 ----- 4 |
| 15. 子育てを楽しんでいる..... | 1----- 2 ----- 3 ----- 4 |
| 16. 園の方針に協力的である..... | 1----- 2 ----- 3 ----- 4 |
| 17. 保護者同士の交流が盛んである..... | 1----- 2 ----- 3 ----- 4 |
| 18. 子どもの成長を楽しみにしている..... | 1----- 2 ----- 3 ----- 4 |

5. 先生が感じておられる保護者支援についてご意見がありましたら、お聞かせください。

お忙しいなか、ご協力本当にありがとうございました。

要約

本研究では、保育者が保護者支援を行うに当たり、「子育ての期待と現実の差」が母親の育児への肯定的感情に及ぼす検討、及び望ましい保護者支援について検討を行った。まず、第1章においては、母親が日常の子育てによって起因する育児への否定的感情と肯定的感情に関する研究について概観を行った。さらに、子どもや子育てなどについて保護者が「理想とする・期待する・想像する」ことを「子育ての期待」として捉え、これまで報告されてきた子育ての期待に関連した研究の動向についてデータベースを用いて概観した（研究1）。その結果、女性が子どもの養育の中で担う「こんなはずではなかった」という「子育ての期待と現実の差」を認識している可能性があること、男性においても父親として母親が期待する家事や子育てへの参加、及びその精神的サポートの必要性を十分に認識していない可能性が推察された。また、3歳頃からの自我の発達の始まりに対して母親が苛立ちを覚えること、期待する子どもの認識と現実の子どもの認識の差から、子どもへの過度な要求や関わりをしている可能性があることも推察された。このようなことから、保育者が保護者支援を行う場合には、親役割、子どもへの認識、父親との関係など多面的に「子育ての期待と現実の差」から保護者を捉えることで、適切な支援の提供が可能となり、保護者の子育てを支えることにつながる可能性が示された。したがって、本研究の目的は、幼児をもつ母親の「子育ての期待と現実の差」が、母親の育児感情に与える影響を明らかにすること、教育・保育施設において保育者が行う保護者支援において、「子育ての期待と現実の差」の視点から検討を行うこととした。第2章では本研究の目的と構成について述べ、さらに基本概念の定義を行った。

第3章第1・2節では、「子育ての期待と現実の差」が大きいと感じる群及び小さいと感じる群の自由記述の検討を行った。その結果、「子育ての期待と現実の差」が大きいと感じる群において、年齢高群では「育児負担感」など、年齢低群で「時間の制約」などのカテゴリーで記述が有意に多かった。また、職業有群では「時間の制約」など、職業無群では「育児負担感」などのカテゴリーで記述が有意に多かった（研究2）。また、「子育ての期待と現実の差」が小さいと感じる群では、年齢高群では「我慢強さ」などで有意に記述が多く、年齢低群では「兄弟の子育ての観察」などで有意に記述が多い傾向が見られた。また、職業有群では「実母の子育て」、職業無群では「兄弟の子育ての観察」において有意に記述が多かった（研究3）。この結果から、保護者支援では母親の年齢の

高低、職業の有無に分けて、支援や情報提供の方法を変えていく必要性が示唆された。続く第3節では、幼児をもつ母親の育児への肯定的感情と「子育ての期待と現実の差」との関連を、母親の年齢の高群低群及び職業の有群無群で検討した（研究4）。3・4・5歳児をもつ母親を対象とした質問紙調査の結果、「子育ての期待と現実の差」は母親の育児への肯定的感情の「育児肯定感」に対して、年齢高群では負の有意傾向が見られ、職業無群では有意な負の影響を及ぼしていた。

続く第4章では、第1節において、母親が子どもや子育てに対して親になる前に抱いていた「期待と現実の差」を、「親役割の状態の差」や「子どもへの認識の差」から捉え、それらと「父親からのサポート」、「育児感情」、「日常生活場面での育児幸福感」との関連について検討を行った（研究5）。3・4・5歳児をもつ母親を対象とした質問紙調査の結果、「子育ての期待と現実の差」がプラスの群において、「母親の年齢」及び「関係性場面」から「親役割の状態の差」へは正の影響、「生活場面」から「子どもへの認識の差」に負の影響が示された。また、「子育ての期待と現実の差」がマイナスの群では、「生活場面」及び「関係性場面」から「親役割の状態の差」へ正の影響、「育ちへの不安感」、「育て方への不安感」から負の影響、「生活場面」及び「育ちへの不安感」から「子どもへの認識の差」へ負の影響を与えていた。「子育ての期待と現実の差」がマイナス群の保護者支援においては、保育者が母親自身に適した対処法を一緒に考え、自身で解決できる道筋を支えることが求められることが示唆された。また、第2節において、「子育ての期待と現実の差」がプラスの群とマイナスの群の母親が求める保護者支援について検討を行った。その結果、「子育ての期待と現実の差」がプラスの群の母親が求める保護者支援は、「遊び場の確保」などであり、「子育ての期待と現実の差」がマイナスの群では、「社会の雰囲気づくり」などであることが示された（研究6）。それぞれのニーズを把握した上で、それに対応する支援のあり方を考えていくべきであることが示された。

第5章では、第1節の研究7において、保育者がもつ主観的な見方である「保育者の保護者観」や教育・保育施設での「子どもや保護者を支える職員体制」が、個別の保護者に寄り添い養育力の向上に資する支援である「望ましい保護者支援」に影響を与えているか検討を行った。保育者を対象とした質問紙調査の結果、「保育者の保護者観」は「子どもや保護者を支える職員体制」や「望ましい保護者支援」に正の影響を与える可能性が示され、「子どもや保護者を支える職員体制」は「望ましい保護者支援」に正の影響を与えることが示された。そして、第2節の研究8において、経験年数と保育者が感じる

保護者支援との関連性、及び保護者支援で感じるものと「保護者への共感的支援」との関連性について検討を行った。その結果、経験年数の違いによる保育者が感じる保護者支援においては、保育者の経験による違いが見られ、保護者支援の内容や技術が経験の中で高まっていくものであることが示された。さらに、「子育ての期待と現実」の視点から捉える「保護者への共感的支援」では、保護者との日常的な関わりの中で「保育知識や技術不足」、「保育者の方が年下である」といったことなどを感じながら、保育者としての技術や質及び経験について意識化を行い、支援を行っているとは推察された。

以上のような本研究によって、幼児をもつ母親の「子育ての期待と現実の差」は、母親の育児への肯定的感情の「育児肯定感」に対して、職業無群では有意な負の影響、年齢高群では負の有意傾向を及ぼすことが示された。また、「育児感情」の「育児への不安感」と「日常生活での育児幸福感」は「子育ての期待と現実の差」に影響を及ぼしていた。さらに、保育者がもつ保護者観や「子どもや保護者を支える職員体制」が、「子育ての期待と現実の差」から保護者を捉え、個々の状況に配慮された「望ましい保護者支援」に影響を与えていた。この本研究における保護者を「子育ての期待と現実の差」から捉える必要性及び保育者の望ましい保護者支援に関する研究の意義としては、まず、「子育ての期待と現実と現実の差」が母親の育児への肯定的感情に影響を与えていることを示したことが挙げられる。次に、保護者が抱く育児への肯定的感情の観点から検討を行っている点がある。研究 2・研究 3・研究 4 における「子育ての期待と現実の差」が大きい群において、職業無群と年齢高群では『育児負担感』における「衝動的な叱責」が有意に高かった。また、職業有群と年齢低群においても『子どものしつけや対処法』における「反抗期の対応」が有意に高かったことは、本研究の対象である母親は子どもとの接触経験や育児経験が少ないと考えられる世代であり、幼児期の子どもの特性を理解した上での対処法をもっていないことが推察される。保育者が保護者を「子育ての期待と現実の差」の視点から捉えることに加えて、職業の有無群や年齢の高低群による個別的な支援を行うことで、子育てに満足感や自信を抱く可能性があると推測される。次に、研究 5・研究 6 では保護者を理解するために「育児期の親性尺度」（大橋ら、2010）の「親役割の状態」と「子どもへの認識」の二つの下位領域から「子育ての期待と現実の差」を捉えた。本研究では「子育ての期待と現実の差」を検討する上で、親としての自らの価値である「母親になった後の現実の子育て」を親としての自らの評価から、親になる以前の評価である「母親になる前の期待する子育て」を除いたものを用いたことで、「子育ての期待と現実の差」

がプラスの群とマイナスの群のそれぞれに対する保護者支援のあり方を提供できる可能性が考えることができた。保護者が子育てを通して人間として成長したと思えるためには、保護者自身が子育ての問題に取り組めるように、しつけの方略や対処法の提供などを行い、うまくいったと実感できる支援が求められよう。保育者が「子育ての期待と現実の差」から得られた情報をもとに、それぞれのニーズに合った支援を提供することで保護者の子育てを支えることにつながる可能性があるのではないかと推察される。そして、研究 7・研究 8 において、保護者支援の観点から保育者が行う「望ましい保護者支援」についての結果がもつ意義が考えられる。長時間保育や休日保育など、多様な保護者ニーズに対応した教育や保育が行われている中、新任保育者であっても日々のコミュニケーションを通した保護者対応が求められている。経験の少ない新任保育者の保護者支援を支えるために、中堅・ベテラン保育者には保育知識や技術を伝達することも求められると考えられる。保育者が保護者を理解するために「子育ての期待と現実の差」の視点を取り入れることで、その差に応じた支援が提供される可能性につながると考えられる。

本研究の限界としては、研究 2・研究 3 は質問紙調査による検討であることから、その内容が保護者自身の主観的な回答に基づくものであるため、実際の状況とは異なる可能性もある。母親と父親の両方の調査データを用いる等の検討を行い、母親が子育てにおいて肯定的感情を抱く要因について研究を重ねていくことが必要である。研究 4 において開発された母親の育児への肯定的感情尺度について、信頼性については確認されたが、構成概念妥当性の検討が十分ではないということが挙げられる。また、研究 5 においては子育て体験の時期を特定しなかったために育児期の親性に関する研究結果との関連が考察できなかった。また、「子育ての期待と現実の差」がマイナスの群の母親の支援についてさらに検討を行う必要がある。さらに、研究 6 において母親が求める保護者支援についての自由記述から母親を取り巻く個人的環境における「相談支援（場所）」で有意な差が認められたことから、母親が「子育ての期待と現実の差」を小さくする要因については、「父親からのサポート」だけでなく父親以外の家族や、友達、保育者からのサポートについても検討を行う必要がある。そして、望ましい保護者支援についてはその効果について実証が必要であり、「子育ての期待と現実の差」に着目して、具体的かつ有効な支援について検討を続けていく必要がある。今後は、より多くの保育者を対象にデータ数を増やし、保護者支援の内容や家庭との具体的な連携についての提言が行えるよう研究知見の積み重ねが望まれる。

本研究をもとにして考え得る今後の方向性としては、幼児をもつ父親の「子育ての期待と現実の差」についても調査を行い、夫婦間の育児への肯定的感情の違いや夫婦間の関係性を明らかにすることを通して、家族関係への支援や情報提供ができると考えられる。また、「保育者の保護者観」、「子どもや保護者を支える職員体制」、「望ましい保護者支援」の関係性については、保育士の個人的サポート源、職場の人間関係、仕事の量的負荷など、保育者が保護者に積極的に関わる際に、保護者対応で困難感を感じた場合の対応や改善に必要な資源についても、今後の検討が必要であろう。

謝辞

本学位請求論文の執筆に当たりまして、多くの方々のお力添えをいただきました。
この場をお借りしてお礼を申し上げます

大阪総合保育大学大学院 児童保育研究科 渡辺俊太郎准教授には、指導教員として本研究の遂行に当たり始終ご指導を賜りました。ここに深謝の意を表します。また、大阪総合保育大学大学院 学長 山崎高哉教授には、丁寧に論文にお目通しいただき、本稿へのご示唆を賜りました。ここに深謝の意を表します。公開審査に当たり、学外から副査をお引き受けくださいました神戸大学大学院 人間発達環境学研究科 中谷奈津子准教授には、論文構成のみならず研究者として未熟な点に対して、的確なご指摘をいただきました。ここに深謝の意を表します。

さらに、大阪総合保育大学大学院 児童保育研究科研究科長 玉置哲淳教授には、教育学の観点からご示唆を賜りました。同児童保育研究科 瀧川光治教授には、丁寧に研究方法についてご教示いただきました。いつも温かく見守り、励ましてくださいました大阪総合保育大学大学院 児童保育学部長 大方美香教授に、心から感謝申し上げます。

そして、アンケート調査では、多くの園の保護者の皆様や保育者の先生方には、ご理解とご協力いただきました。心より感謝申し上げます。

渡辺ゼミの皆様には、温かい励ましと応援をしていただきました。ここまで挫折しませんでしたのは皆様のおかげです。本当に有難うございました。また、同じ年に入学した楠本洋子さんと小島賢子さんとは一緒に励まし合いながら乗り越えることができました。感謝の気持ちでいっぱいです。また、大阪総合保育大学 非常勤講師小西由紀子先生、本当に有難うございました。

そして、職場の大先輩であり長年 O 市立保育所の現場において所長業務をされていた先生方にお礼申し上げます。

平成 30 年 3 月

小西眞弓